

兵庫縣 武庫郡 私立關西學院長

吉岡 美國氏

嚴正なる武士的家庭に養はれ、偉大なる信仰心を扶植せられ、殊に尊王愛國の誠心淺からず、吾常に神と共に在りとの安堵を以て、夙夜子弟の教養に餘念なく、孜々奮勵身を天帝に捧げて、畢生を期し、今や七百有餘の學徒に臨む人、之を兵庫縣私立關西學院長吉岡美國氏なりとす。

氏は文久二年十月京都御池屋敷に生れ、家代々徳川藩士たり、明治四年京都英學校に入り、後京都中學に學び、同十三年其の第一期を卒業せり、中學修業中既に頭角を同僚に抜き、同校教場補助を拜命し、卒業後同十八年迄勤続す、此年神戸英字新聞社に入り翻譯係と爲り、傍ら兵庫磯町に英語塾を開く、同二十三年米國ケンネツシー州ナシビル市バンダビルト大學に神學を修め、同二十五年歸朝して關西學院に教鞭を執り、翌年推されて院長に就き爾來二十有餘年、以て今日に至る。

氏資性温厚にして謙遜、人に接するに親切を以てし、學徒を教ゆるに不言實行の主義を以てす、クリスト教を經とし、武士道を緯とし、所謂寬嚴宜しきを得る事を以て、家庭、青年及社會に對する教育方針と爲す氏亦溢るゝ如き温情を有し部下職員學徒而已ならず、一般氏に接する者能く懐き能く尊敬す、數年前米國エモリアンドヘンリーカレッジより神學博士の名譽學位を贈らる、大正三年四月日本美以教會を代表し、合衆國メツヂスト教會總會に出席し目下歐米漫遊の途に在り、要するに氏は育英に貢獻する事既に三十七年、功績蓋し尠少ならずとす、吾人の推稱豈に偶然ならんや。」



島根 松江高等女學校長

從七位 吉岡 勘之助氏

近時女子の風俗華奢婉麗に流れ虚榮に走り貞淑を缺き、從順を離れ、所謂三從の美德は遂に其根柢を喪ひ、甚しきに至りては女權擴張を喋々して恬然たるものあるに至る、之れ獨り都會風潮のみならず、溢れて鄙邑に及ばんとするは痛歎に堪えざる所なり、此時に當り崇高偉大の人格學識を以て女子教育に奮勵する吉岡勘之助氏のあるあり、以て吾人の意を強うす。

島根 松江高等女學校長

從七位 吉岡 勘之助氏

氏は島根縣教育界の元勳、明治二年九月を以て八東郡波入村入江に生る、縣師範學校を出て、安濃郡川合小學校長たりしが、鵬翼更に翔りて東京高等師範學校に入る、然るに病に罹り中途校を退き、獨營獨習化學科の免許狀を受得し、縣師範學校に職を奉ず、引續き教育科、物理科等の免許狀を得たり、後篠川郡視學に轉じ、更に縣立第二中學校教諭兼舎監と爲り、明治三十五年再び縣師範學校教諭に任じ、奏任の待遇を受けて以來、正八位、從七位と累叙せられ、同四十四年を以て現校長に就き以て今日に至る。



島根 松江高等女學校長

從七位 吉岡 勘之助氏

氏は資性極めて眞率正直、功成りて居らず名聞を避け、只管實踐躬行實効の擧がるを期し、性來の精力主義を發揮し萬難敢て意とせず、下僚を激勵して一意其職に努む、故に生徒亦學藝に勵み、絶て淫靡虚飾の風あるを見ず、其教育方針たる徒らに高遠なる理想に奔せず、卑近なる日常坐臥の行事に重きを置き特に實業思想の鼓吹に努め、入つては學び出ては業に匪勉なる良風を作し、父兄の信頼極めて厚く、學徒の敬慕愈加はる、令名縣下に噴々たるもの偶然ならざる也。」

山口豊浦高等女學校長

正七位 横 畠 武 二 氏

言は易く行は難し、終始一貫堅忍不拔の士に非ずんば如何ぞ能く事の成功を期し得んや、教育の目的を論じ方法を講じ彼此長短を比較し、口角泡を飛ばす事は已に過去に屬したり、今や即算言實行の期にあり、女子教育に於て特に其然るべきを感ず、豊浦高等女學校長横畠武二氏は此主義の入幾多の事蹟は不言の裡に一貫せる目的と方法とを設け盡して餘りあり。



氏は安政元年四月山口縣に生る、幼より才能人に勝れ藝術衆を抜き特に數學に長ず、明治七年同縣教員養成所幹事兼教師と爲り、同十年同縣師範學校訓導兼幹事に同十五年一等助教諭に進み、山口縣中學校助教諭兼教諭兼書記と爲る、同十六年教育上の功績に因り六國史一部外一點の下賜あり、同十七年山口中學校教諭專任に同二十年廢校と共に山口高等學校助教諭と爲り、同二十六年中等教員數學科の免許狀を得、同三十年山口縣立中學校教諭に轉じ豊浦分校主事と爲る、同三十二年豊浦中學校教諭に同三十四年聘せられて徳島縣立脇町中學校に榮轉し從七位に叙せらる、同四十四年正七位に陞叙一時退職年額三百四十五圓の恩給を受く、大正元年更に出て、現任と爲り孜孜教務の刷新を圖りつゝあり。氏人と爲り眞摯確實にして頭腦明晰手腕敏捷劃策經營殆ど功を奏せざるなし、殊に形式に走らず奢侈に流れず、専ら賢母良妻たるべき女徳の修養を圖り、傍ら柔順穩健の美質を造るに努む、此を以て氏教育上の功績大なるもの擧げて數ふべからず、眞に斯界の元勳者と謂つべし矣。』

兵庫農學校長

正七位 吉 田 彦 松 氏

万鈞の重きも撓ます能はず、雷霆の威力屈する能はず、其の世に立ち、事を論ずる、謂々乎として隠す所なく、嘗々乎として避くる所なし其の正義の内規律の嚴乎たる與に善を爲すべくして、與に不善を爲すべからず、與に義を爲すべくして、與に不義を爲すべからず、現任兵庫縣立農學校長吉田彦松氏や、其の德養々乎たるものと云ふべし、氏の到る所令名高き偶然にあらずる也。



氏は廣島縣廣島市莖町の人、文久二年十月を以て生る、至誠謹嚴の一語は特に氏の人と爲りを詮表すべく造られたるもの、如し、明治十九年駒場農林學校を卒業し、同年八月廣島縣廣島中學校教諭に任じ、同廿七年四月大阪府立農學校に轉じ、同三十年四月兵庫縣簡易農學校長に任ぜられしより、爾來十有七年一日の如く、育英の業に従ひ、同十四年文部省より多年實業教育に従事し、勤勞尠からざるの點を以て選奨せられ、大正二年七月大日本農會總裁貞愛親王殿下より紅白綬有功章を授與せらる。

氏自ら持すること甚だ嚴、人を待つ甚だ寛、克く適材を適所に用ゐ、喜んで各々其の能を盡さしむ、一度氏の部下に身を投ずるものは、忽ち其の靡風に浴し、容易に去る能はざるなり、現に氏の下に其の職を奉ずる職員十三名中、勤績最も短かさものと雖も五年を下らず、十年十五年勤績の如き事實を以ても知るを得べし、氏常に慨して曰く、一日煖めて三日之を冷やすが如き社會現狀に於て爲す教育の効果は須らく教育者自身の非常覺悟に待たざるべからずと、眞なる哉言や。』

高知市立商業學校長

横山又吉氏

宋黄平は鐵石の心腸にして梅花を賦し、張良は容貌婦人の如くにして博浪沙の槌あり、大膽にして細心、無愛憎にして親切、放縱にして眞面目、剛愎にして圓滑、木強漢にして風流等全然正反對の性情を一身に具備すと土陽週報子論ず、横山又吉氏の人と爲り以て推知するに足らん歟。氏は安政二年を以て土佐郡旭村に生る、明治八年東京尙友義塾に入り若松甘吉に和漢學を、有爲義塾蒲生重章に漢文學を學ぶ、後政界に入り保安條令の爲片岡健吉等と共に石川島の獄に入る、又星亨の幕下に參じ新聞記者と爲り、更に高知市參事會員、學務委員長と爲り明治三十一年五月高知商業學校長の職に就く。



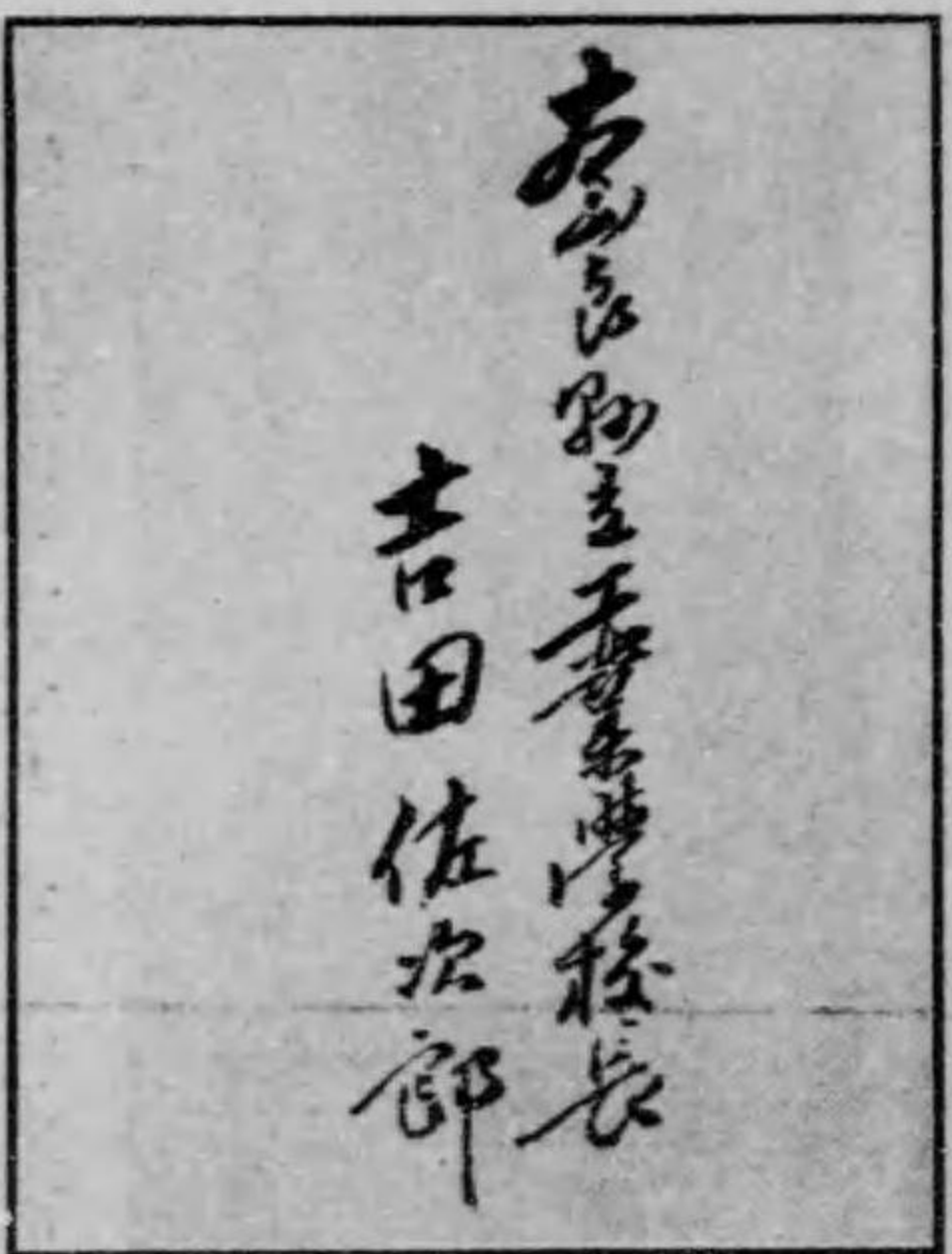
氏や前には悲歌慷慨の志士、自由民權の大義を唱道し、憲政の創立に奔走し、不羈豪放産を破つて家を成さず、居宅宛然梁山泊の觀あり、爲めに現校長就職を聞くや道路目を側て。豹變の甚しきを怪しみ、成功を危ぶみたりき、然るに杞憂は徒浪に歸せり、創立十有五年の久しき平穩無事學校中の白眉たるに至りしもの氏の熱心と識見と技能との然らしむる所ならずんばあらず、氏は豪宕放縱の氣象と共に精細緻密の性格を有し臨機應變の才あり、薔薇花の栽培に嗜好を有し、斯道のオソソチナリたりと、又詩を善くし感興の觸る、處咄嗟吟を成し、沈鬱悲壯ならざれば王郎酒酣にして創を抜き地を斬り莫哀を歌ふの慨あり、基礎確立し守成の境に入る永く氏の健在自重を祈る。』

鑑銘家育教

奈良縣立工業學校長兼縣技師

從六位 吉田佐次郎氏

明治の仙骨中江兆民居士、商店を札幌に開きたる事あるを聞く、時の新聞紙は之を以て一奇報とせり、然れども吾人を以て之を觀れば、實に好模範を後世に傳へたる者と云はざる可からず、夫れ光風霽月居士の仙骨にして尙ほ徒食すべからざるを視、自ら其職業を求めて之に就けり、豈學ぶ所なからんや、吉田氏奈良に實業教育に従ふ、勤勉の人之を教ゆるや必せり。



慶應三年十一月豊後國北海部郡下北津留氏を産み、實業教育家たらしむ可く、東京工業學校に送る、氏乃ち化學工藝染工科を修めて明治二十三年其業を卒へ、錦衣歸郷す、同二十五年東國東郡臨時郡立華蔭染法傳習所の教師に聘せられ、後中學校化學科圖書科の免許狀を受く、同二十九年鹿兒島女子徒弟興業學校染色科教員と爲り其訓導を兼ぬ、同三十二年同教諭に進み、續いて石川縣立工業學校教諭に轉じ、後奏任待遇たり、同三十七年徳島縣立工業學校長に就き從七位に叙せらる、同四十四年文部省の選獎金二百五十圓を賜はる、大正二年現職に移り又縣工業技師たり、高等官五等に叙せらる。

蓋し氏の敏活多才なるは學んで得たるに非ず、先天性の然らしむる所、此の天稟の才に加ふるに粹然たる造詣を以てす、常に導くに勤勞と儉素とを以てし、獨立獨行研鑽琢磨の風を養ひ、徒衣徒食の卑しむ可きを教ゆ、蓋し手島精一氏門下の一異材着々效を收む可きや必せり、由來奈良とし云へば直ちに優雅柔弱を聯想するは非なり、今や邦國有數の工業地、氏を得て更に發展せむ。』

鑑銘家育教

東京市立商業學校長

吉田升太郎氏

領土の狭小、人口の剰多且つ負債國たる我經濟界を圓滿に、正價流出を防止する所以のもの専ら生産業の發展に俟ざるべからず、殊に商業界の舊慣を脱して以て日新の智識を修得し、其思想は世界的に行爲は確實真摯なる商人養成の外あるべからず、我吉田升太郎氏夙に愛に見るあり以て大に商業教育に興味を有せり、東京市立商業學校の設立せらるゝや氏拔れて其校長と爲る。

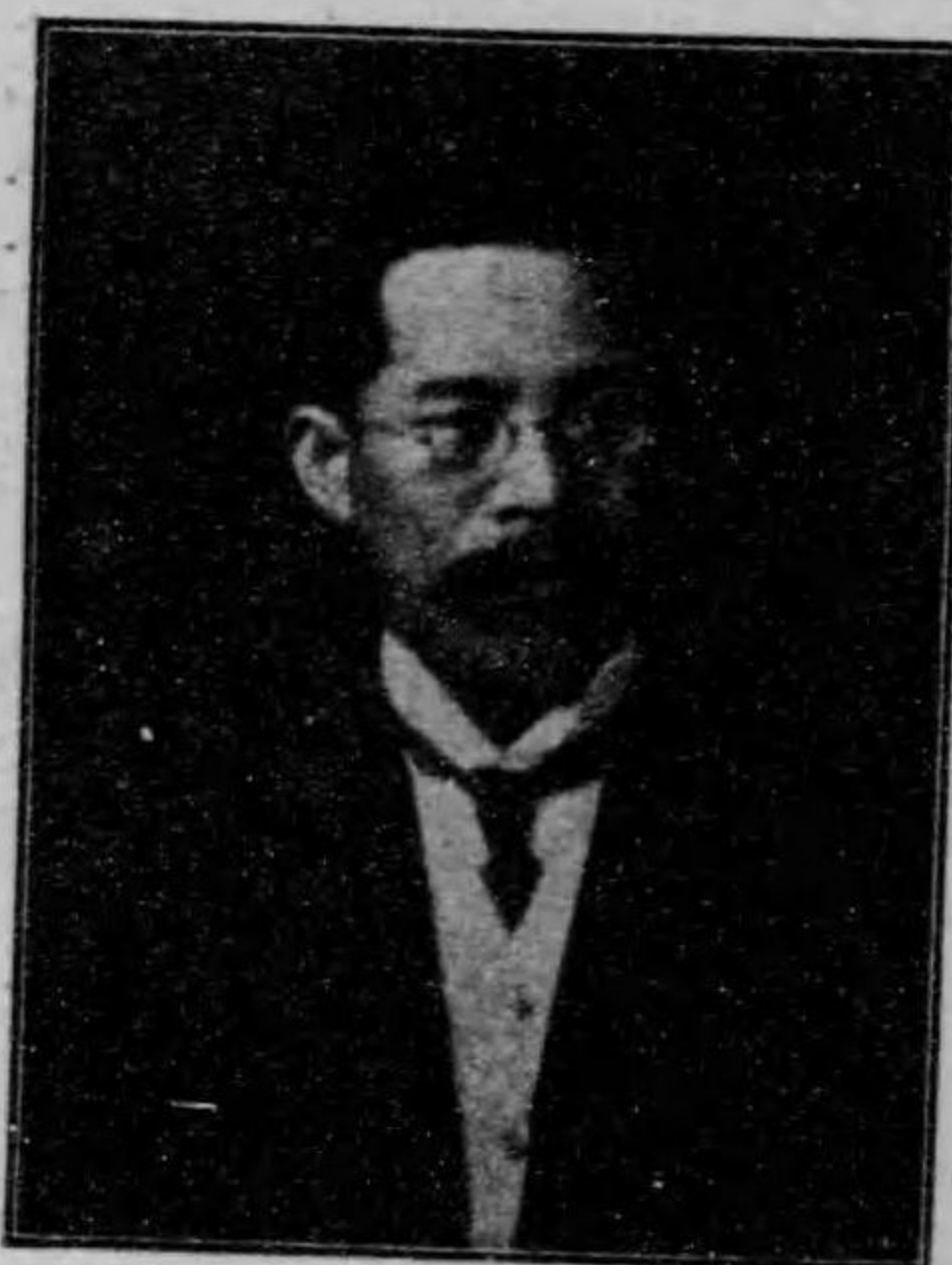


慶應二年十一月江戸本所石原町氏を産む、氏幼にして父母に従ひ祖先の墳墓地上州高崎に生長し、群馬縣中學校を出て文部直轄東京師範學校に學び中教師範科を修めしも、病の爲め半途退學、後ち群馬縣師範學校に業を卒へ、其縣倉賀野小學校長、高崎小學校長に歴任當時令名頗る高く、同三十年宮崎縣地方視學に榮轉し、同三十二年静岡縣駿東郡視學と爲り翌年縣視學に上り第三課長心得たり、同三十八年東京市事務員に移り教育課に勤務次て市視學を兼ね、同四十三年現校の前身商業學校長と爲り同四十五年其組織を改めて尙其校長たり、大正元年八月奏任待遇に進み孜々一貫其施設經營に倦む事なし。由來東京市の商業學校中多くは其實務に疎にして空理に馳するの傾向あり、氏大に之を憂ひ其主義たる實質的に我商業界の活動者をして文明的商業の向上發展に資するを以て要旨と爲し、以て其職員の統御に學徒の指導に、専ら實踐躬行を重んじ其養成を受けたる校友にして已に實地に着きたる者幾何、開校以來日尙淺しと雖も、銳鋒已に顯る、吾人は本市商界の爲め氏の指導を俟つや大。

高知縣高知市私立高知工業學校長事務取扱

從七位 吉崎七次郎氏

我國の文運日に月に駁進、各種工業亦刻々勃興す、就中機械工業、電氣事業の進歩發展實に驚く可きもの有り、此時に當り礦業家竹内綱氏巨資を投じて本校を起し、吉崎七次郎氏を聘して校務を委し、生徒の教養を司らしむ、氏の人格と蘊蓄とは必ず設立者の期待に添ふや明かなり。氏は大分縣の人明治六年一月を以て中津町に生る、明治二十七年縣師範學校を卒業するや、中津高等小學校に訓導たり、後工業教員養成所に入り同三十三年其機械科を卒はり、任を神戸市湊川實業補習學校に奉じ同小學校訓導を兼ね、次て兵庫縣立神戸商業學校教諭に轉じ、更に同縣立工業學校教諭に移り奏任待遇たり、越て同四十三年從七位に叙し、翌年職を辭し現職に就く。



資性温厚着實にして明敏恪勤なり、由來本校は河に臨み高知公園に接し風光明媚最も教學の好位置を占む、創立に際し校主及評議員は特に氏の人格並に高等工業學校在學中及前任地に於ける成績を認めて推舉したるもの、着任以來創業の事務に執掌し、校紀の振興、設備の充實、教授の刷新、品性の陶冶に維れ日も足らざるの狀態なり、日尙淺きに拘はらず、入學志願者は募集定員の二倍を越え校運日々隆昌の域に進むを見る、其教育要旨たるや工業上必要なる學理と實地の技能とを連絡調和し、活動的人物を養成するに在り眞摯正確を旨とし奢侈を避く可く、自ら學術、運動、作業に勵み依頼心を起し明暗の行なからしめ、能く規律命令を守り他人に迷惑を及ぼさず有益なる人物たるに努む、本校夫れ人を得たる哉。

京都竹間尋常小學校長

吉村保氏

明敏忠直自信強く、苟も意見の存する之を主張するに忌憚なし、而も一面其の過失を改むるに吝ならず、能く然諾を重んじ難事猶解決を告げずんば止まず、交友に對して情誼厚く義に富み正に與みず、業務に對する研究心に富み、最新智識の吸収に努めて穩健主義を確持し敢て一時の流行を趁はず、文學藝術並音樂に對する普通の趣味を有し、文筆に長じ筆蹟亦一種の風骨を存す、之を現任

京都市竹間小學校長吉村保氏の資性と爲す



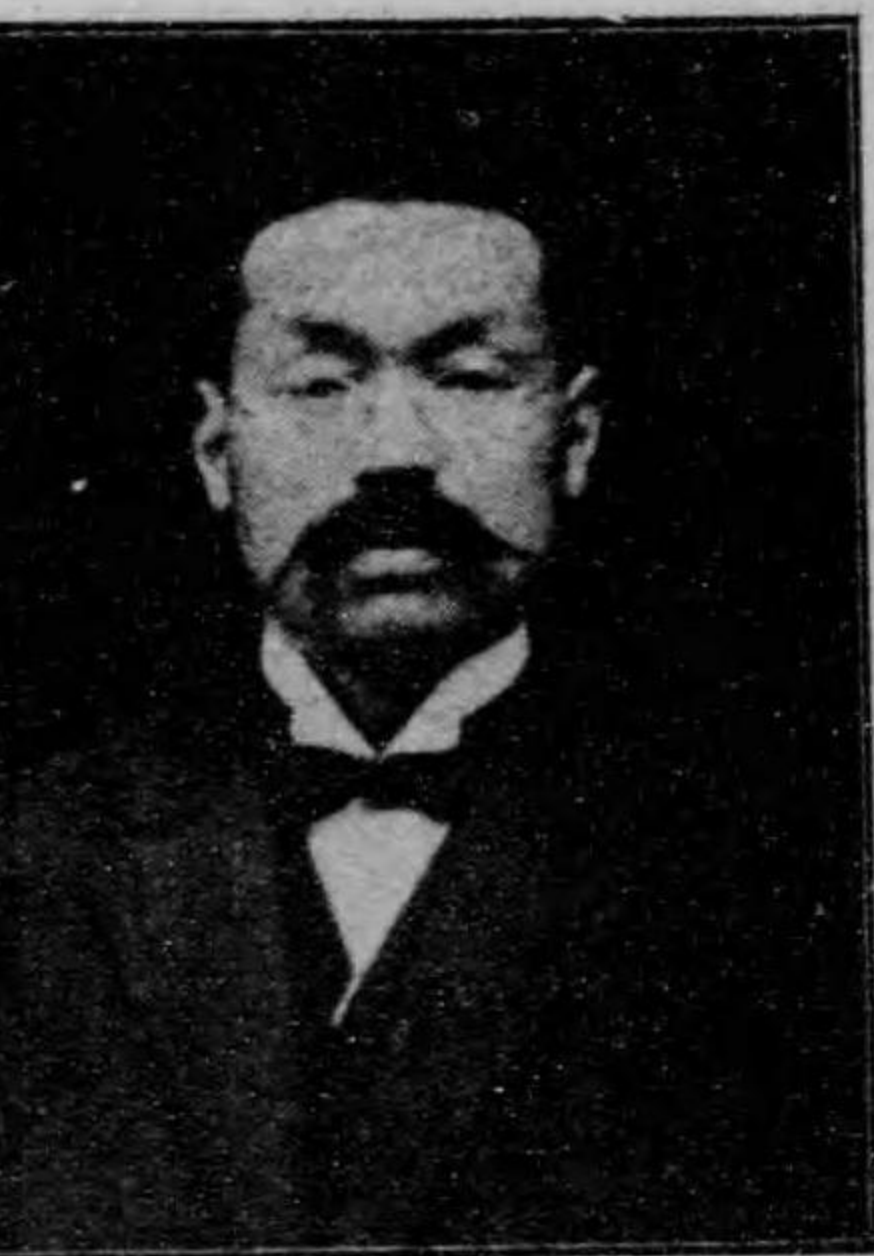
氏は明治八年一月を以て府下中郡峰山町に産す、明治二十九年京都府師範學校を卒業し、郷里峰山高等小學校訓導に任じ、同三十二年抜かれて師範學校訓導と爲り、懇切熱心教生の指導に従ひ、教授訓練の諸問題を研究し之を發表して初等教育界に裨益する事八年、同四十年轉じて現職に就き、先づ職員配置に着眼し、優良教員を蒐集する縣内罕に見る所なり、宜哉京都府は職員一同に賞金を授與し、文部省亦氏を選奨す、同時に府更に百五拾金を賞與せり。

部下職員の教務に對する適當なる批判と注意とを與へ、進んで研究修養の氣風を養成し、『學校教育』なる一大冊子を編纂して有爲有徳の人物を養ふの方針を示し、智識技能の傳達及心力の陶冶を目的とし、自律的人格の養成に努め、家庭との聯絡を重んじ結果の檢閲處分に力を注ぐ、殊に體育に重きを置き有ゆる方法を以て父兄を開發し、臨海示教の開催、體操會の特設、體育の特別訓話、兒童の着袴等悉く組織的の方案なりとす、校風の優良、氏が聲望の洽然蓋し偶然ならざるなり。』

山梨縣身延尋常小學校長

依田貴敬氏

美なる哉山河の固めや、幸なる哉山河の化や、而して此所身延の地は日宗の祖日蓮圓寂の地、秀嶺は夫れ人心を崇高ならしめ、清流は夫れ人心を清廉ならしむ、加ふるに此の靈地の歴史的に偉大の感化力は査定すべからず、現任身延尋常高等小學校長依田貴敬氏は此の天賦の靈地に依りて斯の民を導く、而して氏に洋々たる慈愛あり、富贍なる學識あり、鋭々他を凌駕する氣魄あり、正に是れ虎にして双翼を持つと云ふべし。



氏は明治十一年一月の生、西八代郡富里村の人なり、素赤地家に生る、後ち出て、依田家の箕裘を襲ぐ、同三十三年三月本縣師範學校を卒業し、直ちに甲府尋常小學校訓導を拜命し、同三十八年七月東八代郡英尋常高等小學校訓導に轉じ、同四十一年四月南巨摩郡鵜澤小學校に聘せられ、同四十二年十二月現任に就く、現任校舎は同四十四年氏の設計に依りて新設し、内外の設備完を告ぐ。

心に特殊の訓練あり、家族的精神の發揮是れなり、愛校心の養成是れなり、されば教師は實踐躬行して活模範を垂れ、法規と學理とを歸一せしめて専ら積極的の教育法に則り、家庭に於ける兒童には能く其の可能性を自知せしめ、父兄をして可成兒童に自策自勵の方を執らしむ、青年に對しては能く現代を意識せしめ、自己の立脚地を解し、長者を敬し幼者を愛護し、一村をして一家族の感あらしむ、尙ほ社會教育上の主義方針としては道徳と經濟との調和を計るが如き、蓋し具眼の士に非ざれば能はざる所とす、嗚呼偉なる哉。』

教育家銘鑑

目之部

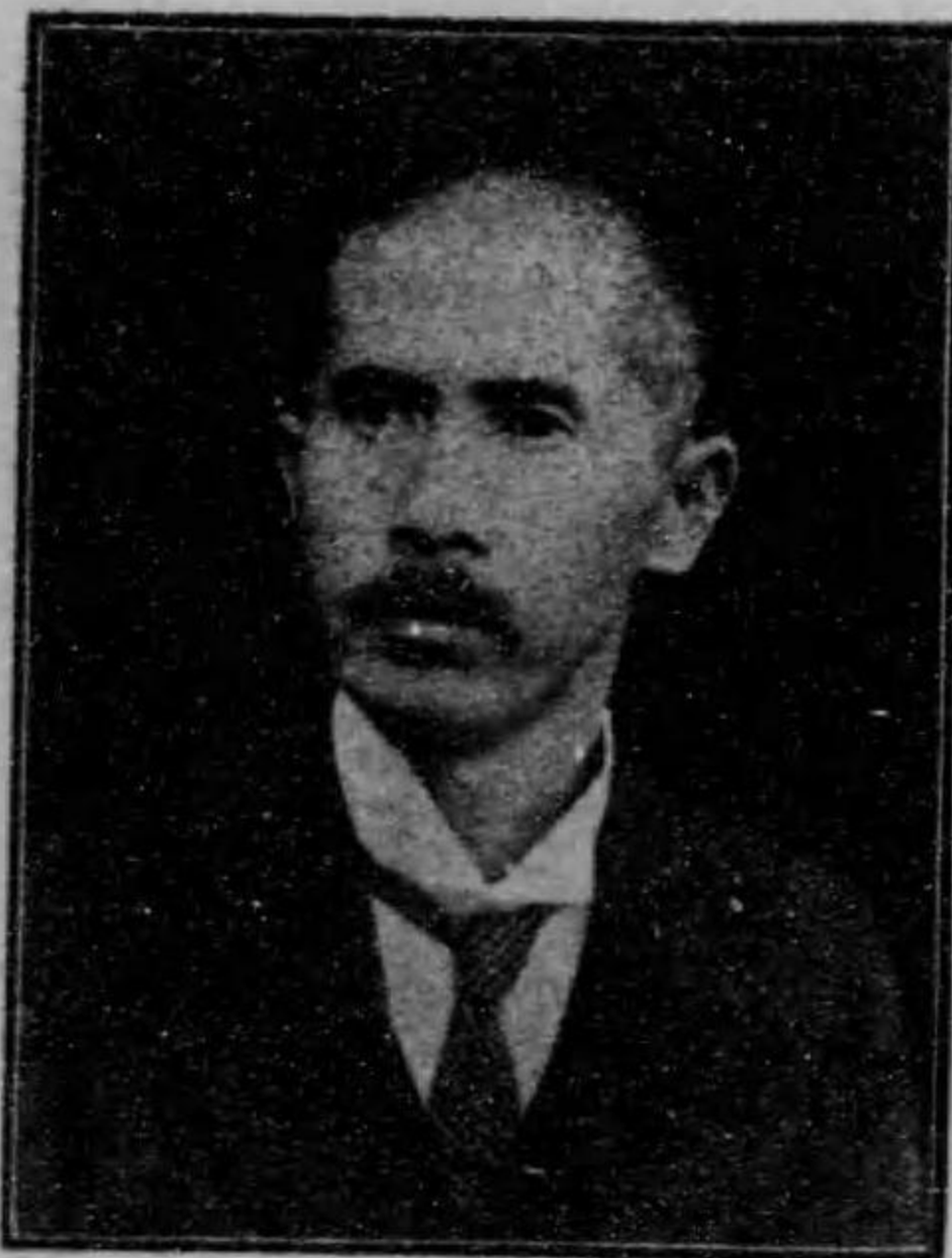
兵庫縣 養父郡 大藏尋常小學校長

米田 德藏氏

身を教育界に投じて在職の久しき者は之れあり、學殖富贍にして學術技藝の奥に達せし者亦之れあり、然れども未だ以て崇高偉大の人格を修め得て兒童教化の範を爲し、勤勉力行の徳を積みて地方改善の裨益せしものは其數甚だ多からず、吾人は此點に於て我米田德藏氏を眞個模範的の教育者と呼び、教育功勞者として推稱せんとする所以なり、蓋し亦何ぞ巧辯を用ひんや。

氏は明治二年十一月を以て兵庫縣養父郡高柳村に生る、明治二十四年兵庫縣御影尋常師範學校を卒業し、直ちに養父郡屋岡尋常小學校訓導に任じ、能く校長を輔けて學校の教化に盡すと十四年、令名大に縣下に擧がる、同三十八年同郡伊佐尋常高等小學校長に榮轉し、同四十二年普通免許狀を授けられ同四十三年現任と爲る。

氏や資性謹嚴にして端正、常に身を以て衆を率ひ、寡言實行、思慮精緻、校務を見る事最も周到にして懇切衆に交はり、慈愛學徒を教へ、同情部下に臨ひ、衆望の重き偶然にあらざるなり、家庭との聯絡に努め、或は父兄會母姉會を催して學校訓育の精神を明かにし、其相互の意思疏通を圖り、青年會を指導して勤勉自修の良習を養ひ、堅實忠良なる國民たらしめんとす、又社會の改善に力を致して風教作振の實を擧ぐる等枚擧に遑あらず、宜なる哉錚々たる氏の令名は郡内教育界に馳す、明治四十年及同四十三年の二回に知事選擧を受け、大正三年體育の成績見る可きものあるを以て更に知事の賞與に浴す、嗚呼氏の效績や眞に斯の如し夫れ偉なる哉。」



教育家銘鑑

大分縣 女子尋常小學校長

吉松 貞三氏

誠實、親愛、柔順、勤儉、規律の五徳を訓練の要綱とし、職員一致協同躬を以て之を率ひ、心身を鍛練し、反覆復習して應用自在ならしめ以て女子の本分を盡すに適せしめ、優美雅正の言語を練習し方言訛言の矯正に努め、隆々其成績を擧げ、聲望洽然たるは、吉松貞三氏と爲す。

氏は慶應元年四月を以て北海部臼杵町に生る、明治十九年大分縣師範學校を卒業し、中津町片端小學校訓導を拜し、同二十一年中津高等小學校訓導に轉じ間もなく同校長に進む、同二十二年縣師範學校訓導に任ぜられ翌年遂に職を辭す、越えて同二十七年大野郡高等小學校長と爲り、同三十一年再び師範學校訓導を奉じ、同三十五年休職、同三十六年大分縣尋常小學校長を拜し商業補習學校長を兼攝し、同四十一年現校長に就き以て今日に至る、校舎は明治二十一年の建築にして不完全なりと雖も、管理訓練能く行届き、基本金の如きも既に壹千圓に達し、縣下亦稀に見るの成績なりとす、之れ蓋し氏の熱誠努力の然らしむる處にして、部民父兄の尊信厚く兒童敬慕の深き宜なりと云ふべし。



氏は溫良篤實にして恭儉身を持し、熱心事に當る、大度宏量克く人を容ると雖も、自己の主張に對しては飽迄遂行を期し、敢て容易に枉げざるの概あり、職員は衷心氏に心服し、誠實以て職に盡す、家庭及社會をして學校教育の主義と歩調を共にし、以て風教の改善を圖らんことを努む、今や一般氏の徳風に化し、敦厚勤儉の美風漸次高進するに至る、氏の感化夫れ大なる哉。」

目之部

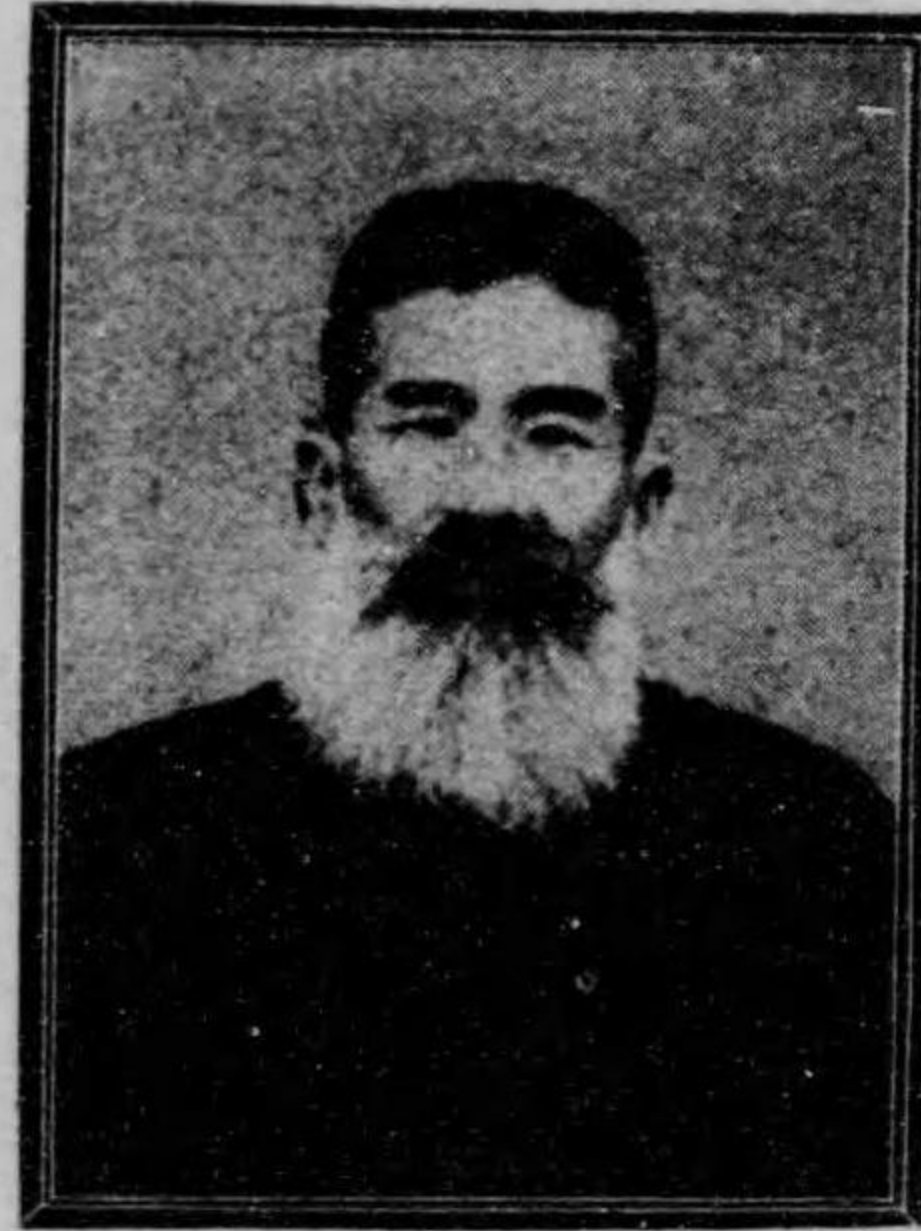
四〇七

愛媛縣今治第一尋常小學校長
越智郡

勳八等 吉田春雄氏

教育家銘鑑

現代の社會動もすれば人間必須なる道德を排斥して、權謀術數猾智を以て時勢に適したりと歡迎す、故に節儉は動もすれば吝嗇として排せられ、精細は動もすれば齷齪として斥せられ、勉強には碌々、忍耐は頑固、不取締は眞率、濫責は潔白、放蕩は磊落、皆夫々の稱呼あり、吾人爰に至りて嘆息之を久ふす、又實に天下達識の士に向ひ之が救済の道を講ぜんことを促すや久し、我吉田春雄氏の如きは眞に此の局に當りて其の救済に適任なるを思ふ、一般の崇敬せる亦宜なる哉。



氏は愛媛縣の人、文久二年七月を以て生る、明治十五年愛媛縣師範學校高等小學師範學科を卒業し、越智郡發英小學校訓導に任じ、後今治高等、河南高等の二小學校を経て同二十六年河南の校長に進み、同三十一年普通免許狀を下附せらる、同三十三年轉じて今治高等小學校長と爲り、同三十四年教育上の功勞大なるを以て縣より金四十圓を賞與せられ、同四十三年現校長に任じ、同四十五年縣再び金五十金を與へて氏の功勞を賞す、大正三年遂に擢んでられて勳八等に叙せらる。

氏資性温順公平にして更に圭角なく、人に接して城寨なし、且つ自ら邊幅を飾らず、質素黽勉只管其の職に忠なるを見る、世間の判者往々にして正當なる思潮を攪亂して暗濫たらしむる者あるを慨し、常に學徒並に青年を誠むるに至誠勤勉、奉公の職を盡す可きを以てす、今や氏の名聲は縣下に洽然、均しく民衆の仰慕する所たり、嗚呼教育者に望む所、眞に氏の如くなれと言はん而已。」

教育家銘鑑

朝鮮 全羅南道 木浦公立尋常小學校長

吉村貫之氏

由來本校は木浦市街の西端に位し、西北に山を負ひ、前面遙に海を望み、教育上衛生上好適の地を占む、而して吉村貫之氏は實に此の校長として兒童を教へ、地方風教の改善に努力し、一般氏を敬し、氏を慕ひ、徳化亦四隣に洽ねきを見る、亦何んぞ由因なくして可からんや。



氏は大分縣の人、明治五年十月を以て玖珠郡森町に生る、人と爲り剛毅英邁、敢て世に阿附せず克く決し克く斷ず、事を處する敏捷にして博覽強記、洽ねく古今の書を涉獵し、殊に漢籍に長じ、詩文を能くす、又書道に通じ筆運殊に巧妙を極む、明治二十七年大分縣師範學校を卒業し、玖珠郡第一高等小學校訓導に任ぜられ、後東京高等工業學校附設工業教員養成所に學びしが、家事の都合許し難く、四ヶ月にして退學歸縣し、玖珠郡有秋高等小學校訓導を拜命し、同三十一年玖珠高等小學校に轉任、同卅三年大分縣師範學校訓導と爲り、後南海部郡佐伯高等小學校長に榮轉し、現校長に移りて既に七年間を経たり。

其の躋上に關しては三則を設けて之が徹底に努む、即ち教室内にて緘黙、整容、専心、運動場には共同、和樂、活動、家庭にては温順、規律、勤勞之れなり、要するに強健、誠實、敏活なる人間を養成せんとす、木浦の地は各府縣の集合地にして一定の風俗習慣なきが如しと雖も、新開地の割合には質朴にして華美の風なく、一般に堅實なる發達を爲しつゝあるは、實に喜ぶべき現象にして、之に氏の高徳を配するに於ては、將來風教の善美亦押して知る可き而已。」

秋田縣大館尋常小學校長
北秋田郡大館高等小學校長

吉村兼太郎氏

内剛にして外柔、自ら治めて人に及ぼし、先見の明に富て能く之を斷じ、斷ずれば直ちに之を行ふ、是れ教育者の人格なりと謂ふべし、大館校長吉村兼太郎氏の如きは、學識の崇高と人格の卓絶せる點に於て、眞に良教育者と稱するを得べし、加るに人と爲り篤實、事を處し物に接するに誠實にして事務を執ること勵精なり、常に内外の教育書を耽讀し、研鑽修養を怠らず。



氏は北海道札幌區豊平町に生れ、年齢尙三十有五、明治三十六年北海道師範學校を卒業し、直ちに東京高等師範學校に入りしも、病魔の冒す處と爲り、中途休學の止むなきに至りたるも、同四十一年同校撰科修身教育科を卒業して中等教員たるの資格を得たり、同四月福島縣田村郡三春第一小學校訓導と爲り、同郡准教員養成所講師を囑托せられ又相馬郡准教員養成所講師を囑托せらる、現校に赴任せしは同四十五年七月なりき。

氏は今や十五學級、九百有餘の兒童の教育者として、着々手腕を振ひつゝあり、訓練に對しては人格的鍛練主義、教授に對しては自學輔導、管理は規律整頓を主とせり、部下に對しては躬を以て衆を率ゐ、協力一致各自渾身の努力を加へつゝあり、家庭教育に向つては、訓練の主義を鼓吹し、訓練の方法を知らしむ、又青年の爲め夜間學校を獎勵し、堅實勤勉なる町村自治の青年を養はんと爲す、兒童には寄席、演劇、活動寫眞等は禁止の方針を採り、圖書館の利用、軍事、農事、通俗等の講話、展覽會等の出席を勵ます、斯界の屬望夫れ大なる哉。

山梨縣里垣尋常小學校長
西山梨郡里垣高等小學校長

米澤資治郎氏

山姿端麗にして更に其威を改めず、滾々たる水條は常に濁を交ゆる事なし、蓋し無心の山川猶偉大の教訓を語るにあらずや、而して米澤資治郎氏里垣小學校に兒女を教ゆる十有七年、其の富瞻なる學識と、崇高なる人格と、堅實なる志操とは、此の山此の川と相俟て效果隆々として擧るあり。氏は安政四年三月を以て、中巨摩郡幸本村の産む所なり、人と爲り温厚着實にして思慮綿密なり



明治十一年茨城縣師範學校を卒業し、茨城縣新治郡土浦小學校に奉職し、同十五年山梨縣西山梨郡千代田小學校長と爲り、同二十年山城尋常高等小學校長に轉じ、同三十年現職に就き、爾來勤續今日に至る、實行主義の訓練、直觀的の教授、自發的練習の涵養、統一的管理、共に成績の良好なる郡下稀に見る所なりとす。

氏は無言實行主義を採り、只誠心誠意躬を以て衆に先んじ、熱誠以て効果を揚げんとす、公平無私一視同仁主義を以て所屬民に對し、貴賤貧富を以て其の扱を異にせず、勉めて教育の眞意を會得せしめんとす、保護者に對する障壁なく、時々父兄懇話會、學藝會、家庭訪問父兄の學校參觀等を獎勵して學校と家庭との親密を圖り、互に同一步調を以て教育を完全ならしむるに力む、勤儉力行主義を以て青年の風紀改善、公共的精神の養成に勉め、社會に對しては輕佻奢侈の風を矯正して公德を重んずる慣習を養ひ、自治的國民の責任を知らしめんとし、時々幻燈會、講話會等を開き以て風教の改善を期す、徳望今や四隣に洽然たる亦宜なる哉。

廣島尾道商業學校長

正七位 武繩七太郎氏



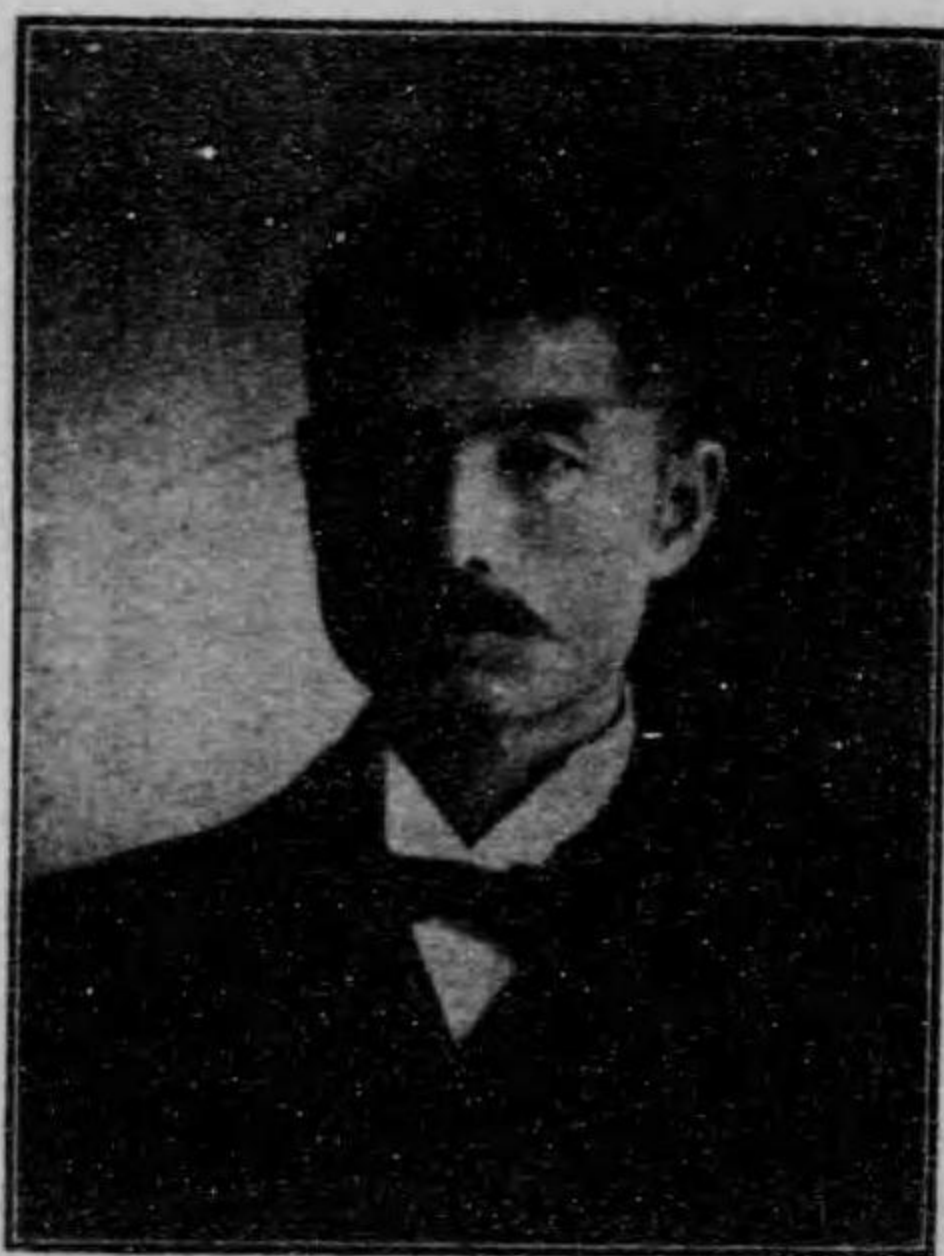
今や二十世紀の風潮は、滔々として宇内を浸潤し、理化に醫術に將た百工技藝に、物質界の發達は、絶大なる速力を以て進行し、百尺竿頭更に數十尺を加へたるの觀あり、然れども舊黨は永く脱し難く、三百年封鎖の民は、其の世界的意氣に於て萎縮屈柔、未だ泰西の仲發に比すべくもあらず是れ本邦商業上の一大缺陷とする所、現任廣島縣立尾道商業學校長武繩七太郎氏大いに之を憂ひ、一意商業の勃興を企圖し、そが教育に全力を注がる。

氏は岡山縣玉島町の人、明治十一年八月を以て同町宇阿賀崎に生る、同三十年三月岡山中學校を卒業し、進んで東京高等商業學校に入り、同三十四年七月卒業、直ちに岡山商業學校教諭に任ぜられ、翌三十五年十二月廣島縣立尾道商業學校教諭に轉じ、同三十七年二月同校長事務取扱を命ぜられ同三十八年五月遂に現職に任ぜらる、本校に勤務すること前後十二年、始終一日の如く、孜孜後進を指導して倦むを知らず、眞正教育者は氏に於て見る。

氏は資性磊落にして邊幅を飾らず、城府を設けず、故に人氏に接するを樂む、其の學生を導くや眞摯懇篤常に其の資質に應じて方針を指示し、就職に斡旋する等、努力頗る多とせる所なり、又就職以來銳意勵精規模の擴張、校規の振肅等、成績の觀るべきもの少からず、一昨大正元年是氏の就職滿十週年に相當するを以て、本校同窓會員、並に現職員等主催となり、盛なる頌徳式を舉行し、紀念品を贈りて、其の徳を謳歌せりと、豈名譽の至りならずや。」

福島縣立蠶業學校長

正七位 田中正夫氏



孟子曰く、恒の産なければ、恒の心なし、苟も恒の心なければ、則ち放辟邪侈到らざる所なしと人世先づ須らく恒産を積むべし、百の亂行之を基として起る、方今邦國輸物物の第一位に在るもの絹を措いて他に求むべからず、斯業の發達と否とは直ちに國家の消長に關す、斯業は乃ち邦國恒産の泉源と云ふも不可なからん、現任福島縣立蠶業學校長、農桑業の教育に従事する已に十數年、其努力少しとせず、富國は萬人皆望まざるものあらず、然も是れが經營に染指するは少し、氏の至誠あり氏の努力あり、以て國富の基を講ず、吾人の三歎措く能はざるもの實に故ありと謂つべし矣。

氏は宮城縣仙臺市の人、明治四年一月を以て生る、人と爲り卒直淡泊、人に接するや洞然として藏するなく、度量洪くして凡てを腹中に置く、明治三十五年七月東京帝國大學農科大學を卒業し、同年八月沖繩縣國頭郡各間切島組合立農學校教諭に任ぜられ、三十八年十月宮城縣郡立遠田郡甲種農學校長兼教諭に轉じ、四十年四月岡山縣勝田英田兩郡組合立農林學校教諭兼校長と爲り、四十二年十一月佐賀縣立佐賀農學校長たり、四十四年佐賀縣立佐賀農業補習學校長兼任、大正二年十月現任に就き孜孜營々教務の發展を圖るを以て日未だ淺きも顯鋒已に現はる。

其の訓練教授は最も活動的にして、平常の教訓皆躍々として熱血溢るゝものあり、部下に對しては何等掣肘せず各其の能に従つて働かしむ、部下悦服生徒敬慕の厚き偶然ならざる也。」

京都市平安女學院長
私立

正六位 田村初太郎氏

夫れ、我育英界に於て高廉なる君子は夥し、又辣腕なる俊材は多し、然りと雖も未だ嵩高なる信念を有するの士甚だ乏しきを遺憾とす、茲に田村初太郎氏、基督教を奉じ、燃ゆるが如き熱心と堅實なる大信念を以て育英の職に執筆以て自己の天職と爲し、溢るゝ如き温情を以て子女を薫化す、蓋し我教育界に於て稀なるの人士、吾人の氏に期待する所多き故なきに非るなり矣。



氏は静岡藩の人、嘉永五年八月を以て生れ、明治九年米國オレゴン州バシファイグユニバシチー大學卒業同十六年同校よりマストルオブアーツの學位を享く、米國メリーランド州セントクレメンツホール私立大學校監事兼教員、大阪専門學校、中學校、大育分校、同教務課主事、第三高等中學校教授に歴任、同二十八年、正六位に叙せられ、同年現任校教頭と爲りて校務一切を管掌し、同四十一年院長と爲り、經營孜孜、曾て勞を覺へざるの精力家なる哉。

該校は京都市烏丸に在りて、御苑内と相接し、地勢頗る優秀、子女薫育の好適所たり、而かも院長に田村氏の若きを有す、斯の校に學べる子女の至幸何にものか譬へつべき、夫れ現時の教育概して形式に流れ、物質的に偏するの弊風あるが中に、獨り該校の、精神的教育に盡瘁せるを見る、又時代の最も要求せる、刻下の急務に適へる事と謂ふべきなり、夫れ人はパンのみにて生くるものに非ずと聖基督も謂へり、現時の女學校概ね實用的教授に傾き内に情操の至醇を養ふ事少なし、茲に此校あり高韻自ら存す敬仰すべき哉。』

鑑銘家育教

沖繩
縣立第二中學校長

正七位 高良隣徳氏

至誠質直、邊幅を修飾せず、毀譽褒貶を意に介せず、自ら反みて疚しからずんば千萬人と雖も吾往かむの概あり、教育の爲には粉骨碎身猶且辭せざるの風あるは、蓋し天稟の至誠に基づくもの、寧ろ情の人にして意の人にあらず、然れども意氣堅鞏『仁者必有勇』とは氏の如きを謂ふか。



氏は明治五年十二月を以て沖繩縣島尻郡小祿村に生る、明治二十五年師範學校を卒業して那覇高等小學校訓導に任せられ、翌年職を辭して東京高等師範學校に入り、同二十九年同校理化學科を卒へ、滋賀縣師範學校教諭、奈良縣中學校教諭を経て、同三十二年沖繩縣中學校教諭に轉じ、同三十六年奏任待遇に進められ、同三十九年從七位に叙せられ、同四十四年同縣立第二中學校長に任じ、大正三年正七位に陞叙せらる。

其の校訓に曰く『忠信を旨とすべし、光陰を惜み學業の進歩と身體の健全とを計るべし、益友に親しみ惡友を避くべし、善に遷り過を改むべし』と、實行事項に曰く『普通語を勵行すべし、學友の交際は智徳の研磨を目的とし不善ある時は互に忠告すべし、規律を守るべし』と、其の教授の上にては、縣下の現狀に鑑みて、特に理學數學に力を傾注す、職員に臨むには只至誠を以てし、職員及び其の家族に對する、猶骨肉の親あるが如く、家庭に在りては慈父たり一般青年に對しては嚴師畏友たるを期し、社會に對しては服裝言語等の一般化に力むると共に、特に風紀の改善に意を用ひつゝあり、『徳孤ならず』、隣徳の名蓋し他日の識たらん乎。』

鑑銘家育教

新潟縣立卷中學校長

從七位 竹内雄之介氏

孟子は君子政を失し世道亂れ人心崩るゝを見て、獸を率ゐて人を食ふ、と評せり、道徳は頽廢せり、風俗は蝕害せられたり、甲は乙を嚙み強は弱を食ふ、私かに慄る今の世、人相率ゐて人を嚙むに非ざるなきか、恐ろしきかな生存競争の人を驅る勢、此時に當り確乎たる信念と憂國の至誠とを以て之が救済に従ふ者、現任新潟縣立卷中學校長竹内雄之介氏其人あり。



氏は鹿兒島の人、慶應元年六月を以て加治屋町の屋敷に生る、明治二十二年度第三高等學校の出身にして、同二十六年鹿兒島高等中學造士館英語科の教員と爲る、翌年英語科中等教員免許狀を受領し、鹿兒島尋常中學校教諭に任せられ、同三十年造士館教諭を兼任し、其翌年鹿兒島縣第一中學校舎監を兼任す、同三十六年大阪府立池田中學校教諭に轉じたるも、病痾職に堪へず、遂に休職と爲る、同三十八年再び鹿兒島中學校教諭と爲り、銳意教授に當る、同三十九年同校分校獨立して第二中學校と爲るや、氏其教諭たり、同四十三年新潟縣立糸魚川中學校奏任教諭に轉じ、翌年同校長に推さる、大正元年現職に就き翌年西蒲原郡立に變更し、大正三年復び縣の經營に移る、大正二年從七位に叙せらる。
氏英邁剛毅の資性を有し、夙に愛國の志あり、特に教育界の萎靡を憂ひ、之が覺醒を叫ぶ事屢々なり、其熱烈なる訓辭は悉く肺肝に發し、言々痛切を極め時代を穿つ、職員悅服、生徒敬慕、父兄信頼、當局信任、北越教育界の重鎮として氏の令名噴々たる、蓋し偶然ならざるなり。』

鑑銘家育教

徳島縣立實科高等女學校長

正八位 勳八等 高橋徵三郎氏

貞淑順良の婦徳を養成すると共に、實業手藝の智能を授くるは、實科教育の要旨とす、加かも日常生活に缺く可からざるを期するは勿論、亦良妻賢母たらしむるも要求の一たるなり、我高橋徵三郎氏は偉大なる人格を提げ、且つ富贍なる學殖を以て、今や徳島縣板野郡立實科高等女學校を統率し、着々效を收めむ事を誓ふ、氏の經歷を以て推せば亦敢て難治に非らざる也。



明治元年三月徳島縣板野郡住吉村の地氏を生む、明治十九年縣師範學校高等師範學科を卒業す、而かも在學中品行端正學力優等の故を以て特別賞與に浴せしの人なり、最初任を矢上小學校訓導に奉じ、翌年撫養高等に勤務す、同二十五年板野郡奥野高等小學校長に擢てられ、爾來學區變更に依り廢校等の事あるも常に又同校に勤務す、同三十一年普通免許狀を受得し、翌年板野郡視學に擢てられ、同十四年正八位に叙し、大正二年現任校長に榮轉し、次で勳八等に叙せらる。

氏や濃厚圓滿、潤達人を飽かしめず、夙に當局其學力を知り、郡内教員檢定を屬する事毎歲、或は圖書審査委員を命じ、或は郡治一斑編纂委員を命ず、明治四十年文部省は多年視學の職に在りて效績擧がれるを選奨して百圓を附與し、同四十二年板野郡組合會より多年本組合高等小學校管理事務を幫助し功勞多き故を以て銀杯一組を贈る、又以て如何に氏が縣下斯界に貢獻せしかを窺ふ可く郡民の尊信の如何を知るに足らん、氏を仰ぐ本校生徒夫れ多幸なる哉。』

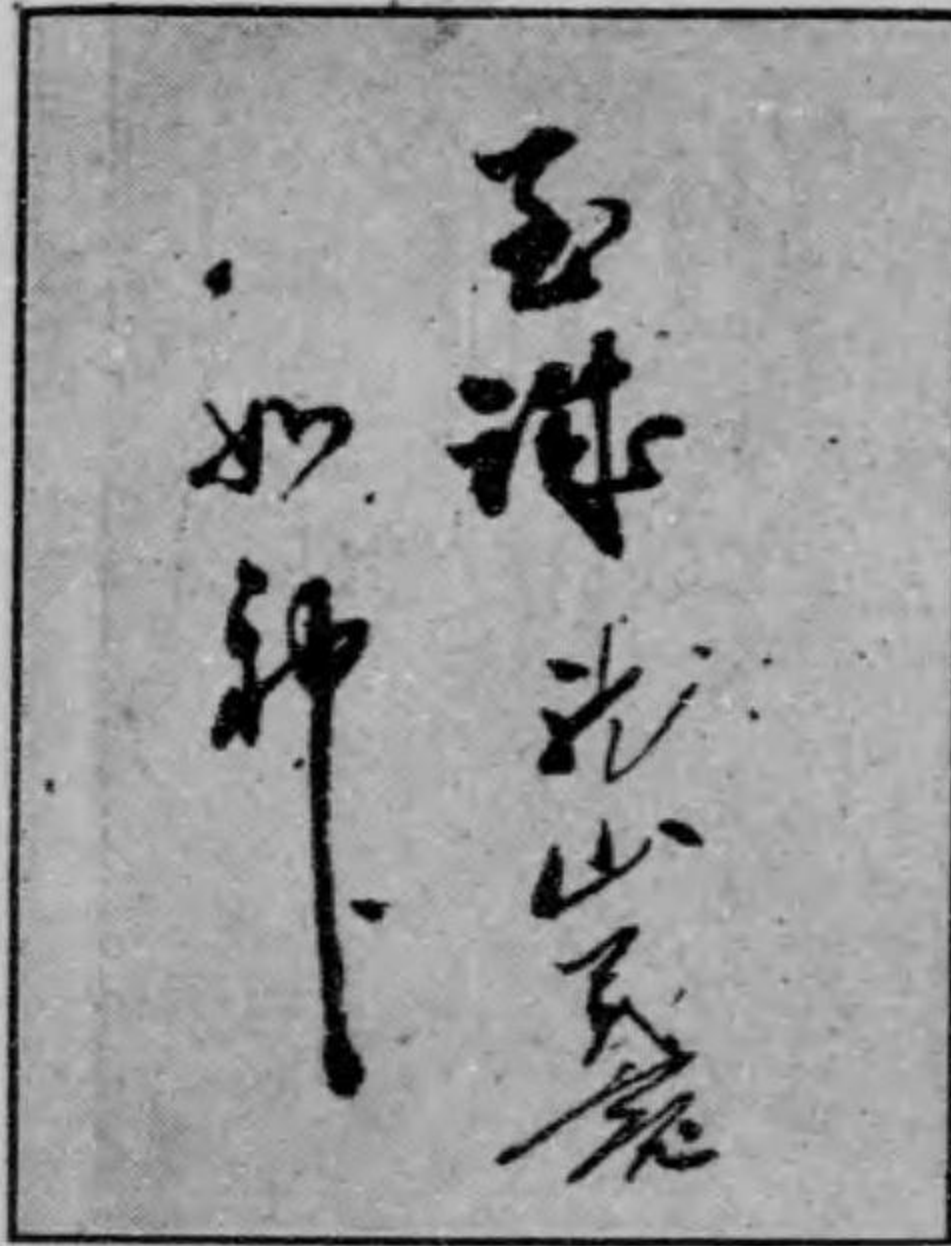
鑑銘家育教

奈良縣女子師範學校長

從七位 龍山義亮氏

趣味は廣汎を欲し同情は深遠を欲す、之れ吾人が自己周圍の環境を醇化し寄附生活を豊富ならしめんとする鋭敏なる感受性にして常に自然と人生との事象に接觸し、眞の生命を感得して之を自己の精神的生活の資と爲す、此鋭敏なる感受性は應て教育効果の實際に顯はるゝもの、言に行に常に其善導に力めざる可からず、殊に女子教育者の心す可き處ならずや、龍山義亮氏亦能く之を知り、他日良妻賢母たる者を教養すべき女子教育者を訓ゆ。

氏は富山縣の人、明治十五年十二月を以て生る、明治卅五年富山縣立高岡中學校を出て、第四高等學校を経て、同四十二年東京帝國大學文科大學哲學科教育學科を卒業す、卒業後直ちに文部屬に任じ、普通學務局に勤務す、次て同局第二課長として大に當局に其非凡を知られ、屬僚亦氏に心服す、同四十四年東京女子高等師範學校、私立宗教大學等の講師を兼ね、以て其學才を斯界に馳せ、大正元年東京女子高等師範學校教授に兼任せられ、翌年從七位に叙せらる此年現校長に選拔せられ以て其任に赴く、年齒而立能く此重望を負ふ者、蓋し氏の品性崇高にして人格偉大なるの致す所、加之才學亦群を脱し、所謂學德兼備の良教育者たるを以てなり。氏は資性溫和にして常に一家の見識を有し、特に教育者、教育制度の研究を専門とし、交はるに城府なく、専ら至誠と公明を以て事に當り、下僚を遇する極めて厚し、着任猶一年餘未だ以て其効績を云々せずと雖も、必ずや抱負の大なる者在るを疑はず、教育と實際生活の意義氏に俟つや多し。』



鑑銘家育教

潮鮮 咸鏡南道 咸興公立農業學校長

從七位 高山徹氏

内地に於て幾多實業界に裨益し、且つ實業教育上に効績を留め、而かも富贍の學殖を提げて、今や朝鮮の實業教育に従ひ、嘖々の名聲を長白山嶺に轟かしむる人、之を現任咸興公立農業學校長高山徹氏其人なりとす、蓋し鮮人の指導誘掖並新開地の發展上貴重なる位置を占むと謂つ可し。明治八年十二月佐賀縣佐賀郡久保田村氏を産む、資性剛毅にして果斷に富み、職務に忠實なり、



且つ社交に長じ、諸官衙學校等の同情を一身に集む、明治三十四年東京農科大學實科を卒業し、爾來神奈川縣農事試験場技手、稅務管理局技手、沖繩縣技手、鹿兒島縣農事巡迴教師、大島檜業模範場技手、新潟縣南蒲原郡技手等を経て新潟縣加茂農林學校教諭、長野縣立上伊那農業學校教諭等に就き、同四十三年本校學監と爲り、翌年朝鮮教育令發布と同時に咸興公立農業學校教諭に任じ、大正二年現校長に進み、今や高等官七等從七位に叙せらる。氏は教育に關する勅語の旨趣に基き、國民性の涵養に努

め、特に誠實、信用、勤儉、從順等の諸徳を涵養せんとし、常に實踐躬行以て師表たるを念とす、其の部下職員に對する懇切叮嚀にして情實に走らず、寬嚴其の宜しきを得、所屬民に對しては溫情を以て指導誘掖し、根本的解決を以て當路者の疑義を質し、地方の向上發展に努力する事大なるを以て一般其徳を慕ひ、屢々來訪して其の教を乞ふ、由來朝鮮の地實業上の幼稚期に屬す、將來氏の如き良教育者を俟つ事益多し、希くば永く其職に在り以て學德教養に盡されん事を。』

鑑銘家育教

富山農學校長
縣立

從六位 武知悅三郎氏



民農を事とすれば則ち田墾く、田墾くれば則ち粟多し、粟多ければ則ち國富む、夫れ富強は列國共に望む所にして、而して各其の死力を此所にいたす、而も興亡隆衰生滅起伏克く人文史に錯綜の頁を挿む所以のもの、其の由る所固より一日にして足らざるべし、然れども要は其の民業の勳墮如何に歸せざるはなし、特に農業の事たる最も國富に主要なる關係を有するもの、是れが改善教育は直に一國の消長に關す、夫れ天下農業教育者の職責も亦大なるかな、吾人斯界に武知氏ある以て意を強うす。

現任富山縣立農學校長武知悅三郎氏は岡山縣岡山市の人、明治九年五月を以て生る、人と爲り謹厚にして寛大、實踐躬行を重んず、明治三十五年七月東京帝國大學農科大學を卒業し、翌年宮崎縣立農學校教諭に任じ、同四十一年七月現職に轉じ、富山縣技師富山縣米穀検査試験委員、病蟲被害豫防委員、東礪波郡蠶糸會顧問等を兼ね、大正二年十二月高等官五等に陞叙し、同三年二月從六位に叙せらる。

氏は教育勅語の趣旨に則り、農民の性格たる質實剛健の風を養成せんとし、之が爲め一法として生徒をして修養日誌を記さしめ、自ら之を檢閲して、嘗て倦むことを知らず、其の教授は克く圃場の實際と照合して、各種農藝上の實際的の技能を養ひ、事務理解の才を養ふ爲めには普通學科をも輕視せず、職員統率に就いては教務農務主任の下に各係を置き、自ら大綱を統べ、職員各其の特長才能は毫も掣肘せず、其の寛容の器克く部下を心服せしむ、令聲縣下斯界に噴々たる宜なる哉。

熊本縣
飽託郡 縣立工業學校長

竹村得太郎氏



美髯尺餘に及び、風姿俊爽、一見其君子人たるを知り得、竹村得太郎氏を以て其人と爲す、氏や其資性機敏に、事を處するや的確眞摯、他と語るに苟も一つの牆壁を設くるなく、加ふるに言語明快にして、其社交圓轉滑脱、氏に接する者齊しく其溫容に懷き、其雄才に服し、自ら徳化さるゝに至る、斯の如き名校長を戴ける該校、其校風燦然として煌き、其實績愈々擧る宜なる哉。

竹村氏は江州彦根藩の出、明治三年十一月彦根に生る、同二十八年七月東京高等工業學校染織工科の業を卒へ、爾後長岡實業學校福井染織學校福岡工業學校等に歴任し、明治四十四年九月現任となれり、氏や常に拮据黽勉此間一日の如く精勤し、外工業家を指導して斯業の改善進歩に貢獻し、内教鞭を振ひて其職に盡瘁し、内外其効果着々として擧る、眞に斯界の偉才と謂つべき也。

部下職員二十餘名に對し、一定の服務規律を勵行せしめ若し違背ある時は之を寛假せず、其態度や眞に嚴格なり、然れども一方事を處するに終始仁愛の徳を離れず、故に一人の信服せざるものなきは蓋し氏に美德の存する所以にして又敬仰に値する人格也、氏や學校長と同時に又熊本縣技師の職を奉じ、縣内工業上の重責を其双肩に荷ひ、常に當事者と密接なる關係を有し、授業上支障なき範圍に於て、校内を開放し以て、實業者の利便に供し、當業者の指導に励め、合せて學徒實地研究の資と爲す、實に氏の若きは工業學校長として模範たるに止まらず、更に一般的教育界の偉功者と稱すべき也。

静岡県濱松高等女學校長

從七位 田邊友三郎氏

豊太閣嘗て曰へらく「一に天を畏れよ二に身を修めよ三に儉を守れ」と、然り修身齊家元より天の定むる所なり、天道に背馳せるの言行は吾人取らざるなり、意義健にして行強なれば、何ぞ他の毀譽褒貶を顧みるの要あらん、孔子の所謂、志於道而耻惡衣惡食者未足與議也、の一節感殊に深きを覺ゆ、近時社會の趨勢を見るに、行道徳に逆ひ、言仁義に悖り、只身邊の修飾を而已之れ事とす若し夫れ女子に於て其甚しきを見る、田邊友三郎氏大に之が矯正に努力す、醇厚の俗を成す宜なる哉。



氏は加賀金澤の人、元治元年九月を以て生る、明治十九年宮城縣本吉郡志津川小學校訓導となり、同二十年志津川高等尋常小學校長に任じ、翌二十一年水口尋常小學校長を兼務す、施設宜しきに適ひ、經營亦頗る見る可く、一般の尊信極めて厚く、令聲夙に縣内に噴々たりき、同二十六年東京高等師範學校訓導に聘せられ、研鑽更に一段の光を添へ、同三十四年静岡県師範學校教諭心得を命ぜられ附屬小學校主事を務む、同三十七年現校長に抜かれ奏任を以て待遇せらる、同四十一年正八位に次て從七位に叙せらる、爾來勤績以て今日に至る、孜々營々として倦まざるは、斯界稀に見る處たり。

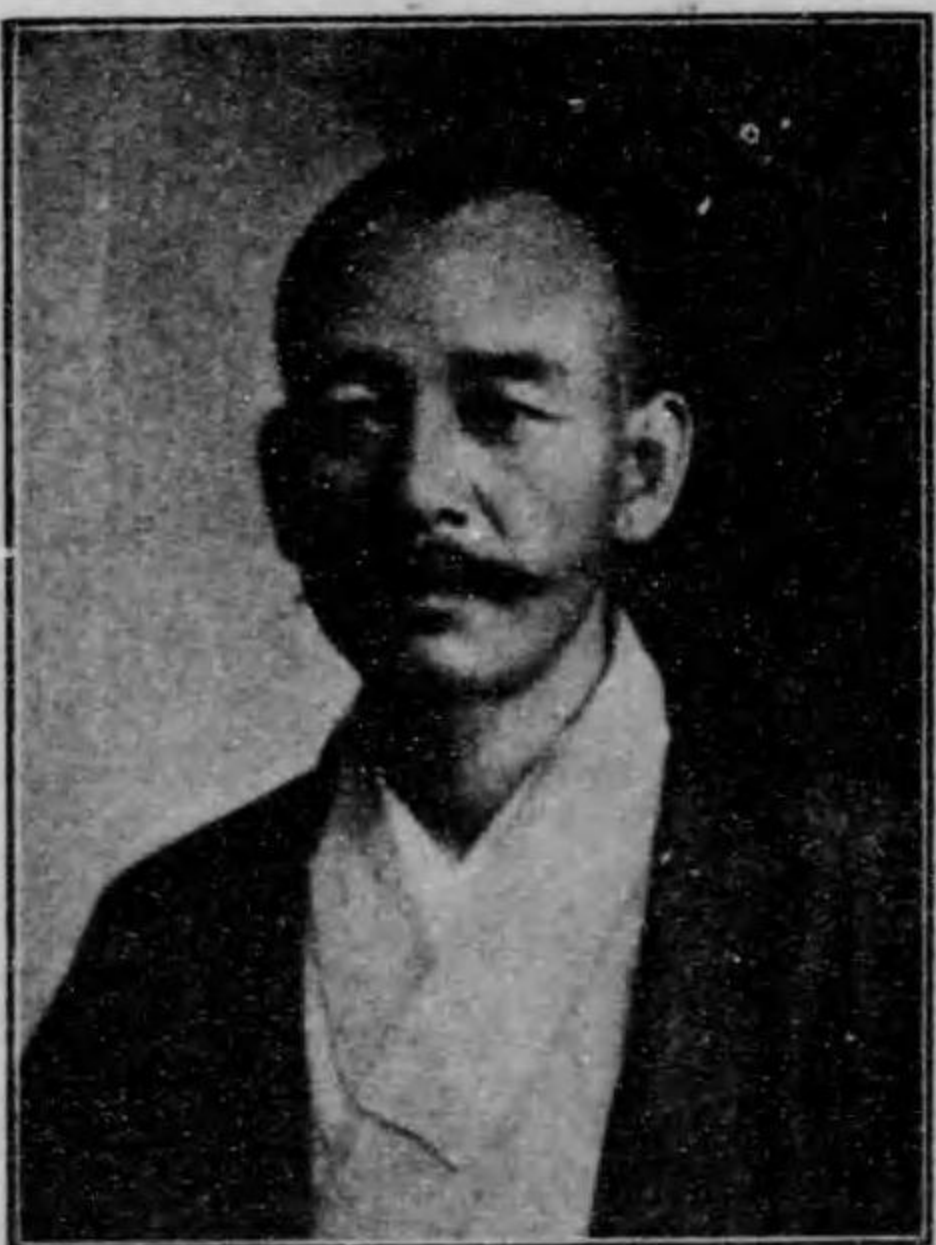
氏や資性濃厚篤實、忠實勤勉にして最も研究心に富む、邊幅を飾らず質素勤儉の範を躬らし、同情以て部下を遇し、慈愛以て生徒を訓ゆ、専ら心の教育に重を置き、志操堅硬、貞淑圓滿、他日の賢母を養はんとす、父兄部民亦氏の熱誠に動き、着々校風の興振せるを見る、豈偶然ならんや。」

鑑銘家育教

愛知縣東春日井郡視學

高橋鍬次郎氏

同情親和は社會結合の要素、信義は交際の要義なり、正義公道を履み、俯仰天地に耻ぢざるは社會生存の骨子勤勉は成業の基なり、高橋鍬治郎氏躬らは等の諸徳を提げて任に郡視學に在り、才氣を楯とし、辯舌を鋒とせざるも、其包藏する學識と經驗とは克く管下學校當事者の羅針盤たるを得べく、效蹟大に擧り、一般斯界の重鎮たるに至るもの、蓋し因なくんばあらざるなり。



氏は慶應三年三月を以て愛知縣中島郡大里村に生る、人と爲り温良篤實、人に接して親切丁寧、學に努むること熱心學實なり、心理學、教育學に精通し、殊に漢籍に造詣淺からず、明治二十二年縣師範學校を卒業し、同校附屬小學校教授方を囑托せられ、後中島郡、西春日井郡及名古屋市の各小學校に歴任し、同三十年愛知縣屬に任せられ學務課勤務たり、其任に在るや、縣下教育上の施設獻策一々肯綮に當り、人以て天才を叫ぶに至る、次て南設樂郡視學を始めとし、海東郡、西加茂郡、葉栗郡、中島郡等の郡視學を

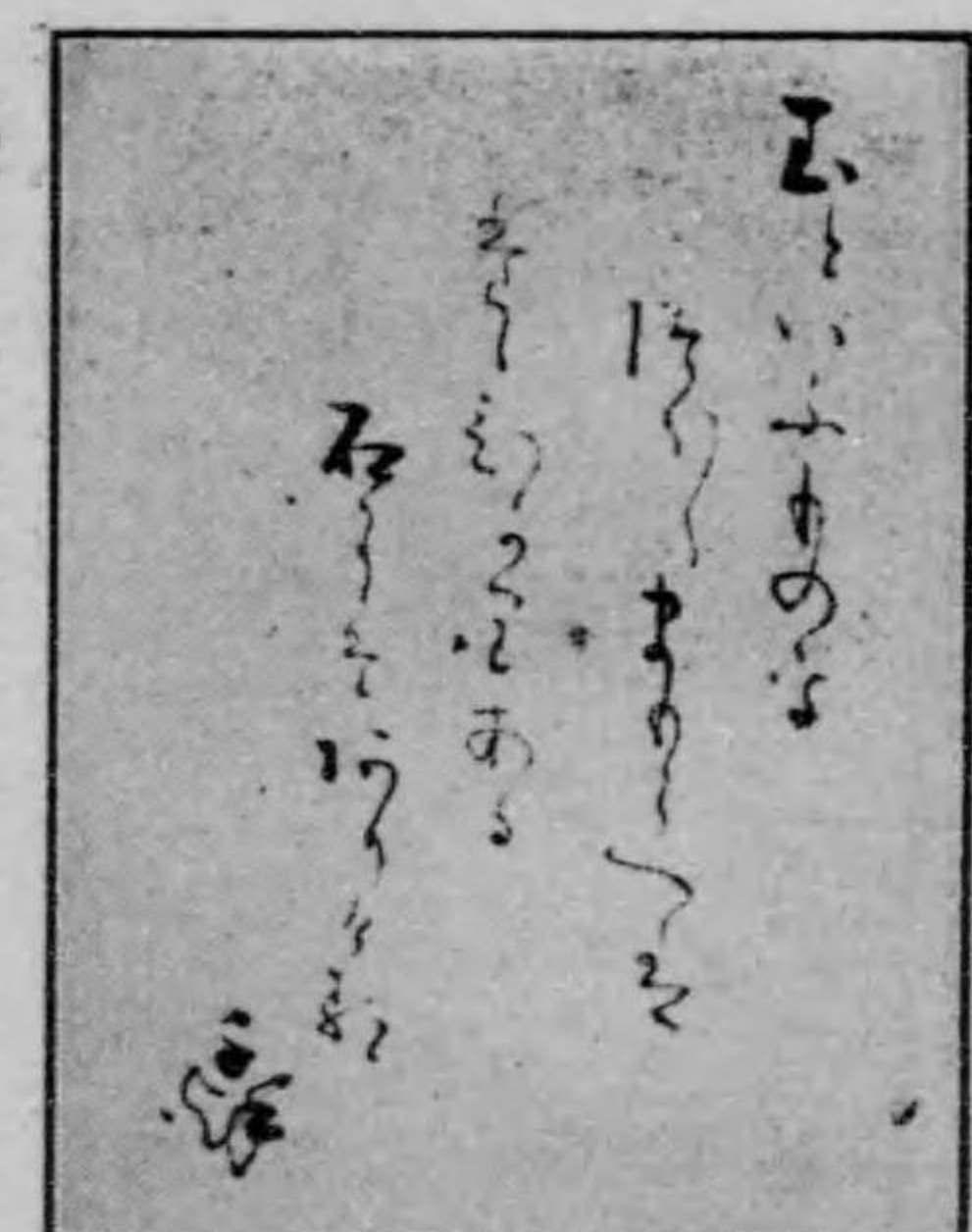
經て、現下東春日井郡視學の職に就き、聲名年と共に加はる盛ならずや。氏郡視學として小學校教員を指導するや、諄々其足らざるを訓へ、信義に坐し、公道に立ち、名分明透にして終始倦まず、之に接するや寬嚴宜しきを得、温情の間自ら犯し難き威を備へ、多數の悦服する所たり、青年教育、社會教育に關しては、熱心啓發に努め、其方針とする所は、浮華輕俳の風を排し、専ら着實穩健の思想を養成せんとするに在り、嗚呼君子なる哉。」

鑑銘家育教

北海道 立根室實業學校長

從七位 田崎 要氏

理論に馳せ實際を輕忽に附するは他日活社會に處する道にあらず、適例を卑近に求めて理解を容易ならしむ可し、殊に専門學科に於て然るを見る、而して他日繁劇なる社會の實務に當り、正直精勤既修の學術を應用し、奉公の誠を以て進路を開拓せしむるは、蓋し田崎氏の方針なり。



氏は新潟縣古志郡の人、慶應元年六月を以て生る、幼時小學教育を卒り傍ら近村稻田長燕に漢學を修め、明治十二年新潟港田崎要造氏に養はれ米穀商業の見習を爲せり、後上京し東京商法講習所に入り矢野次郎氏の薫陶に浴す、同二十年東京高等商業學校を卒へ日本鐵道及大阪帝國物産等の會社員たり、同三十四年一般經濟界の恐慌に際し會社解散の悲運に會せり、而して商業立國は經國の大本商業教育の普及は帝國の急務なるを確信し同三十五年下關商業學校に關係以來、甲府、釜山、豊橋の各商業學校長を経て大正二年現校長に就く、商界教育の爲め南船北馬席暖らずと雖も本務を畢生事として息まず。

部下をして感化の中心たるを自覺し、實賤躬行を辭せず和衷協同天職として怡々任務に努力せしめんとす、土地の狀況一般民度を基礎とし、善良なる第二の郷民を養成するを方針とし、父兄會を始め各種會合を催し、地方文明開發の資とし、町民と接觸す、俳優及び辯士の品位を改善し、以て演劇寄席及活動寫眞等を利用し、體育場を開設して志操意氣の鍛鍊を試み、閑日子女を伴ひて神社佛閣に詣て野邊の散策を奨むる等以て氏の人格を窺ふに足らん、我國商業の刷新、氏に待つや大なり。」

京都府葛野郡視學

正八位 勳八等 玉木捨吉氏



方今初等教育界の大勢を見るに、徒らに區々たる形式に捉らはれ、教化の効果如何を省みる者其數を減じ、且つ泰西の文物に心酔して我國固有の道義を忘却し、教育勅語、戊申詔書は只之を奉讀するに止め、敢て自から聖書に副ふの行爲なく、教科書上の教授を以て其の任務を完了するが如く思惟する者滔々然らざるはなし、然り我國の前途果して杞憂なくして止まんや、此時に當り現任京都府葛野郡視學玉木捨吉氏あるあり、躬から忠孝の道義に則り、管下當事者の指導誘掖に努め、郡下教育界の刷新統一に熱誠を捧ぐ、吾人の感謝措かざる所以也。

氏は文久三年十月を以て滋賀縣高島郡今津町に呱呱を舉ぐ、明治十五年滋賀縣師範學校高等師範學科を卒業し、直に縣下小學校に教鞭を執り、轉じて大阪府に入り久しく教壇上の人と爲り、小學校長として頗る令聲ありき、同三十三年改正官制實施に際し、兵庫縣下郡視學の職に在る事六年、同三十九年再び大阪府に轉じ、郡視學として貢献する事七年、大正二年十月遂に現職に就き、以て府下初等教育界の指導に任ず。

氏人と爲り濃厚英邁、機を見る敏に事を處する最も周到を極む、能く人情の機微を洞察し、交誼更に城壁を設けず、多年視學の職に執掌するが故に、能く學校の内部並教育法規に通じ、偏に國家教育の根本精神を誤まらざらんとす、適く所功績舉り、嘗て文部省の選奨を受け、次て正八位に叙せられ、勳八等瑞寶章を名譽授與せらるる所以なきにあらざる也。」

京都市
私立京都淑女高等女學校長

田島 教惠氏

東に比叡西に愛宕の靈巒あり、近く京都御所、村雲御殿、建勳北野平野の諸神社あり、風光明媚宛然歴史畫中の巍然たる校舎は之を淑女高等女學校と爲す、屢々伏見宮文秀女王殿下並村雲宮殿下尊臨の光榮を有し、御賞詞且御染筆下賜の御沙汰を蒙り、面目を施せるは世の既に知る所、其之を創立し校長として只管淑女養成に全力を竭す者は、田島教惠氏其人なりとす。



氏は慶應元年十一月を以て福井市に生る、資性温厚篤實にして而も剛毅果斷なり、明治十五年小學校教員と爲り、同二十一年東京哲學館に普通科を修め、亞て國民英學會に入り同二十四年文學科を卒業す、後京都に移り私立明進學校を創立し、同三十四年本校を設立す、當時京都府下高等女學校は府立一校を有する而已なりき、形式的教育を避け我國國有の美德たる温良貞淑の女徳を涵養し、堅實なる精神教育を施し、良妻賢母の養成を目的とし、冠するに淑女の二字を以てす、爾來終始一貫今日に及べり。

氏は女生徒を教ゆるに同性主義を採り、女教員組織と爲す、京都府其功績を認め府會の決議を経て補助金の下附あり、補習科は小學校教員免許状を受くる特典を得たり、宮内省より松樹數株、桃山御陵前の御建物等を下賜せらる、校庭内の恩光館之なり、其他御鏡、御旗、御紋章提灯並先帝の御遺品を賜はる、氏は英語倫理歴史音楽に長じ、女子日本帝國史、淑女の修養、淑女鑑、最新ヱアイオリン教本、大内山等二十餘種の著あり、中三種は天覽の光榮ありと、偉なる哉氏の光華。』

鑑銘家育教

京都府
愛宕郡立農林學校長

正八位 谷口 重氏

京都府下山岳重疊して而かも猶原野到る所に帶形を爲し、氣候中和地味豊沃、農産林業の富恰も天與の澤あり、宜なる哉實業學校を各所に設けて以て斯業の改良發展を策する、我谷口重氏は、實に愛宕郡立農林學校長として現に其の職に在り、地方殖産業の知識者たり先進者として今や重きを爲すの人、殊に豊富なる學殖は、其の指導に溢れて解疑更に凝滞する事なし。



氏は岡山縣の人、明治十一年十一月を以て其郷に呱呱を

擧ぐ、夙に育英に志あり、縣師範學校に學ぶ事四歳、明治三十三年を以て其の教科を終へ、直ちに任ぜられて英田郡江見高等小學校訓導と爲り、翌年同校長に擢んでられ、能く其の施設經營を完ふして校紀亦大に振張したり、然るに氏は大に感ずる所あり、出て、東京帝國大學農科大學附屬農業教員養成所に學び、同三十七年卒業して本府中郡五箇村立農林學校長に任ず、在職三年にして熊野郡立農林學校長に移り、同四十四年奏任待遇に進み、大正二年轉じて現校長と爲り、翌三年遂に正八位に叙せられ、現に猶其の職に營々努力す、壯なる哉。氏や剛毅篤實、處事緻密を極め、人に接して城寨を修めず、淡々名利を思はず、超然たる一個の識見を有し、着々効果を收むるが故に、適く所皆衆の尊信を受け、令名亦夙に高きを致す、學徒を導くに躬を以てし、實業家を指掖する最も懇切なり、現任日猶淺く、效績將來に俟つを可とせんも、過去の経歴、世既に定評あり、銘鑑の一頁に推擇する蓋し所以なきに非ざるなり。』

鑑銘家育教

鑑銘家育教

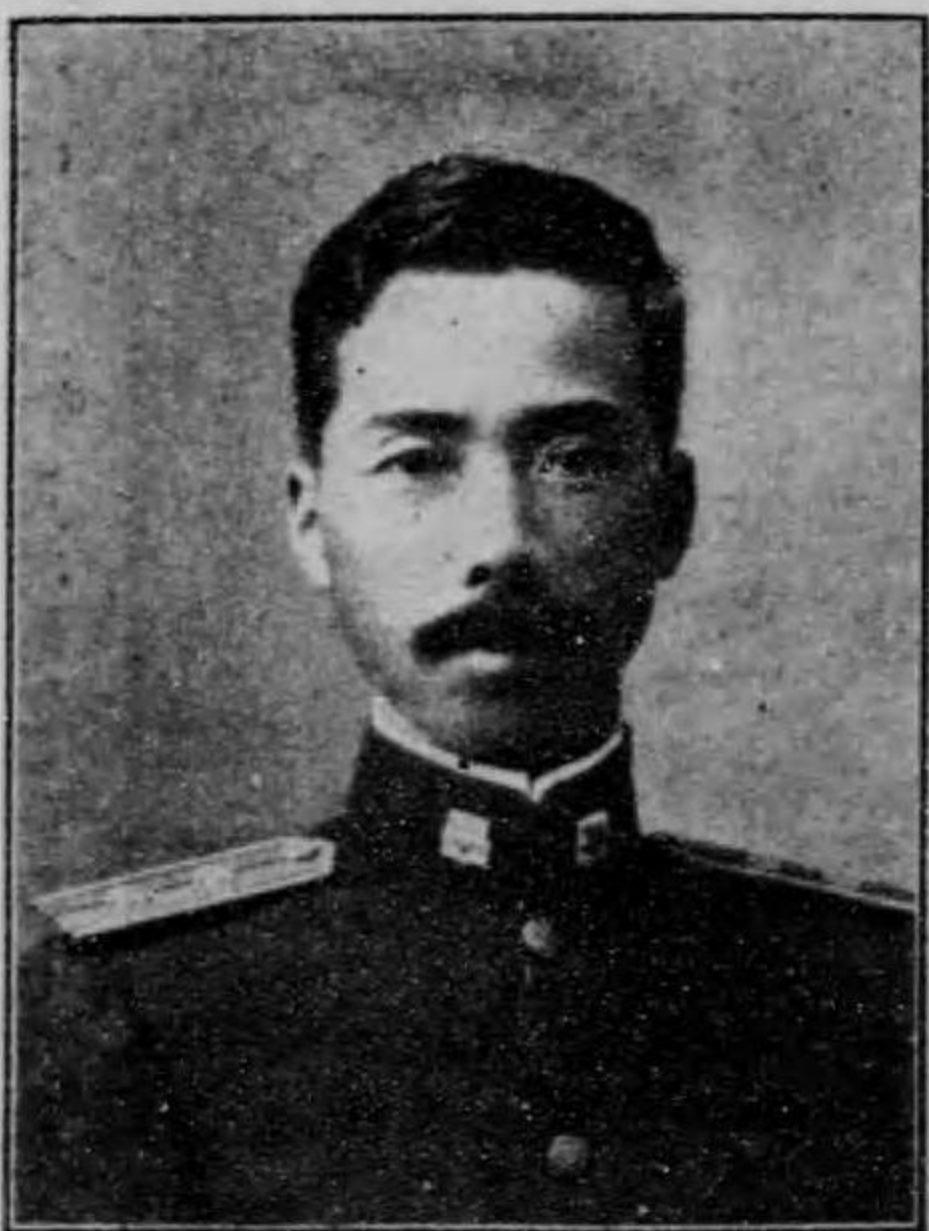
女之部

朝鮮 仁川公立商業學校長

正八位 高山經慶氏

服務規律あり服務心得めり、之が恪守は校紀振肅を期し得べく、校長の誠意は克く職員の意志を疎通し、事務の進捗校風の美果を收め得べし、所屬民に對しても赤誠の一字あるのみ、と蓋し現任仁川公立商業學校長高山經慶氏の方針、亦敢て他を求めんや。

氏は明治四年十一月を以て愛媛縣越智郡今治町に生る、穩愜、緻密、寡黙、勤直は氏の資性、自制力に富み統御の才に長ず、明治三十四年東京高等商業學校附設商業教員養成所を卒業し、廣島縣立尾道商業學校教諭愛媛縣立商業學校教諭を経て、石川縣町立七尾商業學校長に轉じ、同四十三年任を朝鮮に移し官立仁川實業學校學監たり、同四十五年遂に現職に就き、高等官七等たり。



由來鮮人は從順にして長上を尊敬し、親戚故舊に情誼厚く、語學に堪能の天稟を有し、技能に熟達すべき資質を備ふ、然れども勤勞を厭ひ貯蓄の念に乏しく、求めて他に倚頼し巧言令色誠實を缺き、不規律不潔不攝生を意とせず、眼中私利ありて公益の念薄く、推理力に乏しく應用の才なし、從つて國語珠算記帳に宜しく數學經濟會計に拙劣なり、要するに其の長所は益發揮に努め其短所は矯正補充を勵まし忠良の商民を養成せんとす、民智の程度未だ進歩の域に達せざる鮮人には學校家庭青年社會等の區別を立てず、只學校教育が家庭又は社會に影響を及ぼすべきを注意し、機會毎に社會一般に對する風教の維持、常識の養成、實業上の改良發明新智識を得しむるに努力して息まず、氏の教育方針當れるかな。』

四三〇

鑑銘家育教

德島 德島中學校教諭

從七位 武田丑太郎氏

毀譽褒貶を意に介せず、内外の分を定め榮辱の境を辨へ、其の唯一關心の對象たる國民教育に驀然猛進して他を顧みるなきは眞個教育家の三昧地に到達せるものにして、翻々たる俗社會に交はる狗々者流の窺ひ知る能はざる所なり、吾が武田丑太郎氏終始渝らず同一校に、熱心學徒を教へ、精勵校長を援けて校務に服し、本校今日の盛大は、氏が自家分上の性を盡し、翌々天職を樂しみ、其の居や一の凝滞なく、一の塵芥なく坦々教育に盡瘁したるの效與つて大なりと謂つべし。



氏は安政六年三月を以て德島縣名東郡佐古村に生る、頭腦明晰にして數理を能くし、現に算術、代數、幾何、三角物理科の中等教員免許狀を有す、明治十二年始めて德島中學校備教員と爲り、同十四年助教諭に進み、同二十六年教諭に任じ、同三十九年奏任教諭に進む、次で從七位に叙す氏は資性溫順、職務に熱誠其本校教員と爲りし以來三十五年の久しきに亘り、其間卒業生千五百餘人を輩出す、勤勉力行以て範を垂れ、生徒は自然に感化せられ、校内は勿論卒業生其他一般の尊敬頗る厚し、明治三十七年同校勤績二十五年に際し、同窓出身者相謀り其功績を表彰し、且報恩の紀念としてエンサイクロペチアブリタニカ及書架を贈り、又其肖像を同校紀念館に掲げたり、後文部省の選舉に依り金二百圓を贈らる、氏は亦陸海軍人志望者及教員志願者の爲熱心指導の任に當り、孜孜として人材の養成に努め、教育上の功績顯著なり茲に木村校長と共に本銘鑑を飾る、盛なる哉。』

女之部

四三一

愛知縣西加茂郡立農學校校長
兼同縣同郡立實業女學校校長

從七位 高野豐治郎氏

人と爲り濃厚にして沈着、事に當りて動せず、懇篤能く人に接し、孜孜勉め諄々倦まず、人格亦崇高にして教育者に適し、施設經營する所亦必ず成績を貽し、眞に人をして敬服せしむるものあり之を現任愛知縣西加茂郡立農學校校長兼同郡立實業學校校長高野豐治郎氏其人なりとす、偉なる哉。

氏は明治十年三月を以て山形縣下に生る、明治三十年山形中學校農業專修科を卒へ、同三十四年

東京帝國大學農科大學附設農業教員養成所を卒業し、直ちに任を東京府豊多摩郡立農業補習學校校長に奉じ、居る事六年能く其の成績を挙げ、同四十年轉じて現職に就き、大正三年實業教育上の成績顯著の故を以て文部省の選奨を受け令聲更に高きを加へ、奮闘努力亦彌増すに至る。

氏は本校創立と共に就職し、拮据勉め今日の盛況に至る戊申詔書の趣旨徹底に有ゆる手段を講じ、毎月十三日、三十日には詔書、勅語の奉讀を爲し印象を深からしむ、又毎月二回の實地授業研究會には郡視學及小學校長等の參列を求めて批評を乞ひ、優良なる圖書の愛讀を奨め、圖書室に各種修養上の書籍を備ふ、明治四十一年一心會を創立す、勤儉貯蓄の美風養成は其の眼目なり、生徒勤勞の收得は修學旅行費と爲す、又購買組合を創設して利便を圖り、一は以て産業組合の利益とし協同の必要及効果を利得せんとす、農作物を試食し又は家庭に持歸らしめて祖先以來の栽培法と比較研究せしむ、各農會は勿論老農及青年團と氣脈を通じ農蠶業の改良に努む、其他企劃頗る多し、校風全く就り校紀張る亦宜なる哉。



鑑銘家育教

大阪府黒江尋常小學校長
東成郡黒江高等小學校長

田中齋造氏

遠く交通往來の煩を避け、近く攝河の平野に接し、遙に金剛、葛城、信貴、生駒の青巒を望み、而かも土地高燥にして衛生に適し、廣大なる敷地に壯宏なる建築を施し、周到なる設備殊に悉く教師の考案若しくは製作にかゝる教具を有する黒江小學校は、田中齋造氏を其校長に戴く。

氏は河内長野町の人なり、明治十年九月を以て生る、率直にして意志強固、溫容掬す可きの徳あり、寡言にして實行二十年倦まざるもの、蓋し部下職員の悦服する所以なり、明治三十二年府師範學校を出づるや、南河内尋常高等小學校長を拜し、同三十三年東成郡杭全高等小學校訓導に轉じ、同三十四年現任地黒江尋常高等小學校訓導と爲り、同四十一年住吉高等小學校長を兼ね、爾後町村組合學校解除二回を経て、同四十三年現職に就く。



氏の教員を統ふるや、公平無私にして誠實、不言實行自ら範を示す、故に相互極めて圓滿、宛然一家族の觀あり、協同一致、和氣霽々たる裡に職務に盡瘁す、懇切所屬民を誘導し、以て學校をして文化の中心たらしめんとす、家庭教育の任務、必要、効果等の知識を一般保護者に與へん爲め、特に村教育會の開催、父兄會、母姉會の召集を行ひ、青年の風俗改善、向上心の發達を圖らん爲め夜學の勵行、優良青年の選奨を實行す、其他壯丁の教育、同窓會の組織、誠友會の雜誌刊行、教育談話會、教育品展覽會等其後進指導に盡す所なり、又村内篤行を賞揚し、以て社會の改良發達を圖り、村内の實力増進と風教改善に努むる所大なり、今や徳四隣に及ぶ嗚呼。

鑑銘家育教

鑑銘家育教

夕之部

青森縣 八戸町立工業徒弟學校長

玉井隆五郎氏

近時實業教育の勃興は漸く社會に其の眞價を認められ、從て徒弟の教養亦大に其必要なるを呼ばしむるに至る、然り文明の世無智の徒弟を以てして焉んぞ能く眞正なる實業界の發展を期する事を得ん、青森縣八戸町を工業徒弟學校長玉井隆五郎氏徒弟教育に盡す事多年、而かも能く人格ある技量ある徒弟を養ふて錚々の名を爲すの人、吾人の推稱亦蓋し偶然にあらざるなり。



氏は愛媛縣の人、明治四年八月を以て生る、明治二十七年愛媛縣立中學校を卒業し、續いて工業教員養成所に學び同二十九年木工本科を卒はる、任を陸軍建築部技手に奉じ同三十二年熊本縣師範學校教授を囑せられ、小學校教員乙種檢定委員たり、翌年飽託郡工業徒弟學校教授を兼ね、鉛筆書用器畫手工科中等教員免許狀を下附せられて熊本師範の教諭に任じ、其翌年鹿本郡來民工業徒弟學校長兼教諭拜命を兼ね同三十六年休職となる、翌年奈良縣吉野郡上吉野實業學校教諭兼舍監を拜し、同四十年奏任待遇に進み、同

四十二年現校長に移り、粒々枚々校の隆昌を圖りて以て今日に至る。氏や人と爲り温厚英邁、學に篤く、言行を謹しみ苟も輕忽あるなし、能く人を容れ部下職員を統ぶるに常に躬を以てし、諄々たる訓諭は能く學徒に敬愛せられ、校風立ろに起り校紀亦頻りに張るを見る、以て地方一般の信頼頗る深く、人以其徳を謳歌せざるなし、卑賤の職業として一般に蔑視せらるゝ徒弟を教育して終に寧日なく能く其職に忠なるの人、蓋し氏の如きは稀なり。」

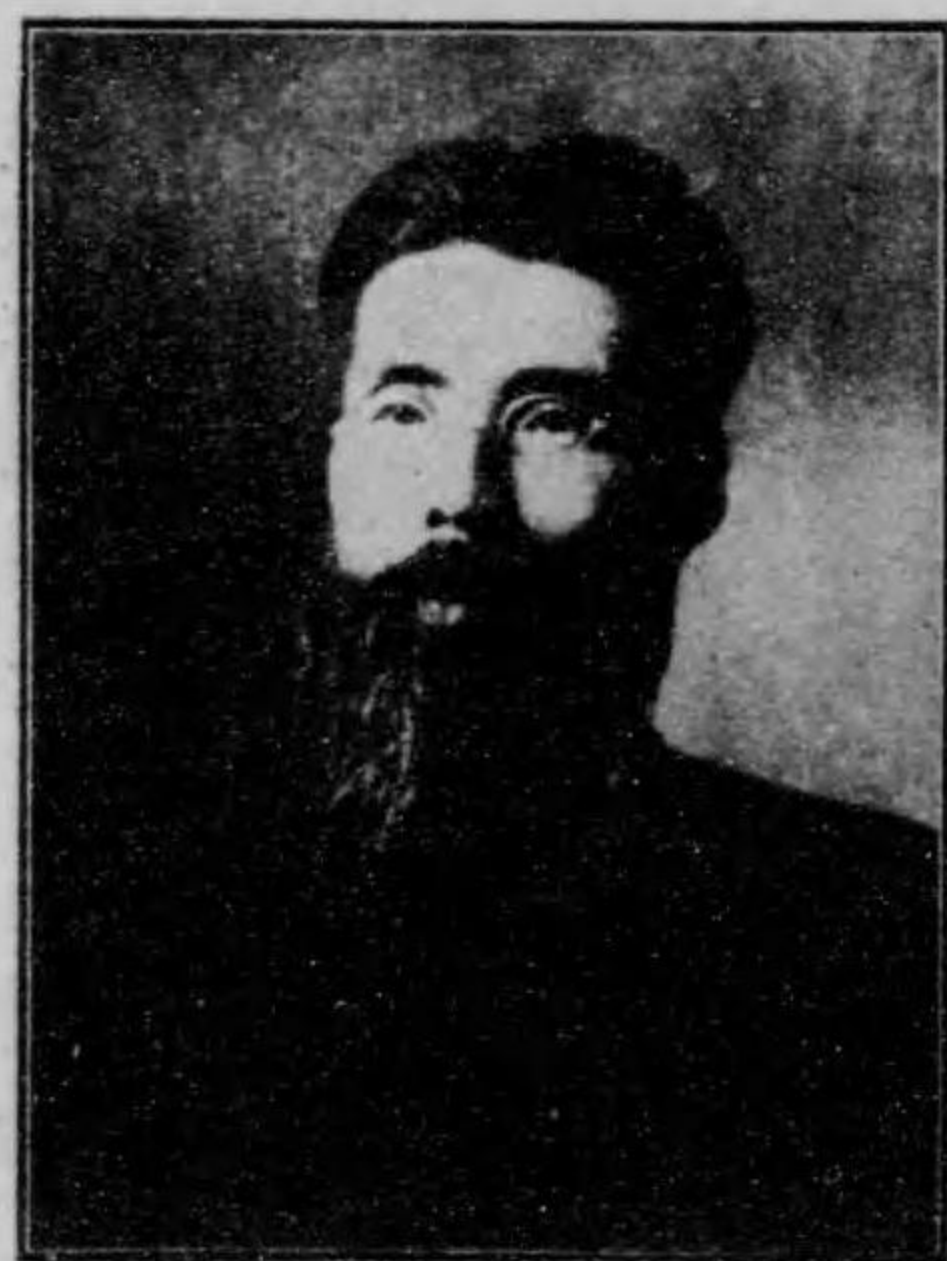
四三四

鑑銘家育教

北海道 大野尋常小學校長 龜田郡 高等

田中幸次郎氏

社會漸く初等教育の必要を認め、子弟の教養亦大に進みたるに乗じ、學校は頻りに新設備を町村に要求して村經濟の調和を缺き、教育上障害を召致する事往々にして之れあり、我田中幸次郎氏は能く叙上の弊を察して以て町村に臨み、教育の効果を收むるに遺憾なからしむるを期す。



氏は慶應二年十二月を以て舊松前藩に生る、明治十九年函館師範學校高等師範科を卒業して母校の訓導と爲り、此年函館區彌生小學校の訓導に移り、後實小學校、古平郡濱中小學校等に歴任して同二十四年現校訓導と爲り翌年同校長に進み、同二十九年大野農業補習學校長を兼ね、同三十一年普通免許狀を受得し、翌年北海道學事會々員を命ぜらる、同三十五年拔擢北海道廳視學に任じ、函館支廳に在勤す、同四十年轉じて現校に就き、復た大野の町民に接す、大正二年教導感化の効偉大なるの故を以て北海道廳より時計料五十圓を賞與せられ、文部省亦模範教育者中に列して氏を選奨せり。

氏資性温厚篤實、堅忍持久、校務を刷新し、温容懇切兒童を教養す、視學に就くや管内を統一し本校に移るや一層奮勵努力成績益々擧り、今や校下の信頼厚く幾多斯界の儕輩に畏敬せらる、教授訓練は世の風潮を趁はず、學校教育を教化の中心とし、諸種研究會を起して研鑽修養の資とし、屢老農に教を請ふて農業教育の改善を圖り、新に同窓會青年會の指導誘掖に努む、由來此地に大野興風會あり前任小祝校長の創始にかゝる、氏亦之が改善に力を致して成績見る可きものあり、偉なる哉。」

夕之部

四三五

青森縣
北津輕郡視學

高屋常太郎氏



孟子の曰く、善を以て人を服する者は未だ能く人を服するに有らざるなり、善を以て人を養ひ然して後に能く天下を服す、天下心服せずして而して王者たるものは未だ之れ有らざるなりと、久いかな善を以て人を養ふことや、孔孟統を斷つ二千有餘載、其の道係つて教育界の双肩にあり、然れども吾が教育界果して先王の道を體する者多きか、吾人は其の少きを悲まざるべからず、幸にして現任北津輕郡視學高屋常太郎氏あり、王者の遺訓此の人に由りて維持せらるゝを見る、孔子曰く、道は遠きに非ず近きに在りと、夫れ已に近し、求め難からざるなり、之を握扼せざるは求めざるのみ、斯界其の任や重し、職に育英にあるもの克く、孔夫子の言を體し、吾が高屋常太郎氏を以て範と爲さば、夫れ得る有るに庶幾し。

氏は青森縣弘前市の人、慶應元年八月の生なり、明治十六年青森縣師範學校を卒へ直ちに西津輕郡向尙小學校、越ヶ澤小學校、越水小學校及東津輕郡沖館小學校訓導に歴任し、同二十年東京府小石川區私立渡邊小學校訓導と爲り、同廿四年青森縣尋常中學校助教員を奉じ、後縣下四小學校に歴任し、同四十一年南津輕郡視學と爲り初めて職を教育行政に承く、同四十四年遂に現任に轉じ孜孜郡内教育の刷新を圖る。氏や剛直にして事務の才あり、常に正義を以て信條と爲し、之を以て人に接し、不偏不黨肯て論る事なく努めて質實穩健の風氣獎勵に盡瘁す、本郡斯界に此人を得たる多幸と謂つべし矣。

鑑銘家育教

兵庫縣
宍粟郡山崎高等小學校長

多賀貫一郎氏



古語に曰く、陽氣の發する所、金石亦透ると、夫れ精神一到何事か成らざらん、茲に多賀貫一郎氏、資性穎敏、敦厚にして質實、至誠を以て其職に當り、斃れて後止むは、眞に氏の常套語たり。加ふるに卓越せる才識を藏し、就中、音樂、國語、理科に造詣頗る深く、諄々として教鞭を執り、孜孜として一校を経営して息む事を知らず、又得易からざるの好箇校長と謂ふべきかな。

兵庫縣宍粟郡山崎町の地、明治二年十一月を以て氏を生む、氏長ずるに及び兵庫縣尋常師範學校に學び、同二十六年を以て卒業の榮を擔ひ、直ちに縣内宍粟郡篠陽高等小學校訓導に任せられ、同二十七年宍粟郡高等小學校に、同二十九年宍粟郡第二高等小學校に轉じ、同三十四年同校長に進む、同三十六年郷里なる現任校に轉じ、訓導兼校長として以て今日に及び、同四十年より兵庫縣宍粟町立技藝專修女學校長を兼ね、精勵大いに勵めつゝあり。

夫れ、論法の巧みなる者、之れ智者たるに背かず、談話の華やかなる者、之れ才子たるに背かず、然れども之等は齊しく架空の事のみ、何時となく消え滅する恰かも彩虹と異なるなし、則ち事の成るは不言實行の人より確かなるはなし、氏が其好典型とし努々汲々たるに於て、如何ぞ功績なくして終るべけんや、則ち校紀大いに振肅し、明治四十年教授訓育の實績優良なるに據り、大正三年體育の施設宜しきにより、縣知事より褒賞を受くるに至る、又氏が該地方教育界の重鎮として、令聞を馳する所以なきに非ざる也。』

鑑銘家育教

神奈川縣曾屋尋常小學校長
中 郡曾屋高等小學校長

武 新次郎氏

温言厚諭の情、其胸裡より溢れて人を動かす、兇漢も爲めに慚感すべく、敦厚温籍なる東風、其胸裡より徐ろに流れて人を感じしめ、黠奴も爲めに反省すべし、實に温良圓満武新次郎氏の如きは甚だ多からず、君子の人を化するも恰も春夏相廻り秋冬相移るが如しと、徳崇うして望み重く、衆人之れを仰ぎ、齊しく其智に服し、其仁に懐く、眞に得易からざるの人格者なるかな。



明治九年八月神奈川縣中郡東秦野村氏を生む、同三十二年三月神奈川縣師範學校を卒業し、同縣中郡曾屋尋常高等小學校訓導に任せられ、一時其郷里なる東秦野村小學校に職を轉ぜしが、同三十八年六月、再び曾屋尋常高等小學校訓導と爲り、同四十年五月同小學校長を兼任するに至り、爾來現今に及び、始め該校は教授訓育の成績比較的良好ならざりしが、氏の熱誠氏の黽勉は遂に其効果を顯し來り着々其成績を實地に高めつゝあり、凡そ事、順にある時其勢を増進向上せしむるは凡夫も時を得て之れを爲し得べし、事、逆にある時其勢を一轉せしめ、之れを順に直し、發達進歩せしむるの業は實に拔群の才智と熱烈なる誠意あるの士に非ずんば則ち能はざる處なり、氏が振はざる其校風を觀取し、銳意之れが改善に心血を注ぎ、以て其逆を順に、好成果を修むるに至らしめし、其効たるや實に灼々として其力強く、以て仰ぐに足るべきものなり、學童氏を嚴父と敬畏し、慈母と親善し、部下職員皆氏の手足の如く、郷閭齊しく氏を敬慕す、眞に故なきにあらざる也。」

鑑 銘 家 育 教

新潟縣 下早川尋常小學校長
西頸城郡 高等小學校長

田 鹿 勝 三 郎 氏

『總ての物汝に與ふ、たゞその代價を拂へ』天は實に人間に向て此の如く命ずる也、革新は人生の偉業なり、汝は此の偉業をば無代價にして成し遂げんとする乎、それ一斗の粟を作る尙ほ若干の代價あり、一尾の魚を捕ふ尙若干の苦勞あり、汝は邦家革新の偉業を以て一尾の魚一斗の粟よりも廉價なるものと爲す乎、思はざるの甚しきのみ、田鹿氏は其報酬其代價として名譽と人格とを受く、蓋し男子の本懐人生の本分たるにあらざるや。



氏は明治元年十二月を以て下早川村に生る、明治廿年縣師範學校を卒業し、三島郡尼瀨町來迎寺村等の小學校を経営し、勤績し、到る處兒童に愛慕せられ部下職員の信頼を得、村民の信用を博せり、越て同四十三年現校に轉ず、由來本村は政黨の軋轢激しく前任者何れも一二年にして去るを常とす、然るに氏は公平を重んじ朝夕奮勵努力を持続し、以て村民父兄青年子女の尊信を收め得たり。

其質實にして友義に厚く、克く後進を誘導し、而も人に接して城府を設けず、快活に克く談ず、一度氏に交はる者終生其影を慕ふ趣あり、嘗て尼瀨町に在るや補習夜學校を起して商家の子弟を養ひ、町教育會、土曜會を創設して社會を誘導し、來迎寺村に於ては基本財産蓄積法、學校林の新設を大成す、金圓時計什器の寄贈は其功勞の恩謝なり、難治の本校にては殊に部下職員兒童を愛撫し、村民遂に其徳を頌す、公務の傍ら教育會青年會其他の指導に努力し漸進に不言實行を標榜す、平常能く書冊に親み修養に努む、壯なりと謂ふべし。』

鑑 銘 家 育 教

大阪市尋常小學校長

龍見竹之助氏

資性清淡にして名利に趨らず、重厚にして起居を苟もせず、讀書を以て唯一の趣味とし、國文學に精通し、書畫の技能を有す、而して其の生命とする所は教育事業に在りといふ、龍見竹之助氏の如きは真に進取的の教育者なるかな、實業の隆盛を以て知らるゝ大阪市の小學校長に、氏の如き性格と修養とを具備する人格者あるは、堅實にして信用ある商才を養ふに遺憾なかるべし。



氏は、明治三年七月を以て大阪市東區西横堀に生れ長じて同府師範學校に學び、卒業後同二十四年七月同市東區中大江尋常小學校訓導と爲り、在職十一年にして同市玉造尋常高等小學校長に轉じ、五年の後再び中大江尋常小學校に移りて校長と爲り、同校に併置せられし商業補習學校、裁縫學校、及び幼稚園等を統率せり、氏が玉造校に就任後校内の整頓はいふをまたず、教導感化の功は校外に及び、附近部落の改良最も顯著なるものあり、明治四十二年三月大阪府は、氏の成績優良を賞して金三十圓を與へ、同四十四年五月東區教育會は、多年勤績の功勞を感謝すべく置時計を贈りて、これを表彰したり。氏の生涯は、實に教育を以て終始するものにして、校内に於ける努力の外、校外に在りても、在郷軍人會の爲に顯著なる成績を挙げ、父兄郷黨の欽仰するところ淺からず、蓋し氏の如きは、至誠を盡して教導感化に捧ぐるもの、その成績が華ならず、浮ならず、着々として實果を結びつゝ、あるは又以て教育界の模範的人物と謂つべし。』

教育家銘鑑

福岡縣蘆屋尋常小學校長

高橋 格氏

夫れ博學なる宜し、明敏なる宜し、抑も又風采の堂々たる宜し、之れ皆教育者とし、素より輕からざるの資格たり、然れども之れに加ふるに、謹嚴なる態度と濃厚厚諭の情を併せ有せざらんか、之れ、佛作りて魂を入れざるに等しく又之れ何の用かあらんや我高橋格氏、嚴正敦厚なる性行以て兒童の範たるに足るべく、質實素朴なる風格、以て之を率ゐるに足るべし、而かも事を爲すに綿密周到なる深慮を以てし、輕佻なる時流を去る事頗る遠し、徳望郷間に喧傳さるゝ又所になきにあらざるなり。



福岡縣三井郡櫛原村の地、慶應元年四月を以て氏を生む明治二十一年、同縣尋常師範學校卒業の秀才なり、同十六年、同縣御井郡六番學區に其熱烈なる教鞭を振ひし以來、縣内御笠郡二日市高等小學校、御井郡第一櫛原高等小學校、遠賀郡蘆屋高等小學校、同郡洞北高等小學校に歴任し、同三十二年、蘆屋高等小學校長と爲り、大正三年、尋常小學校と併合の結果、現任に移り以て教務の刷新を圖る。

氏や地方舊來の弊風改善を以て自己が責任と感じ、教育勸語及戊申詔書の聖旨を奉體實行せしむべく、禮儀、勤勞、節儉、忍耐、義勇の五項目を以て訓練要綱とし、之れが實踐を期しつゝあり、又教材の地方化主義並に生産的教育主義を執り、自發活動的に教授す、部下統御又甚だ宜しきを得宛然一大家庭の如く、相信じ、相扶け、以て春色駘蕩たるの裡に、經營孜孜、着々として實果を擧げつゝあり、氏や華やかならざれど實あるの人、又仰ぐ可き偉材なる哉。』

教育家銘鑑

臺灣 臺阿緞廳 蕃薯寮尋常小學校長

竹内理喜太氏

校は蕃薯寮街の西北に位し、後ろに鼓山を控へ、前に楠仔仙溪の清流を挾んで、旗尾山に相對し臺灣南部に於ける山紫水明の地に在り、校長竹内理喜太氏、學徳勝れ識見又頗る高く、眞に好教育家の典型にして、下に慈愛同情を以て對し、又人を容るゝの雅量海の如きもの存す、而して公を持し平を保ち、圓滿なる裡に訓育の實績着々として擧がる、又仰ぐ可きの士なる哉。

氏は明治元年五月を以て福井市老松下町に生る、同二十四年同縣尋常師範學校を卒業し、福井市順化小學校に勤務、同三十六年休職となり、同年渡臺、臺北第二尋常高等小學校に其教鞭を振ひ、同三十八年臨時戶口調査委員に、同三十九年地方稅出納補助に命ぜられ、同四十二年阿緞尋常高等小學校長と爲り、大正二年現校に赴任、手巾葉尋常小學校長を兼任し、以て今日に及べり。



「易き事なりとも等閑に附せしめず」「命ずれば必ず實行せしむ」「着手すれば必ず仕上げせしむ」之れ氏が教育上の主義にして、謂ふ處や平易なり而かも如何に其實際的なるかは以て斯界の範とすべきなり、氏又、該地の風習に鑑み、特に、誠實、規律、禮讓、清潔、質素、獨立等を訓育の要項とし、大いに之れが實踐を圖りつゝあり、夫れ彈丸兩飛、劍戟閃々たるの裡に勇戰して偉功を立つるの徒、勿論國家の干城たり、然りと雖も僻陬の地に於て、第二の國民たる兒童を訓育し、諄々、其熱誠を盡しつゝある氏の如き國家の干城あるを忘るべからず、氏が志や壯、氏が行や又美と謂つべき也。」

教 育 家 銘 鑑

岐阜縣 付知尋常小學校長 惠那郡

玉置源次郎氏

身體魁傑、眼光奕々、中に沈勇果毅の氣象を藏し、他に對する極めて寛宏、眞に温情掬すべきもの存するの君子人、玉置源次郎氏を以て其人と爲す、すべて善意を以て人を解し、長所を以て人を見る、之れ聽て氏が温良なる自己の裏書にして、衆人氏を敬慕して措かざる所以又茲に存す、好んで他の惡を云ひ、他の短所を擧ぐるは之れ小人の常、玉置氏に比し又霄壤の差ある哉。



明治四年八月、岐阜縣土岐郡餘戶村、此君子を生む、氏や同二十五年同縣師範學校卒業後、縣内土岐郡柿野小學校に赴任、翌二十六年五月現任となり、茲に星霜を重ねる事、實に二十有一、赫日光を流す夏日も、朔風肉を射る冬夜も、惟ふ處皆育英の職に關らざるなく、電ひる處皆校風の振起に及ばざるなし、夫れ丹心は以て日を貫く可く、至誠は以て天を撼かすべし、校裡整然として、功績着々顯はれ、或は縣より獎勵金を得、或は文部大臣より薦獎せらるゝに至りし、又所以なきにあらざるなり。

抑々現時の教育、其學ぶ所に於て、其教ふる術に於て、又昔時に比すべからざる進歩發達を遂げたり、然りと雖も之を齎つて熟思するに、師弟の情交の如き至醇の情味に於ては甚だしく退歩したるの感なくんばあらず、茲に玉置氏、無意無味の拘束を排し、至情を以て兒童を訓化し至情を以て部下職員を統御し、至情を以て校下郷民の向上を促し、至情を以て、青年教育に、社會教育に盡瘁して息まず、則ち師弟の間自ら他に見る能はざるの情味を有するに至れる偶然にあらざるなり。」

教 育 家 銘 鑑

兵庫縣小宅尋常小學校長
揖保郡

田中銀次郎氏

朱子謂へらく『陽氣發する所金石も亦透る、精神一到何事か成らざらん』と、男子事を企つる宜しく此不屈不撓の精神なかる可からず、徒らに空理空論に駢するなく熱誠事に當らざるべからず、須らく其本を極むるを要す、所謂『萬物其本を得るものは生じ、百事其道を得るものは成る』とは蓋し此謂ひなり、我田中銀次郎氏の今日在る、真に然るありと謂つ可きなり。



氏は揖保郡龍野町の人、慶應三年八月を以て生る、資性親切丁寧にして用意周到、穩健にして着實等有ゆる美德を備へ、研鑽力極めて旺盛にして、各教科に對する造詣の深奥なる、蓋し稀に見る所なりとす、元私立の不完全なる中等教育を受けし而已にて専ら獨習に依りたるは、以て其不撓の精神に出でたるものとす、明治二十六年尋常小學校の免許状を受け、同三十三年小學校本科正教員の資格を得たり明治三十五年現校長に就き、以て今日に至れり、其聲望遠近に洽きを見る。

氏の具有せる資質は學校經營方面に遺憾なく發揮せられ、訓練に、教授に、管理に、一として不備なる點なく、足一步同校に入れば直ちに一種の快感を覺ゆ、曩に優良學校として文部の表彰を受く、部下を統督する寛嚴中を得、職員誠意と忠實を見る、所屬民に接觸し、青年夜學の補習には銳意之が衝に當り、在郷軍人會と提携し、神職僧侶等と協力して奉誠會を組織し、教育勸語、戊申詔書の趣旨徹底を期し、講演會を開催する等、其熱誠實に敬服に堪えざるなり。』

長野縣須坂尋常小學校長
上高井郡

伊達義治氏



眞率寛裕衆を容るゝに足り、端正嚴格人を正すに宜しく、而かも人に接するや圓轉滑脱く衆心を攪る、本校曩に職員内部の調和を缺き、教權失墜せんとするの時就任したる我伊達義治氏は、拮据畫策校務を處理し、職員の統一に努め、今や學校の信用を挽回し、町の重望を受くるに至れり。氏は長野縣の人、明治五年十月を以て埴科郡松代町に生る、同二十八年縣師範學校を卒業し、直ちに埴科郡西條尋常小學校長に任ぜられ、後松代、埴生等の小學校を経て、同三十六年師範學校訓導に拔かれ、同三十九年南安曇郡堀金小學校長に轉じ、同四十三年遂に現校長に就き、千三百の兒童、二十七の學級を統督して令名遠く四隣に延び、今や郡下斯界の重鎮たり。

由來須坂町は製糸工業地にして質朴の風夙に失せ、漸次奢侈浮華に赴かんとするの傾向あるを以て、氏は誠實禮節質素勤勉等の諸徳養成に向つて力を用ひ、教授に於ては國語算術理科圖畫手工等に特に力を注ぎ、朝會は自から校風を向上せしむ可く訓話し、職員は威あり信あり、能く二者を調和して統督宜しきに適ひ、兒童の成績亦良好なるを見る、所屬民をして學校に同情あらしむ可く着々校内部の發達整備に盡瘁し又家庭と學校との聯絡に關しては種々考案を運らし、漸次充分なる効果を收め得るならん、然れども其効果如何の程度は各々視る處に因りて差等あるを免かれず、猶工女教育の獎勵に努力す、聽て効果奏す可きや必せり、氏や精神絶倫令名縣下に噴々斯界の偉人たる也。』

熊本縣 熊本市 壺川尋常小學校長

多田 駒喜氏

自ら教授法研究の中心と爲り、進取の風校内に充ち、職員教授用品の製作に工夫を凝らして教授上の利便を圖り、粒々辛苦を重ねて壺川尋常小學校を統率し、十有七年の久しき遂に寧日なく、孜孜効果の之れ擧るを樂しみ、營々施設經營を完ふす、氏夫れ勤めたる哉。



氏は熊本縣の人、慶應三年五月を以て生る、資性温厚にして英邁、夙に教育に畢生を期し、熊本縣師範學校を卒業し、明治二十二年を以て熊本高等小學校の訓導を拜命し、能く校長を佐けて施設經營に従ひ、同僚と協力一致して兒童の教化に偉功を樹て、徳望校の内外に及ぶ、同三十年衆望を負ふて現校長に就き、一層の奮勵努力を以て隆々たる校運を興し、同三十七年縣より表彰を受け、同四十年日露戰役の功を以て文部省より金三十圓を下賜せられ、同四十三年復た成績佳良の故を以て縣より金百圓を表彰せらる。

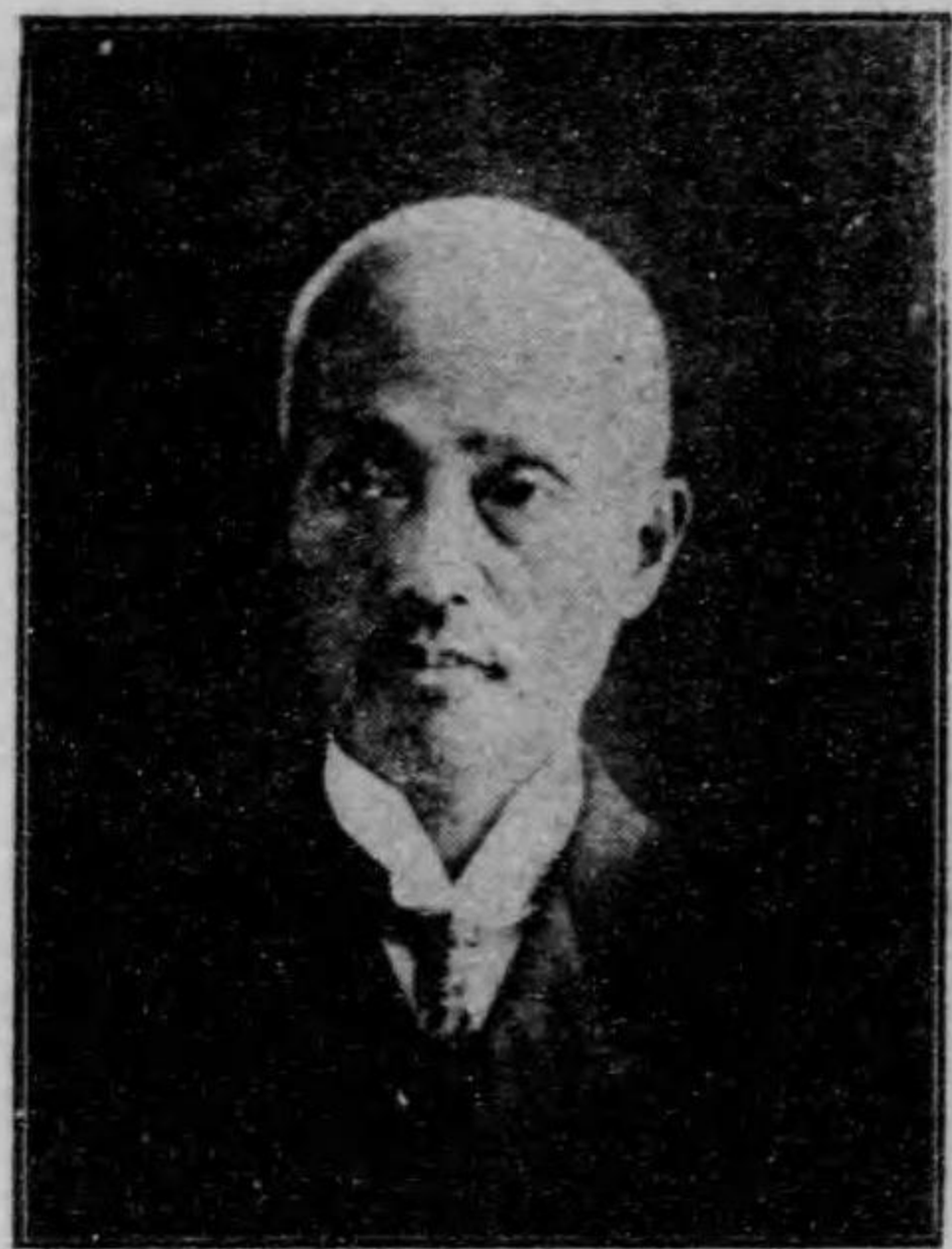
氏や共同一致規律を守り眞面目に働くを以て訓育の中心主義と爲し、熱心誠意部下を率ひ、皆其徳に服し兒童亦教示に従ふ、先年小松原文部大臣巡視の際佳良の成績を激賞せらる、父兄亦氏の熱心に信服し、年々若干の金圓を寄附して其の研究施設を助け、十數年前には縣下尋常校に手工圖書を科したる事なし、氏率先之を科す、然るに「大工の教育畫かきの教育は我が兒童に用なし」とて父兄有志の批難攻撃を受けしが、所信遂に動かず、他教科教授の進歩を圖ると共に其の實効を擧げ、近年一特色を現はすに至る、氏の自信夫れ堅い哉。」

鑑銘家育教

愛知縣 龜城尋常小學校長 碧海郡 高須

高須 鉦吉氏

温雅にして快明、克く世態人情に通じ、學識高遠にして、克く部下の修養を指導し、校務を處理する機敏、其技益々老熟の域に達す、故に其の教導訓化の宜に適する匹儔を見ず、其の特技とする所は詩文と能書たり舞雪に風し吟興湧く時、句々聯珠の玉唾口を衝いて發す、若し夫れ春羅秋桂の候、硯泉香墨に湛うるや、頽穂忽ち躍り龍虎の勢紙面に蟠嘯す、四隣其の能を稱し、囑依する者甚だ多しと、然して是れ繁務の勞を醫する氏が唯一の佚道たるに至りては、其の高風豈吟ずべからずや。



氏は元治元年四月を以て本郡刈谷町に生る、明治十五年二月縣師範學校を卒業し、同十六年八月刈谷學校訓導に任ぜられ、同二十一年三月同校長兼訓導を拜命し、同三十四年十一月富山縣に出向を命ぜられ、西礪波郡視學に任ぜらる、同三十六年六月山口縣豊浦郡視學に轉じ、同四十三年十二月同縣熊毛郡視學に轉じ、同四十四年郷里愛知に歸り、其の三月を以て現職に就く。

氏は兒童の訓育に就いて向上自重協同の三綱領を定め、郷土の人物松本奎黨十津川義舉の總裁に文を採り空戸彌四郎(十津川義舉の合關係)に於て武を採り、之を模範人物として日夕子弟を訓練す、教職員に對しては各自天賦の才能を發揮せしむることに努め、之に由つて各研究調査或は事務の分掌をなさしめ、更に毎週修養會を開き、研究、運動、娛樂の途を講じ努めて家庭的ならしめんことを期せり氏到る所名聲を博し所屬民の信賴厚きを得る偶然ならざる也。」

鑑銘家育教

熊本縣託麻高等小學校長

田代喜作氏

家あれば、桃あり、柳あり、野あれば、菜あり、麥あり、山あれば松あり、柏あり、川あれば、水あり、橋あり、而して桃は赤く又白く、柳は翠なり、菜花は黄に、麥苗は青し、松は緑、柏は碧水は漾々として、橋は紅霞の如く、之れ天然一幅の平和郷、一として和樂の象徴ならざるはなし、田代喜作氏資性極めて温籍にして、寛雅、常に東風駘蕩の情を失はず、未だ嘗て他と争闘せしことを識らず、終始靄然たる裡に其職を勵む、好果自ら修むるを得、兒童は嬉々たる自然の薰陶を受く、如斯、温籍誠實なる好箇校長を有せる託麻の地、豈至幸ならずや。



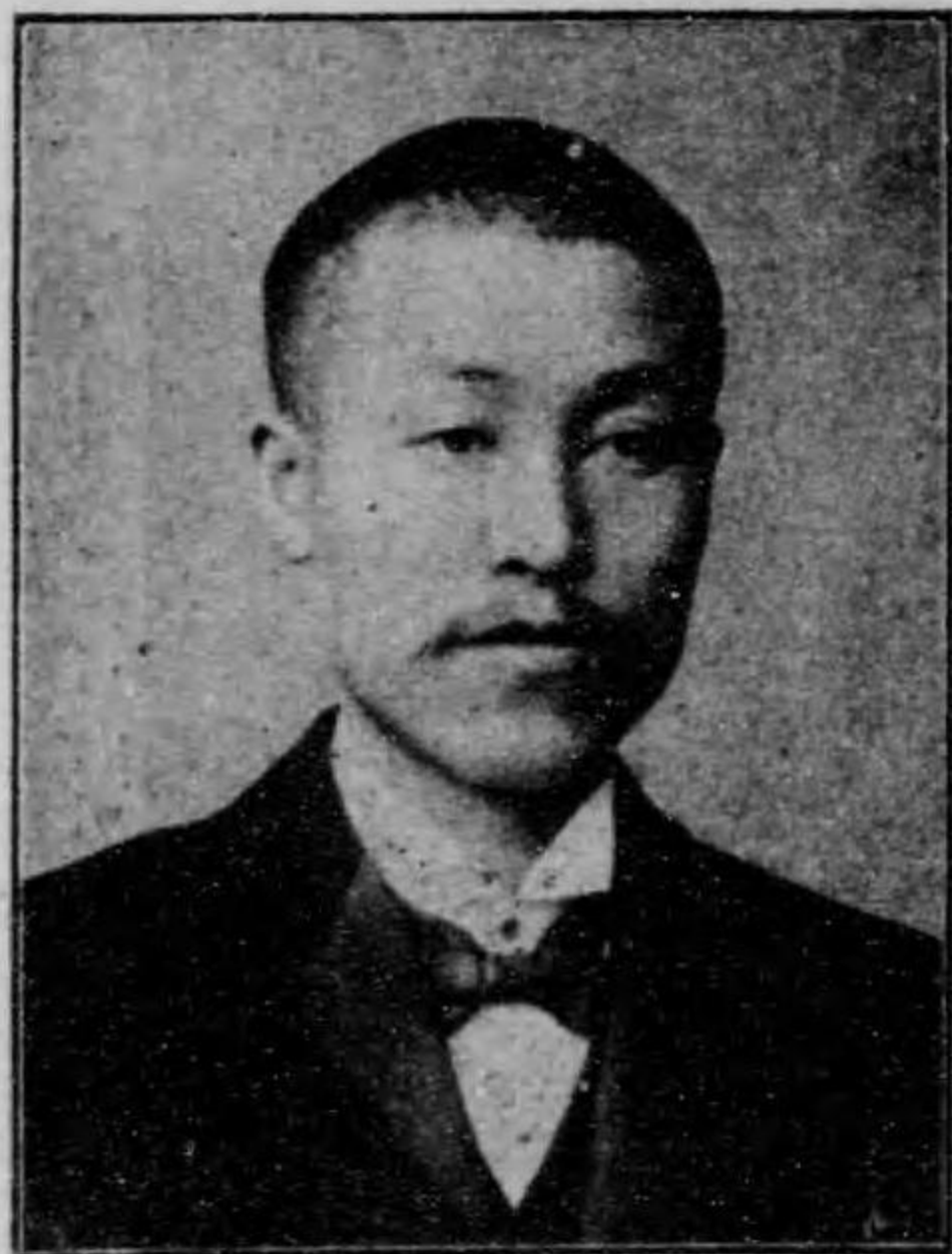
田代氏、熊本縣菊池郡の人、慶應元年加茂川村に生る、明治十九年熊本縣師範學校中等師範學科を卒業し、同年四月より同三十五年十月に至る殆んど二十箇年、小學校訓導又は校長として専心努力、一日の如く育英に盡瘁し、遂に拔擢されて同郡視學に任ぜられ、更に大正二年八月現任と爲り大に刷新を圖りつゝあり。

夫れ、公は保ち難く、平は持し難し、氏の部下職員、學童に對する極めて平正にして苟も依估偏僻あるなく、専ら是れを平等に、以て職員の好果を期し、所屬民に對しては常に學校と家庭との意思疏通を圖り、徒らに教育論などの華議に走らず、一に生活の實際に順應せる兒童を養成せんとす、進んては地方青年に對して其小學教育の効果を散逸せしめざる爲め常に機を設けて是れを誘掖指導し更に完全なる社會教育の効果を修めんとす、氏の如き好人格者又得易からざる也。』

岐阜縣八百津尋常小學校長

田口清城氏

感化力は教育力の改稱なり、教育者の行爲にして其感化力を有せざるものは、之を力なき教育と云ふ、今や文運隆昌百藝進化の域に達せしと雖も、其精神的實質の修養に至つては、寧ろ退歩したるに非ずやとは識者の常に杞憂する所にして、吾人亦畏懼なき能はず、田口清城氏夙に國民教育に志し、躬ら教育的人格の素養に努め、今や德澤四隣を潤ほす、蓋し聖域に在りと謂つ可き歟。



岐阜縣加茂郡、明治七年二月を以て氏を佐見村に産む、人と爲り温厚篤實、恪勤勵精、思慮周密にして志操頗る鞏硬なり、明治三十一年縣師範學校の出身、初め加茂郡神土尋常高等小學校長の職を奉じ、次で同三十四年下麻生尋常高等小學校長に轉ず、多年職務に勉勵し功勞不尠を以て縣の表彰を受く同四十二年川邊尋常高等小學校長に移り、大正元年十二月遂に八百津尋常高等小學校長に任ず、本校は十九學級、千百の兒童を容れ、基本金は有價證券二千三百圓畑七畝歩山林二十町歩を有し設備亦充實するを見る。

氏の部下職員を督するや、其大綱を示して些事は之を各自の自治に任じ、教育の効果を完からしめんとす、故に教員の長所を發揮せしめ、適材を適所に配し且つ各自の人格を尊重するの方針なり氏兒童を教ふるに嘗て煩なく、諄々倦まず、致々怠らず故を以て兒童深く敬慕し、學徒業終へて校門を出てたる後と雖も、永く師弟の關係を持續して忘れず、一郷化せられて敦厚の風走童野婦に及ぶ、嗚呼氏は眞の育英者にして、世間滔々名利に走るの時、氏を得たるは慶すべき哉。』

東京市錦華尋常小學校長

高羽幸槌氏

名聞副はざるも可し、利祿來らざるも亦可し、只々自からを修め、赤誠を披瀝して一步一步教育の最終目的地に達せん事を思ひ、言ふ可きは飽くまでも言ひ、行ふ可きは必ず徹底に到る、蓋し男兒の快男、吾人の推稱亦此點に在り、之を錦華尋常小學校現校長高羽幸槌氏に見る。



氏は廣島市の人、明治四年四月を以て的場町に生る、人と爲り不羈磊落にして交はるに城府を築かず、洋々たる襟度能く大船巨舶を繋ぎ、且つ之を操縦するの手腕あり、明治二十六年廣島縣師範學校を卒業し、直ちに廣島高等小學校訓導に任ぜられ、同三十年廣島女學校教師を囑託せらる、又縣教育會常議員として縣下教育界に貢献せし事不尠、同三十三年擢んでられて安佐郡高宮高等小學校長に任じ頗る令聲あり、翌年安佐郡北部小學校教員通常練習會頭に擧げられ、且教育會より木杯を贈與せらる同三十八年東京市に轉じ、神田尋常高等小學校長と爲り、兼て神田區商業補習學校長たり、同四十一年現校長に移り

錦華商業補習學校長を兼ね、神田區學務委員を選任せられ、致々營々止む事なし。氏は荆棘荒蕪を開拓するに逡巡するの士にあらず、其至誠は逢適する事々物々を征服するの勇あり、滔々風發の辯論は常に理に當り、人をして傾聽せしむるものあり、而して毅然たる教育方針は部下職員の協議に提し敢て漫りに專斷を行はず、常に新刊書を涉獵し諸の學說を腦底に蓄積す、漢學に詳しく英語を好む、今や帝都教育界に一異彩を放つものと謂つ可きか、氏の精血偉なる哉。』

北海道廣尾尋常小學校長

高梨駒治郎氏

膳に山海の魚菜を盛り、身に綾羅の衣を纏ひ、婢僕輻輳出入に便す、人其榮華を羨むと雖も、多くは優柔不斷只情蕩の人たる而已、屋は漏り衣は破れ、芋栗猶腹を鼓するに足らざる者、多くは忠孝仁義を知る、國亂れて忠臣現はれ、家貧にして孝子出づとは夫れ是を謂ふか。



現任廣尾小學校長高梨駒治郎氏は、宮城縣の人明治三年十二月に生る、幼時家計猶豊かなりしも禍災年を追ふて來り、七八歳の頃家運遂に傾き赤貧洗ふが如し、氏具さに辛酸を嘗め、十一歳甫て小學校に入り、十七歳授業生と爲り、十九歳縣師範學校に入る、此間家計を助けん爲め農業に従事し、年内出缺相半ばするの狀態なりしと雖も、其奮闘電勉は常に優等の成績を挙げ、郷間褒讃せざるものなかりき、同二十五年業を卒へ、縣下小學校に職を奉ずる事十有餘年、同三十六年北海道に移り、各地成績の良好を致し、現校長に轉じて已に五ヶ年に及び管内最も佳良なるもの、一とす。

氏資性圓滿骨て人と争はず、忠實事に従ひ、部下の指導獎勵に努む、僻遠の地猶安んじて職に努力するを見る、兒童教養上自己の見解を披瀝して、家庭との連絡を保ち、社會及青年をして援助せしむるの方法を執り、學藝會、父兄會、及家庭訪問、其他幻燈會、通俗講話會、青年會、同窓會等を催して之が啓發に力む、今や二女共宮城縣女子師範學校に學びつゝありと、艱雖汝を玉にすとは蓋し氏の如きを云ふか、薄志弱行、驕傲放逸の徒、三省して可なり。』

兵庫縣 枚田 尋常 小學校長
朝來郡 枚田 高等 小學校長

高橋 芳太郎 氏

凡そ教育は、學校に限る可きにあらず、學問は書物に限る可きにあらず、山川草木より、禽獸虫魚に至る迄耳目の觸るゝ所悉く教育の資料、學問の料たらざるはなし、學校をして其位置を撰擇する蓋し理ある哉、我枚田小學校は後に山を負ひ、前に川流を控へたる恰好の地に建てられ、戴くに濃厚篤實の高橋芳太郎氏を以てす、校風興り、校紀張れる亦宜なる哉。

兵庫縣神崎郡粟賀村は明治五年二月を以て高橋氏を産じ氏夙に育英に志し、縣師範學校に學び、明治二十八年其業を卒る、直ちに朝來郡枚田尋常高等小學校の訓導に任じ、次て山東高等小學校長、梁瀬尋常高等小學校長等を経て、同四十一年再び枚田に歸り同校長に就き、現今に及ぶ。



資性穩健にして摯實、献身的に職務に勵精し、郡内第一流の教育者として矚目せられ、圓轉滑脱の性能く人を魅するの概あり、最も外交に長じ内外の信望隆々たるものあり職員に對しては、各員の長所を利用し、各員自己發展の道を開くこと、教育事業は單に大綱を統ふるに止め、各自に自由活動の餘地を與ふる事等を以てし、所屬民の意見は易めて要求を容れ、兒童をして地方並に家庭に適應すべく教養せんとす、さまりよくせよ、まじめにはたらけ、げんきよくあれ、の三徳目を訓練の要綱とし、教材は理解に止めず體得せしめ、實際生活に必要な事項を選び補足教材となし、外形の方式に拘泥せず内實の結果を重んじ、應用の基礎を作り、活動的ならしむるに努む、氏の考慮夫れ偉なる哉。」

鑑 銘 家 育 教

三重縣 鳥羽 尋常 小學校長
志摩郡

竹 内 健 助 氏

兒童は絶へず四圍の状態に注意し、其求知心の發動は終に模倣と爲り、長者の實行を擬するに至る、殊に教育者の言行を信任する絶對的なるが故に、此點に於ても教育者は常に自己中心主義を以て師表たらざる可からざるなり、竹内健助氏の人格實に此れが範を爲すものあり。



氏は鳥羽町の人、明治二年に生る、資性濃厚篤實にして、事に處する極めて熱心、克く勤勉努力して飽かず、清廉にして質素苟も名利に走らず、最も同情心に富み、且つ度量殊に廣し、明治二十四年本縣師範學校を卒業し、直ちに本校に就職以來孜々盡瘁二十有餘年、累進して校長と爲る、其校地域の狹隘と經費の制限に因り理想の施設不能なるも克く細密なる注意を拂ひ補助的多方面の施設を爲し其缺陷を補ひ、一步も他に譲らざるの抱負を有す、兒童卒業後の實況を考究し、教授の缺陷を察知し、教材の郷土化等に注意し、職員が兒童に對する態度は宛然慈母の赤子に於けるものある、蓋し本校の特色なり。

氏は身を以て部下を率ひ、恩威並び行はれ、職員能く其職に樂しむ、部下の輔導愛撫宜しく、公私極めて公平且つ親切なり、父兄は氏の隔意なき熱情に信頼し、相互意志の疎通を得るに至れり、常に兒童心理の状態を究め、苟も不良なる心意發動に基く行爲は、嚴に之を戒諭して許す所なきも、亦其自由意志を尊重す、青年の指導は勿論、處女の教育僕婢の教化に至る迄効顯あらしめ、才子的人物を斥け質實敦厚の美風養成に力む、氏の精力主義豈に偉ならずや。」

鑑 銘 家 育 教

岡山縣 江西尋常小學校長
赤磐郡 江西高等小學校長

玉谷俊吉氏

資性機敏にして着實、熱心にして奮勵、其教授訓練の如きも、口頭を以て事を強ゆるにあらず、實踐躬行自ら範を垂れ、教授細目の如きは、自ら有效のものを編成す、是を以て子弟の尊信厚く、父兄の信頼深く、郡下教育界其他當局實務者一般の推重する所の者之を玉谷俊吉氏と爲す。氏は岡山縣の人、明治五年一月を以て、赤磐郡佐伯上村に生る、明治二十七年縣師範學校を卒業し、爾來今日に至る二十閱星霜、或は訓導として校長輔佐の任を盡し、或は校長として施設經營の職を完ふし、現に江西尋常高等小學校長の職に在る外、瀬戸實科女學校校長並に江西青年夜學校長を兼、孜々育英に盡瘁す、明治三十八年日露兵役の收まるに際し、當時在任の龍岡高等小學校に於て、補習科を設置し、戰勝紀念學校林を設定し、以て産業趣味の養成に、植林思想の涵養に、富國の策を講ずる等其貢献する所極めて大なるものあり。



由來本郡教育會が、十數町歩の殖林、數千圓の基金を造成せるは、主として氏の計畫宜しきを得たるに依り、加ふるに明治三十八年九月赤磐郡編纂の議起るや、氏は獨力全部編纂の重任を負ひ、爾來數年間、公務の餘暇を以て古書を搜索し、舊跡勝地を跋渉し、或は考古家を歴訪して夙夜自強、拮据經營能く其大任を完ふし、數百頁の大作を編成せり其の苦辛奮闘眞に筆紙に盡し難く、地方人士の企及する所にあらず、幾度か當局其他の旌表を受くる決して偶然ならざるなり、嗚呼偉なる哉氏の精力奮闘や。』

鑑銘家育教

鳥取縣 小鴨尋常小學校長
東伯郡 小鴨高等小學校長

田中萬壽造氏

東照公の家訓中自己を責め人を責む可からざるを謂へり、然り徒らに責任を他に課し、恬然自ら其功を誇る者、睡するに價す、恭、謙、讓の徳を積み、自から卑きに坐するの自覺ある者、眞に尊敬すべし、田中萬壽造氏、該博の學識あり、然かも韓信の徳を備ふ、亦君子なる哉。氏は明治五年を以て鳥取市に生る、夙に和、漢、洋の學を修め、算數を學ぶ、資性溫厚、篤實にして率直なり、至誠一貫職務に盡し、勤儉力行躬ら範を示す、明治二十八年本縣師範學校を卒業し、鳥取市修徳尋常小學校、同修立尋常小學校等の訓導を歴て、同三十九年現校長に轉じ、小鴨裁縫學校並小鴨農業補習學校の校長を兼攝す、到る所成績を貽し、選獎を受くる事數次に及ぶ。



氏元來身體強壯、未だ醫藥の味を知らずと、以て意思精神の堅固にして不拔の氣あるを窺ふべし、近時時代の寵兒なる者空理空論を弄して思想界を攪亂し、有爲の青年子女を誤るもの多く、歐米に心酔して我國體、國性を閉却し甚だしきは愛本主義を唱へて忠孝を度外する者あるに至る、氏は常に個人主義を斥け、國家主義を獎む、黽勉其品性を陶冶し、恭儉己を持し、忠君愛國の精神に富み、良民を養成すべきを以て自ら任とす、部下に接する寛嚴度を失はず、和樂的協心を以て相共に子弟の化育に盡瘁す、由來本村の住民浮華遊惰の風あり、氏之が救済に心血を注ぎ風紀大に改まり、勤儉の風大に興るに至れり、今や村民氏を徳とし、敬慕措かざるものあるに至れる、偶然ならざる也。』

鑑銘家育教

福井縣國高尋常小學校長
今立郡

高橋 鴻氏

氏は天資温良謹直の人、其兒童に接するや諄々として倦むことなく、其校下住民に對するや懇切にして指導怠らず、其の慈其の愛父母も猶及ばずと爲す、故を以て兒童の敬慕父兄の信賴頗る篤く曾て其縣花筐小學校に奉職する事七年、其榮轉に際し、告別の辭を述べんとするや、兒童は悉く別を惜み、涕泣して已まず、遂に其の辭を述ぶる能はず、父兄亦期せずして相會し、劇金して紀念品を贈り、其徳に酬いたり云ふ。



氏は明治十一年十月本郡栗田部村に生る、明治三十四年福井縣師範學校を優等の成績を以て卒業し、直ちに郷里の花筐小學校に奉職し、傍ら教員養成所の講師を兼ね、同四十二年敦賀第一尋常小學校に轉ず、大正元年遂に現任に榮轉せり、日露戰役中の功に依り文部省より特別勤勞賞を受け、今や青年會を興して智徳増進、風紀改善を圖り、其の他講話會の開催、實業補習學校の設置、擊劍柔道其他器械體操等の奨勵及び農園試作田等を設けて、専ら地方教育の促進並青年の元氣涵養に努力する所、功績眞に尠少なざるなり。

由來該地は地味肥沃、郡内第一の富村たり、明治四十二年義務教育年限延長實施に際し、從來の四校を合せて一村一校と爲し、校舎を新築し道路を改作して兒童の通學を便にし、毎月一回教育茶話會の開催に、學事關係者は勿論村會議員有志者等多數を集めて教育の方針、施設の概況を知らしめ、また國民須知の法規を講じ、時事を談じ以て専ら通俗教育に資す、氏の精力偉なる哉。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

滋賀縣木之本尋常小學校長
伊香郡

田中仁吉氏

機略縦横にして應變の才氣あり、以て師たる可く以て吏たる可し、之を現任滋賀縣伊香郡木之本尋常高等小學校長田中仁吉氏と爲す、蓋し教育の効果は普遍の人を養ふ可きか、一藝の秀を俟つ可きやは今爰に言はずと雖も、氏の如きは寧ろ萬能の士、亦以て異數なりと謂つべし。



明治十二年十月滋賀縣伊香郡余吳村の地民を産む、明治三十四年三月滋賀縣師範學校を卒業し、縣下小學校の教壇に兒童を養ふ事八年、頗る令聲あり、同四十二年四月伊香郡郡視學を缺き、當局其の人選に苦しむ氏擢んでられて其の職に就き、能く郡下當事者の指揮監督に任じ、足らざるを補ひ、紊れたるを整へ、賞むべきは頌し、罰すべきは責め、幾多の宿弊を根絶して縣下噴々の名を傳ふるに至る、同四十四年四月遂に現校長に就任し、附設裁縫專修學校長を兼掌す。

氏天性快活にして圓轉、才氣潑瀾にして繁根錯節を拓き、亂麻を斷つるの智あり、而かも事に當りて熱心、必ず其の貫徹を期す、能く部下を信任して各其の長所を發揮せしめ、兒童を導くに慈情を以てし、勤勉儉素の美風を涵養せん事に努む、殊に青年は地方の中堅たり元氣たり、其の風習の善惡は直ちに地方風教の善惡に關し、産業の消長に影響するを以て、之が鼓舞誘導に力を致し、且つ所屬民に接觸の機を多からしめて社會改善を圖り、學校を中心として教育有終の美を濟さんとを奨勵す、今や部下職員は信賴し、父兄村民は尊敬す、當局亦氏を重用す、氏亦偉なる哉。」

東京府南足立郡梅島尋常小學校長
南足立郡梅島高等小學校長

高橋庄藏氏

氏は東京府南足立郡西新井村の人明治三年一月を以て高橋次郎氏の次男に生る、夙に教育に志し東京府師範學校に入り明治二十六年卒業して南足立郡本木小學校に教鞭を執り、同二十九年梅島小學校長に轉じ、執誠教育に従事して今日に至る、嗚呼壯なる哉。

氏資性快活磊落にして慈心に富み、多趣多藝學に篤く音楽に興味を有し、能く校内の統一を謀り、



校の設備を完全にし、廢物より得たる基本金を蓄積して百數十圓に達せしむ、生徒を訓練するの要目として眞面目、規律、禮儀の三ヶ條を理想とし、全校の修身教授は氏自ら之を擔任し、其の説く處熱烈眞摯にして兒童は能く氏の人格を信じ、悦服して其の徳を慕ひ、着々として其成績を擧げつゝあり、職員に對しては一家の戸主の如き態度を以て之を統率し、團樂和樂の裏に職務を進行し、勉勵努力倦怠を知らざるものゝ如し、部下職員兒童は懐き、父兄村民は信頼する決して偶然にあらざる也。

氏又村内父兄を初め一般の教育に志し、青年會を起しては一致團結の基を築き、元氣を鼓舞し、風儀を矯正し、勤儉貯蓄を勸めて村内の富力を増進せしめ、兼ねて學術の進歩發達を企劃し、農事家業の勉勵努力すべきことを教へ、和氣藹々の中に於て村民の道徳心を涵養し、今や一郷往時に比して風俗民情を一變せしむるに至れり、氏の功や大なること海の如しといふべきなり、氏の教育事業に貢献するは獨り學徒の教養に止まらず會全般に關はる多大也、氏の徳夫れ偉なる哉。」

鑑銘家育教

鳥取縣湖山尋常小學校長
氣高郡

田中久藏氏

名利の外に超越して、單に教育の効果を擧ぐるを任とし、郷黨の尊敬を享け子弟の渴仰を集む。小學校當事者として田中久藏氏の如き境遇に在るものは、遺憾なく三樂の一を享受せる君子人なりと謂ふべし。その部下に對して勤勉、親切、勇敢の三徳目を以て、宜しく兒童の示範たれと訓ふるもの、要するに自己まづ實行して而して後に於てす、教導感化の風靡然として校の内外に行はるゝもの、決して偶然に非ざるなり。



氏は明治八年三月を以て鳥取縣氣高郡末垣村大字伏野に生れ、同三十年三月鳥取縣師範學校を卒業す。同年四月氣高郡湖山尋常小學校訓導と爲り、累進して校長と爲る、村立農業補習學校をも主宰するに至れり、明治三十九年教育上の効績を賞せられて金拾圓を受け、同四十年一月同上の廉により賞金拾圓を受く。同四十五年三月、多年同一學校に勤務し、精勵その職に盡し、校務を整理し教導感化の實を擧げたるを賞し、縣知事より賞金三十圓を與へられ、その効績を表彰せられたり。以て氏の教育的眞價如何を窺ふに足らん。

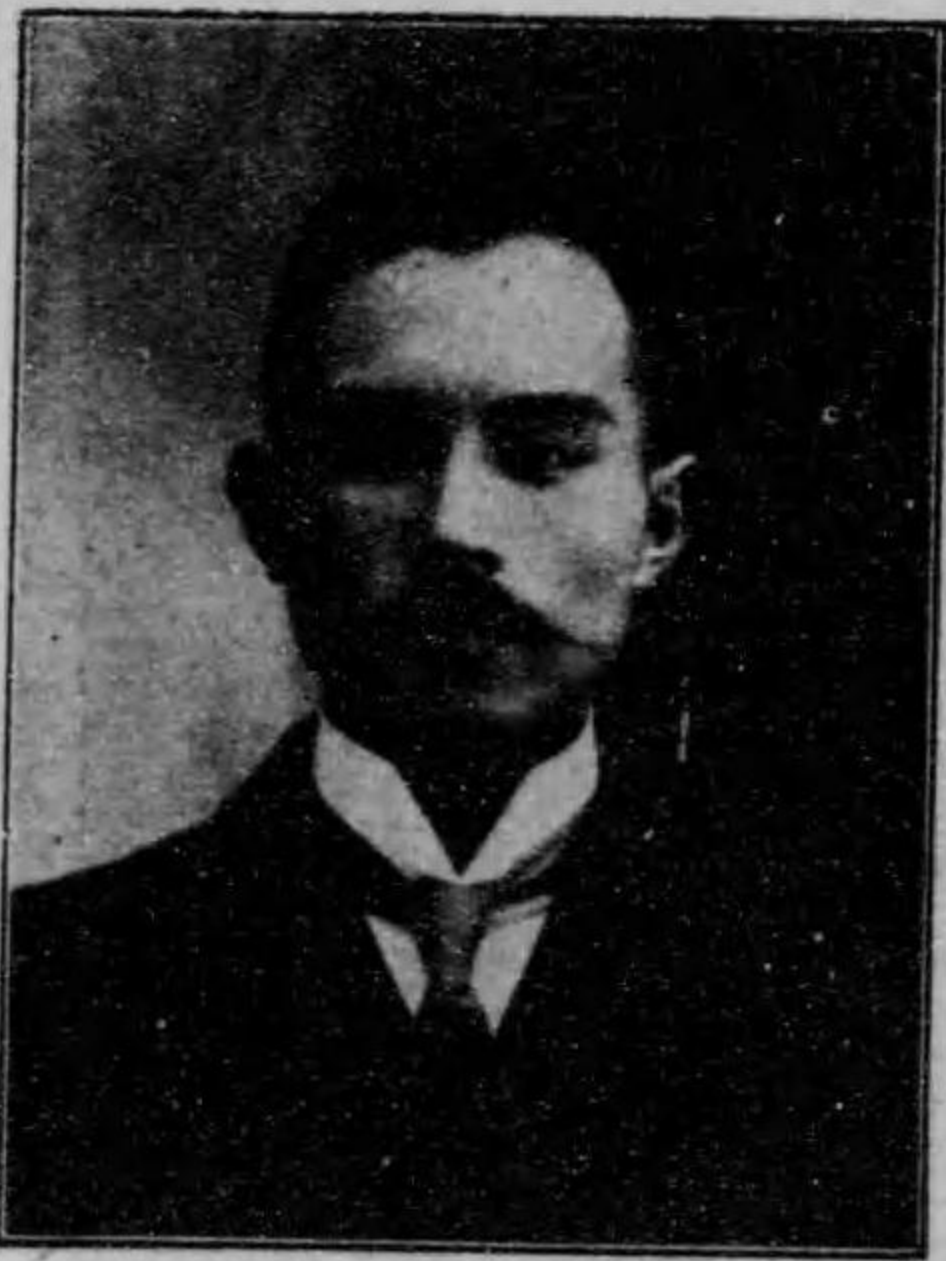
思ふに教導感化の力は、一に其の人の人格に根柢す。氏が一方に於て教育上の効果を擧ぐると同時に、職員をして各々其の能を發揮せしめ、所屬民に對しては肺肝を披瀝して協同の活動を爲し、青年を指導し、社會教育の實績を確實にするなど、所謂奮闘力戰的生活をなして倦まざるは、氏の修養怠りなきに因ると雖も、亦實に天賦の人格に由るものと謂つべし偉なる哉。」

鑑銘家育教

宮崎縣高鍋尋常小學校長
兒湯郡高等小學校長

財部 叶氏

時勢の推移は遂に停止する事なく、我國運の發展一層更に大を加へ唯り東洋に牛耳を執るのみならず遠く世界に於て平和の主たらんとす、此時に當り我教育界の一大開展を催すは自然の勢にして活教育者たる財部叶氏已に爰に見るあり、以て大に世界的思想の鼓吹に努む嗚呼偉なる哉。



明治十四年六月鹿兒島縣肝屬郡西串良村の地氏を産み宮崎縣師範學校氏を出す、氏は其師範學校入學前夙に教鞭を執る事三年、明治三十七年師範學校の業を卒はると同時に同校訓導に任ぜられ、爾後五ヶ年間母校に其實力を研鑽し人格の修養を遂げ、當時氏の名聲縣内に噴々、同四十一年八月中宮崎郡内教員夏季講習會の講師として教授訓練を、同年十二月兒湯郡内教員冬季講習會講師に其他東諸縣北諸縣等各郡へ講師として招聘せられたる以て氏の異數たる知るべきのみ、時に當局縣内有數の教育難地兒湯郡斯業の刷新急なるを認めつゝあるに當り、其郡教育の主腦地たる高鍋小學校長の缺くるや、人選頗る困難に際し、氏を聘するに縣内未曾有の優遇を以て迎へらる、于時明治四十二年なりき、氏現校就職以來校内外の教育刷新に碎身したるの功勞空しからず、其施設經營着々好成绩を收め、同四十五年縣内の嚆矢たる實科高等女學校の創立と共に其校長と爲る、以て町民の信頼如何に厚きかを知る。氏人と爲り恭虔にして濃厚思慮周密事に當りて熱誠に、根氣強く一旦の處決は遂行を必する慨あり常に即決主義を採り秩序嚴正なるが故に忙中閑日月ありて社交亦圓滿、嗚呼偉なる哉。

鑑銘家育教

鑑銘家育教

新潟縣船戶尋常小學校長
東蒲原郡高等小學校長

田中熊吉氏



初等教育に身を置くの人は、哲理ならんより寧ろ常識の人を勝れりとす、田中熊吉氏は頗る常識に富めるの人なり、資性活潑、態度謹嚴、能辯にして才氣縱橫、頗る交際家なり。

明治二十七年三月新潟縣尋常師範學校を卒業し、西蒲原郡卷高等小學校訓導と爲り、次で同郡金巻尋常高等小學校訓導兼校長に任ぜられ、再同郡大野尋常高等小學校訓導兼校長に轉じ、明治三十五年

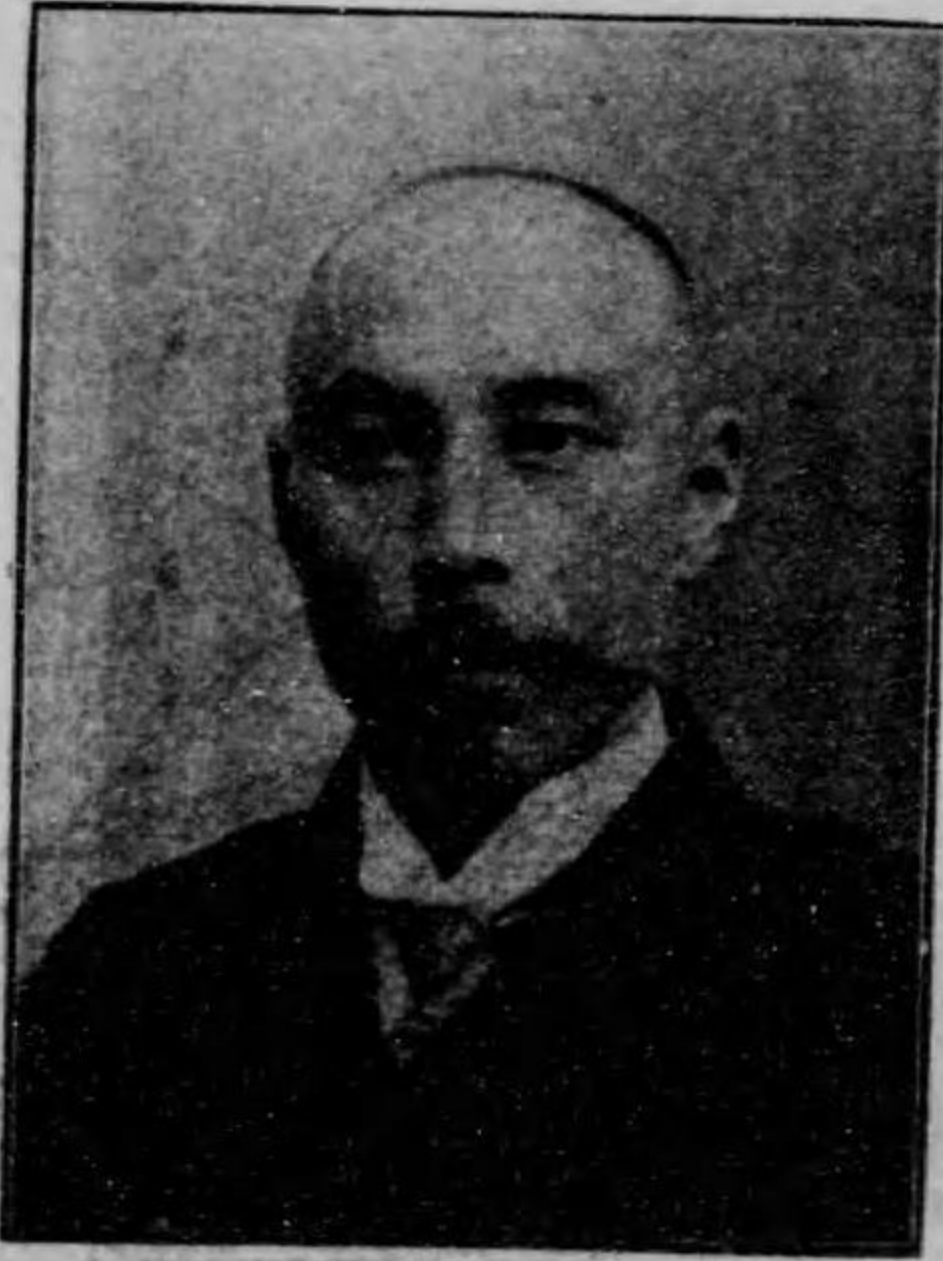
七月現船戶尋常高等小學校訓導兼校長の榮職に任命せられ當時頗る名聲高く明治四十五年三月知事より表彰せらる、氏は兒童個性觀察に重きを置き、良習慣養成に熱中し、(1)清潔、(2)勤勉、(3)力行の三點に最も留意せらるゝを以て既に善良なる校風を作り、規律整然郡内學校の範と爲る又常に教員の研究を怠らず、其方法の改善に努め、教授適切にして効果最も著し、管理上に就いては處務細則規定を嚴守し、諸帳簿の調製、校具の整頓、職員兒童の心得、兒童校外取締等大に見るべきものあり。

家庭教育に對しては、學校との聯絡に意を用ひ、常に家庭を訪問して、家庭の採るべき方針を注意し、年に數回父兄を集合し、教育上の懇談を爲し、青年子女の會を起して自ら會長と爲り、學術の研究上進を催し、勤儉貯蓄の美風を養成し、風紀の改善を企畫し、産業の發達を奨勵し、特に尊王愛國の精神を涵養するに勤め、社會教育に遺憾なきを期す氏德望一郷に洽ねく、兒童の敬慕益厚く父兄の信頼愈深し、吾人は斯界の爲め氏の健全を祈る。」

福島縣 三春第一尋常小學校長
田村郡

高橋友治氏

桃李言を成さずと雖も蹊自ら樹下に在るは、蓋し其人の徳に集まるの謂にして、現に之を福島縣田村郡三春第一尋常高等小學校に見るは、吾人の悦ぶ所、其の爰に至りし所以のものは、現校長高橋友治氏の人格と至誠職に忠なるとの結果に發するや明らかなり。



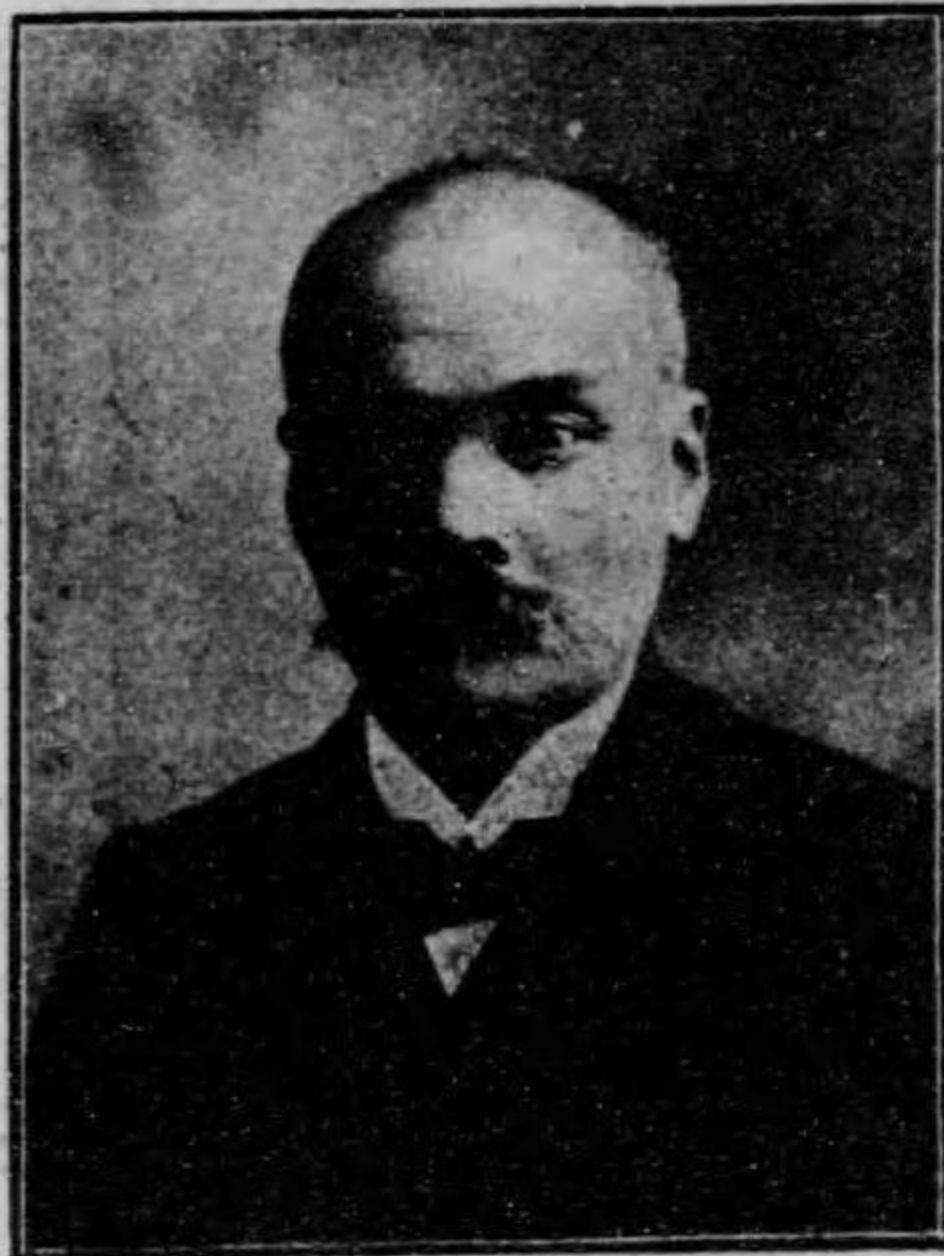
己の修養に努め、教育の進歩を以て自ら任じ、未だ曾て懈怠ある事なし、縣常に任ずるに重要な位置を以てす、則ち明治三十五年西白河郡川崎尋常高等小學校長より拔擢して石川郡視學に任じ、勤勉にして良視學の名あり、同三十九年現職に轉ずるや、多年の経験と研究とを以て、誠意熱心校務の改善に従ひ、部下を統督指導して其成績を見る可きに至る、宜なる哉同四十一年平素職務に誠實、兒童の教養宜しきを得優良校として知事に賞せられ、同四十三年協同一致職務に努め教授訓練の成績を見るべきものありとて文部大臣より表彰の榮を荷ふに至れる、畢竟氏の拮据經營の成績ならずんばならず。

教育家銘鑑

岐阜縣 中津尋常小學校長
惠那郡

鷹見豊次郎氏

名利に趨り、權貴に阿諛する俗輩のみ蠢爾たる現時に於て茲に鷹見豊次郎氏敦厚溫籍の質を有し自ら持する謹直、他に接する寛容、常に暇あれば詩の鏗鏘に遊び、俳諧の恬淡に息ふ、而かも一面其職に當つてや燃ゆるが如き熱烈を以てし、眞に一身を賭して育英の業に盡瘁す、氏が人品自ら崇高なる韻度を有し、徳望縣下斯界に喧傳さるゝ又宜なりと謂ふべき哉。



岐阜縣惠那郡阿木村の地明治元年七月を以て氏を生む、氏や同二十四年同縣師範學校を卒業し、同三十年縣内土岐郡視學に任ぜらる、同三十三年同縣惠那郡巖邑小學校訓導兼校長に轉じ鞠躬如として精勵に次ぐに精勵を以てし、同四十一年遂に文部大臣より効績狀並賞金を受領するの榮を擔ひ、同年現任に移り以て今日に及べり。

氏は特に質實剛健なる氣風の養成に力め、郷土の光輝を發揚すべく常に兒童を訓誨し、教授に於ては敢て形式に囚はるゝなく、専ら兒童實力養成を以て主眼とし、毎學年自ら各學級に臨み、兒童學力の比較考査を爲し、成績優良なる學級に對し、獎勵旗を授與し以て學力向上を圖りつゝあり、氏や部下職員に對する懇切を旨とし、細密なる校規を以て之れを統御するの具となさず徹頭徹尾徳を以て感化し、細目に拘泥せず大綱を把り以て協力を期す、則ち各職員皆濯然として其職に勵み訓育の功果自ら大なるに至れり、補習學校を設け青年の爲めに、信勝社工場内に子女教育を爲し、熱誠貢獻して息むを知らず仰ぐ可き哉。

教育家銘鑑

大阪府茨木尋常小學校長
三島郡

高谷菊次郎氏

夫れ言ふは易くして、行ふは難し、高谷菊次郎氏の如く、自ら持する事素朴にして而して厳正、他に接するや仁愛にして而して懇切なるの士は多からず、氏は大阪府の産、慶應三年二月三島郡如是村に生る、明治二十二年七月大阪府立尋常師範學校を卒業し、直ちに同府下三島郡養精高等小學校訓導兼校長に任ぜられ、勤績實に二十有三星霜、同四十五年五月現任校に轉ず。



氏の其訓練や修身教授に依りて指導せる事項をして、直ちに校内に於て其の實踐躬行せん事を期し、之が遂行の爲め其設備の完全を圖り、教授方針には最も之れが教材を撰んで之を授け、兒童の成績を精査し、以て豫め樹てたる目的と其實績を比較し、其將來に適切なる教訓を捉へん事に留意す、又其管理方面に於けるや、すべて教員及兒童に對して、各嚮ふ所を示し、極めて明確鮮顯にして、而して之を律する頗る公正、諸成案一系統に據り些の缺陷を許さず効成る又惟ふべきなり。

其部下に對しても自ら惟ふ處を壓抑的に強行せしむるの愚を執らず、各員意の存する處を傾聽し參酌宜しきを得、加ふるに其自發的性情の程度、及び繼續狀況を檢察し、各々其個性に適應せる指導を下さん事を圖る、常に之に誨へて曰く兒童の敬慕を受くるの師必ず父兄の信頼を得るの人、父兄の信頼を得るの人必ず郷間に敬仰さるゝの士也と、以て自ら其範を垂れんとす、大正二年二月特に文部省より其教導感化の効、校の内外に及べるを表彰さるに至れる宜なりと謂ふべき哉。」

沖繩縣名護尋常小學校長
國頭郡

武田喜八氏

躬から大綱を執りて枝葉の事は職員の裁量運用に任じ、法を以て職員を拘束せず、其の材能と人格とが能く職員を弟妹の如くならしむるや否やに一任し、常に校長の教育方針は職員全體に透徹せん事に注意し、各自の研究心を惹起する機會と方便を供給し、而かも研究事項は之を發表日常教務に應用せしむる事に努むる人、之を沖繩縣國頭郡名護尋常高等小學校長武田喜八氏と爲す。

氏は明治六年十二月を以て滋賀縣栗太郡上田上村の産む所たり、資性磊落にして邊幅を飾らず、談論に長じ、研究心に富み、特に教育上の蘊蓄極めて深し、又狩獵に趣味を有す、明治二十八年滋賀縣師範學校を卒業し、小學校訓導若くは校長たる事十三年、郡視學の任に在る事三歳、適く所令聲の噴々たるを見る、蓋し偉材なりと謂つ可し。



とし、自治の習慣を涵養し、作業を重んずるの良風を養ひ、分掌事務を嚴守し、學校衛生に注意す所屬民に對しては虚心坦懐、只村利民福を増進するの誠意を致し、虚飾體裁を避け、家庭の快樂を覺知せしめ、漸次内地の家族風に同化せん事に努め、村の勸業衛生等を中心たらしむるの施設を怠らず、青年には度量と眼界とを大ならしむるを教へ、努力勤勉の美風を養成せんとす、要するに氏は地方教化の中心として自ら任じ、着々成績を擧げたる人、一般の欽仰厚き宜なる哉。」

岩手縣 稻瀨尋常小學校長
江刺郡 稻瀨尋常小學校長

高橋藤七氏

自由を標榜し、其人格的修養に努力し、科學的智識の研究に盡瘁するのみならず、自立自營自ら己を治むるの剛氣を養ふを以て目的と爲し、清潔、整頓、容儀、儉素、忍耐、勤勉、規律、禮儀、公衆の爲に盡す等の諸徳目を案配し、躬行實踐以て其範を垂れ、部下職員をして信服其職に安んぜしむるのみならず、所屬父兄の信頼厚く、兒童一般の敬慕深きを致したるより教務の發展、校紀の振興を圖り、功績顯著に令聲縣内教育界に噴々たる者を高橋藤七氏と爲す。

明治四年十月岩手縣江刺郡玉里村の地氏を産む、氏資性温厚篤實にして恭虔、着實熱誠にして事を處するや遂行せずんば止まざるの概あり、度量寛大にして他を包容するに吝ならず、同情心厚く慈愛に富む、之れ能く部下所屬民の信頼する所以なり、磊落にして城壁を設けざるは能く人を容れ以て人望を博する所以と爲り、日夜學徳を修養し以て内容の充實を圖りたるは兒童一般の敬慕を受くる所以と爲る、氏は明治二十六年岩手縣師範學校を卒業し、直に膽澤郡眞城尋常小學校訓導と爲り、次て其師範學校訓導に抜かる、間もなく紫波高等小學校長に榮轉し、大原高等小學校長に移り後東磐井郡立蠶業學校教諭に補せられたり、當時氏の令聲遠近に馳す、遂に迎へられて現任稻瀨尋常高等小學校長に就任す、時に明治四十三年なりき。

氏の教育主義は地方適切な人物養成を急務と爲し、務めて家庭教育に重きを置き、父兄弟姉會を開催して家庭教育方法の如何に爲すべき事より、毎に學校教育の參觀を勵獎し以て其疏通を圖るに努力す、其青年子女の修養として補習學校設立及び農間夜學會の獎勵を怠らず、常に青年の風儀如何に注意を施し、以て社會教育の忽諸に附すべからざるを奨む、幾多教育者中學校教育のみを以て教師能事終れりと爲す者、以て氏の努力奮勉に鑑みざるべけんや噫。」

鑑銘家育教

京都府 醍醐尋常小學校長
宇治郡 醍醐高等小學校長

勳八等

左右田忠太郎氏

教育者は須らく慈善の心を有せざる可からず、頑是なき清淨無垢の兒童を教養するの職に在る者は更に一層慈善心の必要なるを認む、親が子に對し子が親に事ふる實に此慈愛の發露にあらずして何ぞや、教育者の學徒に接す亦何ぞ之と相撰ばん、我左右田忠太郎氏は衷心慈善の心を有し同情の念に富む、加之不斷の精勵を以て其の職に盡す、其の今日在る蓋し亦當然の數。



氏は京都府の士族なり、文久元年十月を以て生る、明治十五年初めて宇治郡勸修小學校の訓導に任じ、同十八年同校長に進み、次て勸修尋常小學校長、久世郡宇治尋常小學校長、勸修高等小學校長等に歴任し、後尋常科を併せて同校長と爲り、同三十九年現校長に就き、今や村立醍醐實業補習學校長、同日野實業補習學校長、同小栗栖實業補習學校長を兼ね、公務の外京都府教育會評議員、宇治郡教育會理事、醍醐信用購買販賣組合理事長として幹旋し、又京都舊官家士族子弟の教育を獎勵補助するの目的を以て設立せる皇室の御恩惠深き社團法人平安義會（在京都）の評議員兼理事として去る明治四十一年以來其の任に在り、大正三年遂に勳八等に叙し瑞寶章を授けらる、豈榮譽ならずや。

氏は温厚着實、邊幅を修めず、城府を設けず、超然名利權門の外に立ち、一家の卓見は能く施設經營の完きを致し、一般の敬慕頗る厚し、殊に兼掌の各校をして猶能く實績を擧ぐるの手腕亦眞に偉なりとす、蓋し溢るゝの慈心に出でざるなく、寔に教育家の範たるべし、ア、偉なる哉。」

鑑銘家育教

兵庫縣篠山町立中學鳳鳴義塾長
多紀郡

從六位 園田定太郎氏

『樹木盛なれば飛鳥之に宿り、芻草美なれば禽獸之に歸し、人主賢なれば豪傑之に歸す』と、宜なる哉、園田定太郎氏は高德、辭讓の人、加ふるに才識群を抜くものあり、知友子弟の之に歸する、蓋し當然なり、要するに人の尊き所以は其人格に在り、品性に在り、又焉んぞ他を問はん。



氏は明治二十二年東京高等師範學校を卒業し、任を沖繩縣尋常師範學校教諭に奉じ、同二十六年愛知縣尋常師範學校教諭に轉ず、同三十一年石川縣師範學校教諭を拜し奏任待遇たり、同三十二年福岡縣師範學校に移り、翌年同校長に陞り高等官七等に、次て從七位に叙せらる、同三十五年高等官六等に進み、更に正七位に叙す同三十七年同縣女子師範學校校長を兼ね、同三十八年高等官五等、同年從六位に叙せらる、同三十九年岡山縣師範學校校長に轉じ、同四十一年願に依り本官を免ぜられ、現職に就く、同四十五年兵庫縣多紀郡立高等女學校校長事務取扱を命ぜられ、兼掌能く女子の育英に努む。

氏は丹波味間村の人、慶應三年十月を以て生る、代々味間村の郷士、園田家の嫡統なり、往昔園田家は駕籠登城を許されたる鏘々の名家なりき。資性濃厚篤實にして人格頗る高し、學藝技能凡て優れたり、氏高師入學當時は森文部大臣、山川校長の時代にして校紀最も振ふ、嚴乎たる訓化は其幼時嚴格なる教育と相加し、殊に天稟の尤好教育家たりしなり、屢々選ばれて難校に任じ、常に大に功績あり、今や故山に歸り舊藩主青山子爵の現校に全力最善を盡くす、嗚呼偉なる哉。』

教育家銘鑑

教育家銘鑑

神奈川縣尋常浦賀小學校校長
三浦郡

反田忠太氏

嘉永六年米使四艦を浮べて通商貿易を我國に求めて以來、地名頗る國民に普及したる浦賀の地は、後に丘阜を負ひ蹄形の小灣にして三浦半島の東岸を占む、本校は灣の奥處に位し芝生川庭前を流れる風景頗る佳なり、此地初等教育の首腦として名聲噴赫たるの人、之を反田忠太氏と爲す。



明治三年七月湘南葉山の地氏を産む、資性温良にして勵精恪勤渝る事なく、一身を擧げて教育に委す、明治二十六年縣尋常師範學校を卒業し、任を三浦郡尋常逸見小學校に奉じ、翌年同郡尋常高等豊島小學校訓導に轉じ、同三十一年同郡尋常高等西岸小學校訓導と爲る、當時浦賀の地東西二校あり、此年之を併せて浦賀小學校と爲るや、氏乃ち其訓導たり、爾來歲月を経る事十有餘年終始一日の如く、能く校長輔佐の任を盡し、同四十年附設實業補習學校訓導を兼ね同四十四年を以て校長の後を襲ひ、實業補習學校校長を兼攝す。

氏は努力的向上發展主義を以て教育に膺り、部下を統ぶるに同情公平を以てし、學徒を教ゆる最も懇切を極む、父兄部民に對する亦頗る鄭重に上下貴賤の別ちなし、しかも謙讓の徳を備へ、日夜心力を教育の振興に傾注す、今や其教養薰化の見る可きを致し、一般の尊信殊に厚きに至る、宜なる哉明治四十一年神奈川縣知事より金五十圓、翌年三浦郡教育會より銀牌一個並時計鎖一連を表彰せらる、氏は手工に對する識見頗る豊富にして技亦長じ、高等科の手工は自ら擔任す、精力夫れ壯なる哉。』

朝鮮全古阜公立普通學校長
羅北道

曾田斧治郎氏

由來井邑郡古阜の地は、元古阜郡治所在の所なるも四周山を以て圍まれ、宛然摺鉢の底の如し、然れども一步を踏み出せば平野連亘五穀豐熟す、民俗固陋、表裏に巧みにして道中文化の最も遅れたるの地と稱せらる、曾田斧治郎氏は爰に皇統を説き人道を教へ、學術技藝を授く、其の困難内地教育の比に非ざるは明らかなり、吾人氏の勞を衷心多とする所以なり。



氏は島根縣の人、明治元年二月を以て簸川郡荒茅村に産る、人と爲り温順にして寡言、大度にし喜怒を色に表はさず、明治二十一年島根縣尋常師範學校を卒業して簸川郡平田高等小學校訓導に任じ、翌年今市高等小學校に轉じ、出雲大社の所在地の分校に在勤し、同廿五年同地八村組合立高等小學校訓導に移り次て同校長と爲り勤績同四十三年に至る、此年韓國學部の招聘に應じ古阜普通學校訓導兼教官たり、翌年校長に進み、其翌年簡易農業學校訓導を兼ね、次て其校長を命ぜられ以て今日に至る。

其の内地に在るや誠實、勤勉、強健の三徳目を訓練要綱とし、大國主神の偉徳を模範として實際に資し校風自ら他と異なるものありき、現職に就くや鮮人の惰弱怠慢の陋風を矯正せんとし、勤勞を尙ぶの風を躰上の大方針と爲す、今や効果著しく皇化に霑ふの忠良なる臣民たるに恥ぢざるに至れり、氏は嘗て文部の選奨を受け、縣知事其他公私團體の賞與を受くる事數次、且つ教育會其他教育研究會等の役員として島根縣教育界に貢献したる事尠からず、氏夫れ健在なれ。」

埼玉川越高等女學校長
縣立

從七位 築根喜一郎氏



裁縫に巧みに、生花を習得し、琴曲を弾じ、各種技藝に通ずるは素より善し、又國學に深く、和歌を詠み、詩文に長じ、且つ劇談講演に趣味を有する亦大に可し、未だ以て順良貞淑の女徳圓滿なるの女子に如かざるなり、女子教育の要は蓋し良妻賢母の養成に存す、現在埼玉縣立川越高等女學校長築根喜一郎氏は人格崇高、眞に教育者の資質完全の人、氏の薰陶に浴する者夫れ至幸なる哉。

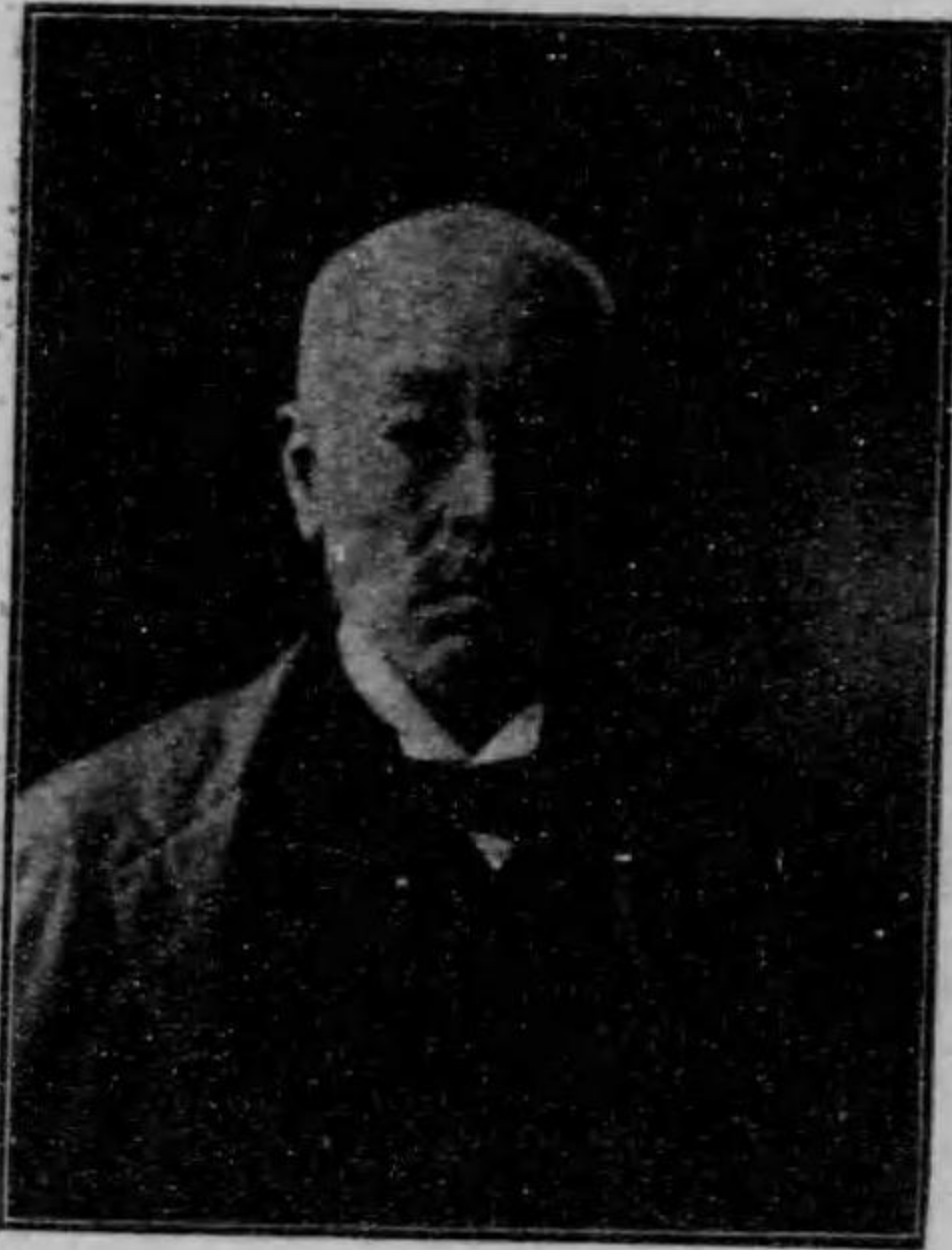
氏は埼玉縣の人、明治六年二月を以て其郷里に呱々の聲を揚ぐ、明治二十九年埼玉縣尋常師範學校を卒業して、任を北足立郡川田谷高等小學校訓導に奉じ、居る事少許、尋て鵬翼を張つて東京高等師範學校に遊び、同三十四年其の理化數學部を卒業す、埼玉縣第二中學校教諭を拜し、舎監を兼ね、最も生徒の信頼を受け、舎風亦自から視る可きものあり、同四十年川越中學校教諭に轉じ、奏任を以て待遇せられ、同四十三年從七位に叙せらる、越て同四十四年現校教諭に移り、大正元年其の校長に就く。

氏資性温厚にして英遭、最も學に篤く實踐躬行の徳を有し、諸般の事皆悉く部下職員に範たらざるなく、學徒教養の資たらざるなし、人と接して城壁なく、活達縦横の才氣は心底深く秘藏して敢て妄りに弄するの愚をなさず、形式並迂遠の學理を避け、眞個家庭の主婦として若くは子女の賢母として遺憾なきの女徳を涵養せん事に努力し、諄々他日の自覺を説いて倦まず、就職日尙甚だ深からずと雖も、能く今日の本校を現出したるもの眞に氏の賜たらざるなし、氏の懿徳夫れ大なる哉。」

大分縣
下毛郡立高等女學校長

正七位 津田純一氏

先賢の學風を追ひ、大聖偉人の人格を慕ふて其の風を學ぶは可し、現任大分縣下毛郡立高等女學校長津田純一氏は夙に故福澤諭吉翁の徳を訪ねて其の塾に入り、後米國に遊びて研鑽する事數年、歸りて師範、中等、其他の育英に竭す事三十有六閱年、今や齡耳順を超へて猶鏗鏘壯者を凌ぎ、諄々婦徳の教養に碎身して倦まず、以て終焉を期す、偉なる哉津田氏の人格。



氏は大分縣の人、嘉永五年五月を以て生る、明治二年慶應義塾に入り、同六年渡米してマネクチャット州ニューヘブンス市立中學校に學び、翌年エール大學に經濟生理倫理心理歴史の五科を修め、其翌年同大學法學部に轉じ、次てアノイブル大學法學部に移り、同十一年同大學を卒業してパチユルオプロククの學位を受け、歸朝して兵庫縣師範學校長兼兵庫縣神戸中學校長に任じ、又東京大學豫備專門教員を拜命し、翌年外務省御用掛仰付けらる、同十六年石川縣專門學校法律部講師と爲り、同十八年三重縣師範學校校長兼三重縣津中學校長を兼任し、同二十年津中學校長專任と爲り同二十二年依願職を退く、越えて同三十八年大分縣大分尋常中學校長を拜し、同三十四年正七位に叙す、同三十九年職を辭し、同四十四年現職に就き、専ら女子教育に貢献す、教育界の成績亦知る可き而已。氏や嚴峻卓勵、操志頗る堅く、所信敢行の邁心極めて強し、然れども一面温情に富み、部下職員學徒を導く事最も懇切を致す、氏の赴く所歴々の校風を成す所以偶然に非らざる也。

鑑銘家育教

鑑銘家育教

朝鮮
京畿道梅洞公立普通學校長

土本由之氏

舊朝鮮の王城に近く、高官絡繹織るが如く、諸般の事贅澤にして金錢に醒醒せざる處、恰も内地の鎌倉時代も斯くやと思肯せらる、此地鮮人並に邦人の子弟を教養して令聲全半島に波及するの觀あるもの、現任梅洞公立普通學校長土本由之氏の如きあり、蓋し教育者中の錚々たる哉。氏は岐阜縣の人、明治九年四月を以て土岐郡土岐津町に生る、資性温厚篤實にして穩健なる志操を有し、事務の材能頗る長じ、議論家にして平素研鑽の諸學説を闡究し、能く咀嚼蘊蓄す、明治二十九年岐阜縣師範學校を卒業して、縣下小學校に奉職する事十年、韓國統監府設置に際し聘せられて韓國學部に來り、鮮人の教育に従事する七年餘、今や内地母縣に在るや、善良なる教育家として表彰二回、日露戰役中殊に出兵家族の教育及慰問等の効著しくして賞金を賜はる。



氏は熱心眞摯の教育家にして、内地に於て視學に内薦數回に及ぶと雖も、斷然之を斥けて専ら子弟の教養に務め、最も精神教育に心を注ぎ、其の陶冶を受けて相當の位置を占むる者亦尠なからず、偶々氏の歸國するや門下接踵訪問、恰も嚴父に對するが如し、氏教育は「嚴格」に在りとの二字を一貫し、鮮人子弟も亦此主義に基き、服従を第一とし、教師父兄上長官等の命令は絶対服従すべきを教ゆ、當校の訓練の行届けるは稀に見る所なり、氏尙春秋に富む、鮮人子弟教養上、將來氏の力を要する事一層重大なるを覺ゆ謹て自重を祈る焉。

鑑銘家育教

ツ之部

山梨縣押原尋常小學校長
中巨摩郡

土橋 豊氏

四七四

兒童は大人と自ら其性情を異にす、從て其強ゆる所亦甚だ異ならざる可からず、則ち潑測たる活氣と剛健素樸の氣風を養成し、個人指導を忽にせず、自習自發の工夫を授け、心力の陶冶を爲さんとするは、土橋豊氏の常に採る方針なり、蓋し其用意周到なる哉。



氏は明治九年八月を以て山梨縣東八代郡豊富村に生る、明治三十一年縣師範學校を卒業し、東八代郡御代咲尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同三十四年中巨摩郡御影高等小學校長に昇り、同四十一年同郡八田尋常高等小學校長に轉じ、同四十二年現職に就き以て今日に至る、其育英に熱誠を灌ぐ所、郡中に其比を見ず、中巨摩郡教育界の中老として重きを爲す所以のものは、常に熱心家たるの故にあらず、蘊蓄せる識才と、圓滿なる人格とは、超然他と趣きを異にし、且つ溫容なる風采は又凜乎たる態度と相映じ、人をして大哲ベスタロッヂに髣髴たるを思はしむるに在り、教育者の資質完く備はれりと云ふべし。

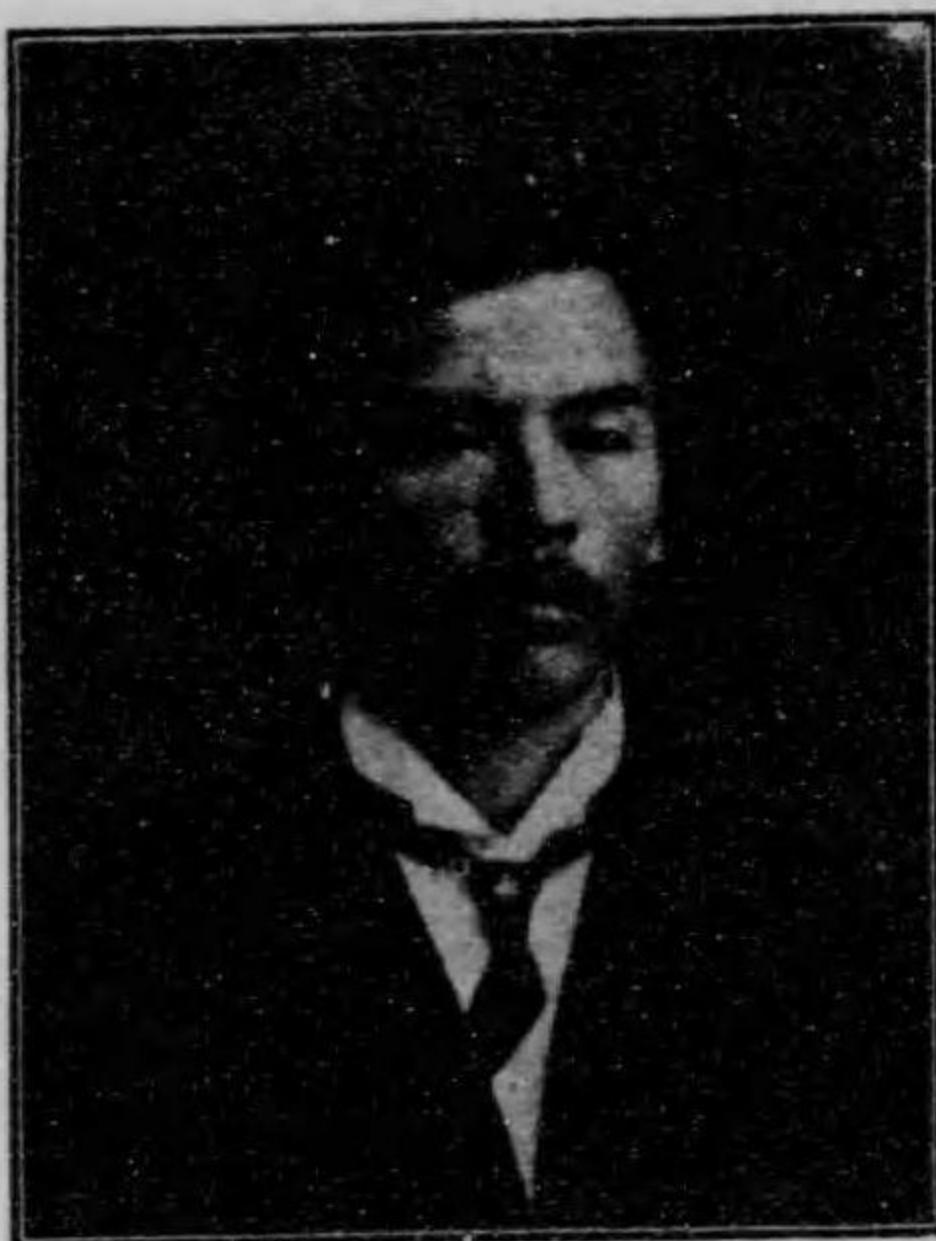
氏亦雄辯家を以て聞ゆ、至誠の進る所、精熱の溢るゝ所、發して論と爲り説と爲る、風發人をして騁倒せしむるものあり、家族的方針を以て部下を率ひ、所屬民に對しては公平無私、胸襟の披瀝は指導度を過ぐるに於ては依頼心を生ず、中庸を得しめざる可からずと説き、婦人青年の教化は社會教育の根本なるを論ず、氏の如き稀に見るの教育者にして其今日在る偶然ならざる也。」

和歌山縣日方尋常小學校長
海草郡

辻

魏氏

時代は精力主義を要求す、國家又活動主義を要望す、苟も身教育の任にある者、學識の高遠なるは固より之を要すと雖も、尙欲するは高潔なる人格と學實強固なる主義なりとす、我辻魏氏の如きは實に之等總ての要求する所を最も完備せる人の一人なりとす。



氏は本縣の人、明治十一年十月を以て海草郡鳴神村に生る、資性英邁果斷、頗る同情心に富み、識亦群を抜く、明治三十二年縣師範學校を卒業して海草郡巽高等小學校訓導に任ぜられ、此年現校訓導に轉じ累進して現職を襲ひ、爾來勤績十五年餘、終始熱誠渝るなし、今や商業補習學校を附設して地方實業の進歩發展に貢獻す。氏や統御の才幹と徳望とを備へ、多數の部下職員は共同一致、獻身的職務に従事し、和氣薰風常に校内に充つ、他を導かんと欲するものは先づ自己を修めよとの主義を以て職員修徳會を組織し、互に助長短補人格修養の資とす、學校教育の効果を充分ならしめん爲め、校下一般父兄母姉の密接なる連絡を保持せんとして家庭訪問、父兄召集、一般懇談會等を勵行す、而して氏は地方に於て最も信用厚く、事實上學校は殆んど地方の中心たるの感あり、地方風教の改善は青年教育の效果に俟つ事大なるを以て、卒業生同窓會、青年會等を組織し、自ら指揮誘導の衝に當り、或は勅語奉讀會を起して地方有志と共に早朝食前會場に參集し、教育勅語、戊申詔書を捧讀し、聖旨の徹底を計りつゝあり、幾度か官民に賞せられ、衆の仰慕を受くる、蓋し徳操崇高、感化偉大の致す所たり。」

鑑銘家育教

ツ之部

四七五

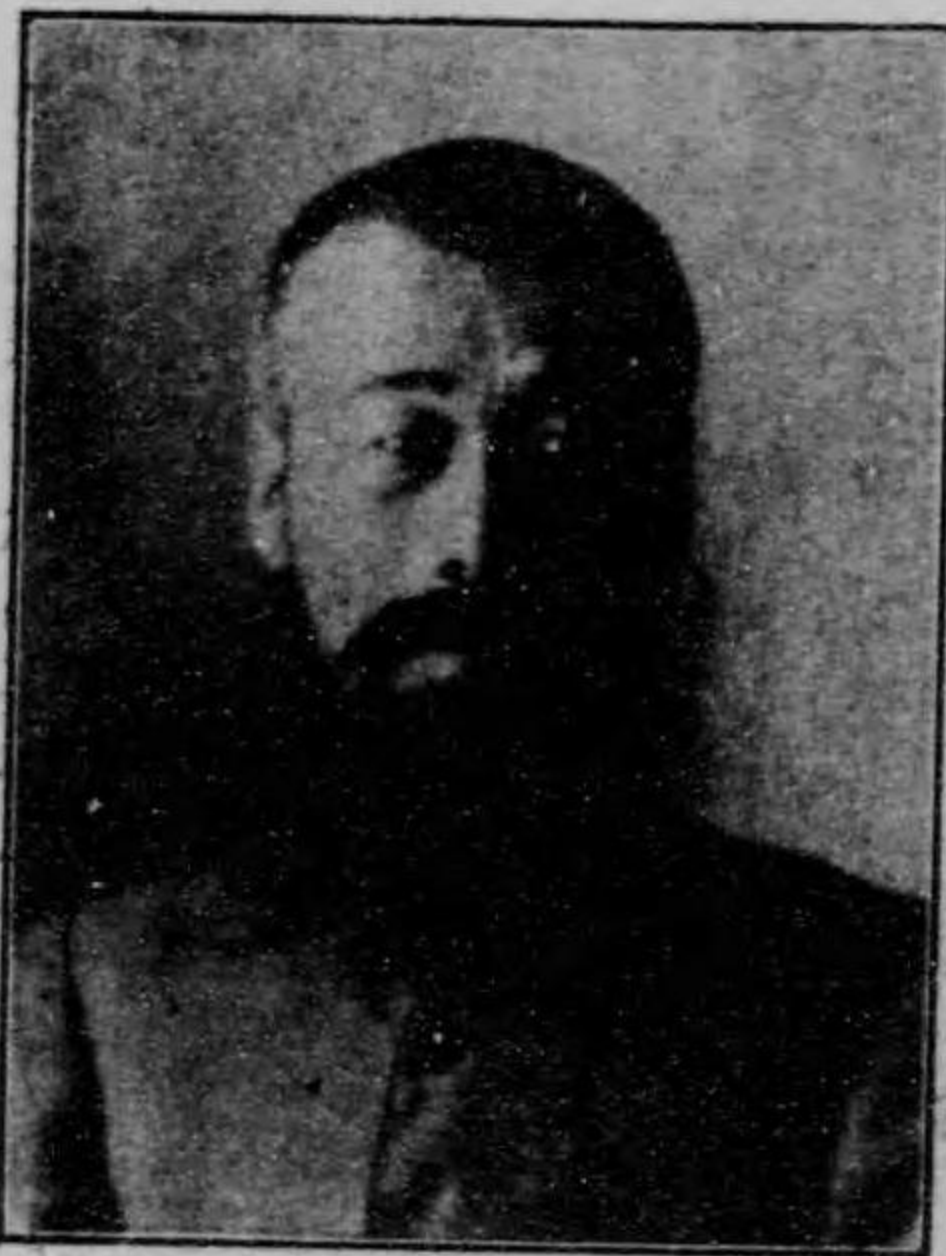
鑑銘家育教

ツ之部

新潟縣相川尋常小學校長
佐渡郡相川高等小學校長

坪井周富氏

四七六



至誠事に當るなくんば以て其成功を期すべからず、況んや社會教化の源泉たる教育事業に於てや、而して社會の實情を解せず社會に同情なき者、安んぞ教育の徹底を期すべけんや、方今教育界理智の人を要するより寧ろ至情の人を待つや急なり、現任新潟縣佐渡郡相川尋常高等小學校長坪井周富氏の如きは眞に至誠を以て衆を率ゆる人といふべし。

氏は新潟縣中蒲原郡村松町の人慶應三年十一月を以て生る人と爲り寛厚篤實にして學徳並び秀て抱負識見に富む特に衆を容るゝの雅量と清濁併せ呑むの襟度とは人の統領として畏敬せらるゝ所以なり、明治十九年新潟學校高等師範科卒業、同二十年二月黒水小學校訓導に任じ、爾來中條高等小學校長、村松尋常小學校長、村松幼稚園長兼任を経て、同四十一年十一月現任に轉じ尋いて相川實業補習學校長、相川實科高等女學校長を兼任し暫くして女學校兼務を辭す、而して前記の一園二校は皆氏の計畫創設に係るものなり、

現任校は規模壯麗を以て縣下に開ゆ而して教授訓練管理の整美なる所屬職員の固骨なる郡内稀に見る所なり、又氏は深く意を社會教育に用ひ四十二年相川教育を興し夜學會通俗講話會展覽會等の施設に努め着々其効を奏し又相川青年會を組織し現に此等の會長として畫策の任に當り専ら國民道徳の鼓吹風紀の改善社會諸般知識の普及に努む、其他甲寅茶話會を設け毎月一回官民有志の集會を催し相互意見の交換を試むる等其の地方の改善發展に畫策すること甚大なり。」

鑑銘家育教

ツ之部

福岡縣弓削田尋常小學校長
田川郡弓削田高等小學校長

津留郭氏

四七七



國家教育の根本義に變化を及ぼさずと雖も、土地の狀況に依りて各其方法手段を異にするは當然なり、是れ教育は一感化事業にして形體事業に非ざるを以て、精神的の訓化を完成するに非ずんば如何に歐米を説き中華を論ずるも、何の効かあらん、寧ろ輕薄才子を多くし、國家的感念の喪失者を養成するに止まり、害却て知らざるに勝らん、寒心に耐へざる也。

津田郭氏は身を礦業地の教育に捧げ、孜々粉骨、克く風俗習慣の缺陷を窺ひ、施設訓育肯綮に合し、成績見るべきものあるに至れるは全く其の努力の致す所と云はざる可からず、人と爲り清廉直峭、進取向上の氣に富み、克く善惡是否の取捨を過たず、明治三十三年縣師範學校を卒へ、本郡一二の小學校に教鞭を取り、同三十九年入りて現校長に就き、内外の信頼尊崇を蒐むるに至る。

氏は近時社會の、徒らに智に馳せ、忠孝の道を忘れ、倫常の頹廢其極に達するを慨き、先づ身を以て範を爲すと共に部下の自奮的活動と犠牲的精神の向上發展を促し、教師は先づ兒童の研究に隨ひ、惡風の實現に先ち指導防遏を試みんとす、校下所屬民並に家庭には可成接近し、意思の疏通を計り、秩序的平和を望み、自治村民たるに恥ぢず、國家教育の大本を認識せしむるに力め、社會をして敦厚質實に、加かも勤儉力行の良風を誘致せんとす、今や氏の熱誠は村民を動かし、漸次風紀の伸張するを見るもの、獨り地方の幸福たるに止らず、國家の爲め慶賀に堪へざるなり、偉なる哉氏の感化。」

鑑銘家育教

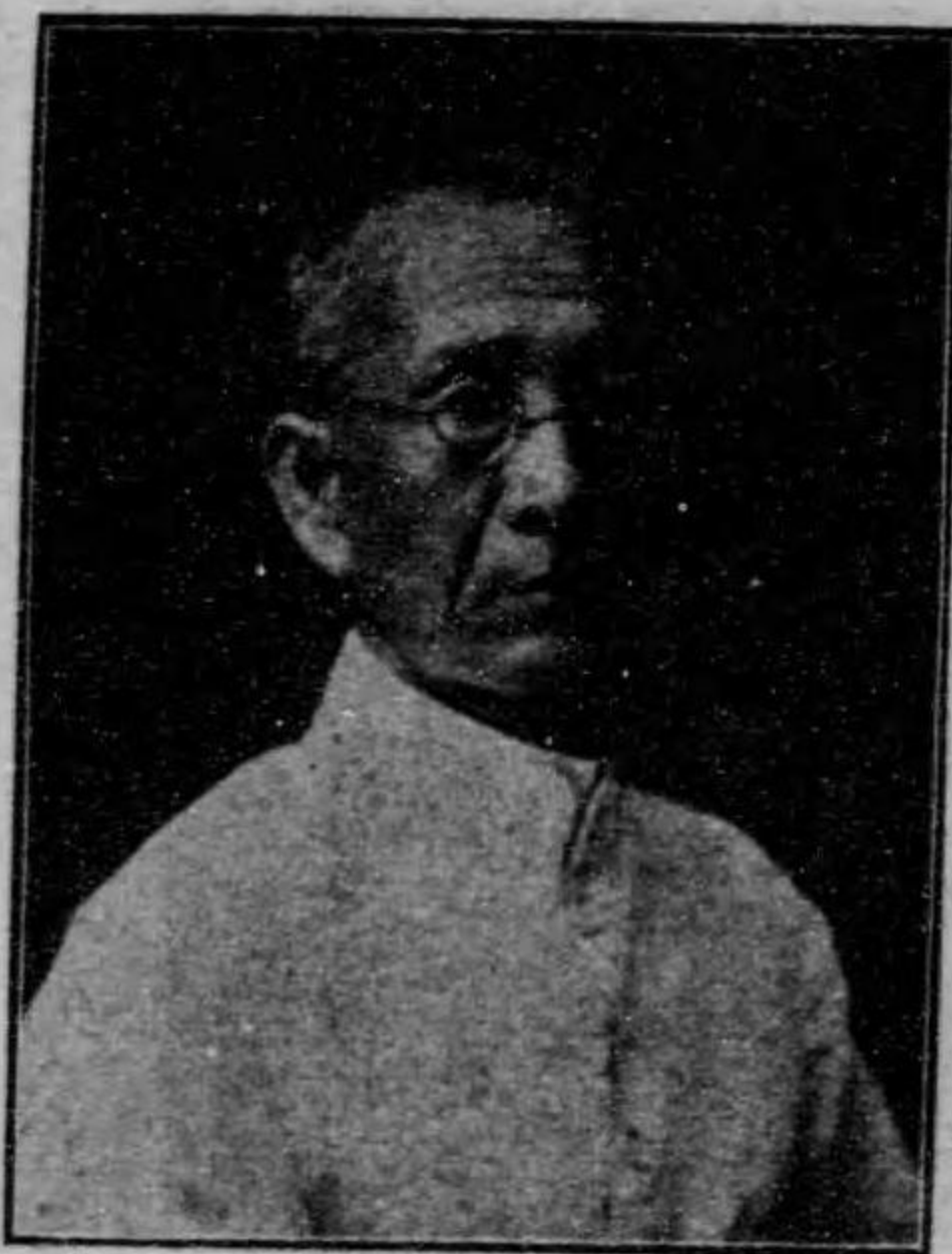
ツ之部

愛媛縣新居濱尋常小學校長

勳八等 津田節一郎氏

四七八

非凡の才を以て平凡に對するは易く、平凡の智を以て非凡に對するは難し、世間往々自己の平凡を知らずして非凡に對し、嘲笑を受くる者あり、顧みざる可けんや、津田氏非凡の人格を以て部下職員兒童を徳化し、郡内第一流の教育家として欽仰せらる亦偶然ならざる也。



愛媛縣師範學校を卒業し、同十六年新居小學校三等訓導を拜し、同三十三年に亘り新居郡、宇摩郡、周布郡内の小學校に奉職せり、同三十三年山口縣の聘に應じ、同縣阿武郡及佐波郡の郡視學と爲り、同三十六年轉じて宮城縣登米郡視學を奉職す、同三十八年歸縣して新居郡西條高等小學校及現任校に職を奉じ、以て今日に至る新居濱小學校は學級數二十三、兒童數千〇四十二人を有する大校なり。

禮儀、規律、公德に重きを置き品性の陶冶に努む、日常適切な智識を確實に收得せしめ、且つ之れが應用を自在ならしめ、自學自習の習慣を養ひ、兒童の個性に留意し其特長を發展せしむ、職員は家族的圓滿を期し町會の規約になれる日章會の趣旨を賛し自治の發展、教育の發達並風儀の改善を圖り、毎月一回各部落に集會を催し家庭講話を爲し、兒童の學藝會、青年團、補習教育、教育會等を開催し、盛に自治の精神鼓吹に盡瘁しつゝあり、斯かる多岐に渉る各種の機關をして能く之を左右し得るもの、實に氏の非凡なる才能に待たざるべからず、大正三年六月勳八等瑞寶章を授けらる嗚呼偉なる哉。」

鑑銘家育教

ツ之部

北海道帶廣尋常小學校長

坪谷俊治氏

四七九

地方の情勢即ち民心、風俗、習慣、社會的勢力に適應し、國民道德の啓蒙を根本目的とし、先づ校舎の玻璃窓を通し、學校、家庭、青年及社會の各教育は果して如何なるものなるかを感知せしめん事を所屬民に對する方針とし、苦戰奮闘するもの、之を坪谷俊治氏と爲す。



氏は渡島國爾志郡熊石村の人、明治十四年十月を以て生る、明治三十六年北海道師範學校を卒業し、管内小學校訓導たる事二年、校長たる事亦二年、轉じて北海道廳屬に任せられ、河西支廳在勤と爲り、教育主任たり、夙に敏腕の聞えありしが、任を此地に受くるに及んで、令聲更に高きを加へ、學校當事者の尊信頗る厚く、言ふ所服せざるなく、令する所行はれざるなきの觀ありき、然るに同四十三年前帶廣校長大竹敬造氏肺患に斃れ、當局其後任の選擇に苦しみ、遂に氏を抽きて校長たらしむ。

氏乃ち明晰なる頭腦と、縦横の才氣、滿々たる霸氣とを提げ、勤勉勵精、長を助け短を補ひ、懇切以て部下十餘の職員を指揮誘導し、慈愛以て兒童を訓へ、早出晚退、孜孜校務を處理し、營々効果の完きを圖る、由來帶廣町は十勝原野の中央を占め、開拓日猶淺く、加之各府縣移住者の集合地たるが故に、言語風俗歸一するなく、教育上の艱難名狀すべからず、然れども、氏の熱誠努力は着々効を收め、今や、管内百四十餘校の模範として目せらるゝに至れり、氏常に新研究を怠らざる而已ならず、餘暇園藝を嗜み、謠曲を學ぶ、英雄の胸中猶閑日月を存す、亦偉ならずや。」

鑑銘家育教

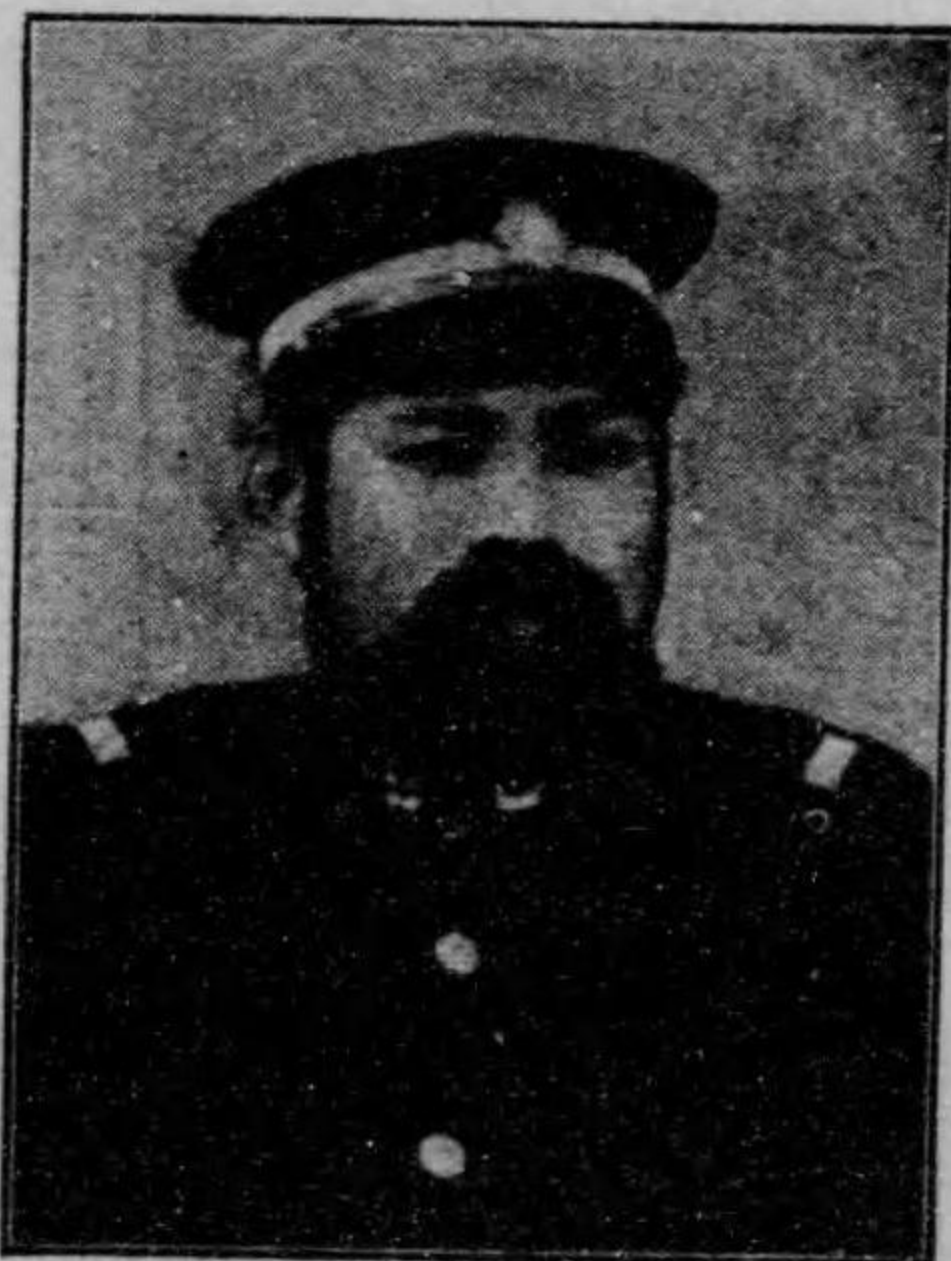
ツ之部

四八〇

朝鮮平安南道平壤公立尋常高等小學校長

辻右作氏

鬚髯蓬々として容貌魁偉、一見豪傑の相を備ふと雖も、頗る細心温情の君子にして多方面に特長を有す、就中地理歴史と手工とは其の最も得意とする所、書を能くし入神の技を有せり、之を現任平壤公立尋常高等小學校辻右作氏と爲す、本校は左に藍碧の大同江を臨み、右に紅瓦の兵營あり後は直ちに停車場に至る可し、四方廣濶眞に教育の好位置を占む。



氏は福井縣大野の人、明治九年六月を以て生る、明治三十一年福井師範を出て、大野郡有終小學校の訓導と爲り、亞て母校師範の訓導に轉じ、後丹生郡四ヶ浦小學校長に榮轉す、越て四十年足羽郡視學に拔かれ、翌四十一年聘せられて韓國平壤居留民團立平壤小學校長と爲る、同四十五年現校長に任じ、平壤公立尋常小學校、朝鮮公立簡易實業專修學校長、平壤公立高等女學校教諭等を兼ねしが、最近漸く諸方面の煩累を脱し、銳意自校の發展に全力を傾注しつゝあり。

氏は居常形式に拘泥せずして實績を挙げよ、教案の如きは自己の手控にて足れり、何事も精力を盡して徹底する迄奮闘せよとの持論を有し、前後七年殖民地の教育に盡瘁して一日の缺勤なく、勵精刻苦遂に西鮮の模範校として賞賛せらるゝに至る、由來民心浮華驕逸に流れ、兒童亦贅澤に赴くを慨し、苦言痛語大に其弊を矯正し、十有餘年同一フロックを纏ひたるに見て如何に其人格の高きかを窺ふに足らん、家庭の訪問、劇場に於ける兒童の監督等遂に寧日なし、氏堅く口を噤みて功績を語らず、謙讓の徳氏に於て完き歟。』

鑑銘家育教

ツ之部

四八一

廣島縣本村尋常小學校長
高田郡

津田勇夫氏

無能にして無爲、而かも恬然として過ごせるの士、又我育英界に其數少なしとせず、此中にありて我津田勇夫氏の如きは夫れ萬綠叢中の紅一點と稱すべき乎、氏や資性敦厚にして人を容るゝの雅量海の如きものを存すと同時に、貴に媚びるなく、權に阿るなく、世俗風潮に流れず、常に一貫せる主義を持し、自ら信ずる處を實現せしめずんば止まず、又偉材と謂ふべき也。



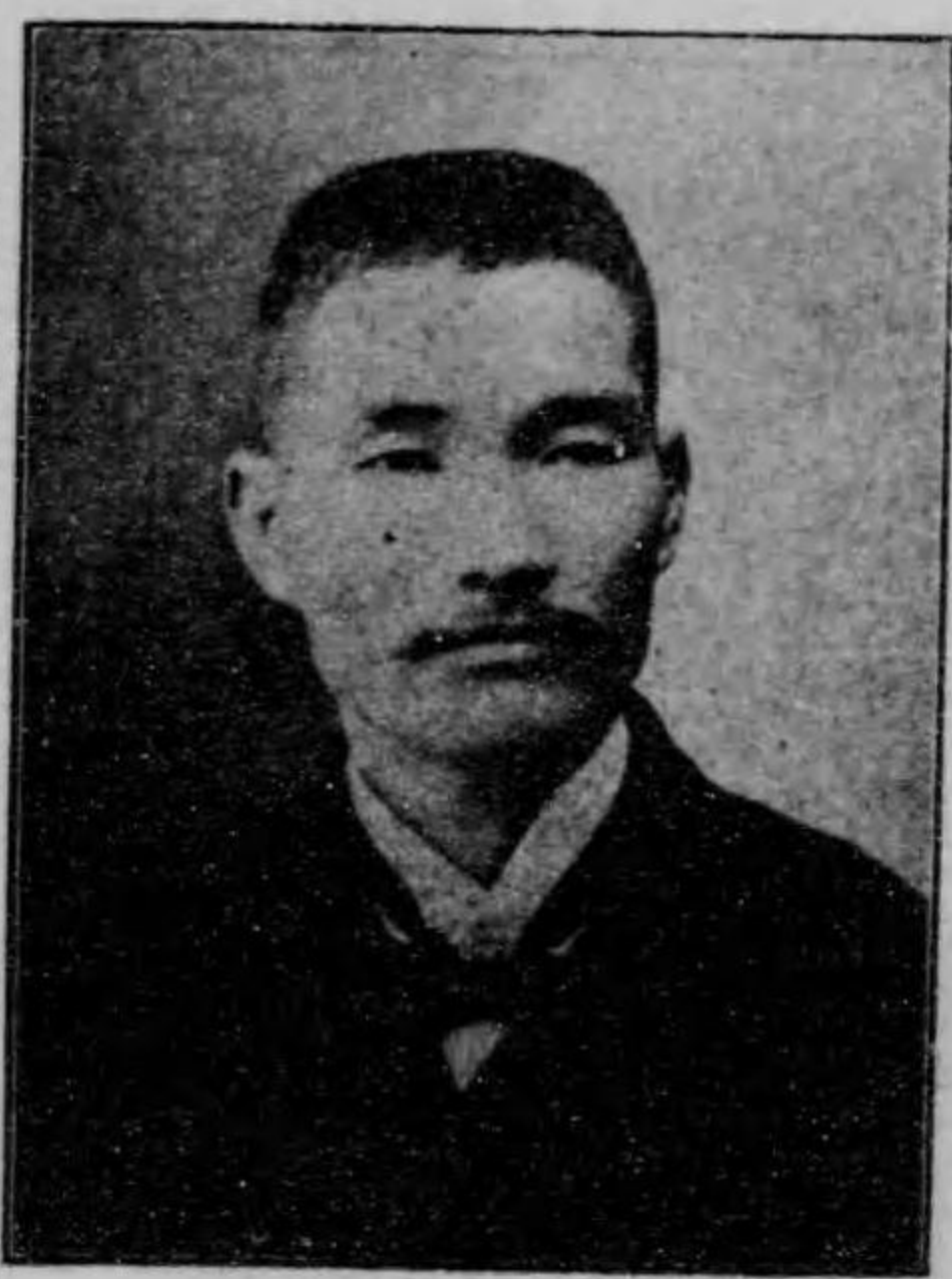
明治八年二月廣島縣高田郡本村の地氏を生む、氏や同二十七年同縣師範學校を卒業し、同縣高田郡可愛尋常小學校訓導に任ぜられ、同二十八年同郡本村尋常小學校訓導に、同三十一年同校長に、同三十三年同郡高田第二高等小學校に、同年同郡北高等小學校に、同郡高田中央高等小學校に、同三十四年同郡簸川高等小學校に歴任し、同三十六年郷里なる現校に赴任、精勵に次ぐに努力を以てし、拮据經營今日に及べるなり。

氏や教育勅語並に戊申詔書の聖旨を奉體し、之れを實踐躬行せしむる指導を以て自己が天職と自覺し、自ら之れを實行し以て他を自ら訓化せん事を期しつゝあり、氏又或は高田郡各小學校教員練習會幹事に、或は月次練習會正副會長に、或は講習會幹事に、或は私立教育會地方委員に、或は他府縣學事視察に、大いに勤むるありて、眞に斯界に貢獻せるや多大なり、則ち令聞縣下に喧傳せられ、公私の賞賜、表彰一再に止まらず、惟ふに氏の若きは單に一小學校長としてのみならず、より大いなる、より廣き意に於ける好育英家と稱すべき哉。』

佐賀縣 杵島郡 六角高等小學校長

辻 勤氏

其の威色は以て三軍を叱咤するに足り、其の寛容は以て嬰兒をも狎れしむべし、是れ統領人を服御する才の両面にして、湛然たる至誠の本體、發しては猛威と爲り、流れては和寛と爲る、猛威と和寛と各其の用、用にして誤らざれば天下の事爲すべし、其の威は百萬の貔貅を粉碎する破邪の劔たり、其の恩は四海を覆ふ慈悲の衣袖たり、現任六角尋常高等小學校長辻勤氏や統領の器完如たり蓋し教育的人格者に非ざれば能はざる也。



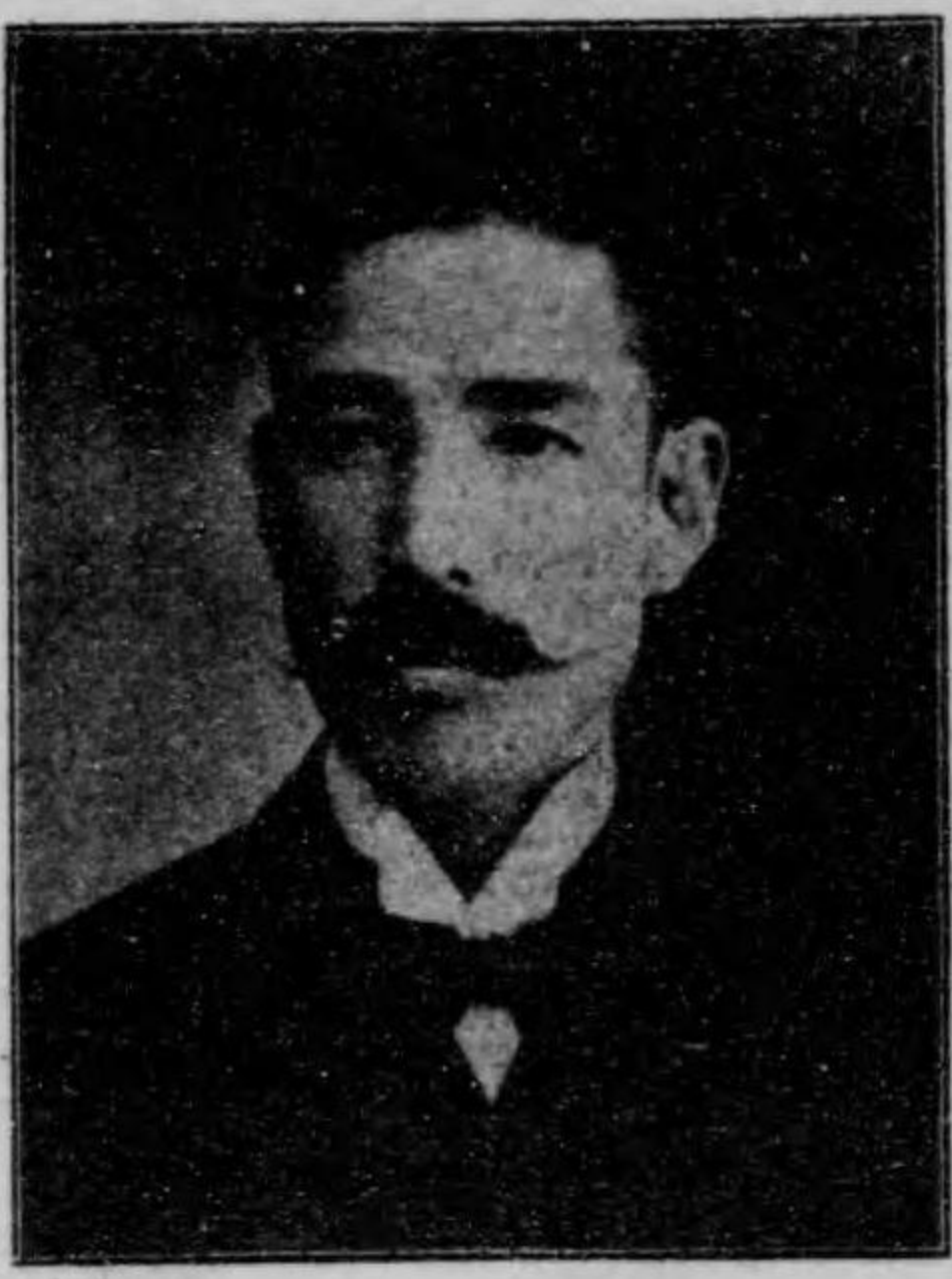
氏は明治八年四月を以て小城郡芦刈村に生る、明治三十一年三月佐賀縣尋常師範學校を卒業し、其の四月杵島郡境堀尋常高等小學校訓導と爲り、同三十三年四月境堀尋常高等小學校訓導兼校長に進む、同四十年七月同郡新橋高等小學校訓導兼校長に轉じ、同四十一年四月同郡福富尋常高等小學校訓導兼校長に任ぜられ、大正二年八月現任に就く、其の間所に人望を博し、功績擧げらざることなく精勤の賞賜表彰數次、名譽の至りなる哉。

氏は小學校教育の通弊たる形式に拘泥するを避け、全く實力を養成し内容の充實を主とし、教育をして實際的にして且つ地方的ならしめんとする旨より、教授細目の研究調製に細心の注意を與へ毎日教授案の編成は、専ら兒童の眞の知識收得に適切なることを努む、又職員をして安心其の校に奉じ、其の使命を完うすることを得んため、各自に自發活動の餘地を與へ、校長自身は只其指針として牛耳を採り、一糸亂れざるの風あり、本校の隆盛地方に擧る宜なりと謂つべし矣。

佐賀縣 赤松尋常小學校長

辻 源六氏

温乎たり其容、靄然たり其言、豁然たる胸襟は人をして自ら親愛の情を起さしめ、寛洪にして仁慈の情に富める、恰も膏雨の草木を潤すが如く、人皆其徳に感じ、其愛に懐く、辻源六氏を以て其人と爲す、春風を着、童子を従へ、沂に浴し舞雲に風し、清吟樂行、悠々として其樂みや君子人、然れども其前事功既に成らざるべからず、勤勞なかるべからず、激灘を出て巖巖に碎かれ、飛瀑懸崖に躍り、苦と勞を通りて始めて大洋悠々たる水と爲る、氏が其職に熱誠、而して櫛風沐雨、拮据精勵せしにあらざれば如斯は得易からざる也、一郷の人、氏を賞揚して措かず、功擧がり、名謳はる蓋し理の順と稱すべきなり。



辻氏は佐賀市の出、明治八年一月白山町に生る、同三十三年三月同縣師範學校を卒業、同年四月佐賀市循誘尋常小學校訓導に任ぜられ、同三十一年十一月神埼郡神埼高等小學校訓導に轉じ、同三十三年四月佐賀郡青藍高等小學校訓導に、同年五月佐賀市佐賀高等小學校訓導に、同四十一年四月現任と爲る、同四十四年二月縣知事より賞金を受くるの名譽を得たり。

郷土の氣風及其長短を詳にし、之れが矯正及助長を圖り、規律、勤勉、正直、養生、親切、禮儀自治、共同、忍耐、勇氣、公德等を以て其訓練要項と定め、一言一行、氏自ら其範を垂れ、以て儀表たるを自覺し、すべて空論華議に終るを好まず、經倫の學を以て人を導かんより寧ろ實踐の暗示を與へ、偶發的事項を捉へ臨機指導誘掖する等實に辣腕驚く可きの偉材なる哉。

教 育 家 銘 鑑

ツ之部

廣島縣 尾道市 第二尾道尋常小學校長

土屋丈之助氏

四八四



我國教育の本旨は忠孝の道義涵養に在り、祖宗の崇拜皆悉く忠孝に胚胎す、然り忠孝の觀念を没却して我國家を論ず可からず、然るに往々泰西の學に心酔して我國道義の淵源を研めざるの學者は我國家的觀念と解釋を誤り、國家を危ふからしめんとす、慈悲や可し博愛や可し、然れども未だ以て忠孝本位の我國に及ばるや遠し、慈悲博愛皆此中に包含す、其大を究めずして小を味ひ、取つて以て直ちに之を我國に移植せんとするは、蓋し本末を轉倒したるものと謂はざる可からず、我土屋丈之助氏は忠孝の徳を備へ、由て以て學徒教養に努む、效果の大宜なる哉。

氏は廣島縣の人、明治三年十二月を以て深安郡春日村に呱呱を擧ぐ、明治二十五年廣島縣師範學校を卒業して小學校教育に従ひ、同二十六年尾道高等小學校訓導を拜命して以來、同校長補佐の任を盡す事多年、同四十一年現校長に轉じ、大正二年八月文部省の選奨に浴す名譽なる哉。

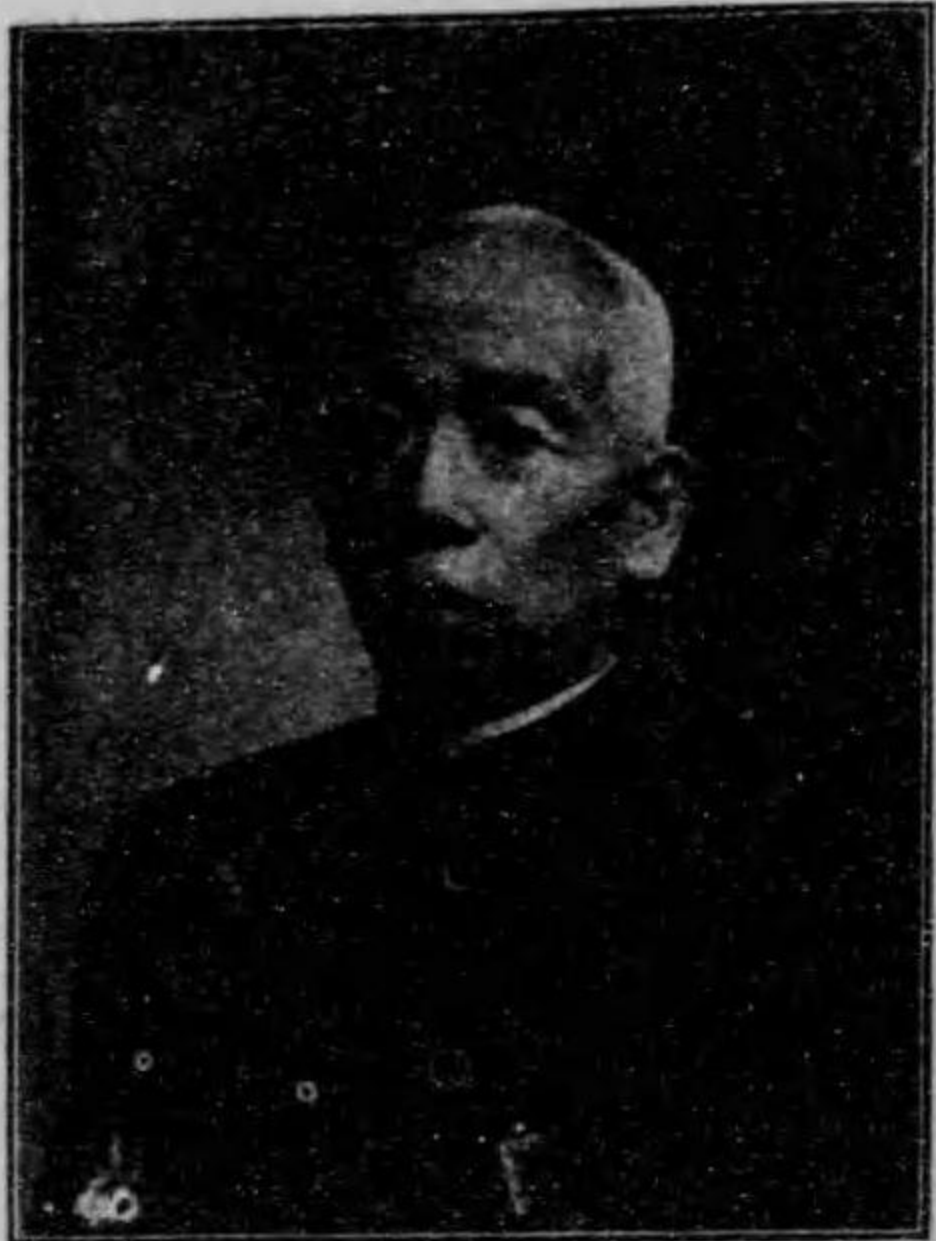
氏人と爲り溫和にして更に圭角なく、濃厚なる慈情は部下並學徒に及び、又一般部民に洽ねく、人皆其徳を稱揚せざるなし、盛んに父兄母姉を接觸して學校教育と矛盾せざらしめんとし、又能く忠孝を説いて我肇國の精神を明らかにし、勤勉力行の範を躬らして青年、社會の華奢情蕩を矯正し、獨り學校の成績良好なる而已にあらず、一般風教上に善美なる感化を與へし事尠少なからざる也、而して二十有餘年の久しき尾道市教育界に貢献し、今や噴々の令聲を馳する所以偶然にあらざるなり。」

教 育 家 銘 鑑

ツ之部

大阪市堀川尋常小學校長

常 光 定 吾 氏



米艦浦賀の海面に顯はれ、久留里濱事騒がしく、朝暮議論沸騰して上下震駭し、尊王攘夷の志士各所に起りて天下將に割れんとす、現任大阪市堀川尋常小學校長常光定吾氏は實に此年を以て呱呱の聲を擧げ、教育界に身を投じて爰に三十有八年、大阪市教育に貢献する亦二十有七歳、加かも幾多の波瀾曲折を冒して遂に今日の盛名を斯界に馳す、嗚呼壯ならずや。

氏は嘉永六年三月を以て岡山縣御津郡平津村に生る、資性濃厚篤實にして些の銜氣なく、雅量ありて能く部下の統率に任じ、成績亦大に擧がるを見る、博學多識頗る勤勉の質なり、漢學數學は其の最も長ずる所にして造詣の深き專門家に讓歩せず、明治九年岡山縣師範學校を卒業し、縣下巡回訓導の職に在る事前後九年、後岡山區小學校長に任ぜられ、同二十一年四月大阪市盈進高等小學校訓導に任じ、同年十一月現職に就き、堀川幼稚園長を兼ね、爾來勤績以て今日に至る、隆々たる機運亦皆氏の效績たり。

常に區民の負擔を省みて費用の節減を圖り、然も明治三十二年には區民を獎勵して當時有數の校舎を改築し、以來潛心專意内容の充實に努めて最も見る可きものあり、明治三十八年大阪府より其の功績顯著なりとて賞を受く、又専ら實質を重んじ、部下職員學徒を統率するに浮薄を責むる事切なり、人あり貴校の特色如何と問へば、曰く弊校は所謂世の誇りとする特色なし、これ即特色ならんかと、以て毀譽褒貶は氏の介意する所に非らざるを知るべし、耳順猶鏗鏘、偉なる哉。」

四八五

京都市翔鸞尋常小學校長

勳八等

露木守五郎氏

人の師表として職を撰ぶものは、少なくとも智徳の修養をして常人以上に爲さざる可からず、而して教員たる以上は、功名利達を惟はず、只管遠大なる希望の上に立ち、功を永遠に待つの一夫覺悟あるを要す、現任京都市翔鸞尋常小學校長露木守五郎氏の如きは、眞に育英を以て天職と爲し、遂に畢生の業として孜々倦まず、其の高大なる人格を後進に扶殖して、今や令聲を我教育界に傳ふ蓋し亦斯界の範、吾人の推稱偶然にあらず。



氏は德島縣の人、文久三年正月を以て武士の家に生る、明治十四年德島縣師範學校を出て、縣下立江小學校訓導に任じ、翌年高瀬小學校訓導に轉じ、同十七年寺島小學校訓導に移り、同二十年名東郡尋常小學校訓導と爲り、此年轉じて京都府紀伊郡東九條尋常小學校長を拜し、次で南桑田郡龜岡高等小學校訓導、北桑田郡高等小學校長、同郡周山高等小學校長に歴任し、同二十六年綴喜郡都々城外二ヶ村組合立高等小學校訓導に就き、同三十二年同校長と爲り、同三十六年現校長に轉じ、同四十一年高等科を廢し、大正三年勳八等に叙せらる。

氏や人と爲り濃厚篤實、意志頗る強固にして節義を重んじ、思慮圓滿周到にして敢て奇を欲せず諄々説き營々躬行す、父兄母姉に接して城府なく、學校の教育方針をして善く家庭に會得せしめ、相共に悖る事なからんとす既に京都府の教育に關はりて二十有七歳隆々たる校運を振興して以て一般の欽慕を受け、其徳を頌せらるゝに至る蓋し亦氏の偉大なる効績の認めらるゝに因る。」

長崎縣佐古尋常小學校長

都々木捨藏氏

「主人は一家の模範なり、我れ能く勤めば衆何ぞ怠らん、我れ能く儉なれば衆何ぞ敢て奢らん、能く公ならば衆何ぞ敢て私せん、我れ能く誠ならば衆なんぞ敢て偽らん」と、宜なる哉吾人今之を都々木捨藏氏に見る、利己的現代、街偽的當今に於て稀に見るの人、蓋し情民の好模範。



長崎縣師範學校卒業、同二十二年縣師範學校舎監に任ぜらる、迄、九小學校を歴たり、同二十五年師範學を去りて現校長に就く迄亦六校を轉ず、同二十九年長崎市立磨屋町夜學校長に同四十四年文部省より功績狀受領、大正二年三月該校が商業補習學校に改まると同時辭任、以上在職十七年餘缺勤僅に三夜、賞狀并に賞金前後四十二回、氏の豪邁峻敏は當時容るゝ能はずと雖も、氏は此間益々人格修養を圖り當局識者をして重を加へしむるを見て、氏の群を抜く愈々高きを思はざる可からず、亦一偉人なる哉。

氏や雨雪寒暑に堪へ、二十有餘年間嘗て一日の缺勤なきは、以て稀代の勤勉家といふを得べく、運動具を網羅して體育を奨勵する所、氏の抱懐を語るに非ずや、蔬菜の栽培、蠶兒の飼育、共同貯金の奨勵、輪番各地方の學事視察、貧困兒童學用品給與等々實行す、氏に一男一女あり、令嬢は某醫師に嫁し、令息は京都大學工科を出て目下内務省に在り、琴瑟相和し團欒親睦の美既に顯はれたりと謂ふ可し、氏到る所令名を博す、現任就職以來所屬民の人望亦厚く教務大に擧りたり。」

宮崎縣 富田尋常小學校長
兒湯郡 富田高等小學校長

津江壽太郎氏

善を賞め惡を憎むは人の情なり、然れども輕忽粗漫の賞讃惡辭は却て社會を毒するもの、蓋し慎重周到の態度に出でざる可からざるや明らかなり、現任宮崎縣兒湯郡富田尋常高等小學校長津江壽太郎氏は能く優を褒め惡を懲らすの人、而して躬ら身を持す謹嚴に、事を處する重厚なり、爰を以て教育の効果大に擧り、聲望今や海嶽に比す、亦壯なりと謂つ可し。



氏は宮崎縣の人、明治三年六月を以て生る、夙に育英に志あり、其の小學校を卒はるや、進んで宮崎縣師範學校に學び、明治二十四年を以て卒業す、直ちに任を富田村八幡尋常小學校訓導に奉じ、同三十年同校長に進む、同三十四年學校名を富田と改め高等科を併置し、就て其訓導と爲り同三十九年現校長に任じ、翌年實業補習學校長を兼攝す、其の職を本校に受けて爰に二十有三年、猶本校に終焉の志を有す、大正元年文部省の選奨に浴す。

氏や誠實勤勉、施設能く整ひ、部下職員兒童能く其の業に服し、父兄村民の信頼殊に厚し、村内の物議を解決して學校を改築し、小破は職員自ら修繕し、平素教材の自製蒐集を奨め、通俗教育に力を致す、又就學出席の優良部落へ獎勵旗を授與し、貧困者に學用品を給與する等向學心の向上に努力す、地方古來の風俗習慣傳説信仰其他生業等に關する事項を調査して勵長矯弊の實を擧げ、青年會、壯丁教育、婦人會、校友會の指導誘掖を怠らず、先年校友會氏の永年の勞に酬むん爲め記念品を贈れり、嗚呼氏や真に獻身的の教育者なる哉。

鑑銘家育教

愛媛縣立松山高等女學校長

露口悅次郎氏

謹嚴靜肅にして多く語らず、明晰の頭腦と學理の深奥とは大に一般生徒を感動せしめ、常に着實を尙び虚飾を避け、銳意校風の振興を圖り、規律を嚴格に内容の堅實抜く可からざる成績を擧げ、現時浮薄の風儀潮流の沓々として殆ど防止すべからざるの狀態に當り、不言實行専ら之が矯正を任と爲し、眞面目なる淑女たり賢母たる女子養成に盡し、孜々諄々教へて倦む事なき者を愛媛縣立松山高等女學校長露口悅次郎氏其人と爲す、尊敬すべき教育家ならずや。

慶應三年八月愛媛縣伊豫郡此人を産む、明治二十二年七月其縣師範學校を卒業し、直に下浮穴郡郡中高等小學校訓導に任ぜられ、同二十五年十月伊豫郡北山崎尋常小學校訓導に轉じ、更に同郡松前尋常小學校訓導に次て其校長と爲る、同二十七年九月同縣師範學校訓導に補せられ、同三十二年六月普通免許狀下附せらる、同年十二月東京高等師範學校訓導に榮進す、同三十五年六月復歸て松山市松山高等小學校長拜命市學務委員を兼ね、同四十年四月遂に進て愛媛縣視學に榮轉し學務主任と爲り、小學校教員檢定常任委員たり、同年五月帝國教育會長より教育功勞者として功牌を受く、同四十四年一月同縣今治高等女學校長兼教諭と爲る、當時氏の名聲赫々として縣下教育界に喧傳せられ、氏の教育上顯著なる成績は大に縣下斯界の模範と爲りたるものあり。

氏や圓轉活達の徳を具へ、英邁奇敏の資を有し、且つ同情心深く人に接して城壁なく、磊々落落克く人を容る、熱誠以て事に當るや遂行せずんば止まざるの氣概を有す、氏は教育を以て一身を固めたる如く氏の眼中教育事業あるのみ、從て其態度や苟も教育的ならざるはなく斯業の爲め百難千坐曾て意とする所にあらず、氏到る所成績擧り徳望高きを加ふる所以のもの偶然にあらざるなり、氏現任就職日尙淺く効果の如何を見る能はざるを惜む、而も過去を推して其果の善美を知る。」

鑑銘家育教

宮崎縣立延岡中學校長

正七位 勳六等 根井久吾氏

愛の徳は廣大なり、先づ君國を愛し、近親を愛し、然る後朋友を愛し、本邦人を愛し、外國人を愛し、延きて禽獸蟲魚草木の微に及ぶ、之を博愛と云ふ。職に教育に在るもの博愛を以て事に當れば夫れ成るあるに庶幾からんか、現在宮崎縣立延岡中學校長根井久吾氏の博愛を以て證すべし。氏は本縣宮崎郡清武村の人、明治八年十月を以て生る、人と爲り剛健にして濶達、嚴格にして温情溢る、其の事を計るや緻密、決するや果斷、明治三十五年七月東京帝國大學文科大學哲學科を卒業し、同三十七年十一月陸軍歩兵少尉に任ぜらる、初め高知縣立第四中學校教諭に任じ、轉じて宮崎縣立中學校教諭たり、同四十三年十一月遂に現任に就き孜々校規の改善に盡瘁し、爲に校風の一



新せるは地方人士の齊しく認むる所たり、在職日淺しと雖も鋭鋒已に顯著なりと謂つべし。夫れ人各長所あり、短所あり、長所を採つて適用す、剛なる者は之を用ひ、柔なる者亦利用の途なきに非ず、氏に各自の修養を奨勵せらる、夫れ中學校は高等普通教育を施して、協同一致校務に勉めしむると同時きは論を俟たず、故に須叟も社會と相離るべからず、宜しく市民或は生徒父兄と接近して互に意志の疏通を計り、實際社會に有用の人材を教養すべきなり、更に卒業生の指導は最も留意すべき所、氏の教育克く如上の要求を満して遺憾なきは蓋し識見の發露にして令聲斯界に噴々たる宜なる哉。」

鑑銘家育教

新潟縣新潟尋常小學校長

根津音七氏

深遠の學識、崇高の人格を兼ね、加かも豊富の趣味を以て兒童育英の任に膺り、着々其效績を顯はし、以て縣下に重きを爲す者、新潟尋常高等小學校長根津音七氏あり。

氏は本縣中魚沼郡十日町の人、元治元年七月を以て生る、夙に三島中洲先生の學徳を慕ひ、出て二松學舎に入り、明治十二年漢文科を卒業し、同十五年より同二十三年に至る間、郷間に住し、



同二十四年東京私立明治義會中學校講師と爲り、教養の餘暇學業の研鑽不撓の功空しからず、同三十一年、修身倫理兩科の中等教員試験に合格し、其年第二高等學校大學豫科講師を囑託せられ、同三十三年同校助教授と爲り、居る事三年、同三十四年本縣十日町小學校長に轉じ、兼て同町郡立中魚沼染織學校授業を囑託せらる、同三十八年教育上功勞不尠の故を以て縣より表賞を受け、同四十二年現任校長に任じ、新潟實業補習學校長を兼ね、曩には高等教育に従ひ、中等教育の經驗を以て更に小學校教育實業補習教育

に盡さる、頭角斯界に顯はる、所以理ありと謂つべし。資性豪毅にして、而かも注意周到、精微、其職責に忠實なる、事務の整理に堪能なる、多く見ざる所なり、克く部下の長所を看破し其利用宜しきを得るが故に皆之に服し喜て其職に盡す、今や新潟市教育會副會長(新潟市青年會副會長)、新潟市游泳協會會長等を掌攝して貢獻する所多く、其教化大に進み、新潟市の面目を一新するに至りたるもの氏の力に俟つや大なり矣。」

鑑銘家育教

巖手縣沼宮内高等小學校長

根守練太郎氏

東聖西哲皆誠を説く、然り誠は之れ天の道なればなり、現任巖手縣沼宮内尋常小學校長根守練太郎氏は「誠」を以て訓練の大綱とし、正直勤勉禮節の三徳目を配す、何ぞ夫れ簡にして要を得たる奥羽の地近年屢災厄に遭ひ且つ本校二回の類焼あり、教育上の困難蓋し同情に堪えずと雖も、校訓の意を銘するあらば遂に教育の効果を誤る莫からんは明らかなり、氏の心意亦爰に在る乎。



氏は明治九年十一月盛岡市に生れ、幼にして岩手郡御明神村に住む、夙に育英に志し、郷里上野小學校に教鞭を執る事數年、同三十一年縣尋常師範學校を卒へ、岩手郡繫尋常小學校訓導に任ぜられ、同三十三年同郡明神尋常小學校長に擢んでられ、次て同郡澁民尋常高等小學校長に轉ず、同三十五年轉じて同郡大田高等小學校長に、同三十九年現職に任ず、適く所父兄の欽仰厚く、成績亦頗る擧がる。

氏人と爲り温良恭謙にして着實なり、部下職員は何れも年少氣英の人なりと雖も克く之を徳化し、和親協力補佐の任を盡し、喜々其の職に勵む、氏又部下の長所發揮と能力の伸長とを奨勵し各責任を重んぜしむ、學校は文化の中心、農村の燈明臺たるを自覺し、親切叮嚀以て所屬民に對し、家庭との聯絡に努む、現時青年の氣風は遊惰に流る、身心を鍛練し徳義を重んじ一定の職業に向つて勇往邁進の氣風を養成せんとして卒業後の指導誘掖に當る社會は刻々進展して底止せず、其の之を善導して風教の美を收むるは亦教育者の任なるを思ひ、數種の公共的施設を以て之が改善を期す、眞に佳い哉。」

鑑銘教育家

元大阪八尾中學校長

正六位 中原貞七氏

韓兆子曰く、國に常強なく又常弱なし、法を奉ずること強ければ則ち國強く、法を奉ずること弱ければ則ち國弱しと、然り今是れを一校に見る、偉大なる人格が至誠より出てし立法は必ず衆人の尊奉する所とならざるべからず、法を奉ずる嚴正なれば、校規嚴乎として諸般の事務は自ら圓滑なる運行を見るに至らん、大阪府立八尾中學校は、其の法治の完美を以て鳴るもの、而して其の是れを致し、は元八尾校長中原貞七氏なりとす。



氏は岩手縣盛岡市清水小路の人、安政四十年一月の生なり、其人と爲りは一言以て之を蔽へば夫れ眞摯か、其の長所としては正直公平を擧げざるべからず、明治十六年東京大學文學科を卒業し、同年九月東京私立成立學會長と爲る、同二十年同會に女子部を設く之れ實に女子教育の素因なり、同二十五年山形縣尋常中學校長と爲り、同三十一年島根縣立第二中學校長に轉じ、同三十六年大阪府立岸和田中學校長に、同三十八年現任に移り、在職茲に八年半。

氏が職員の統御に關しては、適所適材を置くを主義とし、一旦職務を委任したる上は、必要なる監督を行ふ外殆ど干渉せず、家庭教育に就いては古武士的家庭を好まるとが如く、不完全の家庭に人と爲らんより、寧ろ寄宿舎生活を爲さしむべしとは、常に口にせらるゝ所なり、青年教育に、鍛練主義を執り、社會教育上には、専ら通俗的圖書館事業を盛んにして一般の人智を進め道義心の涵養に努力す、氏の到る所敬稱止まず重を斯界に占めたる理ありと謂つべし矣。」

鑑銘教育家

元福岡縣視學官

正五位 勳四等 長倉雄平氏

我國教育界の人にして長倉雄平氏を記憶せざる者なからん、夫れ第二の國民を養成するに孜孜たる教育家は、國家の生命なり源泉なり、之を愛敬し、之を尊重せざるべからず、這般帝國教育會有功賞牌を贈らんが爲め、各府縣功勞者一名の推薦を知事に圖る、福岡縣は當時既に官職を退き悠々日向の一邑に閑居する長倉氏を薦めて其譽を得せしめんとす、畢竟之れ縣民感謝の發露せしもの、以て氏の效績偉大に人格高きを窺ふに足らん。



氏は宮崎縣の人、嘉永三年十月を以て其郷に生る、明治六年文部省に出仕し、同九年東京府に轉じ、翌年東京府師範學校備を兼ね、後學務課長と爲る、同十六年新潟縣一等屬に移り學務課長衛生課長を兼掌し、同十九年新潟縣師範學校長兼屬と爲り、同二十二年山梨縣師範學校長に轉ず、爾來三重縣熊本縣各師範學校長を経て、同三十二年福岡縣視學官に擢かれ、次て同縣事務官たり、此間累進して高等官四等從五位に叙せられ、勳四等旭日小綬章並金七百圓を賜はり、同四十年休職滿期、同四十一年正五位に陞叙せられたり、

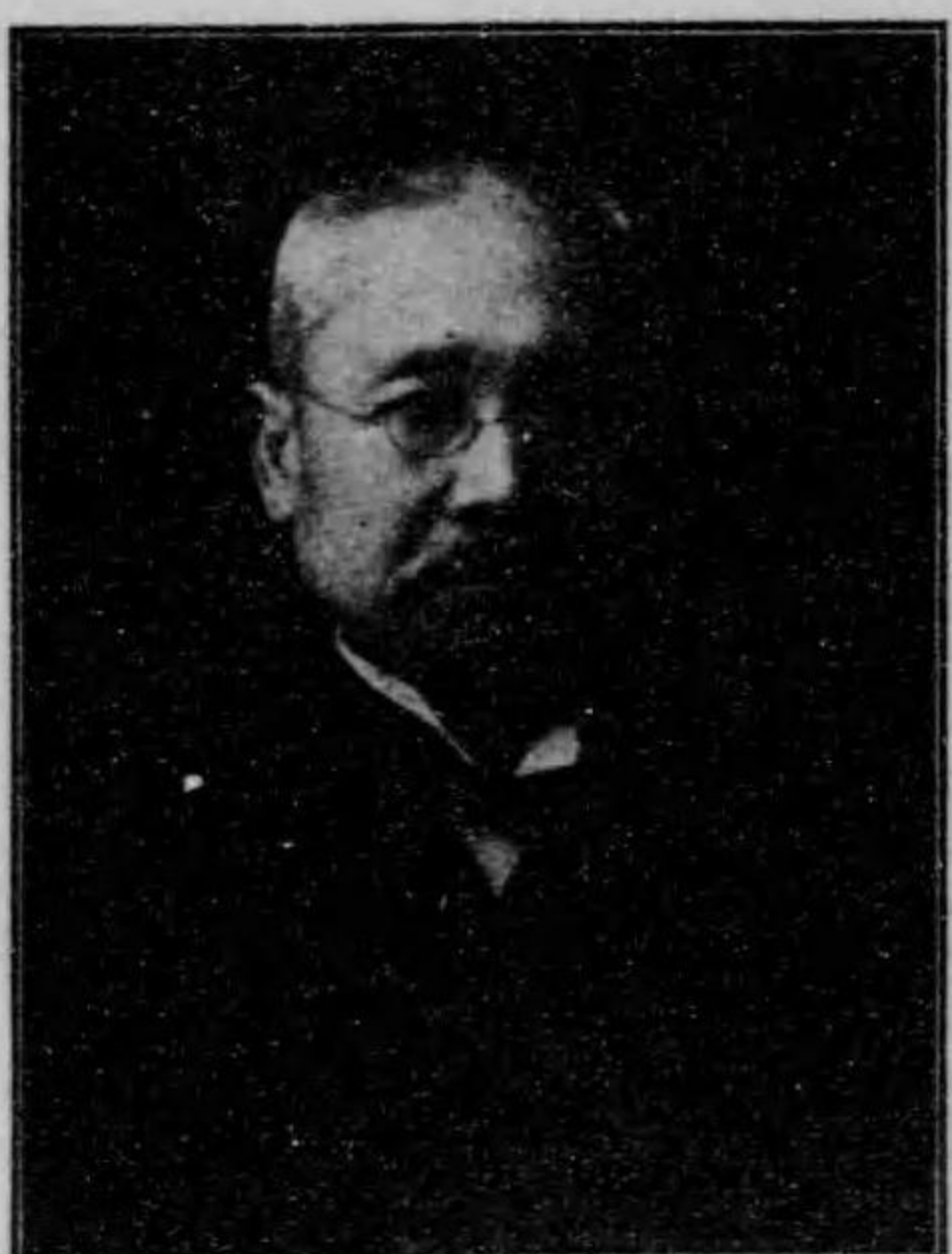
氏や重厚溫雅克く人を容れ、德望衆を率ひ、明治六年任官以來三十五年の久しき、終始教育の爲に盡し其功顯著なり、就中明治三十二年視學官制の設置以來福岡縣視學官として在職し、當時の師範學校、中學校、工業學校、農學校の増新設、高等女學校實業學校の設置獎勵、殊に初等教育の普及發達に關し、今日の福岡縣あらしめたる、實に氏の督勵指導宜しきに據るものとす、謹祈萬壽。」

鑑銘家育教

群馬前橋中學校長

從六位 勳六等 成富信敬氏

今や我國に於て、社會に出て處世の道を達せんとするの青年、動もすれば自ら治むるを學ばずして、早くも人を役するの道を講じ、自ら助くる能はずして、早くも人に施さんとするの計を爲す、抱負愈大にして爲す所益々小、唯に小なるのみならず、遂に何事をも成し得ざるに了る、畢竟架空的空想に馳せて實際智識の吸収に力めざるの結果なるや否は、吾人之を知らず、然れども我成富氏の如く品性陶冶、實力養成の方針を以て學徒を教養するに於ては、又何ぞ之を憂へんや、吾人は氏に因て意を強ふす。



氏は安政六年六月を以て肥前蓮池藩に生る、少年時代蓮池育英館に漢學を修むる事九年、又關清甫に從ひ數學を學ぶ、後東京同人社、横濱居留バラノ學校、大坂英語學校東京大學豫備門等を経て理科大學に入りしが中途疾を得て學を退き、熊本縣天草中學校教諭、熊本中學校教諭、第五高等學校教授、高知縣中學校教諭、海南學校教諭、大阪府第五中學校教諭を経て、佐賀縣第三中學校長と爲り、後福井縣武生中學校長、和歌山縣和歌山中學校長に歴任して大正二年二月現職に就く、氏赴く所任期長からずと雖も亦一種の感化力を有し、何れも效果見る可きものあり。

氏は剛毅果斷、克く事物の條理を究め、曲を矯むる事嚴にして私なし、部下を愛撫し、校務致密に、實踐躬行努力飽く所なし、常に形式的學理を避け、實際に應用教授の方針を持し、人格の修養圓滿の常識を養ふに努む、其公平無私は蓋し氏の長所歟。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

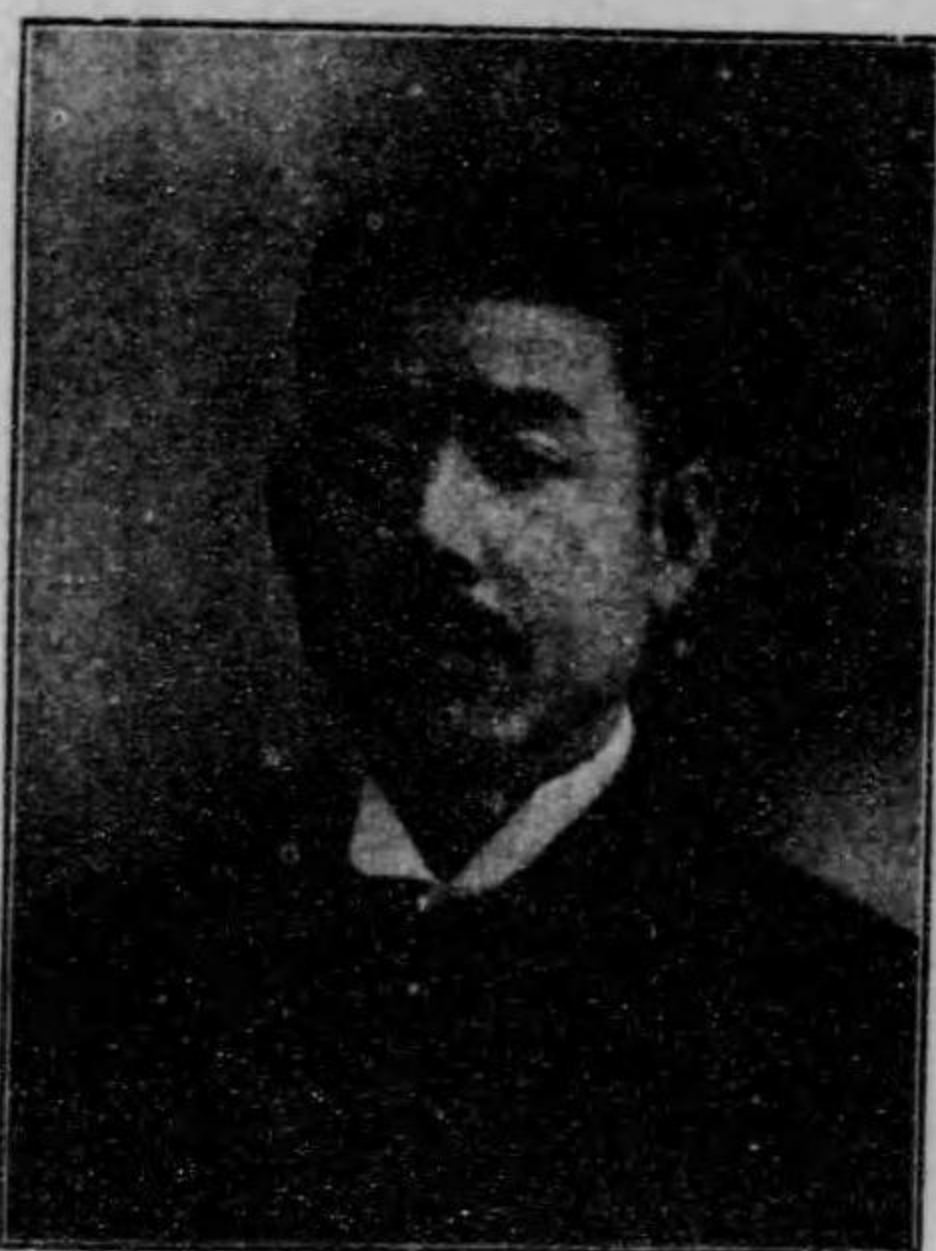
ナ之部

福島磐城高等女學校長

從七位 長岡恒喜氏

四九六

壯にして豪宕なる者圓熟して醇和の域に達するや、其の人格の光輝温中威を藏し親むべくして狎るべからざるものあり、統領の器固より斯の如くならざるべからず、彼の優柔に失し剛強に偏するが如きは以て衆を悦服せしむるに足らず、現任福島縣立磐城高等女學校校長長岡恒喜氏は其の明瞭たる心理能く萬物に凝滞なく、其の和醇なる思容克く衆を容れ、其の威儀に整然たる亦克く衆を服せしむるに足る成徳の美極まれるかな。



氏は熊本縣士族、明治九年四月を以て生る、幼にして俊穎、早くより熊本濟々學に學び、其の才學夙に群童を抜く己にして第五高等學校に入り、後直に東京帝國大學文科大學に入り哲學の研鑽に努め造詣する所多し、同三十九年七月業を卒ふ、同四十年香川縣高松中學校の聘する所と爲り同校教諭たり、同四十三年四月福島縣立福島高等女學校教諭に轉じ、同四十四年十月遂に現職に榮轉せり。

氏は訓育要項として教育勅語戊申詔書の御趣旨を奉戴し更に敬神報國の念を養成することに努め、特に女徳の大綱として調和勤勞氣節の三綱目を掲げ、是れが躬行實踐を怠らしめず、日夕の言動に能く留意し、個々に就いて克く訓戒する所、其の懇切叮嚀なる骨肉の親も及ばず、されば職員全體之を體し、各受持級の監督指導を忽にせず、其の教授の如きも一意徹底に努め、教材の整理には特に留意し精勵努力各成果を競ふ、是れ校長の忠實精勵の發揚にあらずして何ぞ氏の令聲縣内に喧傳せらる宜べなる哉。」

鑑銘家育教

ナ之部

青森縣立工業學校長

中原正道氏

四九七

人我に無禮なりとも、我が耻辱にならざることは咎むべからず、人の無禮を宥め忍して堪忍すれば、我が心平和にして樂みを失はず、人と争はずして無事なり、斯くの如くなれば物の波瀾を受けず、物の爲めに我を殉ずることなし、莊子の所謂存養の道完しと云ふべし、現任青森縣立工業學校長中原正道氏は克く這般の理に體達せる人格者と云ふべし。



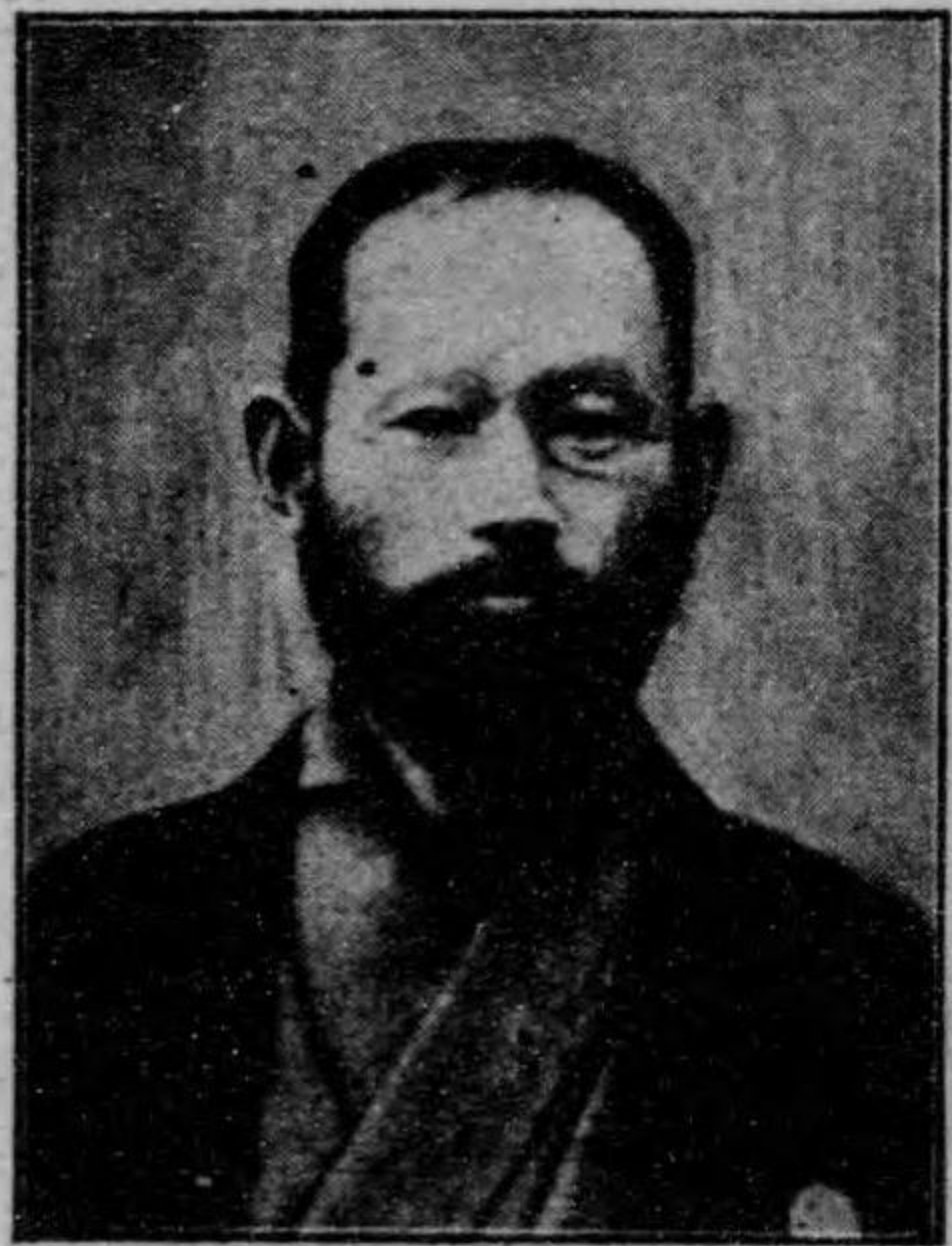
氏は岩手縣盛岡市の人、明治五年十月を以て生る、人と爲り温厚篤實にして同情心に富む、蓋し氏は幼時頗る苦學したる人にして、修學當時の經歷は世の立身談に資するに足るものあり、明治三十三年七月東京高等工業學校教員養成所本科建築科を卒業し、京都府師範學校教諭と爲り、後ち岩手縣立工業學校教諭に轉じ、香川縣琴平工業學校教諭兼校長、大阪市立工業學校教諭等を経て、現に青森縣立工業學校長兼教諭、青森縣技師、青森市立工業徒弟學校長として致々其の職に努む。

氏の教育は德育根底主義にして、智能は道徳の直上に位置せざれば、毫も其の價值無しとの信念を抱持し、極めて眞摯の氣風を鼓吹し、而も智能の教養に付ては又極めて活動的なるものあり、其の部下學徒に臨むや、常に家族的觀念を基とするを以て寛嚴何れにも偏せず、終始温情を以て貫き形式を避けて實質的善美を得るの方針を採り、又一面人材の適否を見るの明快なるは、氏の長所とする所にして、其の信望や極めて厚し、氏の令名縣下に洽然たる所以なきにあらざる也。」

京都府立第五中學校長

正七位 中野省吾氏

細心と忠實とを以て職務に當り、學力の補習と品性の修養とに努め、青年の研究、各生徒の固性群集心理の研究、地方民の人情風俗、學生界の風潮等に留意すべく、部下職員に要求し、欲望を指導し、謹嚴にして慈愛に富める態度と、父兄の熱誠にして學校に信頼せる行動と相俟つて圓滿親和の間、能く教育の徹底を期すべきを示し、躬ら其範を垂れて孜々倦まざる者、之を現任京都府立第五中學校長中野省吾氏其人なりと爲す。



氏は明治四年九月を以て大分縣に生る、其の中學を卒へ第五高等學校に學び、中途退學して英人に英語、英文學、獨乙語及哲學を修め、後帝國大學選科に入り、明治二十八年其業を卒はり、猶留まりて心理學、倫理學及教育學を研究し、傍ら私立日本中學校に英語を教授す、此間校長杉浦氏の人格に得る所尠ならず、同三十一年愛知縣第二中學校奏任教諭に任じ、翌年京都府立第一中學校教諭に轉じ、舎監を兼ね、同四十一年京都府第五中學校長に榮轉す、此年

教育家銘鑑

文部省は氏の功績を賞して二百金を下賜し累進して今や正七位に敘せらる。氏資性穎悟、學に篤く職に忠なり、部下を統ぶるに寬嚴宜しきを得、學徒を化するに慈情を以てし、父兄會入學式其他の會合を利用して家庭との連絡を圖り、規則書學友會誌及學校通信を配布して教育方針を周知せしむ、思ふに高尚の理論に偏し、巧妙なる技能を弄ぶ教育者多きも、氏は徹頭徹尾實際的教育を施さんとするに外ならず、今や府下教育界の重鎮たる所以なきにあらざる也。」

教育家銘鑑

富山縣商業學校長

正七位 中隈仙五郎氏



人は幸福なる可き權利を有す、人若し幸福なる能はずんば是れ自から失墜したる也、又焉んぞ天を咎めん、自立自營以て國家に貢獻すべきは國民の義務、而かも自からを幸福ならしめ、猶且國家を泰天の安きに置くの人物を養成するは教育者の任に屬す、殊に商業教育に於ては獨り我國内の交易に止まらず、宇内列國と相關聯する所大なるが故に、絶大なる抱負、偉大なる人格を有するの人は始めて能く之を完ふすべし、我中隈氏蓋し是なり。

氏は佐賀縣の人、明治元年十一月を以て佐賀市に生る、明治二十四年東京高等商業學校の出身、始め逓信省鐵道書記と爲り、同二十七年長崎縣商業學校教諭に任じ、同三十二年富山縣高岡商業學校長に榮轉し、亞て同三十四年市立新潟商業學校長に轉ず、同三十六年同校を縣立に改め、翌年從七位に叙せらる、同三十九年任を北海に移して廳立根室實業學校長と爲り、翌年根室町立女子職業學校長を兼ね實業學校教諭を兼ね、同四十四年從七位に陞叙せられ、大正

二年現校長に任ず、適く所多大の效績を印し、實業界の標的と爲る。氏や人と爲り英邁溫厚、然れども能く談じ能く語り、具さに實業界の大勢を洞察し、能く部下を督勵して學徒教養の責任を盡さしむるのみならず、實業家を接觸して學校教育の本義を知らしめ、弊を矯めて商業道德の發達を圖り、誠實を根柢として自己を幸福ならしめ、堅實なる志操を涵養して國利を増進せしむるに努む、充溢せる經驗、富贍の學殖、偉大の人格者たる氏や尊い哉。」

鑑銘家育教

ナ之部

五〇〇

宮城縣 仙臺市立仙臺商業學校長

正七位 鍋島熊太郎氏

萩花露を抱いて風無きに獨り地を潤ほし、巖礎苔を被りて招かざるに波浪頻りに訪づる、嗚呼徳なる哉此花、大なる哉此巖、吾人鍋島熊太郎氏の人格に接して轉た此感を深からしむ、夫れ教育者は宜しく斯くあるべきを欲し、又斯くある可からざるものと爲す。



氏は佐賀縣の人、慶應元年四月を以て生る、人と爲り清廉温良、志操堅固にして徹透玲瓏玉の如き人格の人なり、其中學を出づるや高等商業學校に入り、明治二十五年七月を以て其業を卒る、此年鐵道廳に出仕し同二十七年福島縣尋常中學校教諭に任じ、翌年市立大阪商業學校教諭に轉じ、後山口縣赤間商業學校教諭と爲る、然るに同三十一年三井銀行に聘せられて赤間關支店詰と爲り、同三十三年日本火災保險株式會社會計部長に移る、其翌年大阪市立大阪高等商業學校教授囑託と爲り幾許もなく教諭に任ず、同三十六年新潟縣立商業學校教諭に轉じ、奏任を以て待遇せらる、次て岐阜市立商業學校長に榮轉し、從七位に叙せられ、同四十二年現校長に就き、大正元年正七位に陞る。

氏深く學を好み專攻の學其の精を極む、而も徒らに學理に捉はれず實地應用の才を養ひ、商賈との關係を密ならしむるは商業教育上必要なる要件たるのみならず、實務に精通し着實勤勉なる子弟を養成せんとす、殊に商業道德は最も尊重すべく、誦詐偽瞞の商略を排斥すべきを教ゆ、部下亦氏の意志を體し協力して教化に膺るが故に、氏の令名と共に校風頻に高きに至れるを見る、偉哉。」

鑑銘家育教

ナ之部

五〇一

石川縣立農學校長

正六位 榎林林二郎氏



土壤水質、その類一ならず、肥沃磽确善惡同じからず、之を治むるに各々宜しきあり、地は惡を厭ふべからず、薄ければ即ち之に糞すべし、鋤は頻を厭はず、早すれば即ち之に灌ぐべし、力を用ふると多ければ利を收むると必ず倍す、夫れ農は天下の大本にして民の以て生ずる所、國富の依つて興る所是れが教養豈忽緒に附すべけんや、現任石川縣立農學校長榎林林二郎氏夙に眼を農政に注ぎ、是れが改善を以て己が任務とし、蹇々匪躬の節終始渝らず、時に或は地方農政の實務に當り、或は子弟に斯業の發展を奨め、其の功や一々枚舉するに遑あらず、憂國の士、其の職に忠なる元より斯の如きのみ。

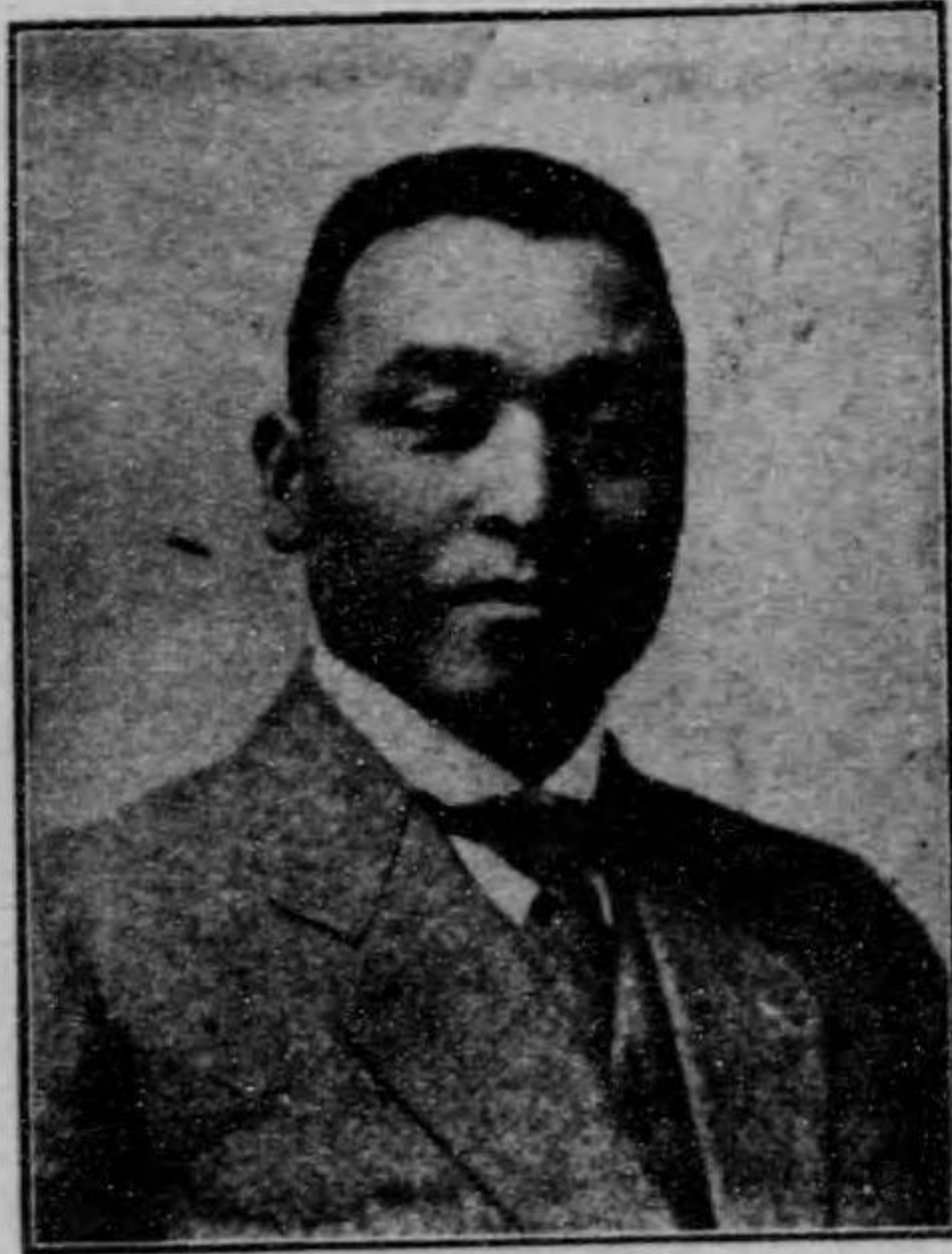
氏は長崎縣北松浦郡平戸村の人、明治八年八月を以て生る、人と爲り温厚摯實にして人格嵩高長者の風あり、明治卅四年七月東京帝國大學農科大學を卒業し、同卅七年五月埼玉縣農事試驗場長に任じ、同四十年十一月兵庫縣技師に轉じ、同月兵庫縣農事試驗場長を命ぜらる、同四十五年三月正六位に叙し、高等官四等に陞叙せらる、大正二年五月石川縣技師に轉じ、現任石川縣立農學校長と爲る、同年六月石川縣農事試驗場技師兼任を命ぜられ、同時に同試驗場長を拜す、就職未だ一年ならざるも、其の努々の績は已に擧れるを見る。

氏は農業の本旨に基き、平素學術の練磨と共に、實習の勤情に重きを置き、着實質素の氣風を養成し、勤勞に堪へ、實務を尊重するの良風習を涵養せんことを期せらる、偉なる哉氏の人格。」

大阪職工學校長

七位 長尾 薫氏

煤煙天を掩ひて日光爲めに暗く、笛聲頻に鳴りて耳尙聾す、蓋し大阪の商工業我國に比なく、工業を言ふ大阪を思ひ、工業を語る必ず大阪を口にす、然りと雖も、職工の多くは猶未だ醜陋を脱せず、否寧ろ淫辭卑語を以て誇らんとするの狀態に在り、従つて技術の鍛鍊益々低く、其將來寒心に堪へざるものあり、畢竟職工學校を設立せし所以ならん、長尾薫氏富賸の學殖と、偉大の人格とを携へて徒弟の教育に従ふ、大阪市民氏に待つや大なり。



氏は大分縣の人、明治四年七月を以て其郷に生る、明治二十九年度工業教員養成所本科木工科の出身、最初任を大分縣師範學校に奉じ、手工科教授を囑托せられ、次て訓導たり、翌年縣共立教育會評議員に選ばれ、小學校手工科に貢献する所あり、此年佐賀縣師範學校教諭に轉じ、佐賀市勸興高等尋常小學校訓導並縣師範學校教諭を兼ね、在職五年にして再び大分縣に復り速見郡別府町濱脇町學校組合工業徒弟學校長に任ず、在職更に五閱年、同四十年現校長に轉じ、後ち正七位に叙せらる、其大分佐賀に在るや、常に小學校教員乙種檢定委員を命ぜらる。

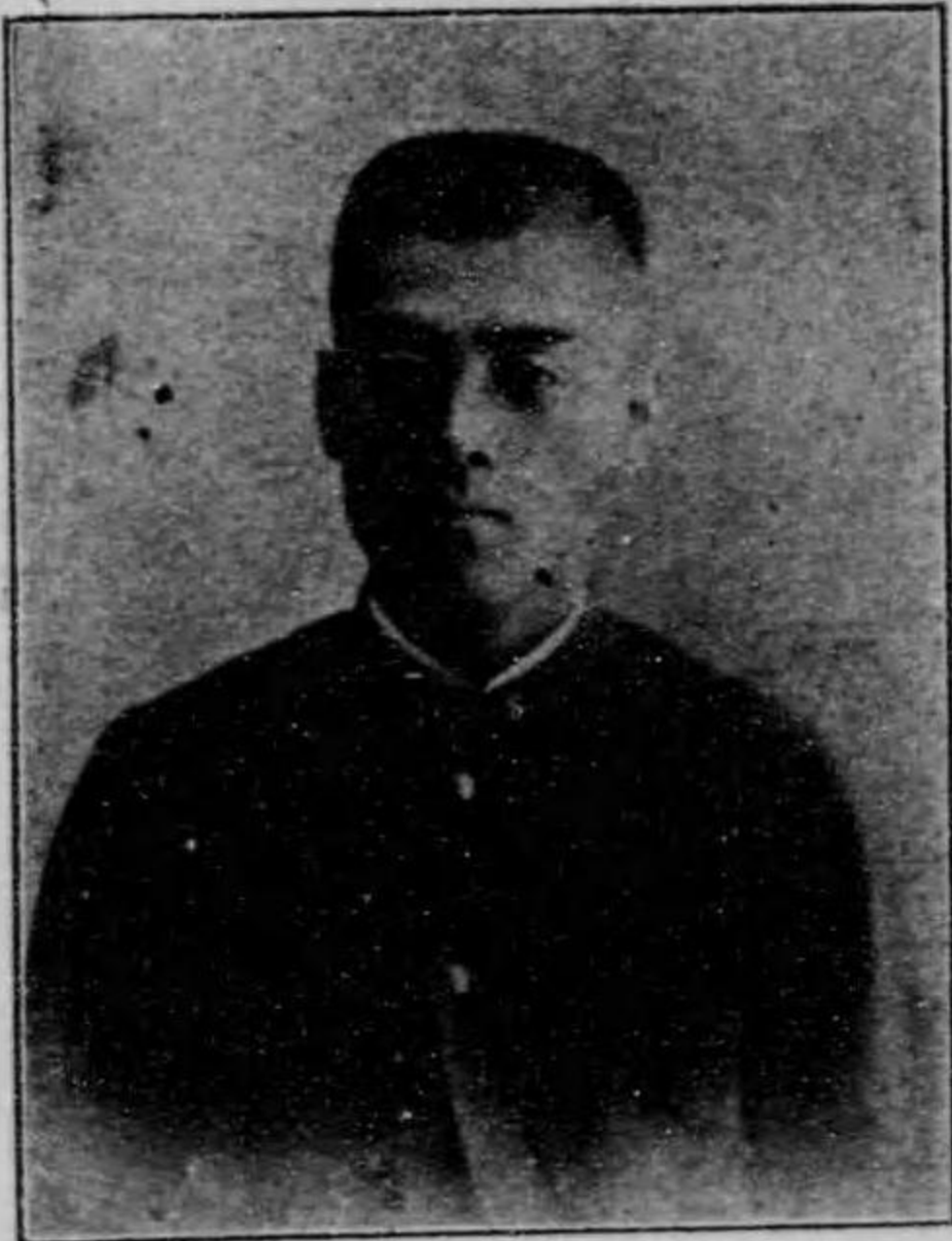
氏の雋秀英邁の人と爲りは、其着實温健の抱負と相待ちて適く所として、尊崇欽慕を受けざるなし、部下を遇する事極めて厚く、皆其職に安んじ、生徒を愛撫する事赤子の如く敢て城壁を築かず、故に學徒能く懐く、父兄其他實業家を指揮誘導して工業實務者の品位を高からしむるに努む、殊に卒業後の狀況を審にし、好んで其風評に耳を傾け以て教育の資と爲す、嗚呼。』

教育家銘鑑

岩手縣郡立膽澤農業學校校長兼
膽澤郡立實科高等女學校校長

從七位 中川 壽照氏

時世の變遷は近時漸く實業教育に傾き、迂遠なる學理に馳せて實際的智能を輕視せし弊を破れり由來國家の強弱盛衰は殖産工業の消長に關する事多し、各地競ふて實業學校を設け、盛んに是等の智識を授けると同時に、實業家を指導開發して最初の目的を達せんとに努む、本校長中川壽照氏は今や崇高なる人格と豊富なる學才とを携へて岩手縣膽澤郡下の實業教育に従ふ、亦適任なる哉。



氏は山水秀麗の峽地山梨縣の人、明治九年五月を以て呱呱の聲を揚ぐ、明治三十年山梨縣尋常師範學校を卒業し、直ちに東山梨郡平等尋常高等小學校訓導に任じ、能く校長の輔佐を完ふし、同僚の親睦に力む、後東京高等師範學校に入り、同三十五年農學地學科を了はり、奈良縣師範學校教諭兼訓導を奉じ、同三十七年高市郡小學校教員講習會農業科の講師、翌年添上郡小學校教員農林科研究會講習會を囑せられ、次て訓導を免じて舍監を兼ね、同四十二年生駒郡立農業學校長に榮轉し、同郡農事試驗場技師を兼任し、同四十五年現校長と爲り、幾許もなく從七位に叙せらる。

氏は温厚の資、剛毅の性、加ふるに匪勉謙讓の徳あり、且つ慈愛に富み、清濁を合せ吞むの量も有す、自ら邊幅を飾らず、躬行實踐能く範を部下學徒に示す、勤勉力行の教育方針は現任日尙淺きも能く其の績を挙げ、校風従つて醇美なるを見る、複雑なる二校を兼攝して加かも些の缺漏を見ざる處、眞に非凡なる器材なりとす、一般の信賴厚く、當局の優遇せる、亦宜なる哉。』

教育家銘鑑

青森
縣立弘前高等女學校長

正七位 永井直好氏

近時泰西の文明頻りに輸入して、古來の風俗慣習を一變し、甚しきは徒らに華美婉麗を競ひ、喋々社會を論じ、喃喃流行を談ず、而して婦道を攻むるもの、少きは現時女流の通弊にあらずや、其の總ての思潮を知悉し、之が矯正に揮身の至誠を致し、他日良妻たり賢母たるの素地を養ひ、一家の主婦として完全無缺なる婦人を造出するに努むる者我永井直好氏の如きは稀なり。



氏は慶應二年を以て江戸麴町の上屋敷に生る、人と爲り靜肅溫和にして慈愛に富み、端正身を持し謹直事に當る、是非曲直の批判頗る明晰にして、非を戒むる事諄々至誠を以てす、明治二十七年帝國大學法科大學を卒へ、文部省圖書課に職を奉じ、山口高等學校の教授に就き、更に紀州會議所書記長と爲る、其濃厚篤實にして眞摯熱誠なる性格は到る所好成績を挙げ、衆心獨り氏に蒐まるを見る、殊に崇高なる人格と、高遠なる學識とは不知不識の間、能く人に敬慕せらる、任を現校長に奉じて以來既に十餘年を経たり。其部下職員を率ゆる懇篤を極め、能く其人を信任し各長所を發揮せしむ、殊に女教員は服裝、言語等直接生徒の模範たる可く、方言の矯正、一般語の使用等に注意せしめ、作法、禮華、手藝に至る迄教ゆる所屹然たる一個の主義方針あり、家庭との聯絡に對しては女子教育に於て其必要の切なるを説き、嫁後猶母校との交際を密にし、學校と相待ちて地方風教の緊肅を圖らんとす、現下校風大に擧り、弘前の地亦女流風儀に一種の特長を見るもの、蓋し氏の賜たるを疑はず。」

仙臺市私立柳絮學校長

長谷りわ女史

節操高潔、孝心深く、忠愛慈善の情厚く、自ら裁縫學校を設立して銳意熱心、女子に堅實なる教育を施すこと二十有七年、卒業生及門弟を併せて五千に達し、功績頗顯著、現代女徳の頽廢を慨する者、女史を以て貞淑の模範と爲し、女子教育界の師表と仰ぐ、決して偶然にあらざるなり。



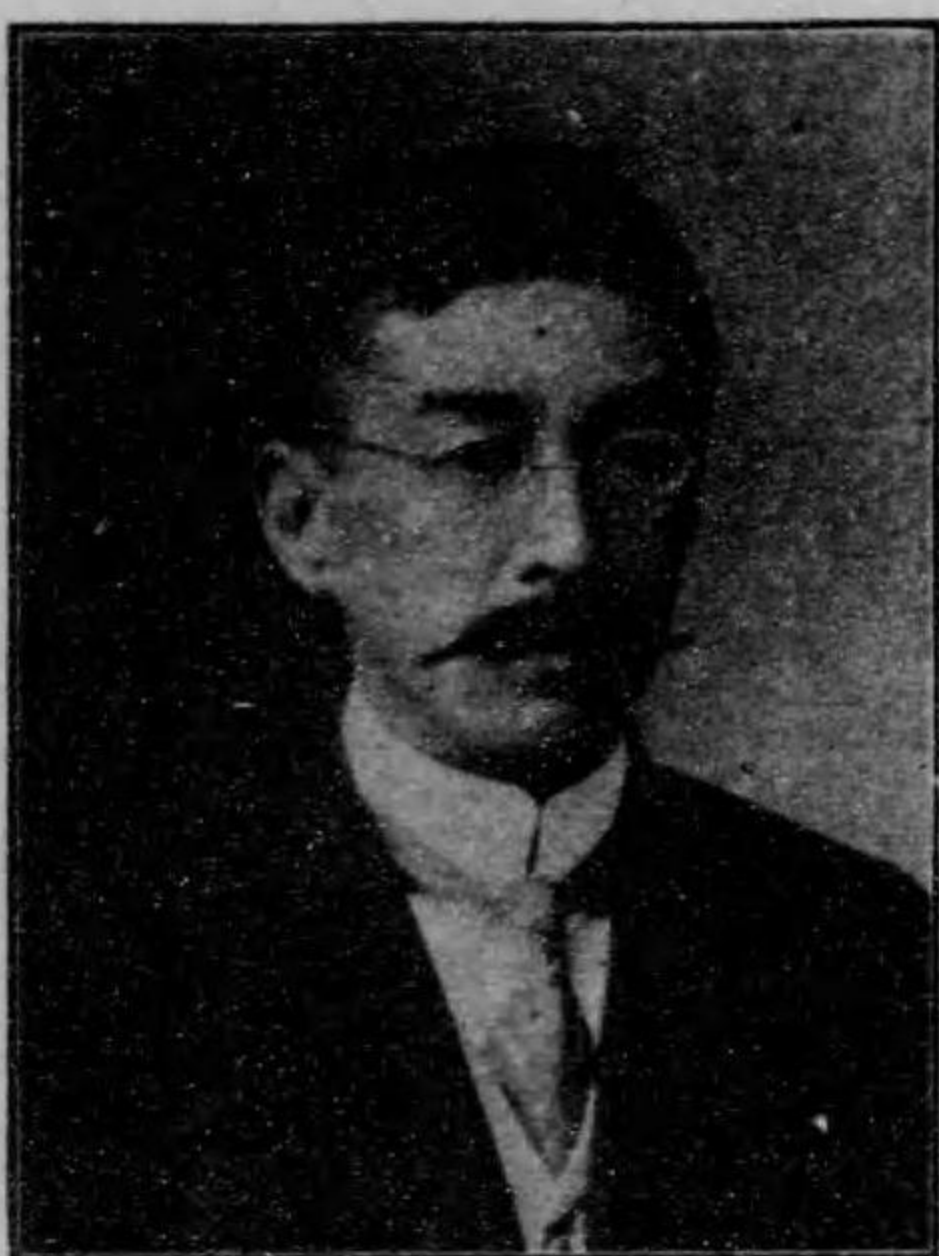
女史は伊達樂山公の侍醫志賀理節の二女、天保十一年十一月仙臺大町に生る、九歳にして母を喪ひ二十三歳長谷甫に嫁す、甫病羸臥蓐に在り、女史資性溫和意思堅實にして艱難に屈撓せず、寢食を忘れて湯藥に侍する事九年、三十二歳遂に所夫を亡ふ、時恰も戊辰の變革に際し士皆常祿を失ふ、長谷氏の如きは藥餌の爲め殆んど家産を傾け困苦一層甚し、加之老姑は嚴峻の性媳婦を換ふる事屢々なり、此苦境に在つて尙寡婦をして毎年二回温泉遊浴の費用を辨せしめしと云ふ、而も女史の之に事ふる孝養盡瘁譬ふるものなく、晨昏呈色以て樂みと爲す、老姑も遂に之に感孚して素行を改めたりと云ふ、當時世以て女史の孝徳を稱讚すると共に、賢婦烈女の龜鑑となせし所以なり。

女史家政を維持する爲め、非常なる困苦を極む、素より裁縫に善し日夜之に従ひ睡眠僅に二三時爲に重症の眼疾に罹る、免許狀を得るや、學校を設立し爾來今日に至る、日清日露役の起るや、平素の貯蓄金を献納し忠愛慈心の赤誠を致す、木盃を始め賞を受くる數回蓋し意志の鞏固なる、節操の高潔なる、裁縫術の精如に、教導の懇切なる、皆以て吾人の範たるべし、嗚呼偉なる哉。」

山梨縣立農林學校校長兼山梨縣技師

中村友太郎氏

凡そ士たるもの、其の執る職業は何にてもよし、居る處高卑更に念とせざれ、唯要は國家の安危國民の福祉を以て己が憂とし任とすべし、斯くてこそ其の一舉一動始めて意義あるに至る、彼の徒らに私利に汲々として、自己の榮達にのみ醜礙たるは吾人の本篇に收めざる所、現任山梨縣立農林學校校長兼山梨縣技師中村友太郎氏の如きは眞に憂國の士と謂つべし、其の學徒教訓の方亦自ら窺知するを得氏の人格夫れ偉なるかな。

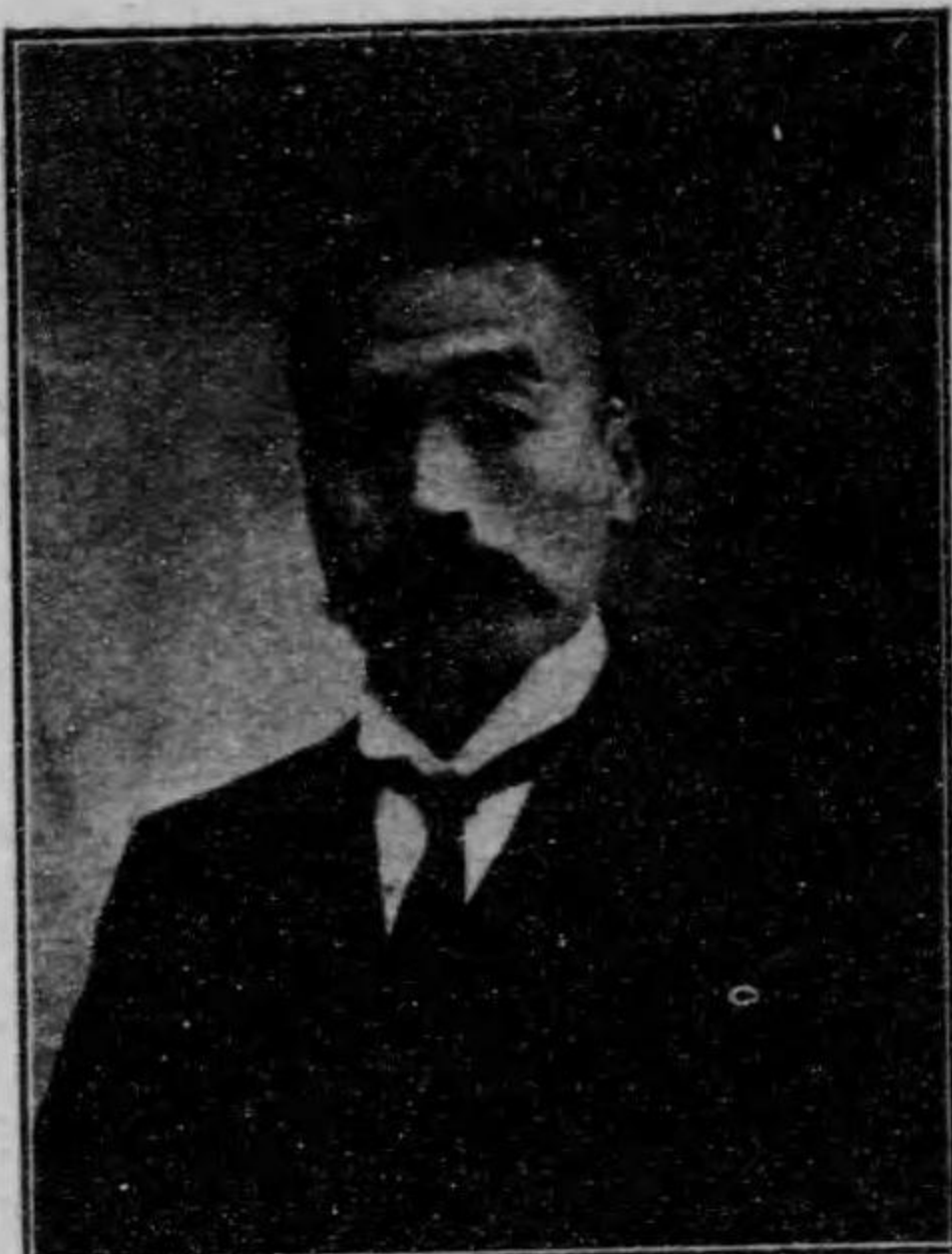


氏は北海道小樽區堺町の人、明治五年十月を以て生る、人と爲り方正端嚴、常に尊王の大義を唱導し富國の方を講ず、其の稼穡畜産の術皆經國の大義より出づ、明治二十九年七月札幌農學校を卒業し、同時に西川農場の監督を命ぜられ、三十一年五月群馬縣立尋常中學校教諭に轉ず、二十二年四月更に青森縣立農學校教諭に轉じ同時に青森縣技師農業試驗場長を囑托せらる、四十年一月新潟縣技師と爲り居る三年、四十三年四月山梨縣農事試驗場長に任ぜられ、大正二年五月遂に現任農林學校校長を兼ね、在職未だ年を重ねるに至らざるも銳鋒已に現はる。氏や在職未だ期年ならず、其の訓練教授管理に就いての主義方針を聽くに由なし、唯吾人は平素校庭に於ける學徒の止態に就いて氏の訓育の力を窺ひ知るのみ、部下職員亦氏の人格の下に統率せられ、其の素默の衆を體し、克く協同一致皆其の責務を實行して遺漏なし、學徒の尊崇や鍾まり、父兄の信頼愈厚きを加へ本校斯業の發展更に氏の經驗徳望に待つや切也。』

石川縣立鹿島郡立高等女學校校長

正八位 那波房太郎氏

齊家の主點は女子に在り、育兒の責任亦婦女に在り、蓋し良妻賢母養成主義の興る所以なりとす然れども文明の弊は往々にして女子教育方針と軌を同うせず、或は邊幅の修飾を誘ひ、淫靡の陋習に導き、徒らに虚榮を誘致して遂に齊家育兒の重を忘るゝに至らしむ、獨り那波房太郎氏あり、大に是等の短所を憂ひ節操堅固、貞淑順良の女徳を涵養すべく、孜孜營々倦まず。



氏は明治元年六月を以て大分縣北海部郡臼杵町の産む所なり、明治二十二年大分縣師範學校尋常師範學科を卒業し任を北海部郡南部高等小學校訓導に奉じ、同二十五年郷里臼杵高等小學校訓導に轉ず、同三十二年普通免許狀を下附せられ、翌年速見郡杵築高等小學校長に榮進す、同三十九年教育科中等教員免許狀を受得し、同四十一年石川縣師範學校教諭と爲り、教員檢定委員を囑せらる、次で舎監を兼ね、同四十四年現職に就き、大正三年正八位に叙せらる。

据電勉常に新智識吸收に努め、閑餘書冊に親しみ、研鑽日も猶足らず、殊に學校施設經營上には非凡なる能力を備へ、杵築に在るや縣氏に三十金を表彰し、又文部省より教育功勞者として賞詞を受くる等成績眞に偉大なるものあり、加ふるに圭角なき交際は部下職員學徒は勿論、父兄村民の信頼と畏敬とを蒐め、言ふ所用ひられ行ふ所悉く他の範を爲す、今や本校に入りて専ら女徳の訓化に努力す、其性格に照し、將來本校並に地方の風教に及ぼす良果や蓋し期すべき也、氏夫れ偉哉。』

神戸市立神港商業學校長

從七位 永田益一氏

日清日露の兩戰役を経て僅かに世界強大國の末班に列したるも、之れ主として兵力に於てのみ、其貿易に於て、其工業に於て列強に互する能はず、而かも不誠實なる商業に於て、廉耻なき取引に於て、寧ろ外國に侮蔑せらるゝ事大なり、永田氏は最も此點に鑑み、徳性の涵養を主とし、我國商業界を覺醒して、確實なる商業家を養成せん事を期し、着々其實績を挙げつゝあり。



氏は佐賀縣神埼郡の人、明治五年六月を以て生る、明治三十年東京高等商業學校を卒業し、山口縣赤間關商業學校教諭、福岡市立商業學校教諭に歴任し、同四十年本校長に轉じ以て今日に至る、由來本校は私立乙種商業學校に過ぎざりしが、氏の來任と共に學校の施設に於て、熱心銳意事に當り着々歩々改善する所あり、本校學科程度の如きも、氏が區會議員、市會議員の間に奔走遊説大に勉め、同四十二年甲種程度に進み尋て市立に移されたり、猶本年九月より大規模の校舍建築に着手すべく諸般準備中なりと。

氏資性英邁、頗る果斷に富み、進取の精神裕にして且つ情誼に厚く、廉耻然諾を重んじ、恪勤精勵以て人を率ゆ、生徒教養の方針としては、務めて開發主義を採り、智、徳、體各方面の圓滿なる發達を圖り、常識に富める實務家たらしめ、以て今の商業家の缺陷を充填せんことを期待す、現今猶ほ校舍狹隘にして不完全なるにも拘はらず、部下統御宜しきを得、各自の驥足を伸ぶるに便ならしめ、校規頗る整然校風亦大に揚がる、以て氏の熱誠を證するに足らん歟。」

廣島縣豊田郡立女子技藝學校長

從七位 内藤晴三郎氏



國運の發展に伴ひ諸般教育の施設其の歩武駸々、然れども女子實業教育に至りては、今後振策砥礪を要すべきもの多く、頗る隔靴搔痒の感なき能はず、夫れ女子天賦の性能に鑑み、之に技藝の趣味を涵養し、之に實業の觀念を鼓吹し、以て處世の實地に活用し産業に裨益するあらしむるは國力充實の上に於いて大に顧慮すべき所、吾が豊田郡立女子技藝學校設立の趣旨亦之に外ならず、而して校長内藤晴三郎氏が拮据經營自強息まざるは、吾人の齊しく三嘆して措かざる所なり。

氏は本縣比婆郡八幡村の人、明治九年三月を以て生る、性寛厚會て聲を厲しうせず温容以て人に接す、生徒の嚆向し衆人に敬慕せらるゝ故あり、明治二十六年九月廣島尋常師範學校簡易科に入學し、同二十八年七月卒業、同二十九年二月尋常小學校本科正教員の免許状を受く、同三十一年十二月小學校本科正教員と爲る、同三十七年二月檢定に依り國漢科中等教員免許状を受領す、初等教育の爲に盡瘁せらるると實に八年、其年四月本校教諭に任ぜられしより今日に至る迄十星霜終始一貫、萬難を排して校運の發展を念とせらる、本年三月舉行せられし創立十週年紀念の盛大なる固より其の所也。氏は専門以外思を法理の研究に罩め法律を研鑽して既に入室の譽あり酒杯を常にせずと雖も酒量乏しからず、月明の夜會心の友と置酒する時斗酒尙辭せず、然れども未だ會て醉色あらず、職員に望む常に諄々として教へて倦まず部下其用を爲すを樂む此人を得たる本郡教育界多幸なる哉。」

栃木縣 鹽谷郡立農林學校長

從七位 中村勝三氏

能く其の職に勵み、能く其の學に篤く、而かも躬からず持する事最謹嚴に、操志頗る鞏固なるの人、之を現任栃木縣鹽谷郡立農林學校長中村勝三氏に見る、其不屈不撓の胆勉は蓋し今日の榮譽を占むる所以にして、小成に安んじ偷安を之れ事とする、薄志者流の企て及ぶ所に非ざるなり。

氏は栃木縣の人、明治元年十月を以て生る、幼時宇都宮福井錮吉に從ひ漢學數學を修むる事五年後



栃木縣師範學校高等科に入り、明治二十三年卒業す、任を足利高等小學校訓導兼足利梁田郡小學校訓導に奉じ、同二十六年鹽谷郡大宮尋常高等小學校長に榮轉す、同二十八年國語漢文中等教員免許狀を得、翌年栃木縣立第一中學校助教諭兼舍監と爲り、此年又地誌(地理)免許狀を受く、次て教諭に進み、更に教育科試験に合格す、同三十二年栃木縣農學校教諭に轉じ舍監を兼ぬ、同三十三年再び第一中學校教諭に移り、同三十五年福島縣立安積中學校兼任教諭に榮轉す、同三十八年正八位、同四十一年從七位に累叙せられ尙同四

十三年迄に修身科及法制經濟科の免許狀を得翌四十四年現校長に就き以て今日に及ぶ。

氏人と爲り英邁にして學に篤く、校務の餘暇常に書冊に嗜み、研鑽遂に倦む事知らず、加ふるに頭腦極めて明晰にして博覽強記、能く五科目の中等教員試験に合格し、敢て學問なきも能く先輩同僚を凌駕し、今や本校に學徒を薰陶す、殊に部下職員父兄郡民に對する親切の指導を以てし勤勉力行の實踐に範を示す、氏を得たる鹽谷郡の地近く情勢を一變するや必せり、氏亦偉なる哉。」

奈良縣 立五條實科高等女學校長

中村常治氏



研鑽自修以て自己の立脚地と爲し、實踐躬行以て教育の根本義と爲す、奢侈を矯め虚榮を戒め以て女徳の修養を圖り、専ら空理妄想を避け以て主婦たり賢母たる婦女の養成に盡瘁せるを以て天職と爲す人を、奈良縣五條高等女學校長中村常治氏其人と爲す。

氏は明治五年五月大和國添上郡樺本町に生る、同二十六年五月奈良縣尋常師範學校を卒業し、直

に郷里の小學校に職を奉ず、之れ氏の斯界に於ける初陣にして爾後小學校の教職にあること四ヶ年、其間已に敏腕家を以て顯はる、同三十年八月進て東京工業教員養成所に入學す、氏は性數理に長じ工藝趣味深きが故に學業大に進みたりしに、惜むべし病の爲め半途退學の止を得ざるに至る後私立天理教授の教師兼生徒監に招聘せられ、以來約十年間同校に盡し、かば成績頗る顯著なるものありしが、同四十年十月一躍現任五條高等女學校長兼實業學校長に推薦せられ孜々營々教務の刷新を圖るに努む。

氏資性快活奇敏にして熱心に、事に當て遂行せられれば止まざるの概あり、同情心に富むを以て部下職員の悦服、生徒の敬慕所屬父兄の信頼厚く、氏赴任當時は該校稍々衰運の傾向ありしに氏銳意獨特の技量を振ひ、或は當局者を激勵し或は母姉會父兄會を開催し、諄々教へて倦むを知らず生徒次第に増加し今や赴任當時の二倍に過ぐ、同校は大正二年高等女學校の組織に改む、氏本務の外或は學務委員たり或は宇智郡小學校組合長として貢獻多大、氏實に該郡教育界の重鎮たる宜なる哉。」

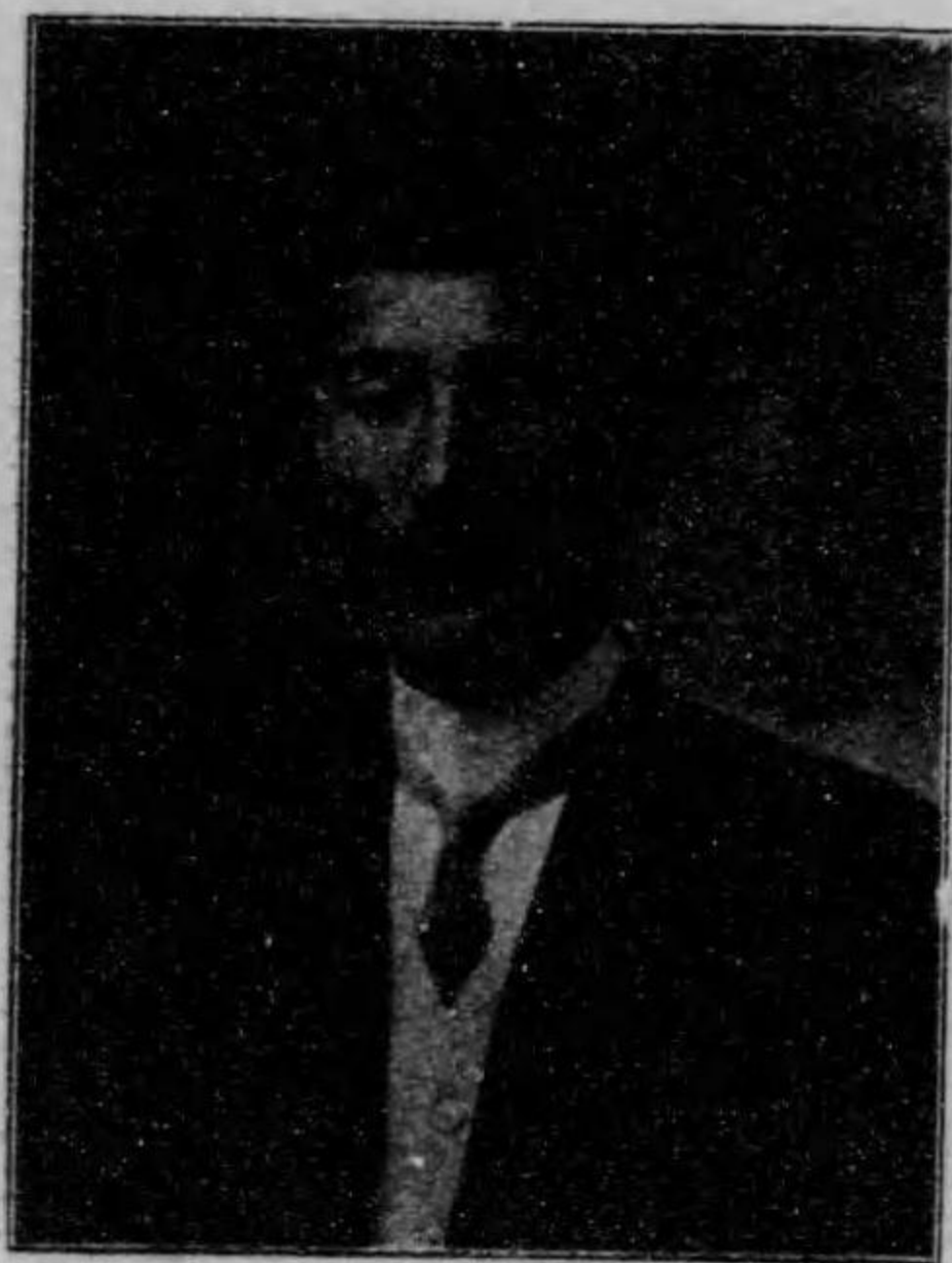
鑑銘家育教

ナ之部

長野縣農學校長
南佐久郡立

中曾根三郎氏

教育者に必要なるは自信に在り、果斷に在り、能く諸事を辨し、能く條理を察して以て事を斷せんと欲せば、須らく確然たる自信あるを要す、己れを信用せざる人は咄嗟事に従ふ事能はずとは蓋し是れなり、現代教育者にして此自信を有するもの夫れ幾許、獨り中曾根三郎氏は然らず、斷々乎たる施設經營は悉く自信に發し、邁往勇然遂に貫徹を期す、偉なる哉。



明治九年八月長野縣更級郡力石村の地氏を誕じ、明治三十二年長野縣師範學校を卒業し、更級郡篠ノ井高等小學校訓導に任ず、當時尙ほ實業教育微々として振はず、氏具さに之を憂ひ、厥然志を起して自から斯界に貢獻せんとし、出て、農業教員養成所に入り同三十五年其課程を卒へ、篠ノ井農業補習學校訓導兼篠ノ井高等小學校訓導と爲り、小學校教員講習科第三種更級郡講習所教員を囑せらる、後岩手縣師範學校教諭、訓導、舎監を兼掌し、新潟縣古志郡立椽尾實業補習學校長に轉じ、同四十五年奏任待遇に進み、

大正二年現校長に移る、過去十五年未だ甚しく永からず、然れども其效績や大なり。氏は温厚の君子、剛健の氣を深く藏めて自信頗る強く、絶倫の勢力を以て學校經營に膺り、學徒教養に従ふ、而かも匪勉研鑽の功を積み、實業界指導者を以て任じ、地方發展の柱石と爲る、其の椽尾に在るの五年間、能く人心を蒐め得て殖産業の改良は勿論、青年風紀の改善、社會善導の成果、眞に驚く可きものあり、年齒猶不惑に達せず頗る春秋に富む、吾人は將來猶幾多の功績を望むや切。

五二二

鑑銘家育教

高知縣長岡郡視學

中屋弼馬氏

幼にして聰明、夙に秀才の譽あり、頭腦明晰事に當つて神速敏活なる果斷は宛も快刀を以て亂麻を截つが如し、而して常に心を智徳の修養に潜め、身を持つること極めて高潔、俗に交りて而かも俗に染まず、上長に對すと雖も徒らに盲從阿附するなく、自ら信ずる所を忌憚なく直言披瀝するの氣概を有す、眞に是れ理想的視學たり、其令名縣下に喧傳さる偶然に非ざるのみ。



明治二年十一月高知縣香美郡野市村の地氏を生む、同十四年二月同縣尋常師範學校卒業、直ちに縣内香美郡吉原尋常小學校訓導と爲り、同年十一月同郡吉川尋常小學校訓導に、同二十六年三月同縣屬内務部第三課に、同年同月同縣尋常師範學校に歴任し、同二十七年一月小學校教員講習會講師として幡多郡へ出張、同年七月同講師として香美郡へ、同二十八年七月長岡郡へ、同年八月安藝郡へ出張、同年十月同縣高岡郡佐川尋常小學校訓導兼校長に任じ、同十二年三月同郡視學に、同三十四年六月同學務課長に、同四十二年十月吾川郡視學に、大正三年三月現任となれり、尙明治三十六年以來高岡郡教育會副會長に、大正二年以來、吾川郡教育會副會長たり、明治三十九年四月賞勳局より三十七八年戰時の功により賞金を、其他文部省及び縣郡當局より金品賞詞數次に及ぶ。

氏常に教育に關する學習を怠らず、其蘊蓄せる學殖と圓熟せる技能と犀利なる觀察批評は共に衆人の深く服する處、處事麗巧ならんより寧ろ正直にと、氏の如き人格者の視學たる本郡夫れ幸哉。

ナ之部

五二三

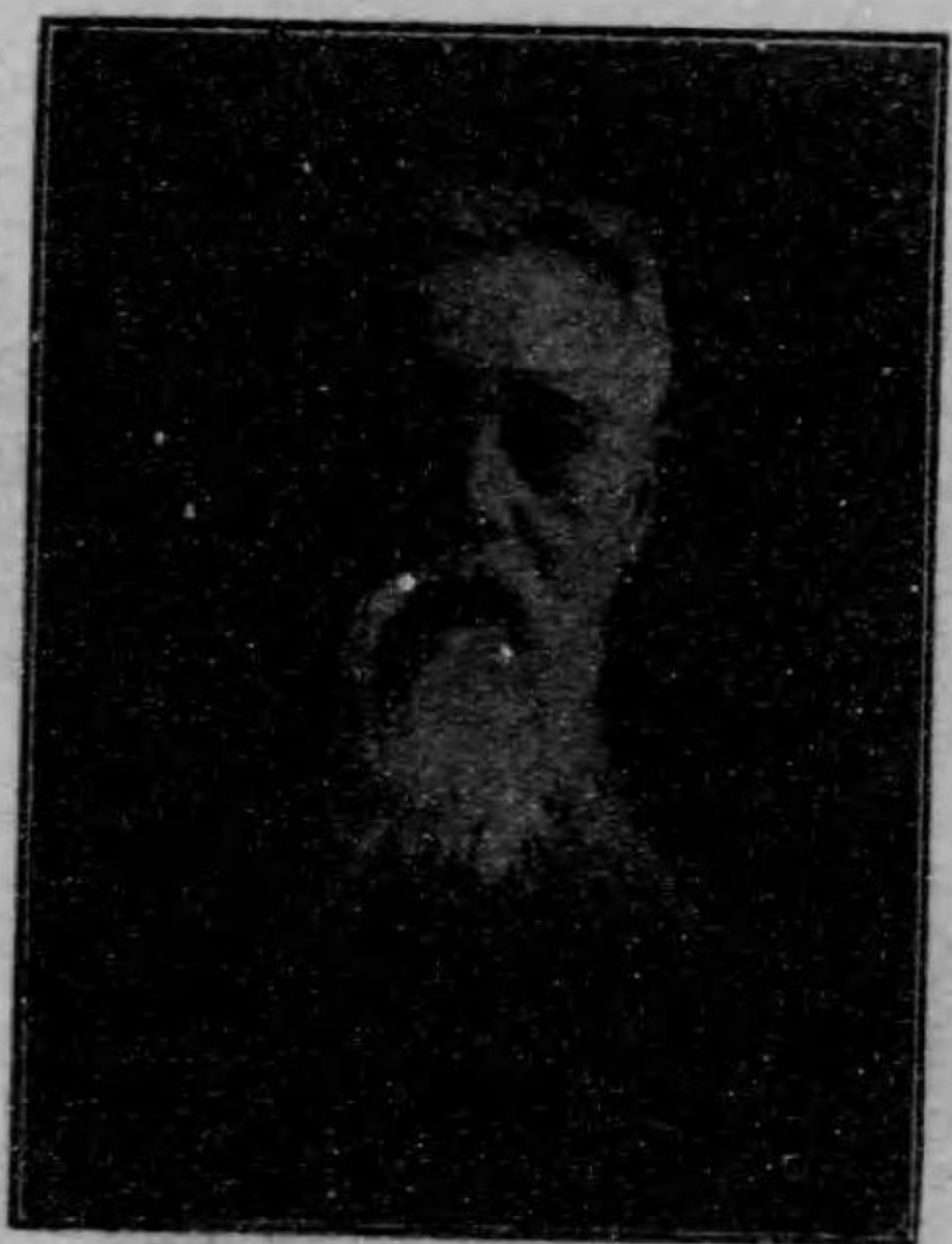
鑑銘家育教

ナ之部

熊本縣私立尚綱高等女學校主
熊本縣私立坪井女子工藝學校長

内藤儀十郎氏

國家有爲なる人物を作らんには先づ其母を養はざる可からず、之れ内藤氏が女子教育に志せし動機にして、良妻賢母は即ち氏が根本主義たり、氏の斯業に熱血を傾注せる、茲に二十有六星霜、數萬の子女を薰陶し、諄々として眞に倦む事を知らざるなり、偶々日露戰役に際し、其生徒を督勵し日夜屹々、終に防水練袋數萬個を調へ之れを献ぜし一事、以て氏の人と爲りを窺ひ得べきなり。



氏は熊本縣の人、弘化四年五月、飽託郡横手村に生る、安政四年藩學時習館に入り、拔擢せられて居察詰たり、明治元年長岡護美子に扈して上京、奥羽地方戰況視察を命ぜられ、歸國後藩兵習練指揮役たり、同五年公立温故中學校誘導方と爲り、同九年熊本縣師範學校に轉任、同十六年濟々農幹事兼教師と爲り、同二十一年濟々農附屬女學校長を兼ね、後獨立の高等女學校と成し専ら女子教育に従ふに至る、更に同志と謀り女子工藝學校を創設し其校長を兼任す、同三十八年帝國教育會長より頌狀及功牌を授けられ、大正

二年勅定藍綬褒章を享くるに至りしもの蓋し偶然にあらざるなり。氏猶餘命を子女教育に捧げん事を期し、之れを以て自己が天爵と信じ、東奔西走、其席眞に暖まるに遑あらざるなり、因循姑息、老後無能の教育家多き現時に於て、氏は齡高うして氣概愈々盛んに、壯者を凌ぐ、如斯人格者の教下に薰陶され、其徳化を享けつゝある子女の至福何にか譬へ得べけん、如斯人傑を得し熊本市教育界亦多幸なりと謂つべし矣。』

鑑銘家育教

山梨縣北都留郡視學

長坂勘三郎氏

剛毅磊落、氣宇宏大、細事に拘泥せずと雖も、教育の事に關しては思慮周密到らざる無し、才氣風發議論縱橫、人に接して障壁を設けず、能く談じ能く笑ふ、而も同情に富むを以て衆人悦服す、所謂上長として人を統率するの器なり、之を現任山梨縣北都留郡視學長坂勘三郎氏と爲す。



明治六年八月山梨縣北巨摩郡武里村の山水氏を産む、明治二十八年山梨縣師範學校を卒業して直に北都留郡葛野尋常小學校長に任じ、爾來南都留郡谷村同郡大石、東八代郡清澄等の校長に歴任し、同三十六年合村の結果境川小學校の設置あるや同校長に就き、次て境川第一第二第三第四の四ヶ農業學校補習學校長を兼ね、令聲大に擧る、次て中巨摩郡視學に轉じ、大正二年現職に就く。氏小學教員たること十四年、郡視學に在ること六年、此間山梨縣教育會評議員、中巨摩北都留郡教育會の副會長として貢獻尠からず、就中清澄高等小學校長として就任するや、近傍數ヶ村の小學校規模小にして設備不完全を極む、氏盛に之が合併を唱ふるも効なし、後内務省小町村の合併を計り自治の完全なる發達を企つ、氏機逸すべからずと爲し有識の士と畫策甚だ努む、遂に四ヶ村を併せて境川村と爲し境川小學校設置と共に其校長に任ず、守舊派反對して鼎の沸くが如く、氏竹槍石器の擾亂、暴行誹謗の中に處し、悠々校舎の新築を完成し、諄々頑民を諭し、青年を教化して漸く平穩に歸し、地方自治の根柢を確立す、蓋し剛毅の氣性と俊秀の才幹なくして得べけんや、今や部内肅々斯界當路者均しく悦服す宜哉。』

ナ之部

岐阜縣海津郡視學

中島健治氏

我國肇建の昔、既に牢固動かす可からざる道義の存するあり、道義とは何ぞや、慈悲に非ず、また愛に非ず、所謂仁義忠孝之れなり、生を我帝國に享くる者、常に此忠孝を行ふを以て本分とし、皇祖皇宗の遺訓を遵守すべく、之に依て我帝國をして益々威を宇内に輝かしむ可きなり、任に教育に在る者の心す可き所は實に肇國の遺訓なりとす、明治天皇の二十三年、一般臣民に賜はりたる勅

語の旨意に基き、更に戊申詔書の聖書を實行するに於て、初めて忠良なる帝國民として世界に雄飛するを得といふ可し、現任海津郡視學中島健治氏の管下學校當事者に求むる所、只一に此點に存すと爲す、蓋し眞なる哉。

氏は岐阜縣海津郡今尾町の人、明治十年二月を以て生る明治三十二年岐阜縣師範學校を卒業し、直ちに師範學校訓導に任ぜらる、畢竟氏が學中の成績優等の致す所たるは勿論、其人格品性の修養の偉大なるものありしが爲めなり、同三十五年海津郡高須尋常高等小學校長に抜かれて其任に赴くや、校外外の弊風を打破し、改革を斷行し、瞬間にして校風の美を挙げ、遠近等しく氏の敏腕に驚歎せざる者なかりき、而して現職に轉ぜしは實に明治四十三年なりし也。

氏資性溫和實直にして高須町に校長たりし以來常に青年教育、社會教育には、殆んど心血を注ぎ形式を去り、實力の増進に努め、仁義忠孝の道義衰頽せるを慨し、只管皇室の尊崇すべく、忠良なる帝國民たるを説き、一般の風紀爲めに大に革まるを見る、氏夫れ偉なる哉。」

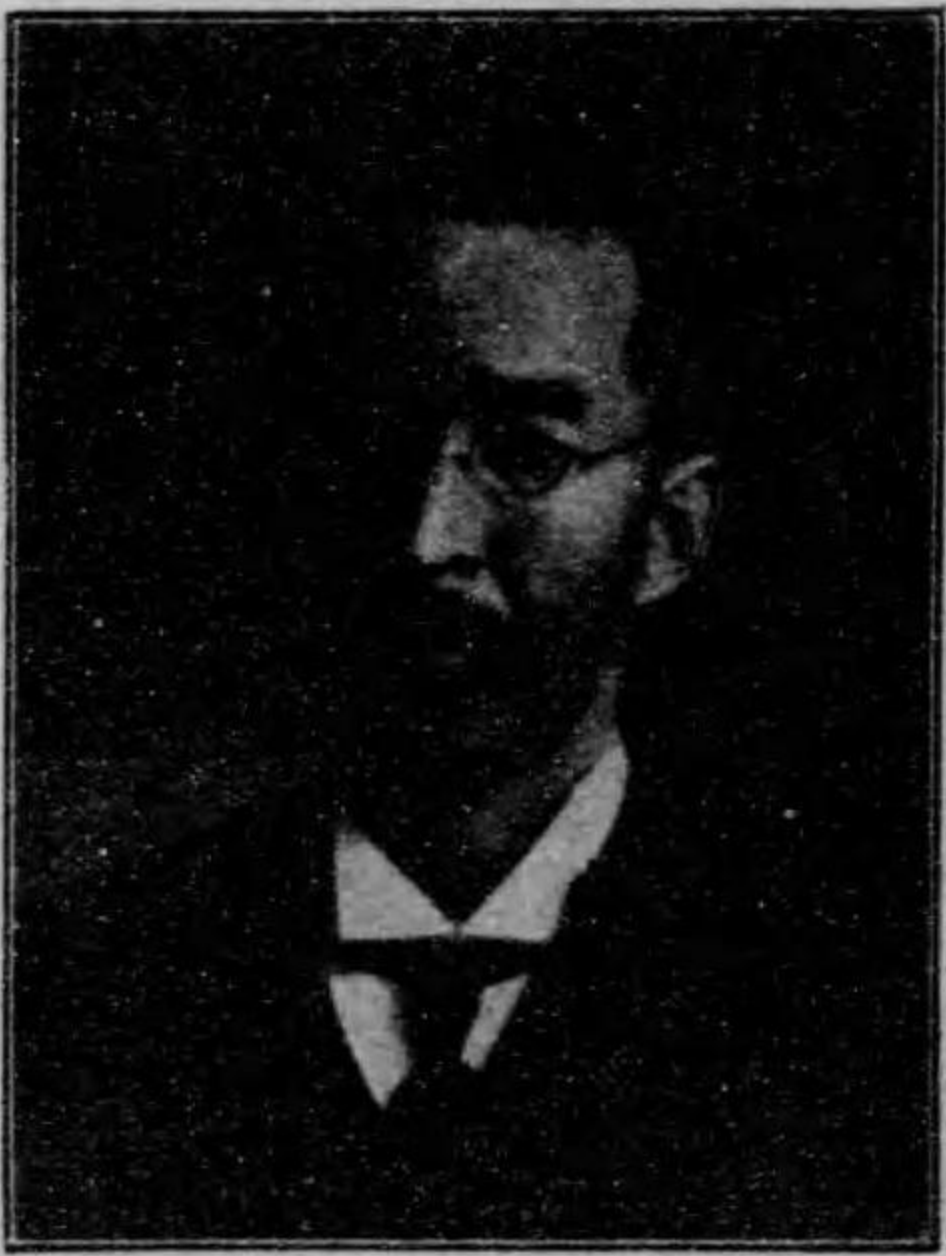


教育家銘鑑

新瀉縣 中頸城郡立新井農業學校長

中島信治氏

近時學生の多くは筋骨を動かし、額に汗するの職業を卑視し、鼻下の八字髯、黄金の眼鏡、曰く何曰く何と、高襟者流の職業を以て理想とし、安逸遊惰を以て成功の階梯に在りと爲す、蓋し國家前途の爲め寒心に堪えざるなり、此時に際し現任新瀉縣下郡立新井農業學校長中島信治氏の在るあり、鋤犁能く範を示し、勤勉勞働の良風を涵養せんとす、校風他と撰を異にする宜なる哉。



氏は新瀉縣の人、明治八年二月を以て中頸城郡津有村に生る、明治三十一年新瀉縣尋常師範學校を卒業し、直ちに師範學校訓導を拜し、教生指導の任に竭すと同時に、自修研鑽最も努む、後東京帝國大學農科大學附設農業教員養成所に學び、同三十五年其業を了へて、群馬縣新田郡町立尾島農業補習學校長に任ぜられ、次て兵庫縣御影師範學校教諭に轉ず、同四十三年新瀉縣中頸城郡立吉川農業學校長に榮轉し、翌年現校長に進み、其翌年奏任待遇と爲る。

氏人と爲り淡泊にして温厚、公私明らかにして處事至誠に出で、只管身の及ばざるを憂ひ、粉骨碎身以て後進の指揮に任ず、青年動もすれば田圃の肥臭を嫌ひ、香水麝香に得々たるの弊を生ず、氏深く之を誡め、農は國家の大本なり、國富民福の上位を占むるを教ゆる事切なり、部下に懇切に互に和睦親密、一校常に春風の吹けるが如く、學徒亦汝々勤勉の美風を薰陶せらるゝあり、爰を以て部民父兄は勿論、一般遠近の追慕殊に深く、着次入學志望者を増すに至る、蓋し氏の人格及其の效績を追ふ所以に非ずや、氏亦偉なる哉。」

教育家銘鑑

熊本縣玉名郡視學

中島 仰氏

恬淡にして名利に趨らず、忠孝を談じ節義を説き、子弟を教導感化する暇には、糞土に親しみ武藝を勵み、翰墨に興を寄せ詩歌に情をつくす。如此は教育家として理想的の人物にあらずや、況や陶冶せる胸中には能く衆人を容れ、練磨したる手腕は巧に事務を整理するをや。氏の如きは、常に教育者とし尊敬すべきのみならず、又實に活きたる紳士の典型と稱すべきなり。



氏は熊本縣の人、明治六年九月阿蘇郡跡ヶ瀬村に生る、同三十年三月縣師範學校を卒業し、直に同校訓導に任ぜらる同三十四年三月八代郡代陽女子尋常小學校訓導兼學校長に任ぜられ、同四十一年同郡代陽男子尋常小學校訓導兼校長に轉じ、同四十二年十一月天草郡視學と爲り、大正二年四月現職に移る。其間八代郡專科正教員養成所講師兼主事八代郡教育會評議員、八代郡南部教育會副會頭、熊本縣教育會評議員等に効勞あり、本務の傍ら心を文筆にとりめ、涉獵研究の結果、著述となりしもの實に十四篇に及ぶ。

氏の學校を監督指導するや、熱誠と懇切とを旨とし、開發的に行動するを以て、毎に所屬郡民及學校職員の景慕を受く。教育上の主義は古典に考へ新設に商り、専ら國民道德の振興と國家的精神の陶冶をつとむ。而して實地の方針としては親切同情を以て事に當り、自學的習慣を修得せしむ、其他家庭教育に、青年教育に、或は社會教育に、専ら活學を基礎とし日常生活の利益を得しむと同時忠孝道義の修養を努めて止まず、眞に地方教育の實際家なるかな。」

島根縣簸川郡視學

並河榮四郎氏

簸川の地山陰の名邑頗る神話に富み、古來風俗敦厚、民情亦和順、近時教育の道大に進み、設備遺憾なきもの多し、然れども開明には自ら華美の弊風伴ひ來たるは、屢吾人の見聞する所、之を未發に防止し飽くまでも醇樸を保ち、祖先の遺風を持續するは、實に教育者の任務にして重大なる一に屬す、現任島根縣簸川郡視學並川榮四郎氏、亦常に之を慮り風教の美を完ふせんとす。



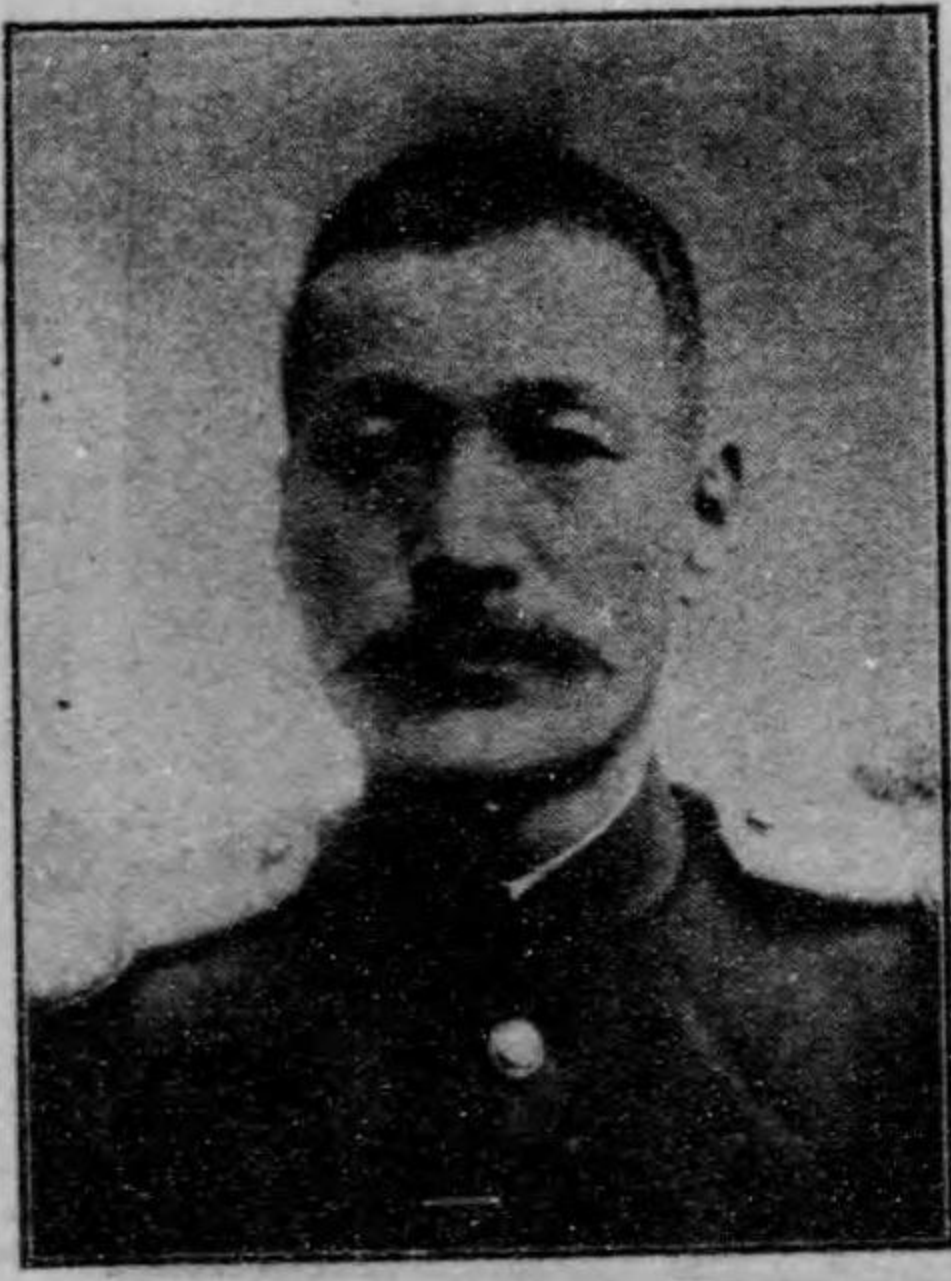
氏は明治五年六月松江市に於て生る、故あつて八東郡岩阪村にて小學校を卒業、明治廿六年五月縣師範學校を出て八東郡意東村尋常小學校長たる事一年、次て郷校岩阪村尋常小學校長に轉じ居ること三年、此時能義郡廣瀬町に入籍したる關係より同町尋常小學校長に移り、同三十七年縣女子師範學校に附屬小學校を附設するや、首席訓導に推されて赴任し在職四年、時に腸疾患の甚しきに遭ひ、命旦夕に迫り退職して休養すること半歳、田園生活に身を委せんとせしが、縣師範學校(男子)附屬小學校に主事並首席訓導を

缺き、同校長より特に首席訓導として就職せんことを勧められ、同四十一年九月其訓導に就く、爾來滿五年の後、突然島根縣下各郡視學の大交迭に際し、擢んでられて現職と爲る。氏資性堅實、職を執る忠、其管内を巡視するや、視察に督勵に指導に、各其精を究め而も同情に富み、又諄々勤勉を奨め勤勞を褒す、今や就任日猶淺しと雖も聲望既に遠く喧傳せらる宜べなり氏の到る所施設の行はれざるなく、指導誘掖其效績顯著ア、盛徳の人、偉なる哉。」

臺灣新竹廳新埔公學校長

正八位 內藤 材氏

柔順を根本とし、配するに正直勤勉博愛の諸徳を以て國民的性格の陶冶に努め、實着にして生産的人物を養成し、一日も早く母國民に同化せしむるの方針を採り、着々効果を收めつゝある人、之を現任臺灣新竹廳新埔公學校長内藤材氏其人なりとす、蓋し國民教育者の模範たる哉。



明治二年十一月、兵庫縣神崎郡田原村の地氏を産む、明治十五年初等科の補助員と爲りしが其の教育界に指染せし初めなり、後優等を以て授業生試験に合格し、次で本科正教員の資格を受く、常に同一學校に勤務して明治三十二年八月に至り、九月臺灣國語學校講習員と爲り、翌年卒業して新竹廳南庄公學校長に任ずるや、時に或は勅語を負ひて生蕃の來襲に備へ、草鞋を解かざる事十四晝夜、或はマラリヤ熱に苦しみ、或は犬に吠へられ水中に追はれつゝ、兒童就學の勧誘に奔走し、具さに辛酸を嘗めて斯業の發展に努む、同三十六年現校長に就く。

氏資性豪邁にして而も温厚、忠實職務に當りて終始を一貫し、徳を以て人を化するの人、氏就任の當時兒童數猶百に充たず、然るに氏の熱誠努力は遂に年々二百餘申込者を見るの盛況に達し今や校舎の増築中、卒業生は醫學校國語學校農事試驗場等に入學者多く就中農業志望者最も多し、今や内地農林學校工業學校等に學び、歸りて實業に従ひ、社會に活動する者頗る多し、風俗猶支那を脱せずと雖も逐次内地化しつゝあり、氏は文藝技藝共に萬能にして文筆は最も長ずる所たり、所屬民の信賴厚く模範として尊信せらるゝ、偶然ならざる也。』

鑑銘家育教

大阪市西區松島尋常小學校長

勳八等 中小路 泰次郎氏



夫れ、點滴遂に石を穿つと眞に宜なるかな、茲に中小路泰次郎氏、温言厚諭の至情を以て育英の聖業に一身を屠し、校裡の整頓に、校風の振起に、教化の實績に腐心を重ね、精勵に次ぐに努力を以てし夙夜匪懈眞に一日も寧處せず、分暑も浪費せざるなり、校風煌々として舉り、實果又着々として修め得るに至れる、之れ數の赴く處にして、氏の人格仰ぐべく氏の偉材服すべき哉。

氏は京都府師範學校の出身にして、同府久世高等小學校訓導より宇治町尋常小學校長に榮轉し、更に久世高等小學校長に累進し前後十有四星霜、炎熱燒くが如く流汗玉をなすの夏も朔風骨に徹るが如く寒威凜然たるの冬も、不撓不屈、鞠躬如として息む事を知らず、遂に久世教育會より名譽の賞状を享くるに至り、又三十七八年戰役に於ては其功勞により勳八等瑞寶章を授けらる、三十八年現校に赴任爾來愈々奮勵斯業に執掌す、該校の成績大いに舉り、大阪府より表彰され、賞を享くるの榮を擔ふ數次。

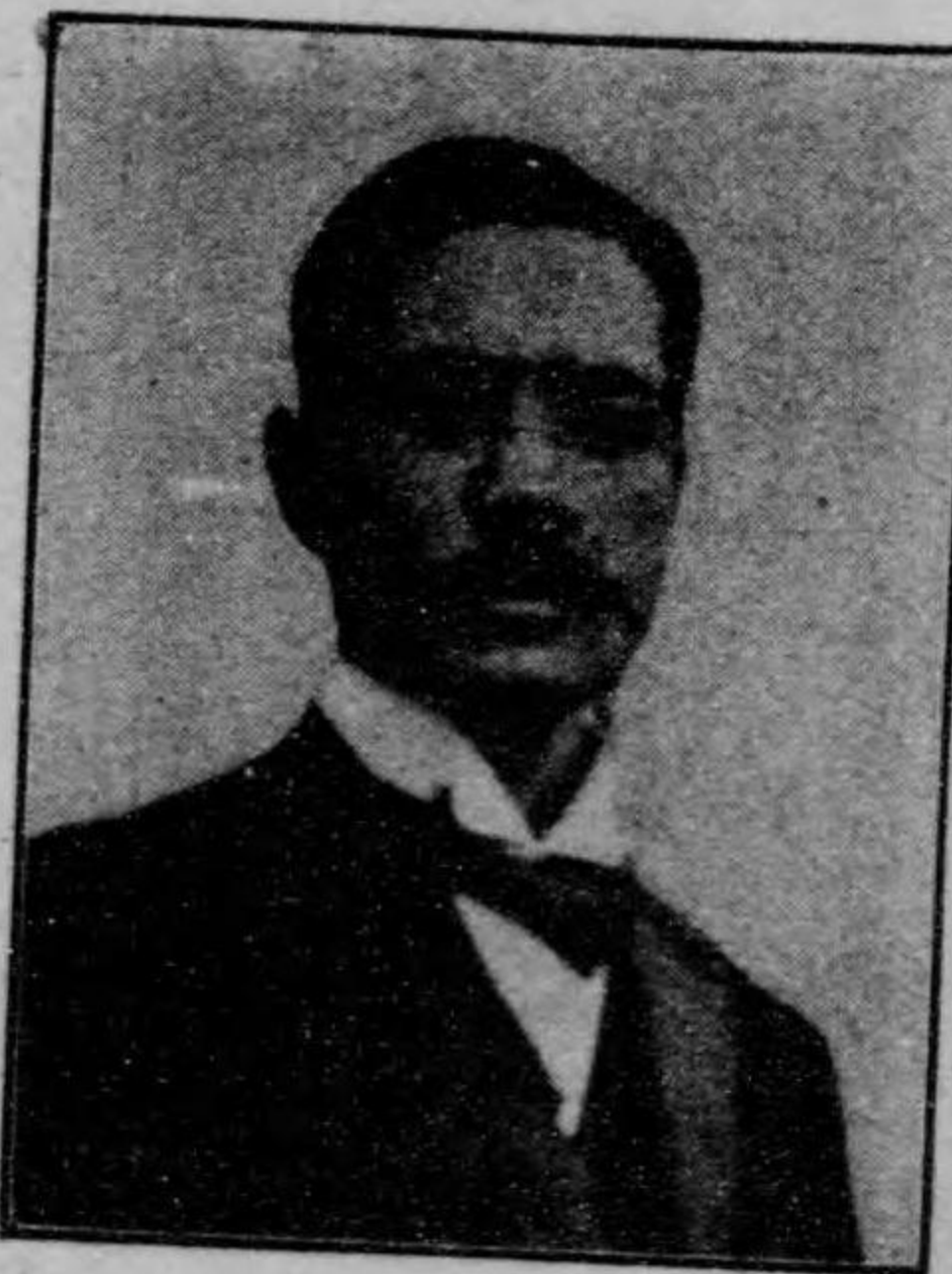
現代の情勢漸く華美浮薄に流れ、着實眞摯の美風は蕩然として地を拂ひ、世道人心の式微眞に憂ふるに堪えざるなり、殊に都會地に於て其弊風の甚だしきを見る、氏大いに信ずる處を有し、質實なる而して熱烈なる教鞭を振ひ以て都會遊廓地子女の薰陶に任じ、十年一日の如く盡瘁し敢て他を顧るなし、學識は勿論育英家に必須なる條件なり、技術又然り、然りと雖も教育事業に於ける眞の成功は蓋し人格者に俟つに非ずんば則ち期し得可からず、吾人氏に愈々奮闘を希ふや切也。』

鑑銘家育教

東京牛島尋常小學校長

中山榮太郎氏

年齒猶壯にして既に成熟の境に達し、事々物々秩然として効果を顯出し、今や知命に及んで猶益勤勉努力深く研鑽の功を積み、令聲四隣に洽く、校運隆々の勢を示すもの、蓋し現任牛島尋常小學校長中山榮太郎氏の如きは稀なり、小成に安んじ自修研學の念に乏しき青年教育家宜しく氏の人格を以て、模範とせざるべからず、吾人の推稱して措かざる所以亦此點に存す。



元治元年十一月を以て、山梨縣西山梨郡清田村氏を産む夙に國手たらんと欲し山梨醫學校に學ぶ事二年、然かも具さに時勢を知るに及んで翻然意を育英に傾け、縣立徽典館中學豫備科を経て、明治十七年其師範學科を卒業し、直ちに池田小學校長に任せられ、翌年曙小學校に轉ず、同二十一年東京市文海小學校訓導を拜し、翌年佃島小學校訓導に移る、居る事五年にして築地尋常高等小學校訓導に轉じ、同三十六年鮫橋尋常小學校長を経て、同四十年現校長に就き以て今日に至る。蓋し斯界の好境者と謂つべし。

京都乾隆尋常小學校長

勳八等 中野虎太郎氏

西陣の地たるや市の西北を占め、本校は其の中樞に位置す、中野虎太郎氏任を本校に奉じたるの當時、學區の内部頗る紛擾を極め、教育の事業遅々として振はず、甚だ寒心に堪えざるものありき然るに氏は至誠以て局に當り、指導宜しきを得、數年ならずして學區民舉て氏の徳を欽仰し、圓滿に其統一を全ふるに至れる、蓋し崇高の人格と自強の精神との發作に因らずして何ぞや。



氏は尾張國舊犬山の藩士、文久二年六月を以て生る、幼にして犬山琢成校に入り研鑽數年、明治十三年京都に入り檢定を経て同市木下小學校教員を拜命し、同二十六年同校廢止と共に現校長に轉じ、爾來三十有四年勤績以て今日に至る、曩には教育賞與規則により書籍料金五拾圓を賞與せられ、後又叙勳の榮を膺へる寔に所以ある哉。

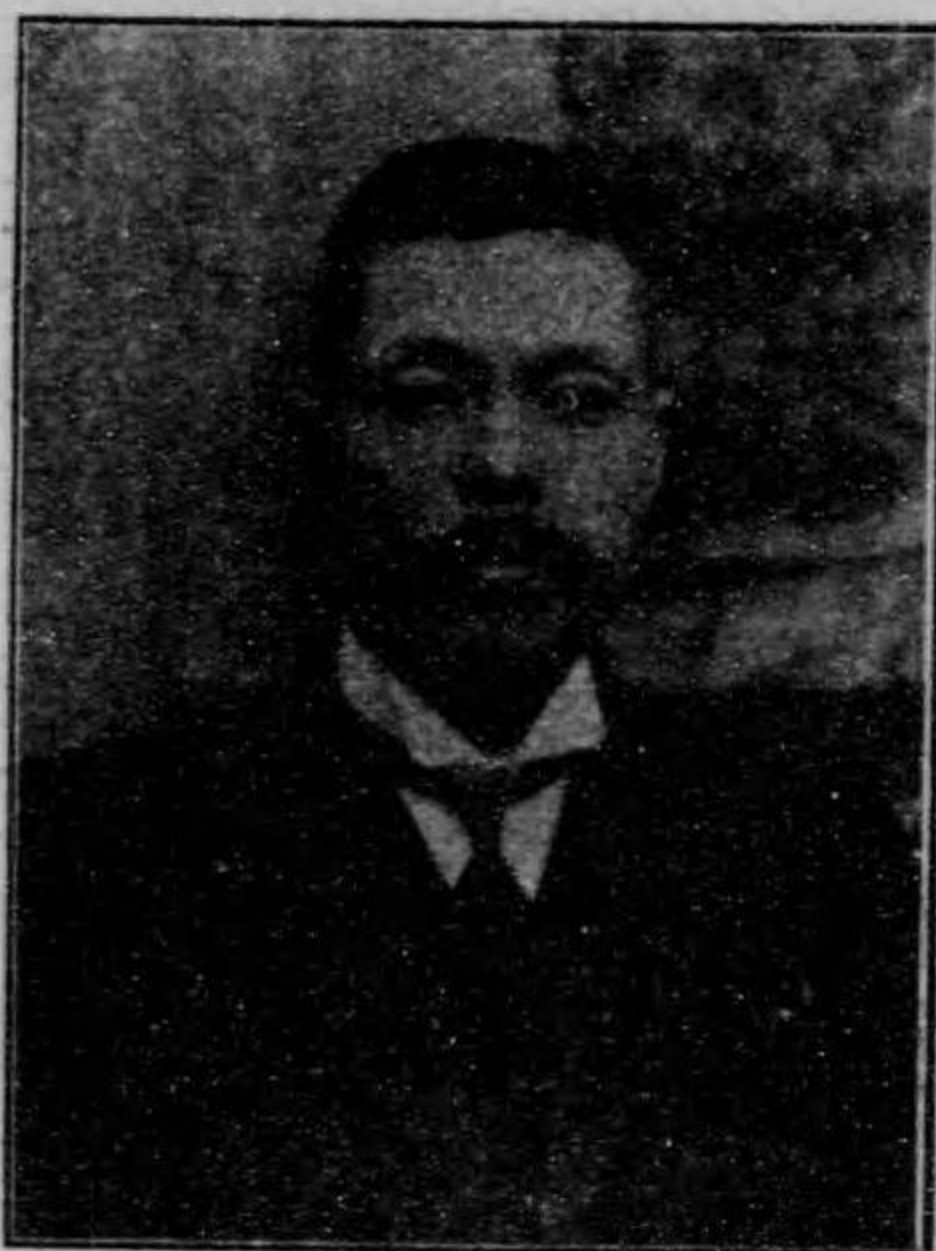
資性溫厚篤實、謹嚴至誠、言々肺腑に發し威ありて猛らず、宏量洋々雅量に富み、事に當り機を見るに敏なり、和漢の學に通じ殊に有職故實に精しく博物の識才ありて植物は其最も得意とする所たり、職員の統御極めて宜しく市内教育界に重きを爲す、由來教育の事屢々として進歩し、校舎の狹隘を告ぐる毎に増築を行ふ事前後四回に及び、更に明治四十年數萬の巨金を要するあり、而かも立ろに寄附を了し、瞬間にして校舎の完全、設備の充實を得たり、是れ一に氏の徳望感化の致りとす、加之地方青年の指導及地方徒弟の教育事業其の風化及ぶ所、又常に府市教育會幹事と爲り、或は評議員と爲り、以て府下教育上に貢献多大、壯なる哉氏。」

埼玉縣彥成尋常小學校長
北葛飾郡

中村要藏氏

五二四

或は淵水漾々として山麓を繞り、樹木鬱蒼、翠綠滴らんとし、淙々の響、颯々の聲、耳を樂しませしめ、眼を怡ばしむ、或は圃圃渺茫、一望涯りなく、麥苗菜花、參差繡錯し、禽鳥和鳴して煙霞の中に飛舞し、以て心を空うせしめ、魂を奪ふに至る、如斯は眞に旅行に於てのみ味はひ得べきの別天地と云ふべきなり、中村要藏氏常に行旅を好み、暇あれば則ち一杖、一鞋、以て白雲に親しみ、



流水と語る、故に浩氣自ら存し、英靈自ら發す、氏が性温厚高潔なる、實に由なきに非ずと謂つべき也。

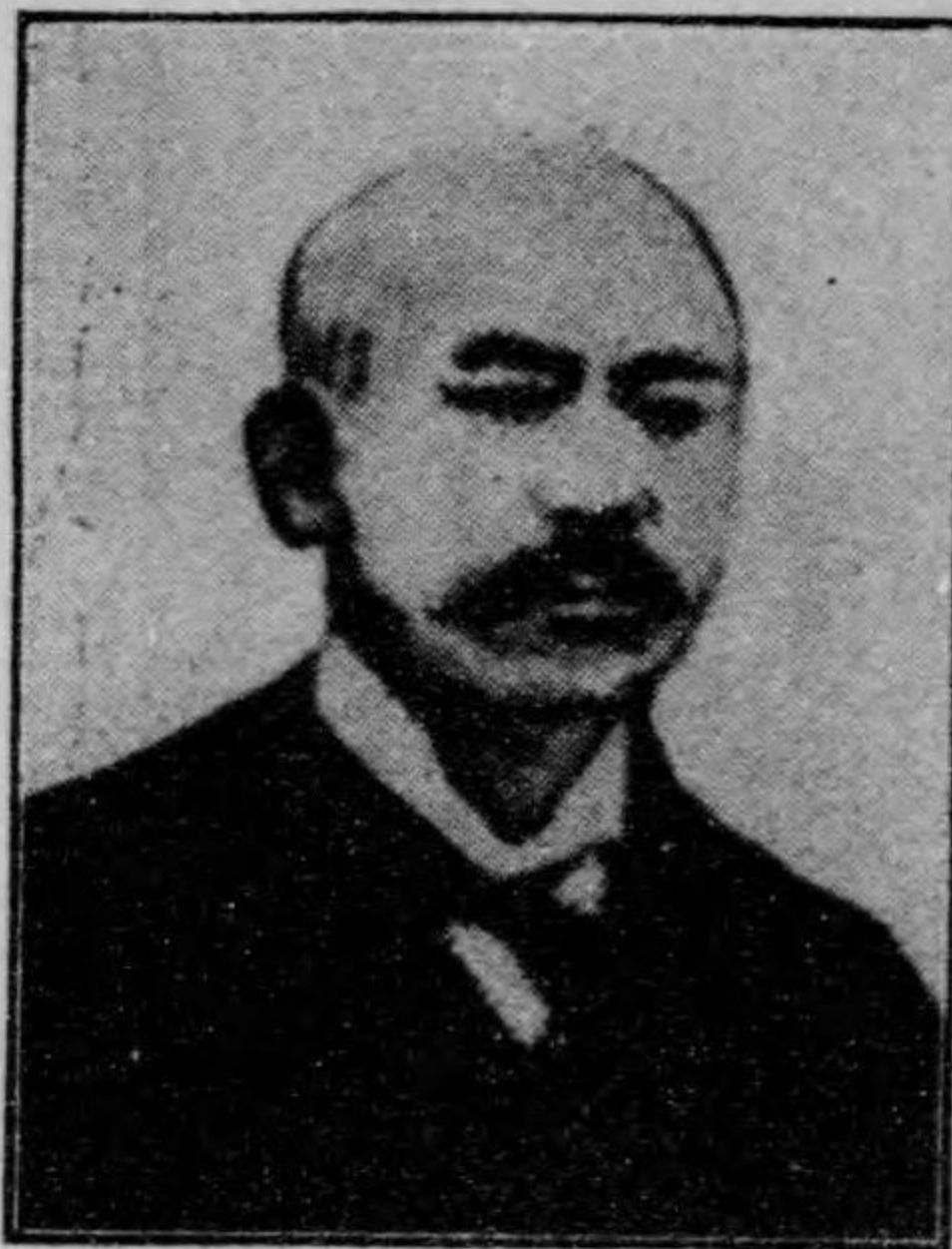
氏は埼玉縣北葛飾郡の人、明治十三年七月豊野村に生る、同三十二年四月同縣師範學校に入學し、同三十六年三月同校を卒業し、直ちに郷里豊野村尋常小學校に職を奉じ、其年陸軍六週間現役兵として歩兵第三聯隊に入營翌三十七年八月埼玉縣師範學校訓導に任ぜられ、同四十二年四月病氣休職となり、翌四十三年六月鎌倉尋常高等小學校に奉職し、同四十四年七月現任となれり。

其訓練要旨たるや、教育に關する勅語の聖旨を奉體し、國民道德の振興を圖るは勿論にして、特に汝の全力を盡せ、汝の最善を盡せの格言を以て第一項の教訓とし、其教授方針に於て、教材を精選し確的に會得せしむるの外、其實地應用、自在ならしめん事に留意し、實際的人物の養成に努力しつゝあり、又部下職員に對するや極めて寛洪にして、全體の調和を破らざる範圍に於て、可及的職員の個人意思を尊重し、充分に其才能を發揮せしむ、各員の怡然職に勵む又宜なる哉。」

東京府寺島尋常小學校長
南葛飾郡

中山喜之助氏

心幽洞の曲に徜徉し、靈寒泉の溪に徘徊す、穎脫爽瀟、玲瓏たる白玉の如し、中山喜之助氏を以て其人と爲す、氏や眞に時流俗風を超越す、心常に端正、徳自ら備はる、一度氏に接する者は其の何人たるを問はず、皆氏の高雅なる風格に感じ、其清廉なる至情に動かざる者なし、一見俗臭紛々たる徒輩の跋扈せる現代に於て、茲に氏の如きを見る、眞に匹儔稀なる所にして、徳化自ら四隣に及び、圓滿なる春風裡に學徒を指導誘接し其實果を修む、實に氏の若きは一校長として敬仰に價するのみならず、人格者として敬慕すべき偉人なるかな。



氏は高知縣の人、元治元年十月を以て高岡郡に生る、明治十七年、東京市淺草區待乳山小學校訓導に任ぜられ、爾來淺草尋常小學校、府下南葛飾郡寺島小學校、同郡小松川小學校等の訓導若くは校長に歴任し、同三十六年現任と爲り大正二年同校補習學校長を兼任す、明治三十五年東京府より普通獎勵規定の賞與を受け、同四十年文部省より戰役中

職務勉勵の廉に依り賞を受く、蓋し効績の大なるを推稱するに足らん。寺島小學校長として其令名、斯界に喧傳され、其効績亦頗る顯著にして、近く同窓者によりて、氏が二十五年勳績祝賀會を開くべく豫定さる、以て如何に氏の徳望高きかを窺ふに足るべし、氏や如斯熱誠其職に奮闘するの傍、光風、明月を友とし、和歌の道に其心靈を滌く、又其筆蹟は既に堂に入る者のとの定評なり、眞に嵩高、其類多からざるの好箇育英家と稱すべきなり。」

五二五

新潟縣尋常小學校長
市立

中村源三郎氏

北越の地、近時教育大に進み、我國他府縣に嶄然頭角を現はすに至る、就中新潟市の教育見る所多し、蓋し因なくんばあらず、獨り趨勢の然らしむる而已にあらずして、教育者其人を得たるの結果に外ならざるなり、我中村源三郎氏の如き、亦優良教育者の白眉たるを失はず。

氏は新潟市の人、明治元年一月を以て生る、明治二十年六月本縣師範學校を卒業し、直ちに新潟小學校に就任、同二十一年七月中蒲原郡新津小學校に轉じ、同二十四年五月再び本市に轉じ、爾來四小學校に歴任し、同四十年三月現任校長と爲る、同四十二年三月教育上功勞不尠故を以て縣より表賞せらる。



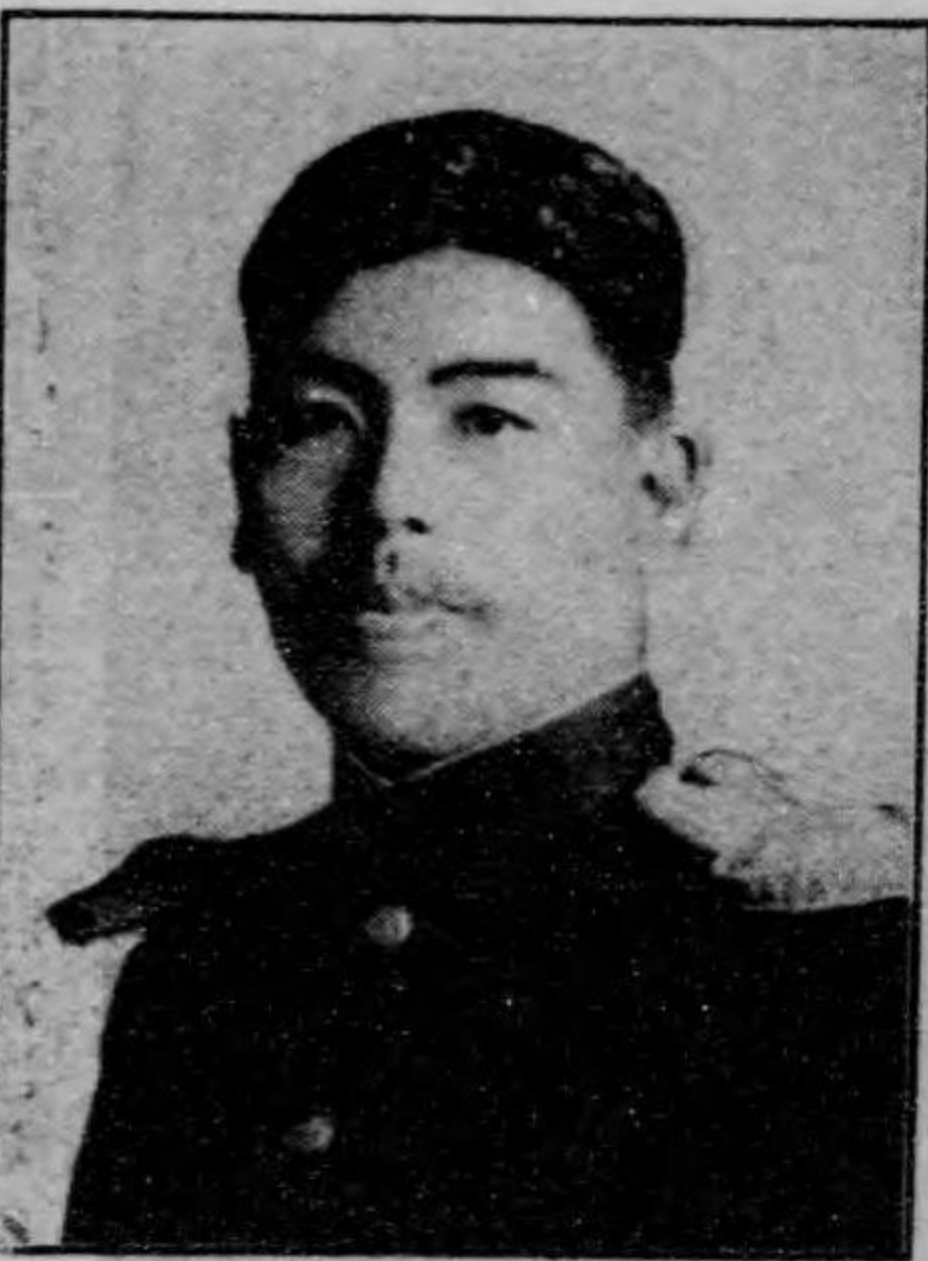
人と爲り着實にして温厚、兼ねて豪邁の英氣あり、學は和漢に通じ、能く文を綴り、國風の嗜み淺からず、多年の研究經驗を以て、之を實地に施しつゝあるが故に、教授管理は圓熟の境に進み、訓練には一個の信念あり、盈虚なく消長なく、指導懇篤を極む、其感化全校に及び、共同和衷掬すべきものあり、部下に接して温容、而かも教職を督する正確に、事務の整理亦自ら範を垂れ、其成績は縣下稀に見る所なり、氏は常に整理整頓を能くするのみならず、家庭教育、青年教育、社會教育等に盡瘁し、諄々訓へて倦まざるもの、其精力の偉大なる亦驚く可きものあり、公務の外、新潟市教育會幹事として貢献する所尠ならず、其斯界に重きを爲す所以なきにあらずと云ふべし、是れ獨り本市の幸福のみに非ず、國家の爲め慶賀すべきものとす、盛なる哉。」

鑑銘家育教

臺灣彰化公學校長
臺中廳

長井實一氏

肥滿大兵、便々緊張せる腹筒は清濁吞下の量を有し、磊落無鈍着の如くにして而かも人情の奇微を穿ち、情誼の爲めには自己の利害を忘れて其の天心を流露し、正義能く其の職を盡し、一將功成りて萬骨枯るの部に部下を方便視せず、大極に眼を注ぎ枝葉局部に齟齬する小才子者流的小刀細工は現任臺中廳彰化公學校長長井實一氏の能くする所にあらず。



氏は鹿兒島縣の人、明治十五年十月を以て川邊郡西加世田村に生る、明治三十二年鹿兒島縣師範學校乙種講習科を修了して教職に従ひ、爾來吃々獨學に電め、雄志常に踏海の念あり、一度臺灣總督府國語學校入學試験の擧に應ずるや、拔群の首尾を以て合格し、同三十六年優良の成績を得て卒業し、撰ばれて臺南師範學校教諭に任じ、後鳳山の教諭、具尾の校長と爲り、深坑臺北兩廳の合併するや先輩を超えて基隆公學校長に任じ、大正二年現職に榮轉す。

帳簿主義所謂形式的の教育は、氏の採らざる所にして、實に藝進主義鍛鍊主義なりとす、此の主義より湧出せる氏の學校には、記録帳簿等其の捕ふべきもの或は少からんも、確かに捕捉すべき眞の或物の伏在を認む可し、學校經營は氏の頗る妙を得たる所、地方人士及當路者との折衝宜しきを得、學校建築等他の及ばざる所を氏は大々的に經行し、曩きに基隆の二萬數千圓、彰化の十數萬圓の工事着手等蓋し非凡なりと謂つべし、由來平原には砂糖米茶の産あり、富豪の櫛比島中第一に在り、今や令聲全島に鳴る、夫れ壯なる哉。」

鑑銘家育教

岐阜縣古川尋常小學校長
吉城郡古川高等小學校長

永瀨吉郎氏

徳たらんとして徳を積む可なり、然れども未だ期せずして徳自ら高きに及ばず、正義を經とし勳勉を緯と爲し以て修養を積まば、獨り自らを善ならしむるに止まらず、遂に衆を善に導くに至る、實踐躬行、眞摯實能く徳望家として人に許さる、者、永瀨吉郎氏の如き蓋し、教育者中の一異彩たるを失はず、殊に研鑽を絶たざるの進取的性格、亦以て後進の範たる可き歟。

氏は安政四年一月を以て本縣大野郡高山町に呱呱を擧ぐ、明治七年初等師範學科を卒業し、大野郡高山町煥章學校教員と爲り、後、中呂、煥章、廣徳の諸學校に歷任同十六年小學高等師範學科を卒へ、廣徳學校長心得と爲り、煥章、高山町尋常、古川高等等に勤務し、地方免許狀、普通免許狀を得、同三十年現任校長と爲り、爾來十有七年、孜孜訓兒の職に在り、岐阜縣、郡教育會、吉城郡戊申俱樂部等より、他年教育に従事し功勞顯著の故を以て受賞數次。氏資性誠實勤勉、職員兒童は勿論卒業生並に父兄の信頼厚く、嘖々たる名聲近縣に及ぶ、氏は自働的、實用的の國民を養成せんとし、自ら範を示すと共に各家庭をして學校の主義方針を知悉助長するに力む、教授は總て明瞭なる直觀を重じ、教科の研究を怠らず、敢て奇拔嶄新の風なしと雖も、教法着實、實地生活に適す、常に固く不言實行主義を守り、至誠堅忍躬行實踐を以て後進の誘掖に盡し、着々效績を擧ぐるに至れり、氏は近郷稀なる能書家にして中學校習字科教員免許狀を所有せり、眞に大徳の人敬すべき哉。



東京市立南山尋常小學校長

中澤常造氏

獨逸式科學の進歩發展著しく、滔々たる名利は人生の凡てを壓倒して餘す所なし、吾人の最も尊重すべき道義の眞理は今や那邊にある歟を想はしむるに至る、此時に當り苟も職を育英事業に執る者須らく超然的人格を有せざるべからず、殊に國家の基礎たる國民教育に従事する教育者諸士に於て一層然らざるを得ざるなり、然れども現今教育家中往々其位地の爲めに權門に媚び、利祿の爲めに富豪に屈する者あるを聞くは、吾人の遺憾とする所たり、而かも爰に如何なる猖獗侵犯に巧妙なる名利も曾て窺ふを得ざる人格者あり、南山尋常小學校長中澤常造氏は即ち其人なる乎。

明治八年群馬縣邑樂郡館林町此人を産む、氏は幼時已に郷間に神童を以て稱せらる、少年時東京に遊び、同二十九年東京府尋常師範學校を卒業し、直に任を東京市富士見尋常小學校訓導に奉じ、其翌年在原郡品川尋常高等小學校訓導に轉任と爲り、同三十二年西多摩郡成木尋常高等小學校長に榮轉し、同三十三年南足立郡千住町千壽尋常高等小學校訓導に移り、同三十六年東京市誠之尋常高等小學校訓導を拜し、此年拔擢せられて現任校長に就き、爾來勤績十有餘年一日の如く、克く其施設經營を完ふし、孜孜教へて倦まず諄々曾て勞を覺えず、終始一貫淪るなき奮闘は、今日隆昌の校運を樹て得たるのみならず、區市教育界に貢獻せる多大なりと謂ふべし矣。

氏や資性豪直にして磊落、人と交はる城壁を築かず、襟度大にして能く容るゝの量あり、殊に同情心深く部下を待つ寛嚴宜しきを得たるは、以て教務の擧る所以、躬行實踐以て範を垂れ、勤儉力行以て邊幅を修飾せざるは、奢侈虛榮の現世を矯むるに足り、匪勉忠實の良習慣を馴致せん事に努む、能く兒童各自の個性を審査して其能を發揚せしめ、家庭教育の普及は學校教育の効果を大ならしむるを以て、其連絡を密ならしめ父兄母姉會校友會等の開催に盡して息まず偉なる哉。

鑑銘家育教

ナ之部

朝鮮 仁川公立尋常小學校長
京畿道

中島訂治郎氏

五三〇

新領土朝鮮に於て、仁川港の京城に於けるは、猶本州に於て横濱港の東京に於けるが如し。この要地に於て育英の任に當るは、老練篤實の教育家を俟たざる可からず。中島訂治郎氏の如きは、眞にその適任者と謂つべく、濃厚にして篤實、思慮周到にして言動を苟もせず。特に教育的修養に至りては、内地に在りて牢固なる基礎をつくり、朝鮮に於て價値ある経験を積み得たる歴史を有す。



氏は、明治十二年十一月を以て佐賀縣西松浦郡波多津村大字畑津に生る、同三十三年三月佐賀縣師範學校を卒業し同縣下伊萬里高等小學校、波多津尋常高等小學校、及同縣師範學校訓導及助教諭等に歴任し、明治三十九年八月韓國馬山公立日本小學校長兼訓導を命ぜられ、大正二年六月現職に轉ず。氏が馬山小學校に轉任當時は、日露戦後日未だ淺く、韓國の統治猶草創の際にして、居留民の自治經營になれる教育事業甚だ困難なるものあり。氏はこの困難の場合に於て、苦心經營其の施設を誤らず、在任七箇年の間に顯著なる成績を擧げて、多大の發展を見たる同地の商工業と並行して遜色なからしめたり。

抑も居留地若しくは新開地の弊として、輕薄浮華の惡風あるは、國家の發展上甚だ憂慮すべきこととなり。氏の如き篤行謹直の教育家にして、その抱負するところは一に海外同胞の子弟を醇化して前途の大成を期せしむるにありとせば、剛健敢爲の氣風こゝに生じて、帝國の地歩を大陸の門戸に固むること決して疑ひなかるべし氏の意見夫れ偉なる哉。」

鑑銘家育教

ナ之部

東京府 大久保尋常小學校長
豊多摩郡

中野丈夫氏

五三一

東京市外郭の町村は、都會繁華の空氣と田園粗朴の風俗と、互に相交錯する土地にして、教導感化の事に當るものは、特に苦心慘憺を要す、故に苟も老練なる手腕と、適良なる修養とを兼ね備ふるに非ざれば、恐くは成功すること難きものあり、中野丈夫氏が、この重要な任務に當りて、よく其の宜しきを誤らず、着々として成功を示しつゝあるは、大に人意を強うするに足れり。



氏は明治二年六月を以て福井市江戸町に生る、明治廿二年五月福井縣尋常師範學校を卒業し、同市福井高等小學校訓導放尋常小學校長、順化尋常小學校長、等に歴任して同縣立福井高等女學校助教諭に進み、六箇年の在職中、教授及び圖書器械標本等の整理について、多大の功績を擧げたり、同二十九年同校補習科の廢止せらるゝや、氏は任を辭して上京し富士見、南旗町の兩小學校訓導より、荏原郡大森高等小學校長及荏原尋常高等小學校長に轉じ、大正元年八月現任大久保尋常高等小學校訓導兼校長に任ぜらる。

氏の稟性や穩健にして率直、學を好み事務に倦まず、校長として稀有の逸材たり、特に同情心に富み兒童を遇すること、猶自己の子弟に接するが如きは、最も尊敬すべき人格の流露といふべし、現任地に就くや、その勤勉正直なる行動は、町民及父兄保護者の信認を持ち、胸中の蘊蓄を實行するを得るを喜び、一意専心至誠以て職務につくし、同地を以て墳墓の郷と爲さん意氣頗る固し、その實績の著しきは、決して偶然に非るなり。」

石川縣 苗代尋常小學校長
能美郡 苗代高等小學校長

中村文彰氏

至誠熱心は事を成すの要訣なりとは、現任石川縣能美郡苗代尋常高等小學校長中村文彰氏の金條なり、然り事の完成を期するもの至誠熱心の精神なくんば焉んぞ能く効を收むるを得ん、氏に此覺悟あり、此信念あり、今日噴々の令名を擧げ、偉大の効績を顯はす蓋し當然の事のみ。

氏は慶應二年十月を以て能美郡御幸村に呱聲を擧ぐ、明治二十三年石川縣師範學校を卒業し、尋常科若杉小學校訓導に任じ、翌年尋常科串小學校訓導に轉じ、同三十一年北淺井尋常高等小學校長に榮轉し、同三十三年淺井尋常高等小學校長に移る、同三十五年普通免許狀を受領し、同四十一年轉じて現職に就き、北淺井裁縫學校長、北淺井農業補習學校長を兼ねて今日に至る。



氏人と爲り謹直至誠熱心を以て終始を一貫す、事務的能力に富み、加かも綿密周到なる判断は常に其企畫を完成す手技に長じ標本類掛圖等は自ら製作したるもの多し、又躬ら難治に當り、細心努力多年紊亂の現校を整理し、着々として成績を擧げ、悠々迫らざる處真に大度の器なりとす、公德心養成の目的を以て學用品の自由販賣を勵行し、兒童各自所要の物品は自由に代金を所定の箱に投入せしむ、然も未だ錯誤を生じたる事なしと、又家庭との連絡、男女の補習教育に盡瘁し、青年の智徳を増進し、風儀を改良し、勤儉力行産業の發達を圖り、躬ら青年團の顧問として指導する事大なり、宜なる哉縣より壹等賞を授與せられ更に縣教育會より表彰狀贈與せらる、氏の効績夫れ大なる哉。』

愛知縣 一宮高等小學校長
寶飯郡

中尾國光氏

忠良にして諄樸、人に接する甚だ温恭、自ら持する極めて謹嚴、中尾國光氏の如きは稀なり、而して其職に熱誠なる、終始専心、身を擲ち、家と思はず、たゞ之努力の化身と云ふべきなり、氏や毎日學校課程終ると共に所屬兒童の家庭を歴訪し、日を暮らす事珍らしからず、其管理地域全般を巡視し終れば一日の課程を残せしの感を以てす、真に得易からざる好箇校長と謂ふべし。



明治三年八月愛知縣寶飯郡豐川町北金屋の地氏を生む、同二十五年三月同縣尋常師範學校の業を終へ、直ちに縣内寶飯郡下地小學校訓導に任ぜられ、同二十六年三月同校長と爲り、同三十三年九月現校の訓導兼校長に轉任せり同四十年二月文部省より小學教員普通免許狀を授けられ、同三十八年三月には縣より職務電勉の廉により特に銀側時計一個を賞與され、尙同四十年三月には三十七八年戰役中、一意職に勵みしにより文部省より賞金を授與さるゝに至れり、履歴は其の人格を語る以て氏の如何に忠良、熱誠、其職に執掌して止まざるかを見るべきなり、校運隆々たる敢て怪しむに足らざるなり。

氏や敬神、愛國を主眼としては其兒童を訓育し、國幣小社砥鹿神社を中心として、盛んに敬神の念を養はしめ、事に當りてすべて努力的邁進的にして専ら實力養成に意を致し、國家及時代の要求せる活青年の輩出に勉む、氏や性行斯の如し、故に部下職員齊しく其懇切に懐き、其徳に畏敬し、皆氏の手足の如く各其任を盡して怡然たり、一郷亦氏を敬慕して措かざる實に故なきに非ざる也。』

兵庫縣前之庄尋常小學校長
飾磨郡前之庄高等小學校長

中野秀藏氏

學校教育を以て教育者の任終れりとするは否なり、家庭を改良し、青年を誘掖し、社會を指導して、堅實なる國民を養成し、有終の美を期待するは、育英の職に在る者の當然力ひ可き義務なりとす、知らず真に自己職責の本分を自覺し、其完きを致す者果して幾何、中野氏任を轉ずる事數次、而かも往く處として効績の噴々たるを見るもの、誠に其任有終を盡す者と云ふべし。

氏は明治八年の生、同三十年本縣師範學校を卒業し、直に郷里美方郡八田村に歸り高等小學校新設の任に當り前後七年、其設備を完成し、村立教育會、學林、就學の普及上進を謀り、知事より表彰せられ、同三十七年村岡小學校に轉じ、學園、圖書館、補習夜學校、戰時教育等に功勞ありて受賞す、更に同四十一年福岡小學校に入り、三度受賞、今や現任校に在りて孜孜實績を擧げつゝあり。

氏や濃厚篤實、事に當りて熱誠、能く既往の成跡に徴し地方の狀況を考察し、服裝を正しくし、清潔を尙び、規律を守り、禮儀を正しくし、言語を明瞭にすべき五ヶ條の校訓を制定し、自發的努力的行動、春風の親和的感情の二大主義を以て部下を率ひ、兒童に對して渡ける渾身の熱血は父兄の感謝と爲り、奮闘的自營的訓練は國民教育の骨髓なり、故に此道念の鼓吹實踐は遂に慣習たるに至つて、協同一致自治體の發展に貢獻し、立憲國民としての義務を遂行すべきものなるを説く、其風教に及ぼす感化力の甚大なる蓋し氏の如きは稀なり、忙間猶書見を怠らずと、夫れ壯なる哉。」



鑑銘家育教

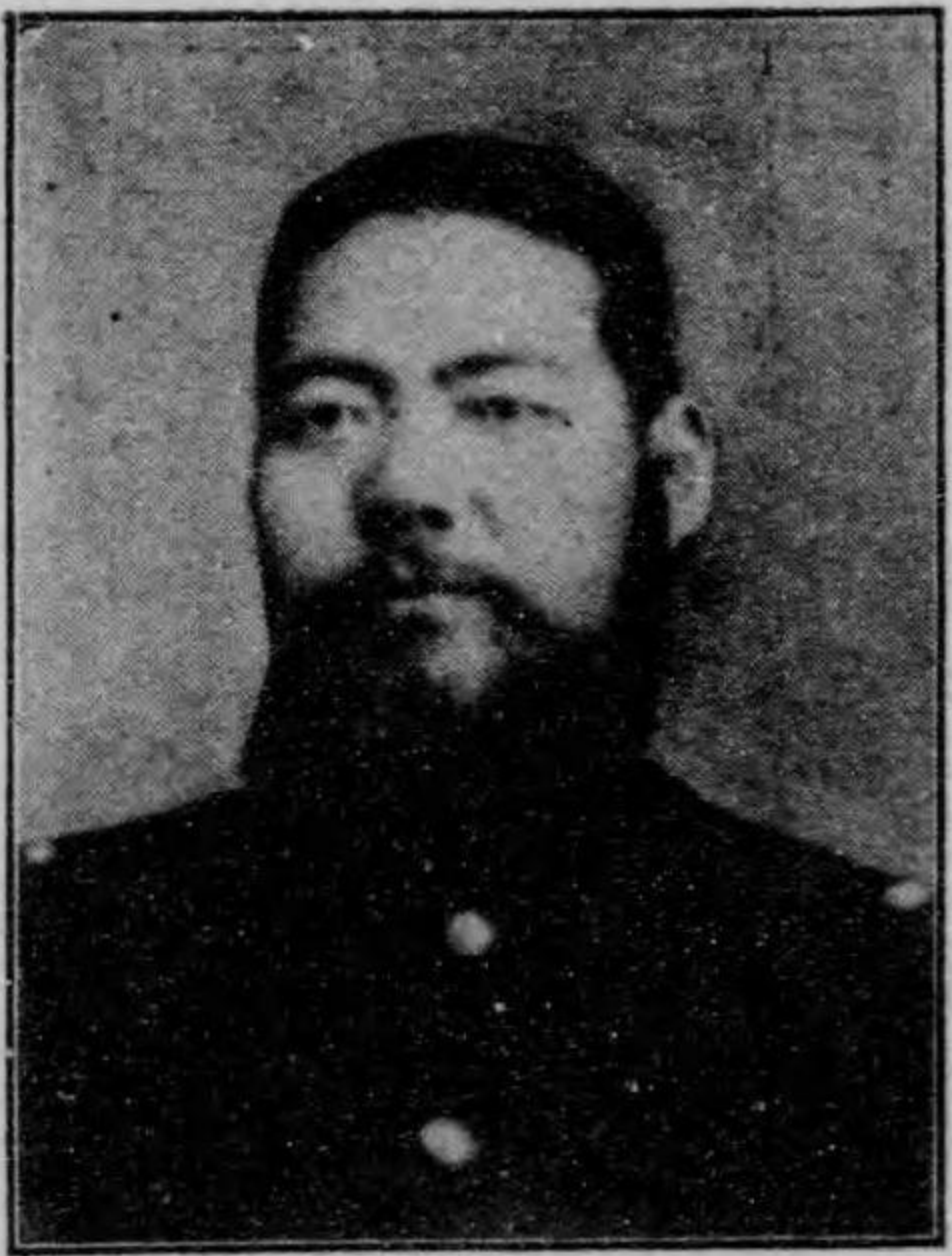
臺灣
臺南廳 蔴荳公學校長

中村龜吉氏

巨軀宏度、笑めば小兒を懷け憤れば猛虎も萎縮す、規律禮儀衛生自營勤勉正直親切從順公德感恩の十大綱目は其の訓練の資、一校和氣霽々團樂一家族の觀を呈し、校下の尊信を一身に鍾むる至大の潤徳は、阿里山森林の水を集むる曾文溪の灌溉と相比し、臺灣南部の明星として將た初等教育界の重鎮として芳蕪馥郁たる者、之を蔴荳公學校長中村龜吉氏其人なりとす。

氏は茨城縣久慈郡西小澤村の産、明治四年十二月を以て生る、常に聖哲の書を繙き、書畫骨董に趣味深く、明透の快舌は鞆鞆の辯を成すと雖も亦實行躬踐の徳を備ふ、明治廿三年授業生として久慈郡大子小學校の教壇に現はれ、以來同縣下小學校訓導たりし事九年、同卅二年臺灣總督府國語學校講習科を卒へ嘉義公學校教諭に任じ、爾來北門岐公學校教諭、同校長を経て同三十八年現校長に轉じ、十有五年の久しき能く臺灣教育界に効績を留む。

由來本校は蔴荳街の人寰を避くる東二丁、竹林鬱蒼として四邊を圍み、農場廣く芭蕉園甘蔗園文旦園等を有す、氏就任の當時些々たる一庄宇なりしが後數回校舍大講堂を新築し、現に五百の兒を收む、且つ二ヶ年の實業科を設け農業上の智識を養ひ、部下をして示範奮闘せしめ、「本校は一大家族なり」との校訓の下に訓育せしむ、且下營庄、後營庄の二分校を統べ、地方の信頼殊に厚し、風俗習慣次第に内地風と爲り生徒は勿論鄉黨半ば斬髮に化す、國語を使用し國民性に涵養せられたる卒業生各所に活動する者多きも皆之れ氏の努力に出づ。」



鑑銘家育教

愛知縣第九高等小學校長
名古屋市

中島 伊勢三郎氏



松平定信公謂へるあり、「言ふべきを言はざるも亦言はざるを言ふも道には叶はざりけり」と、漫りに言を弄して世を瞞着し、只己れを衒はんとする者あり、又言ふ可きを言はずして世の侮蔑を受くる者あり、共に之れ道を行ふの人に非ざるなり、其言ふ可きと言ふ可からざるとの判別は實に其人の明不明に因り、又常識の發達如何に關す、我中島伊勢三郎氏は常識の人、又人格の人、言ふ可きに言ひ言ふ可からざるに黙す、道に沿ふ所以なりとす。

氏は慶應元年を以て三河國寶飯郡御油町に生る、軀幹長大、眼光炯々として人を射る、明治二十二年愛知縣尋常師範學校を卒業し、久しく郡部に奉職して效績を留め、同三十五年市内に轉じて再び其手腕を振ふ、同四十一年四月現校長に就き、孜々經營し、營々施設する所、亦見る可きもの少なからず、校務の外現に市教育會の理事として會務に參し、劃策する所極めて多し、要するに氏は熱精熾火に比すべく、聲望年に加はり、芙蓉更に低きを覺ゆ。

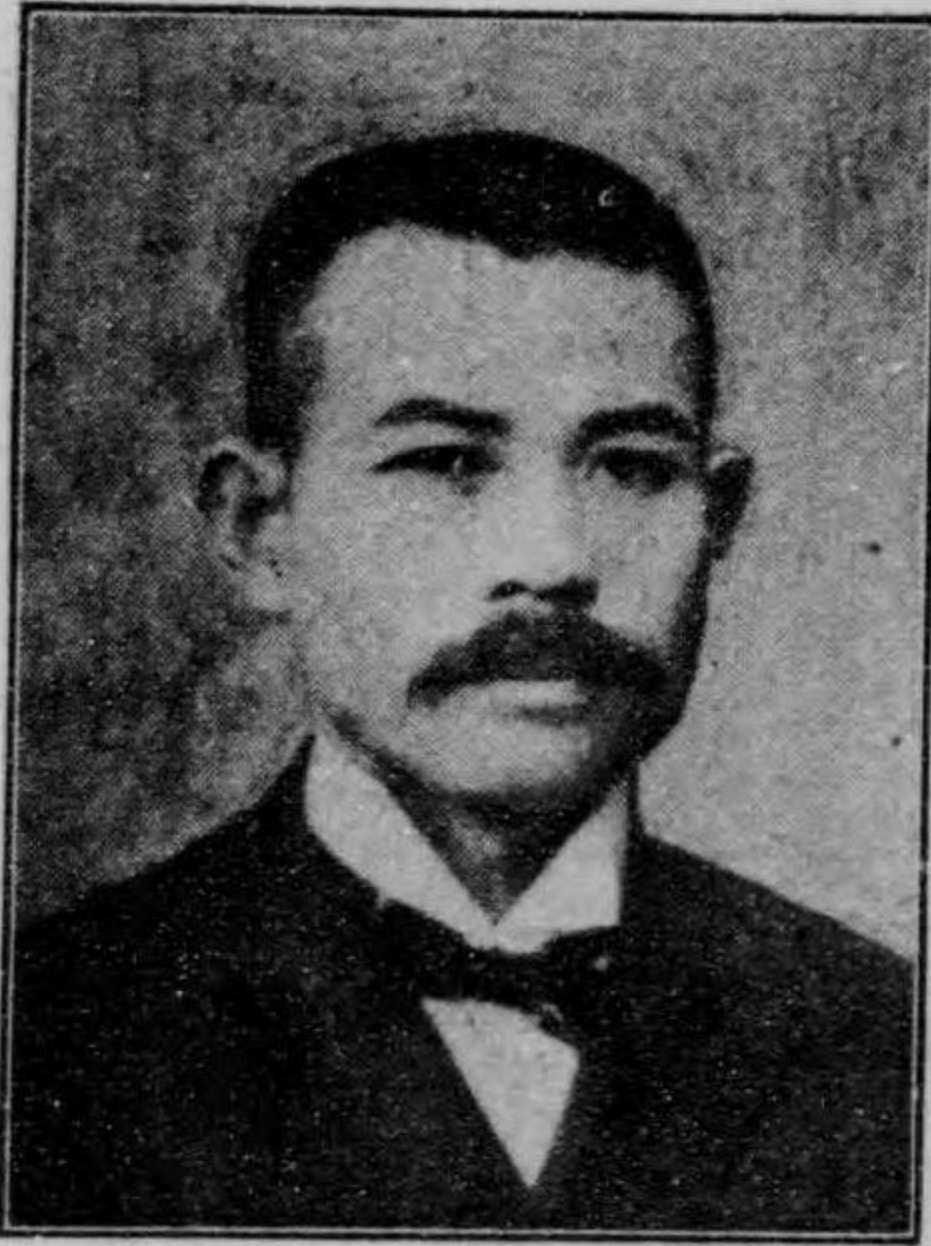
氏は剛毅果斷の資性を有し、克く讀み克く語り又克く研鑽を絶たず、風發の議論常に嚴正にして言々肺腑に發す、然れども議を好み論を嗜むの人に非ざるなり、氏は最も兵式體操を好み特に兒童をして喇叭を吹奏せしめ教練するが如き實に其技に於て得意とするところなり。能く適材を適所に配して其長所を發揮せしめ、慈愛以て兒童を導き、懇切以て父兄市民に接す、卒業生の連絡及社會風教の振肅は最も其の意を用ゆる所、今や其德四隣に洽く、一般の尊信厚き、蓋し理ある哉。」

鑑銘家育教

鑑銘家育教

岡山縣尋常小學校長
後月郡義之

長尾 協氏



嚴に失すれば下萎縮し、寬に過ぐれば放慢となる、所謂小人は養ひ難き歟、教育者の心す可き處真に爰に在り、小弦急にして大弦緩まざる程度の教育こそ、吾人の望む所なれ、然るに世多くは一方の小事を把へて饒々論難、遂に他の方面の大部を忘却す、教育者は常に大局に眼光を放ち、寧ろ一局部を寬恕するの度量なかるべからず、現任岡山縣後月郡義之尋常高等小學校長長尾協氏は此點に長所を有す、郷里後進の教化方に氏の手中に存し、今や舉つて其の影を追ふ、蓋し氏の德器や大なる哉。

明治七年八月岡山縣後月郡西江原村の地氏を産む、同三十一年三月岡山縣尋常師範學校を卒業し、直ちに任を木之子村立慎思尋常高等小學校に奉じ、克く其の施設經營を完ふし、校風亦善美を致し、一般の信頼極めて厚かりしが郷里の囑望辭み難く、同三十五年三月遂に現職に就く。

氏人と爲り剛毅率直、謹嚴端正、公私頗る明かにして聊かも曲を恕せず、然れども内溢るゝの慈情を蓄へ、言々悉く肺肝膈腑に發し、人をして真に悔悟せしむ、頭腦透徹にして事務整理の才に長じ、且校具書籍の整頓見る可きものあり、部下を信任して細節を委するの雅量に過ぎたりと雖も、怠慢放逸を恕することをなさず、家庭との聯絡を密接ならしめ、青年の補習教育に力を致し、常に青年は地方の中堅たるを自覺せしめんとす、社會に對しては學校中心主義を採り、之れが指導誘掖に盡す所多し、今や郷黨皆克く氏に信頼し、事大小となく協議に參す、氏人格の大に教化の德夫れ偉ならずや。」

鑑銘教育家

ナ之部

一五三八

佐賀縣武雄尋常小學校長
杵島郡

中村勘一郎氏

温平たる風采の一度壇上に現はるゝや、兒童の視線は一齊に氏の身邊に集まり、場内肅として禮容忽ちに整ふ、其の該博なる智識と周到なる用意は説明の巧と相俟つて、深刻なる印象徹底せる知識を與ふ、噫現任武雄尋常高等小學校長中村勘一郎氏の教授は真に奥堂に入れりと云ふべく、而して其の崇高なる人格は已に技術の巧緻を要とせずして絶大なる訓化の力を有すと謂つべし。



氏は本郡住吉村の人、慶應三年十一月の生、謹直にして嚴正、世に處する質實、職を執る勤勉なり、明治十八年七月佐賀縣師範學校を卒業し、同二十五年十月佐賀縣管内に於て小學校本科正教員たることを免許せらる、同年十一月縣下明治小學校長と爲り同二十七年一月依願退職、直に東京市淺草區代用雷坡小學校首席訓導に就任す、同二月東京府管内に於て小學校本科正教員たることを免許さる、廿七年七月歸縣、爾後各地小學校長に歴任し氏の轉々踏査は大に其實験を豊富ならしめ、大正二年三月遂に現任に就く。

氏は熱せず冷せず、終始一貫身を以て範を郷黨に垂れ、人をして不知不識の間に徳性に薰染し善行に感化せしめんとす、着任後未だ一週年を経ざるに其の感化の及ぶ處廣且つ大なるを見る、以て其の人格の一斑を知るを得ん、又深く同僚を信じ、各其の長所を發揮せしめ、其の功績を顯著にし以て其の榮達を講ず、所屬民に對しては常に學校との連絡を謀り、公平と親切を以て接するが故に、其の信頼や益厚く敬慕や愈深きを加ふ、此人を得たる該縣教育界夫れ多幸なる哉。」

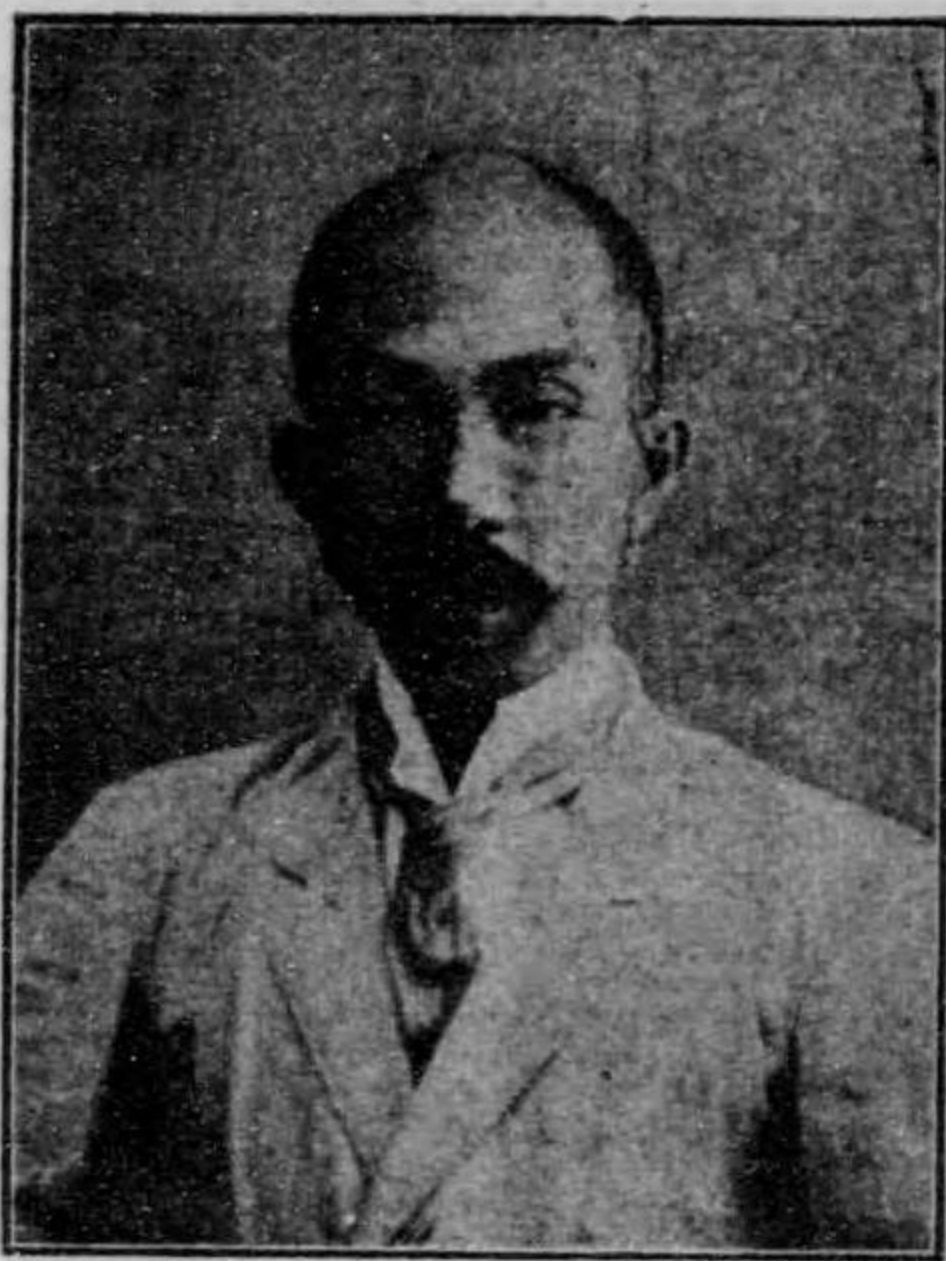
鑑銘教育家

ナ之部

五三九

神奈川縣川村尋常小學校長
足柄上郡

正八位 長坂村太郎氏



爛眼にして辣腕なる、敏捷にして果斷なる、皆之れ教育家に必要な條件たらざんばならず、然れども辣腕之れを以て全部と爲し能はず、敏捷之れを以て全部と爲し能はず、之れに加ふるに徳行の相伴はざるに非ざれば蓋し何の用に歟適せんや、茲に長坂村太郎氏、稀代の辣腕を有せず、絶世の才智を有せず、而も教育家としての第一條件たる徳行を有し、温厚なる和風自ら人を化するものあり、校風爛乎として擧れる又所以なきに非ざる也。

神奈川縣足柄上郡金田村の地、慶應二年一月を以て氏を生む、氏や明治十九年同縣師範學校を卒業し、直ちに縣内足柄上郡三育學校に職を奉じ、同二十年同郡山田學校訓導に、同二十五年金田學校訓導に、同二十六年同校長に、同四十二年足柄上郡視學に歴任し、大正二年正八位に叙せられ、現任となり以て今日に至れり、氏や其間流汗玉をなす夏の日も、寒風膚を劈く冬季も、夙夜其職に努力す賞を享け表彰さるゝ屢次、氏が令聞又四隣に喧傳され、郷黨氏を敬慕して措かず、兒童又慈親の如く氏を慕ふて止まざる故ありと謂つべし。

夫れ文局に當り、一國の文政を掌握し、一國の向上に努めつゝあるの人、真に之れ國家の柱石にして、又凡夫のよく爲し能はざる所なり、然りと雖も茲に郷閭に在りて、育英の聖業に従事し不斷の努力を以て之れに盡瘁し、一身を屠して之れに對する人格者なくんば何ぞ一國の文政舉らんや、何ぞ一國の向上期し得べけんや、蓋し氏の如きは眞の人格者模範教育家として仰ぐべき哉。」

教 育 家 銘 鑑

京都府 船井郡 殿田 尋常 小學校長

内藤 直次郎 氏

適く所成績を留め、教ゆる所學徒皆之を遵奉し、授くる所能く之を會得して些の遺憾なきもの蓋し良教員たるを失はず、我内藤直次郎氏は真に之れなり、今や殿田尋常高等小學校長として府下噴々の名聲を馳する者、其の人格の偉大と徳望の熾盛に因らざるべからざる也。



氏は京都市の人、明治二年九月を以て船井郡川邊村に呱呱の聲を揚ぐ、夙に教育に志を寄せ、京都府師範學校に學び、明治二十三年を以て其の教科を了り郡の中心たる園部小學校訓導として赴任し、居る事十年能く校長を輔佐して施設經營を完ふし、同僚と提携して教授訓練管理の良好を示し、優良なる教師として洽ねく縣下に其名を知らる、次て現校長に拔擢せられて任に就き、既に十二年餘を経たり、世木村の教育今日在る、真に氏の陶薰の然らしむる處たらざるなし。

氏は資性温厚篤實、思慮綿密、用意周到事に處して熱學、益る、如き慈情は常に部下職員を心服せしめ、城壁なき交

元青森縣視學

正八位 成田 健夫 氏

威猛寛柔能調和し、氣品皓々として操守殊に固く、諤々の論威武も近よる能はず、衆繩も擾たす能はず、斷案速にして一々肯綮に當る、而も自ら興乎として敢て誇るなし、而して今や退いて閑地に就く、所謂功成り名遂げて身乃ち退く者、之を元青森縣視學成田健夫氏其人と爲す。



氏は弘前の人、安政五年十二月を以て生る、明治十二年青森縣師範學校を卒業し、以來縣下の初等教育、並中等教育に従ふ事八年、學事郡書記、縣屬、郡視學等の職に在る事二十有三年、明治四十一年正八位に叙せられ、翌四十二年擢んでられて縣視學に上り、此年勳八等に叙し、大正二年五月遂に願を容れられて職を退く、然れども氏の遺功や永く縣下に貽らんのみ。

氏資性剛直、質素にして邊幅を飾らず、職務に對しては至誠一貫緻密にして處決要を得、頗る精勤なりき、其初等教育の任に在るや、諸般の設備を改良し、校務の整理其宜しきを得、深く兒童の精神教育に留意し、尙進んでは郷風の改善に勉むる等、其の成績大に見るべきものあり、中津輕郡視學在職中は、克く其の任を完ふし或は就學の督責に、或は設備の完成に、或は青年補習教育の普及に、或は樹裁の獎勵に或は教育上の刷新に努力す、是が爲め縣郡教育會は其成績を表彰し、文部省亦金若干を賜ひて其勤勞を賞するに至れり、蓋し誠實職務に勵精するの致す所ならざるなし、宜なる哉我帝國教育會氏を賞するに功牌を以てす、蓋し我教育者中少數の選獎豈に榮譽ならずや、吾人亦謹て感謝の意を表す。」

教 育 家 銘 鑑

岐阜縣中之保尋常小學校長
武儀郡中之保尋常小學校長

長尾千尋氏

曉色海を覆ひて海靜かに、東方遙かに水天髣髴の邊、一分の光動きて漸次に黄又紅、濃淡變幻波を燒くが裡より、金鳥團々として上るの景、之れを以て長尾千尋氏資性の象徴とすべき乎、氏が胸裡の大量なる以て大海の廣さに比すべく、氏が才氣喚發、滑脱なる交際術は、彼の鮮かにして變化麗はしき東天の如し、氏が令名遠近に喧傳さる、又所以なきに非ざる歟。

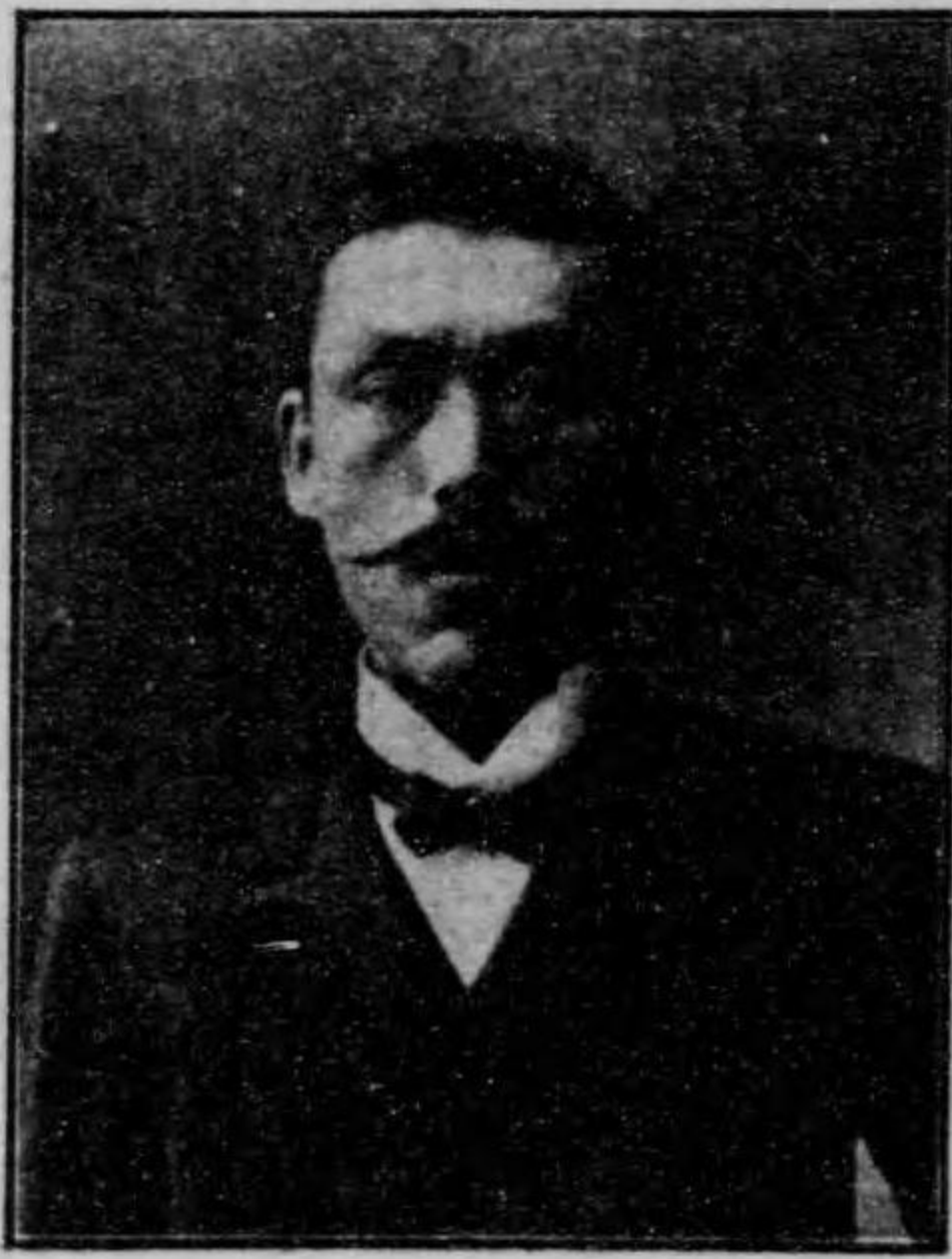


明治元年九月岐阜縣武儀郡中之保村の地、此秀才を生じ、同二十四年氏や同縣師範學校を卒業し、直ちに縣内武儀郡上有知小學校訓導に任せられ、同二十六年同郡博愛小學校訓導兼校長に、同三十二年岐阜市高等小學校訓導に歴任し、同三十五年五月稻葉郡長良尋常小學校長に同三十六年同郡蘇原尋常高等小學校長に、同三十八年可兒郡上之郷尋常高等小學校長に、同四十三年同郡豐岡尋常高等小學校長に歴任し、大正元年十一月郷里なる現校に赴任、經營致々以て教務の刷新を圖りて息むを知らず。

氏や、特に全校兒童の短所を參酌し、勤勉忍耐の習慣を養成し、勇敢進取の氣象を有せしめ、清潔、整頓の風習を作り、規律を重んぜしむるを以て訓練の要項と定め、之れが實績を擧げん事に努む、又一職員兒童は一大家族にして、校長は家長たり、職員は其弟妹たり、而して兒童はその子女たり、和樂圓滿の中に協力し以て子女の教養、校運の隆昌を圖るべし」との意を以て部下職員に對す、則ち部下克く怡然其職を勉め以て一致の實を得、茲に人の和あり、校風振肅宜なる哉。」

元京都府鞍馬尋常小學校長
愛宕郡鞍馬高等小學校長

故夏目左直氏



赤瀟々、裸淨々、眞に心情潔白なるの人、而して其操行嚴肅、自ら持する極めて質朴にして高廉世に街ふの念なく、一點浮華の心、半片脂粉の氣なし、之を夏目左直氏其人とす、貴權に阿諛し、すべて自己が利に趨り、慾に赴くの輩、滔々として一世を壓するの時、斯界に此人を見たる、吾人又些少の感なき能はず、氏が温籍なる情、篤實なる質、大に偉功を遺したるは理數の到る處にして、吾人深く之を信じて疑はざる處なり。

明治元年十月京都府久世郡淀町の地氏を産む、明治十七年教授生より起りて准訓導訓導を経て、同三十三年現任校長に進み、模範的人格者の氏や、黽勉拮据、夙起更寢、分晷も徒消せず、獨學自習以て身を立つ、常に自己の修業を怠らず、而かも修養の爲めには時間と金錢を惜まず、能く休暇を利用して各地の講習に出席し、現に東京高等師範學校開催の冬季講習會の如き聴講繼續八年に及びたり、以て氏の人格如何を知り得可きなり。

氏や獨學力行自ら奮進すると同時に、其學童に對しても専ら自學自修の習慣を養はしめ、艱難に耐え究苦を凌ぎ、獨立獨行、濶歩し得る有爲の國民を養成せんとす、社會教育に意を用ひ、殊に青年男女の教育所を設け、又一方に青年會を組織して之れが會長と爲り、其誘掖指導に力むる事親切なり、大植林を經營して該會の團結を益々固からしむるに至らしむ、明治四十一年京都府廳より賞金を下附せらる、聲望日に高く益々期する所ありしに今や他界す、吾人悼惜に堪えざる也。」

福岡縣 門司市 清見尋常小學校長

永江朝太郎氏

活動的快感と追求的興味との附與は、應て自學自習の域に到達せしむる階梯にして、教材に對する教師の深き修養と信念とは其必要條件なり、故に兒童の固性に鑒み、教授の主眼を確認して練習を積み、鍛練を重ねて知識の活用に力むるは、永江朝太郎氏の採れる、方針なりとす。



氏は本縣三池郡の人、明治四年七月を以て銀水村に生る、資性濃厚寡黙にして同情の心深し、明治二十七年縣師範學校を卒業し、郷里銀水高等小學校の訓導を拜命し、翌年大牟田高等小學校に移る、同三十五年福岡高等小學校に、同三十七年門司高等小學校に轉じ、同三十八年門司市小森江尋常高等小學校に榮轉し、大正二年遂に現校長に就く、先づ國民性の長短に鑒み、土地の情況を顧み、己の自分を盡す確實なる人物を養成せんとして訓練要綱を制定し、基礎性格の涵養に努め、管理は簡單なる規定の外、教師の材幹と熟練とに委し畫一法を採らず、兒童を自治的に活動せしめて良風の建設に努力せり。

部下を督するに令規を用ゐず、適材を適所に配し、各自の自省に由り自覺に訴へ、協同一致進んで研究的態度を持し、益々改善の實を擧げんとす、教育の出發點は家庭に在り、其感化は子女の將來に多大の影響を與ふるが故に、祖先崇拜を其基點とすべきを教へ、青年の氣風傾向は其地方に及ぼす影響大なり、故に郷土と青年との關係を明にし、風紀の振肅を圖らしむ、又社會を改善するは學校教育を善美ならしむるものとし、盛に講演會を利用しつゝ、あり、今や一般民を徳す可なる哉。」

島根縣 八束郡 玉湯村 尋常高等小學校長 兼 同村 立實業補習學校 訓導

永岡又之助氏



教育には學校教育、社會教育、家庭教育の區分なく、青年教育は小學校教育の延長したるものなりとは我永岡又之助氏の常に唱道する所、而して教育の施設を郷土に適應せしめんとし、地方の研究と各種職業との聯絡を圖り、先づ校下の家庭を調査して保護者の決心を確め、青年子女兒童の個性を觀察して訓育の方針を確立し、學校は常に一村の中心たり、家庭、社會と氣脈を通じ、施設經營に努力を斷たず、廣義の教育意義眞に佳い哉。

氏は島根縣松江の人、慶應元年十一月を以て生る、資性濃厚着實にして圖畫及歴史に精し、明治十八年縣師範學校を卒業して縣下小學校訓導又は校長に歷任し、同三十年飯石郡視學に任じ、同三十四年縣師範學校訓導に拔かれ、後再び縣下數校に校長たり、大正三年を以て現職に就く、適く所信望厚く、兒童は勿論校下父兄其感化に浴し、殊に青年の如きは能く其の命を奉じ、風紀の矯正、補習教育の實績等見る可きもの、蓋し少なからざるなり。

部下職員には相當責任を負はしめ、一面協同的動作を要求し、能く之を統督す、更に教材其他の研究の如き、其發表に當り必ず主査の職氏名を公にし其の人格を尊重す、兒童の心身發達に應じ訓練要目を定め實踐躬行以て良習慣を養ひ、各教科の聯絡を圖り内容の充實を期し、自治的管理の方法を案出して諸般の整理に努む、氏は未だ文部の表彰に會せずと雖も、人格的教育を施し、本郡内屈指の効蹟者たるは夙に當局の認識する所、其選獎蓋し遠きに非ざるを確信す。」

鑑銘教育家

ナ之部

五四六

朝鮮 忠清南道 大田公立普通學校長

中村藤太郎氏

事に新舊なし新しきものは舊きもの、形を變へて表はる舊きも使用方法にて新しく事に當り先づ其根本を見ざるべからず、常に國家に適應して現代より一步進みたる人を作らざるべからずとは氏の教育方針にして教育上幾多の成績を内地に貽して今や半島の教育界に活動す壯ならずや。



一見無頓着に似て然かも注意周到、人格頗る高く潔癖あり常人は山林泉石の氣を忘る可からざると共に廟廊的の慨なかるべからずと又た頗る常識に富み又情に脆く他の難を救ふの俠氣あり、明治廿四年大分縣師範學校を出て縣下數校に訓導又は校長たる事十五年、同三十九年兵庫縣佐用郡久崎小學校長に轉じ久崎裁縫學校長を兼ね、同四十二年佐用郡立農蠶學校長兼教諭に拔擢せられ、翌年美方郡視學に就き最も令名あり、其翌年朝鮮總督府公立天安普通學校教監事務取扱と爲り、次て同校長に任じ、後現職を襲ふ。

氏の創始的手腕は常に改革を要する方向に任命せられ、良く整理を遂げ校風を作り、且つ部下職員學徒亦人物の輩出少なからず、爰を以て當局其成績の佳良を賞する事屢なり、又實業的趣味の作興に努力し、形式的假想的の教育は氏の採らざる所なり、猶又東洋的文學の造詣深く、應用理科に長じ、種々の考按製作物あり、其該博の學を應用して書畫古器物の鑑識を養ひ得たる等凡人の企及すべからざる點頗る多し、朝鮮教育界氏を得て光輝更に加はりたりと謂ふ可き歟。」

鑑銘教育家

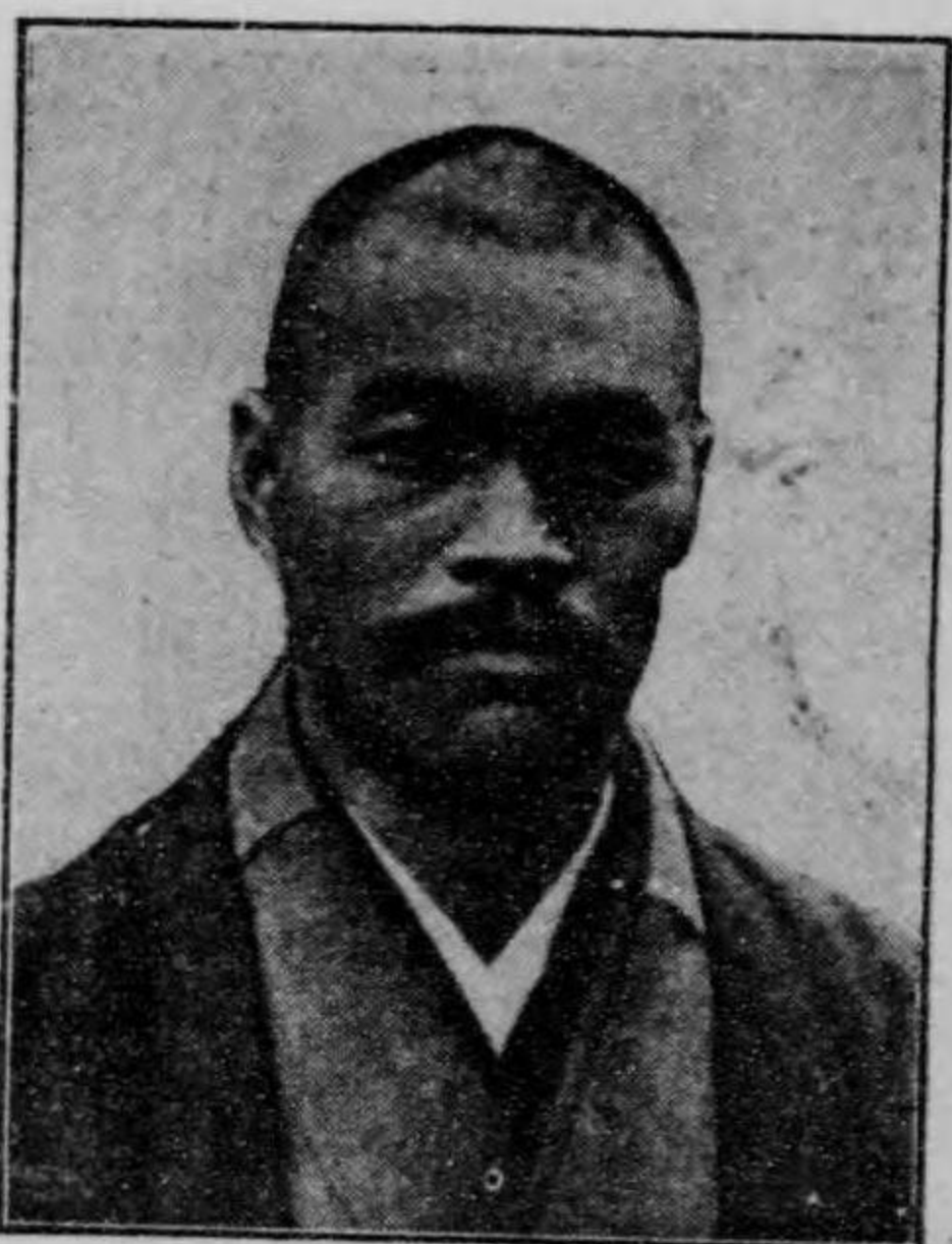
ナ之部

五四七

長野縣 上高井郡 高井高等小學校長

中村良平氏

由來長野縣山岳重疊し、沃野其間に横たはり、五穀豐熟、山林能く繁茂す、常に山間村落に於ける殖林事業の大切なるを説き、熱誠此の方面に力を盡し、兒童の教育を勵むと共に、大に地方の向上發展に努力し、今や聲望四隣に高く、一般の尊信を蒐め得たる人、我中村良平氏なり。



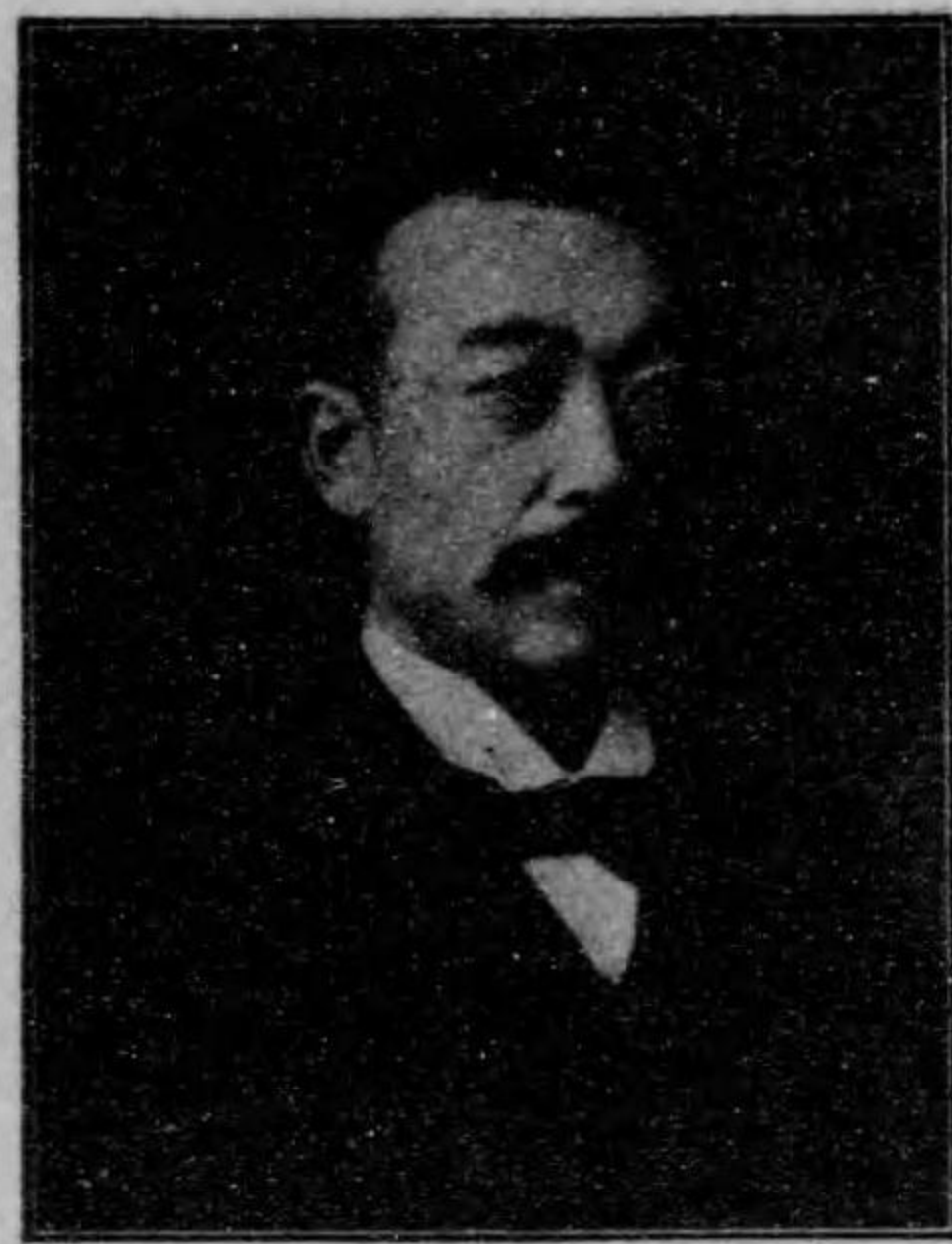
氏は明治十三年七月を以て長野縣更級郡牧郷村の産む所なり、敢て學閥を有せず、郷里小學校を卒へ、後自學自習以て今日の位置を贏ち得たる、蓋し非凡の材なる哉、明治三十三年尋常科准教員免許狀を得るや、郷里牧郷小學校に奉職し、同三十五年小學校准教員、尋常科正教員の免許狀を受け、同三十八年小學校本科正教員の資格を得たり、同三十九年篠井高等小學校訓導に任じ、同四十一年共和小學校訓導に轉じ、同四十三年本校訓導と爲り、大正二年現職に進む、教授の傍ら教育學を研究し、大正二年文部省より教育科中等教員免許狀を受領す。

氏人と爲り萬事學問的にして勝氣の性に富み、常に眞摯なる研究を怠らず、哲學的趣味を有し演説談話に長ず、氏や恰も初夏五月の頃、綠樹尙綠淺く、生氣潑瀾として前途遼遠なりと雖も、其の向ふ所何物をも燒き盡さざれば止まざるの熱心を以て事に當り、就職日尙淺きも青年の思想を開發し、婦人會、青年會等を指導して盛大ならしめ、且つ文學を好愛し趣味の向上を助長せり、學校と家庭と相提携して教育の徹底を計り、實業的教育を普及せんとするは、蓋し氏の主義方針なりとす、奮闘努力の範眞に氏に於て全しとす偉なる哉。」

秋田縣中通尋常小學校長
秋田市

長瀬直倫氏

禮義、信愛、正直、勤勉、規律、自治、體力の養成は其訓練の七要項、中庸不偏、實踐躬行、責任自覺を職員の信條とし、不言教化を其真髓とす、自省鑑なる小冊子は兒童各個の自律自治の指箴、學級協議會、細目調査會、研究會、校長輪回授業等は、教授の徹底及統一の指針、殊に學級協議會は其特色にして同學年教授の實際を統一し、所定の方針に背垂せざる、皆之れ長瀬直倫氏の腦底に發す。



梅檀は雙葉猶馥郁たる香あり、幼にして穎敏、長じて明晰、明治二十二年成績優等を以て縣師範學校を卒業し、直ちに平鹿郡増田高等小學校長に任じ、爾來九年同校の經營に膺り、一町の風紀を振興せん爲め青年會を設けて矯風に努めたるが如き當時實に空谷の梵音たりしなり、同三十年擢てられて平鹿郡視學と爲り、同郡教育の萎靡不振の根帯を攻め、少壯有爲の教育者を樞要の地位に抽き、郡内を數區に分ちて研究部會を設け、模範たる可き數校を選んで之に倣はしめ、其誘導指掖する所多く郡教育爲に大に興る、同三十二年轉じて秋田市高等小學校長たる、現校に就任以來既に十二年令聲縣下に轟々たり。資性溫良部下を率ゆるに身を以てし、啓發誘掖敢て勞苦を厭はず、職員亦業に勉む、平素研鑽、新刊書を涉獵し、誠むるに常識の修養を以てす、熟慮施設を苟もせず、能く規矩繩墨に適し、成績着々良好に赴き、餘暇縣市の教育會に獻議を不絶、文部大臣縣市其の旌表を受くる事算なく、遂に奏任待遇の榮譽を贏ち得たるもの豈偶然ならざるなり、吾人斯界の爲め切に氏の健在を祈る。」

教育家銘鑑

長崎縣大村實科高等女學校長
東彼杵郡

長淵和一氏

餘暇書冊に親しみ、寸陰之を惜しみ、研鑽自修遂に倦む事なく、期週時配當尋常小學作文實地教授書五冊を著はし、作文教授上に多大の貢獻を爲したる長淵和一氏は、後國語漢文中等教員試験に合格し、今や長崎縣下大村實科高等女學校長として専ら女徳養成に努め、令聲縣下に噴々たり、畢竟氏の人格如何に存するや明らかなりとす、研鑽自修の徳蓋し大なる哉。



氏は長崎縣の人、慶應二年九月を以て生る、明治十六年縣師範學校の出身、長崎學區中等興善小學校、霞翠、大村等の訓導に就き、後南松浦郡榎津、西彼杵郡山里の各校長を経たり、此間或は學務委員と爲り、或は師範學校准教員臨時講習科の教授に參す、其の大村に在るや一訓導の位置を以て東彼杵郡小學校職員會長に推され、榎津山里各在職中郡教育會支部會長として斯界の重鎮たりき、明治三十八年始めて中等教育界に入り、長崎縣立中學政島學館教諭、鹿児島市立商業學校教諭より轉じて東彼杵郡立女子手藝學校長となり、同四十四年現職に就き次で奏任待遇に進む、其他教員講習所講師として裨補甚大なりとす。氏資性濃厚摯實、至誠勤勉に加ふるに周到綿密なる判斷あり、且つ頭腦明晰にして處事悉く中正を得、寬嚴宜しきを以て部下職員學徒能く悦服す、流行を追ふて汲々たるの弊風を憎み、簡素身を持し、敦厚風を作すの美徳を養ひ、他日の賢母、家庭の主婦として情緒細かに操志鞏固なる婦徳を涵養し、兼て女子特有の手藝に熟達せしめんとす、吾人猶ほ將來に俟つ多し、氏夫れ自愛せよ。」

教育家銘鑑

徳島縣 牟岐尋常小學校長
海部郡

中西環氏

繁文褥禮にして實蹟の之に伴はざるは文明の弊、條理整然として法規備はり、實果隆々として之れ舉がるは文明の成、甚だしいかな今の世、弊毒の多くして、其の成美を樂しむことの尠きや、現任牟岐尋常高等小學校長中西環氏、其の條文を設くる秩然、其の指令を下す瞭然、百規備はり萬法成ると雖も、部下をして繁褥の歎あらしめず、是れ一には氏の頭腦の明晰に由ると雖も、大本は此の至誠無私の大宏量に職由せずんばならず。



氏は明治二年十月本郡鞆奥村に生る、性辯舌に長じ一度机を叩いて呼號せんか言々皆肺腑より出て句々聯珠の美を爲す、是れ單に修辭の練磨及び其の熱誠の迸發たらずんばならず、氏に奇癖あり、好んで器物の考案に興味を有し亦漢書を善くす、此の人にして此の才あり、對照妙ならずや、明治二十五年七月縣師範學校を卒業し、以來勤績す、同三十九年二月文部省より普通免許狀を受領す、其の在職實に二十有三年功績大に擧る。

氏は教授訓練共に硬教育主義を執り、努めて自發的に誘導し以て自修力を涵養す、所屬民に對しては、其の向學心を惹起し、延いて家庭教育の効果を見せしめ、學校の式日、學藝展覽會等には可成父兄の參校を求め、尙ほ更に日常教授訓練の實際を見しめ、父兄會母姉會を組織して家庭との連絡を圖り、又同窓會を組織して其指導につとめ、青年者をして學校と接近せしむるのみならず青年會を組織して一には修養を誘發し一には子弟のため學事の勃興を企圖せしむ。

鑑銘家育教

茨城縣 五霞尋常小學校長
猿島郡

勳八等 長沼梅仙氏

梅は霜雪の烈しきに遭ふも其花の馥郁を變へず、牽牛花は如何に其蔓を矯むるも遂に莖を實らさず其の本性を失はざる斯の如し、人の性は元と善、生れながらにして惡性なるの理なし、譬へ惡性に成長すと雖も、其良心や猶善あり、指導啓發の要蓋し爰に在り、現任茨城縣猿島郡五霞高等小學校長長沼梅仙氏は常に良心の啓發を以て道義を説き、以て教育の効を收めんとす、可い哉。



氏は茨城縣の人、安政二年十二月を以て生る、明治十二年初めて小學四等訓導に任じ、水海道小學校在勤同十五年臺小學校二等訓導に轉じ、同十七年筑波郡書記と爲り、同十九年判任官九等に叙し、同二十一年猿島郡高等小學校長を、同二十五年西葛飾郡五霞高等小學校訓導に、同三十四年同校長に進み、同三十九年猿島郡生子菅尋常高等小學校長に轉じ、此年更に行方郡小高尋常高等小學校長と爲り、同四十二年現職に復校、大正三年勳八等に叙せらる。

氏は濶厚英邁にして世事に通じ、育英を唯一の樂とし常に謹嚴の能度を以て部下職員兒童に臨むと雖も、其の慈眼は能く人をして敬慕せしむ、部下を信任して各其の長所を發揮せしめ、喜んで兒童を教導せしむるに努む、兒童の就學出席の督勵、父兄會、青年會、在郷軍人團、其他諸種の會同には必ず出席して之が指導に盡し、以て善美の村風を作振せんとす、又常に心を自治に置き、國民的精神と地方産業の關係を知らしめん事に斡旋す、今や聲望大に擧がり、地方崇敬の標的と爲る、開發的教育、良心啓發の主義、蓋し奏效大なりとす。

鑑銘家育教

教育家銘鑑

ナ之部

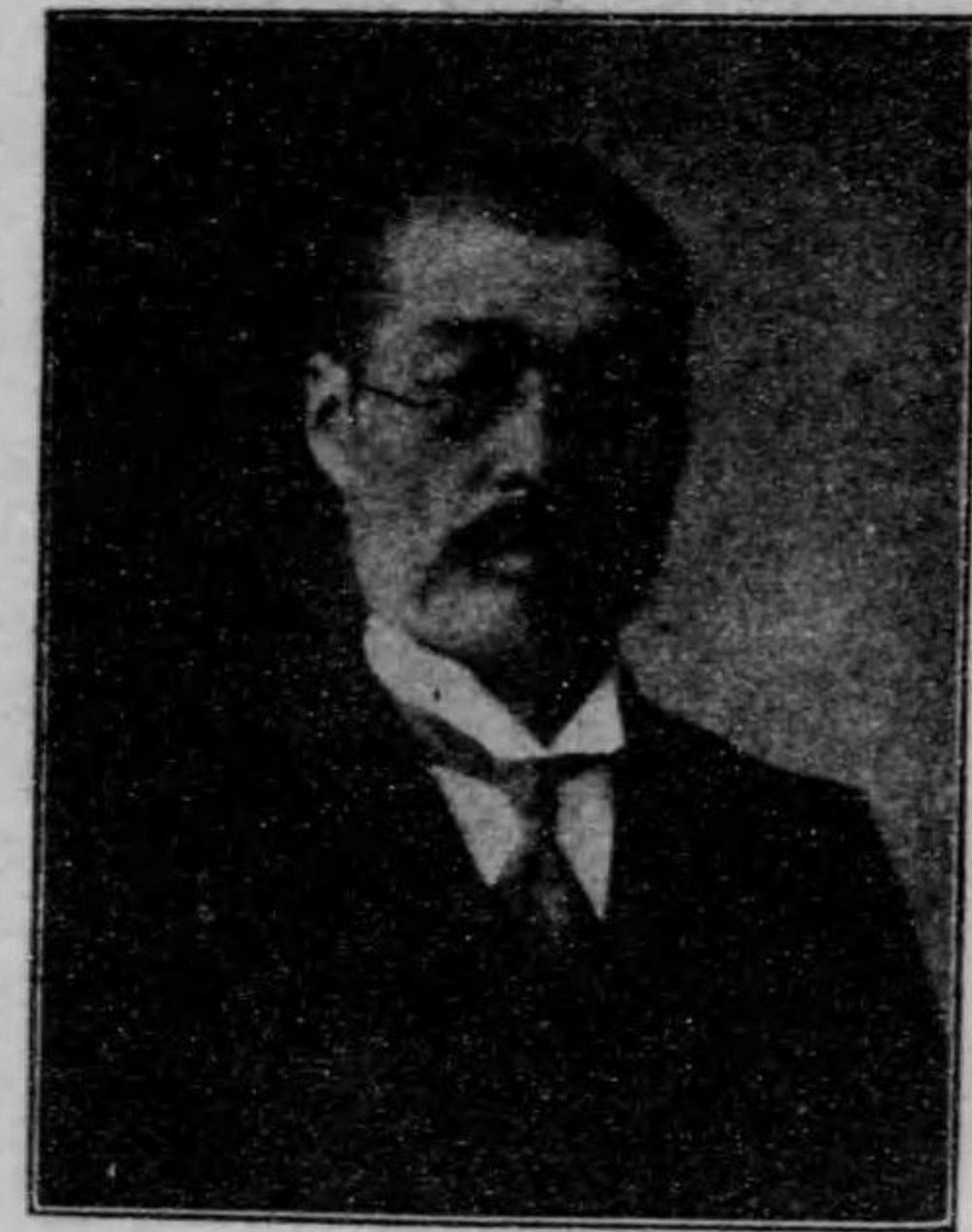
愛知縣常滑尋常小學校長
知多郡常滑高等小學校長

勳八等

中村文三郎氏

五五二

凡そ人業に當りて功を一簣に制せんとするは非なり、須らく悠々自若、遠大なる精神を以て他日に俟つの雄なかる可からず、要は只研鑽攻究不退の邁往あるのみ、又何んぞ功を求むるの要あらんや、蓋し積大なれば功自から表はる、所以なり、現任愛知縣知多郡常滑尋常高等小學校長中村文三郎氏は噴々の名聲と赫々の功名とを享有するの人、然れども未だ以て敢て自から求めず、偉なる哉。



氏は明治元年二月を以て愛知縣下に呱呱の聲を擧ぐ、明治二十二年縣檢定に合格し、幡豆郡高等小學校訓導に任じ、同二十五年同郡奥津尋常小學校長に轉じ、次て同尋常高等小學校長と爲る、同三十三年拔擢北設樂郡視學に任じ、同三十五年丹羽郡視學に移り、同四十年知多郡視學と爲り知多郡立農學校教諭を兼ね、同四十五年現職に就き、常滑町立陶器學校長、町立實業補習學校長、町立女子技藝學校長、町立常滑圖書館長等の職を兼攝し、而かも能く之を統率して缺くる所なし、大正三年遂に勳八等に叙せらる。

氏の勤勉の性、精勵の質、多年教育界に在りて幸に繁激の職に當り、遂に寧日なしと雖も、終始一貫勤勉の徳は、能く悉く成績を擧げ、人以て偉材と爲す亦偶然にあらざるなり、曩に日露戰役の功を以て八十金を下賜せられ、同四十年多年視學の職に在りて功績多きに依り文部省より金百圓を選奨せられ、今や亦平素職務に勵精し、勤勞不尠成績顯著の故を以て叙勳の恩命に浴す、蓋し之れ氏の期待にあらずと雖も、爰に至りて其の遠大の効果を賞するに餘りあり、氏亦榮譽なる哉。」

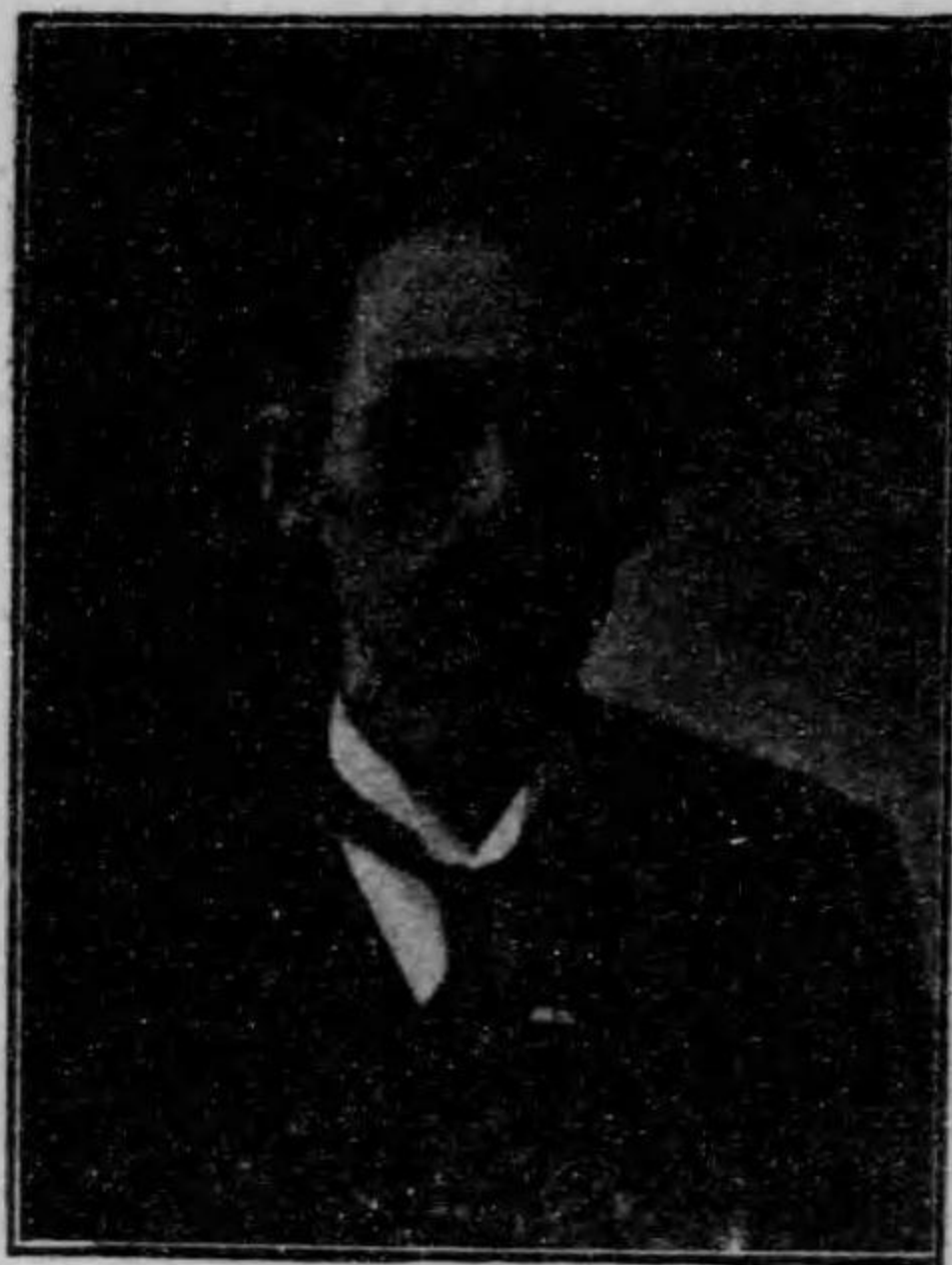
教育家銘鑑

ナ之部

鳥取縣就將尋常小學校長
西伯郡就將尋常小學校長

内藤 靜氏

溫籍の氣、厚諭の情、其胸裡より溢れ、以て人を動かし、以て人を感ぜしむる者之君子乎、茲に内藤靜氏天稟敦厚溫和、動止靜嫻、些の銜氣なく、着實熱誠を以て職に執掌す、育英の業至難なりと雖も如何ぞ成らずして止まんや、吾人氏に期待する大なる所以亦他ならざるなり。



慶應二年正月岡山縣眞庭郡二川村大字種村の地氏を生む、明治二十四年三月鳥取縣尋常師範學校卒業、同年四月より同三十七年五月に至る迄十有三ヶ年間鳥取縣西伯郡米子町義方尋常小學校訓導に其熱心なる教鞭を振ひ、同三十七年五月より同四十年八月迄同町角盤女子高等小學校訓導兼校長に在職、同年八月鳥取縣日野郡視學と爲り、大正二年六月依願免官、大正二年六月現校に赴任し訓導兼校長と爲り以て今日に至る。

善良の國民有爲の青年を養成せんには須く善良なる町民を作らざるべからずとは氏の持論にして、深く校下の情況を觀取考察し、規律、勤勉、着實、禮讓の四綱目を特殊的訓練要旨と定め、就中、規律を最も重んじ、時間の勵行と體操科の效果により此良習慣の養成を圖り、教授も亦此見地に據り、其郷土を眞に了解するに非ざれば良町民たる能はずとなし、教材をすべて郷土化せしむるは勿論、具體的簡明なるべきを奨勵して之れが徹底を期す、而して校を管理する極めて整然、加ふるに部下職員の統御最も宜しき得、協力以て専ら實果を修めんとす、此人にして此方針あり、而して熱誠あり、燦として績擧るべき又理ある哉。」

五五三

鑑銘家育教

ナ之部

北海道女子尋常小學校長
根室町

長尾又六氏

五五四

事に教育に従ふもの先づ自らを正くし以て衆に及ぼすを要す、徒らに辯舌を弄して仁義忠孝を説くも其効や微なり、實踐躬行の徳茲に於てか貴し、北州の絶東根室の地教育界の重鎮を以て目する、我長尾又六氏は真に此點に於て群を抜くもの、其學徳北邊を風靡する所以なきに非ず。



氏は越後長岡の人、明治五年一月を以て生る、幼にして父を失ひ母に養育せられ十九歳の時叔父を頼りて札幌に來る、天資聰敏、教育者たらしと進んで師範學校に學び、同二十九年業を卒へ、任を根室郡根室町花咲小學校に奉じ熱誠以て訓化に従ふ事六閱星霜同三十五年北斗小學校の開設せらるゝや拔擢校長に榮轉し創立の事業を成就し隆盛を見て同三十八年に現校長に就き以て今日に至る十九年此間根室女子職業學校教師又は同校長を兼ね令聲大に擧がる、常に研鑽の精神に富み、或は讀書に或は講習に、其見聞を多くし、年と共に學加はり、人格更に高きを見る異數と謂つべし。

氏は溫良にして篤實、克く人と交はり克く人を容る、懇切部下を督し、長所の發揮に力む、部下亦氏に心服し、各其職に精勵するを以て、校紀興り、成績佳良を致し、和氣霽然氏は女徳の涵養に思慮を費やし、家庭との連絡は女子教育に於て痛切に其必要を認め、炊裁花禮より育兒に涉るまで其指導開發を怠らず、明治四十五年二月北海道長官より銀側時計一箇代の授賞あり部下職員兒童は勿論父兄町民氏の徳を慕ひ欽仰措かざるもの豈偶然ならんや。」

鑑銘家育教

ナ之部

宮崎縣赤江尋常小學校長
宮崎郡

中山彌八氏

五五五



夫れ、師の影を七尺去りて之れを履まずと、之れ弟子の取るべきの道なり、現時如斯は真に見る事、殆んど能はざるの徳たり、之れ弟子師に仕ふる道廢たれしか、然り之れ又其理由たり、然れども師たるもの、人格低く、爲めに弟子の敬仰を自然、得ざるの理由亦之れを醸さざるにあらず、中山彌八氏資性敦厚にして溫和、善に就く恰も流るゝが如く、殊に常に自己の修養を怠らず、謹嚴自ら人を服すの徳あり、蓋し現代に稀なるの君子人乎。

明治元年七月宮崎縣北諸縣郡高城村穗滿坊の地、氏を生む、同二十二年四月宮崎縣師範學校を卒業し、直ちに縣郷里なる高城小學校訓導に任ぜられ、同二十五年十一月同校長を兼任す、同三十年四月同郡祝吉尋常小學校訓導兼校長に、同三十二年九月縣内宮崎郡生目尋常小學校訓導兼校長に、同三十四年七月同郡清武尋常高等小學校訓導兼校長に、同四十年三月同郡木花尋常高等小學校訓導兼校長に歴任し同四十一年四月現任となれり、同四十三年一月普通免許狀

を享け、爾來孜々として教務の刷新を圖り營々以て設備の完全を期するを努む。氏や師範學校卒業後、茲に二十有五星霜、炎暑焼くが如き日も、寒威骨に徹するが如き時も、撓まず倦まず、勉勵に次ぐに勉勵を以てし、恪勤眞に一日の如く、勵精其職に盡瘁し、殊に就學出席の督勵、青年の補習教育、兒童の訓練は氏の最も意を致せる處にして、爲めに其功績愈々著しく、四隣其徳を仰ぎ、令聞四方に喧傳さるるに至れる偶然に非ざるの結果ならん噫。」

廣島市本川尋常小學校長

長澤智水氏

時勢は移り思潮は流れて常に順移正流を保ち難し、時に或は逆轉暗流の滔々猖獗を逞ふするあるを慮らざる可からず、教育の要は蓋し此に在り、一を聞いて一を知り、二を學んで二を行ふは易々たり、一を聞いて十を覺り、二を學んで百を視ふの能力を養ふは眞に難い哉、我長澤智水氏は多年の經驗と時勢の推移とに應じ、適切なる教育を施すを其主義として努力止まず。

安政元年八月廣島市段原村の地氏を産む、明治八年廣島師範學校下等小學師範學科を卒業して下等小學八等教員と爲り、爾來沼隈郡今津小學校廣島區古町小學校、同櫻川小學校等の訓導を経て、同十六年溫知小學校長に榮轉し、同二十一年成達尋常小學校長に移り、同二十三年轉じて現校長と爲り爰に終焉の志を堅くす、其の今日に至る前後四十有餘年の勤績如何ぞ效果なくして可ならんや。



氏や誠實熱心、日夜孜々校務を處理し、懇切部下を統督し、校内和氣霽然たり、從て教員の勤績亦永く、職員兒童皆氏を敬慕し、父兄均しく信頼す、德望隆々隱然市内斯界に重を爲す、奮闘努力の精神涵養主義を以て兒童に臨み、應用自在確實正當なる智識を得せしめんとす、先きに教育會より三ッ組木杯、縣より多額の獎勵金並表彰状を下賜せらるゝ事數次、帝國教育會亦氏に功牌を贈り以て其功勞を表彰す、大正元年文部省亦全國教育者中の模範を以て選獎せらるゝ、蓋し其の及ぼす所獨り校内のみならず、校下一般の指導誘掖の績甚大なるものとす、氏の德望高く令名噴々偉なる哉。』

教育家銘鑑

京都府協一尋常小學校長
北桑田郡協一尋常小學校長

永井登氏

教育家の節操は剛毅なり、教育者の感情は摯實なり、兩者の調和宜しきを得て、はじめて理想的の學校長を見る。永井登氏は即ち其の一人なり。氏の子弟に臨むや、規律を正しうし勤勞を獎め、實行を旨として輕浮に陥むらず、少しく教へて多くを知らしむるを主とし、一校の中整然として紊れず、上下相和して教鞭を執り、子弟相樂しんで智徳を磨くの概あり。



氏は石川縣の人、安政三年三月を以て金澤市三社に生る明治初年文部省直轄愛知縣師範學校に入り、研精倦まず同十年十月を以て業を卒ふ。爾來一身を教育の事に委ね、席常に暖まるに違あらず。明治三十一年十月現任地に就職し今日に至るまで孜々として倦まず、校務の旁ら家庭會を開き、各部落青年會を興して殖林及貯金を獎勵し、更に學校と社會との觸接を計畫して、戸主會及婦人會を開催し、熱心なる教導感化の功は、校の内外に及びて最も顯著なるものあり。明治四十三年天長節の佳辰に際し、その功績を選

獎せられて京都府より賞賜を受けたる以て偶然に非るを知る。蓋し教育の事は、一人箇々の力の能くすべきにあらず、氏が掛員を率ふる嚴正にして而も寛宏を失はず、各自をして其の長を發揮して功果を擧げしむるは、眞に教育事業の眞諦を會得せるものと謂ふべし。特に所屬民に對して啓蒙開發の道を誤らず、内外相應じて教育の實績を確固にするは、克く始ありまた克く終あるものにして、以て教育家の模範とするに足る。』

教育家銘鑑

福井 郡立大野中學校長

正七位 長江有一氏

邦土狹隘にして限りあり人口増殖限りなし、職業の競争は變じて生活の競争と爲り以て優勝劣敗は時代の要求と爲る止むを得ざるの勢なり、吾人の生存を完全ならしめんと欲せば物質的に苟も法網に觸れざる以上は他を擁して以て自己の利益を圖らんとする理なきにあらざるなり、是れ近時人情の益輕薄に道義愈衰頹する所以ならん歟、唯に僥倖の世を嘆ずる者は其根幹を究めずして其枝葉の枯死を慨くに均しく、生ける教育者の爲にあらず、我が長江有一氏は大に爰に見る所あり以て専ら殖民的に外部膨脹を主とする方針を執り、以て限りなく人口増殖に激烈なる生活競争を融和ならしめんとす、氏の教育方針や我國時勢に適切せるのみならず、我國特殊の道義的精神持續法として最善教育主義と云はざるべからず、氏の識見高き偉なりと謂つべし矣。

氏は岡山縣の人、明治七年三月を以て呱聲を擧ぐ、同三十年第五高等學校文科を卒へ、東京帝國大學文科大學に入り、同三十四年を以て其史學科を卒業し、翌年福井縣立福井中學校教諭を囑托せられ、中等教員免許狀を受くるに及んで教諭に任ぜらる、其翌年奏任を以て待遇せられ、同三十九年從七位に叙せらる、當時已に令名高く到る所に徳望厚きを得たり、同四十年遂に迎へられて福井縣立小濱中學校長と爲り、同四十三年轉じて現校長に大正元年十一月正七位に陞叙せらる。

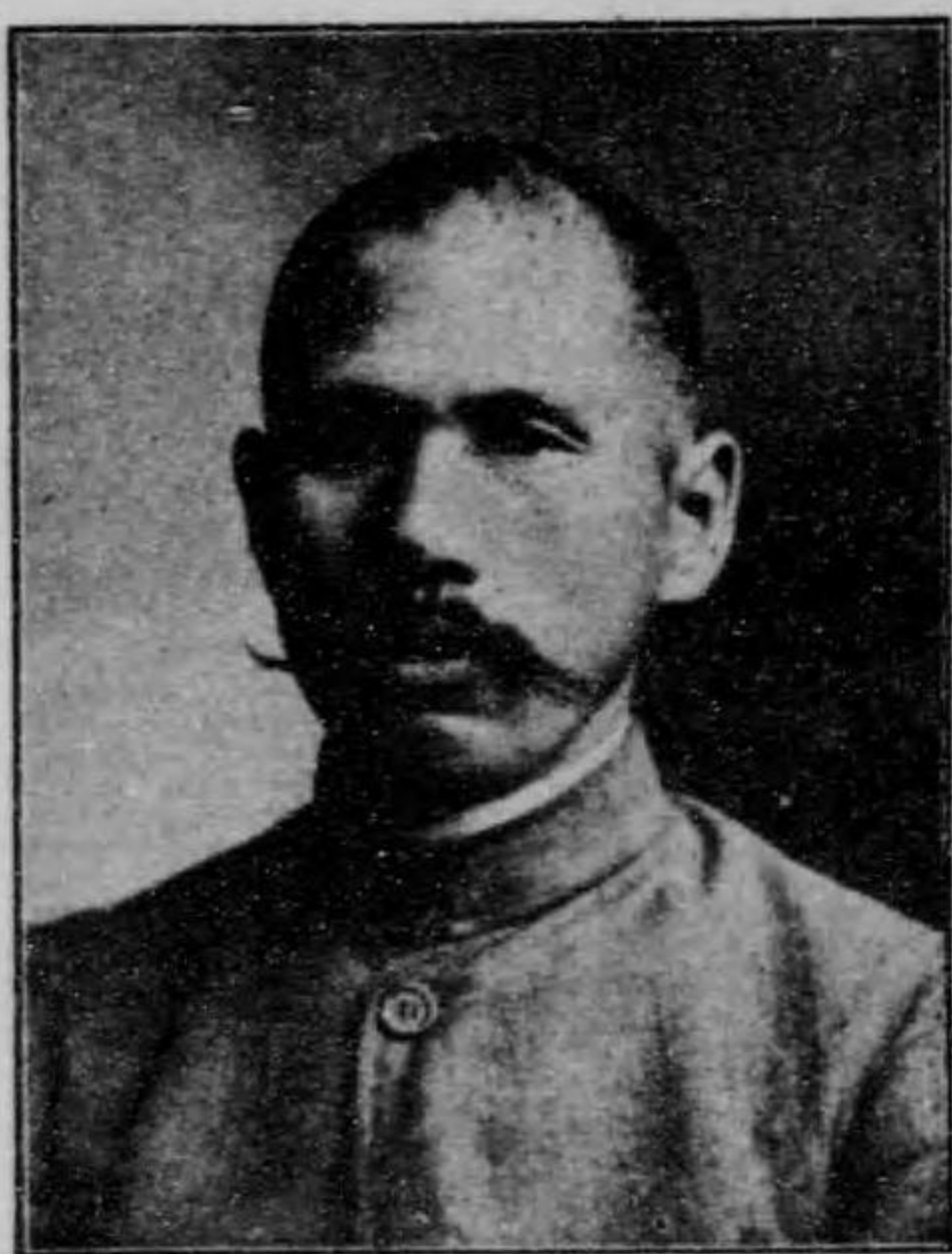
氏人と爲り温厚英邁、學博く人格高く、思慮周密深遠にして施設經營一も誤るなし、其生徒に接するや孳々諄々教へて倦まず、温顔洋々喜怒哀色に表はさず、常に自己の修養を努め、部下職員を鼓舞して學徳の研磨に盡力せしめ、合せて教育家たる人格の修養を奨む、以て協力一致大に教化の實蹟を擧げんとす、殊に青年の誘掖指導には率先之が衝に當り郡縣教育會の事業に參して社會風教の改善を圖る等其盡瘁せる所多大なり、縣下斯界の敬仰を受く偶然ならざるなり。

鑑銘家育教

静岡縣 沼津尋常小學校長 駿東郡

永田金作氏

寛なれば放縱佚遊に流れ易く、嚴なれば則ち拘曲齷齪の陋に沈む、人を統ふるもの此の兩者の利害得失を打算し、寛なるべくして以て寛に、嚴なるべくして以て嚴に、其の適宜中正を得ざるべからず、是れ最も難き所にして、古聖も欲すらく、難いかな夫れ中庸や、民得るある鮮しと、吾が永田金作氏は這般に於て體達せるものと云ふべし。



氏は明治二年三月を以て本縣小笠郡川野村に生る、性篤實にして惇朴、輕佻浮薄の狀更に之れ無く、人に接し懇篤にして毫も隣壁を設けず、渾然夫の如き美質能く人を容る然れども其の矯正すべきあらば諄々として之を説き悔悟に至らしめざれば止まず、眞に天生の統治者なるかな、氏明治二十二年四月を以て尋常師範學校を卒業し、直に沼津尋常小學校訓導と爲り、後ち横地尋常小學校、川崎尋常高等小學校、掛川女子尋常高等小學校長と爲り、尙ほ二三に歴任して、同四十一年十二月初めて職を現任に受け、爾來孜々以て教務の刷新を圖り、營々以て校舎の設備教具の完美を努めたり。

氏は質朴勤勉誠實を以て訓育の方針と爲し、之を以て部下に示し兒童を導かしむ、其の教授は秩序あり統一あり、之に加ふる積年の經驗を以て、學童皆好みて其の教授に親しむ故なしとせず、尙ほ家庭教育の改善を計る爲め、屢々父兄會、母姉會等を開き、青年を導きては氣力剛健の性を養はしめ以て社會風教の刷新を計らんとす、觀界夫れ偉なる哉。

鑑銘家育教

愛媛縣 喜多郡 郡立高等女學校長

從七位 長井音次郎氏

我國女子教育の隆盛現時最も至れりと謂つべく、而して其物質的智識の上達技藝の發達は頗る進運の期至ると雖も、女徳節操に到つては古昔女大學の修養時に比し遜色なきを得ず、否却て學業を街ふの結果墮落婦女の多々輩出するを如何せんと、長大息を發せしむる所以のもの女子教育の缺陷と謂はざるべからず、道に婦女教育に在る者特に戒心留意せずんばあらざるなり、我長井音次郎氏大に茲に憂ふる所あり、威容、寛宏、沈黙、剛毅の四徳を具へ、嚴格に著實に苟も虚飾に流るゝを許さず、我國固有の婦徳節操を修養するに努力す、如斯人格者の教下に在る者至幸ならずや。

氏は愛媛縣の人、慶應二年を以て呱呱を擧げ、明治十八年同縣師範學校の業を卒へ、松山三槐小學校訓導に任せられ、同縣越智郡今治高等小學校訓導に、同二十一年兵庫縣神戸市雲中高等小學校訓導に轉任、次て米國人に就き英語學を修めて造詣深く、同二十九年同縣川邊郡立花尋常小學校訓導に、同三十一年同縣明石郡平野尋常高等小學校に轉じ、到る所令名高く功績頗る擧る、同三十四年其郷里なる愛媛縣今治高等女學校教諭に榮轉す、同四十年迎へられて現任喜多郡立高等女學校長に轉任せられ其翌年奏任待遇と爲り從七位に叙せらる、爾來孜々諄々教へて倦まず、實踐躬行範を生徒に示すを訓練の要旨と爲す、營々砧々校舎の設備に教具器械の備附に遺憾なきを期す。

温平たる其容、霽然たる其言、氏の威容を重からしめ人と接するに敢て牆壁を設けず、其豁然たる胸襟は氏の沈黙寛宏を大ならしめ、其高潔なる行爲は以て氏の剛毅を發揮し、人をして自ら敬仰の念を起さしむ、之れ氏が崇高なる人格者以て現時女子教育の矯正者として、縣下教育界の重鎮たり錚々たる所以ならん歟、氏は常に自己修養を怠らず、尙女徳の研究に心を潜め、大に部下職員を勵ます、氏が不屈不撓の精神は校内外の誠意と爲り、虚榮奢侈の風儀矯正を知る精力偉なる哉。」

鑑 銘 家 育 教

市立岡山商業學校校長 岡山商業補習學校長

村 井 素 行 氏

社會往々奇才を以て衆人を弄び、佞辯邪智巧みに世人を瞞着して獨り得々蠢鼻拭唇を敢てする者其數僅少ならず、而して誠實誠意其職に盡し、其間何等の私心なく、只躬を育英界に獻け、能く後進の指針たり後援者たる者は蓋し渺々、眞摯たる村井素行氏あり吾人意を強うす。

氏は明治五年十月を以て岡山縣下に生る、明治二十七年岡山縣師範學校を卒業し、英田郡明倫尋常小學校訓導、御野郡御野高等小學校訓導、岡山高等小學校訓導等を経て、同三十五年岡山市商業學校教諭兼書記に任じ、同三十九年同校教諭專任と爲り、同四十二年校長事務取扱を命ぜられ、同四十四年商業補習學校を附設して自ら校長を兼ね、次て現職に就き爾來孜々教へて倦まず。



氏は温厚英邁、熱誠職務に服し、現校創立の際は校長を佐けて創立事務に膺り、孜々校務を處理し、各種の設備を整へ、一方實業教育を感知せざる父兄に對し學校設立の目的を説示して百方入學を勸誘し、初年既に二百餘名の入學を得、爾後四百名を下らず、今や日々勤勉熱心の度を増し、校務の整理、部下の統督、教授法の示範に寧日なし、卒業生就職に斡旋し毎年十數名を大阪神戸地方へ引率して諸種の商店會社等に入らしむるを例とす、先年補習學校を小學校より移すや率先家庭を訪うて學校との連絡に努め、相互意思の疏通を計り、適切な施設熱心の經營、劃策悉く宜しきを得三十名内外より三百名の生徒を得るに至り卒業生亦五百名に達す、誘掖指導に盡瘁して勞を覺えず、稀有の育英者なる哉。」

鑑 銘 家 育 教

愛媛縣立松山中學校教諭

勳八等

村井俊明氏

潑瀾縱横の才氣を有して其施設を美ならしむる教育者は之れ有り、滔々風發の快辯を以て仁義禮智を説き盡し人をして其幽遠なる學識に驚倒せしむる教育者亦之れ有り、然れども黙々の内其徳を慕ひ其影を尊び學徒をして、衷心敬服欽仰を完ふするの教育者未必しも多からず、現任愛媛縣立松山中學校教諭村井俊明氏は蓋し後者に屬すべき眞個の教育者として吾人の推稱措かざる所なり。

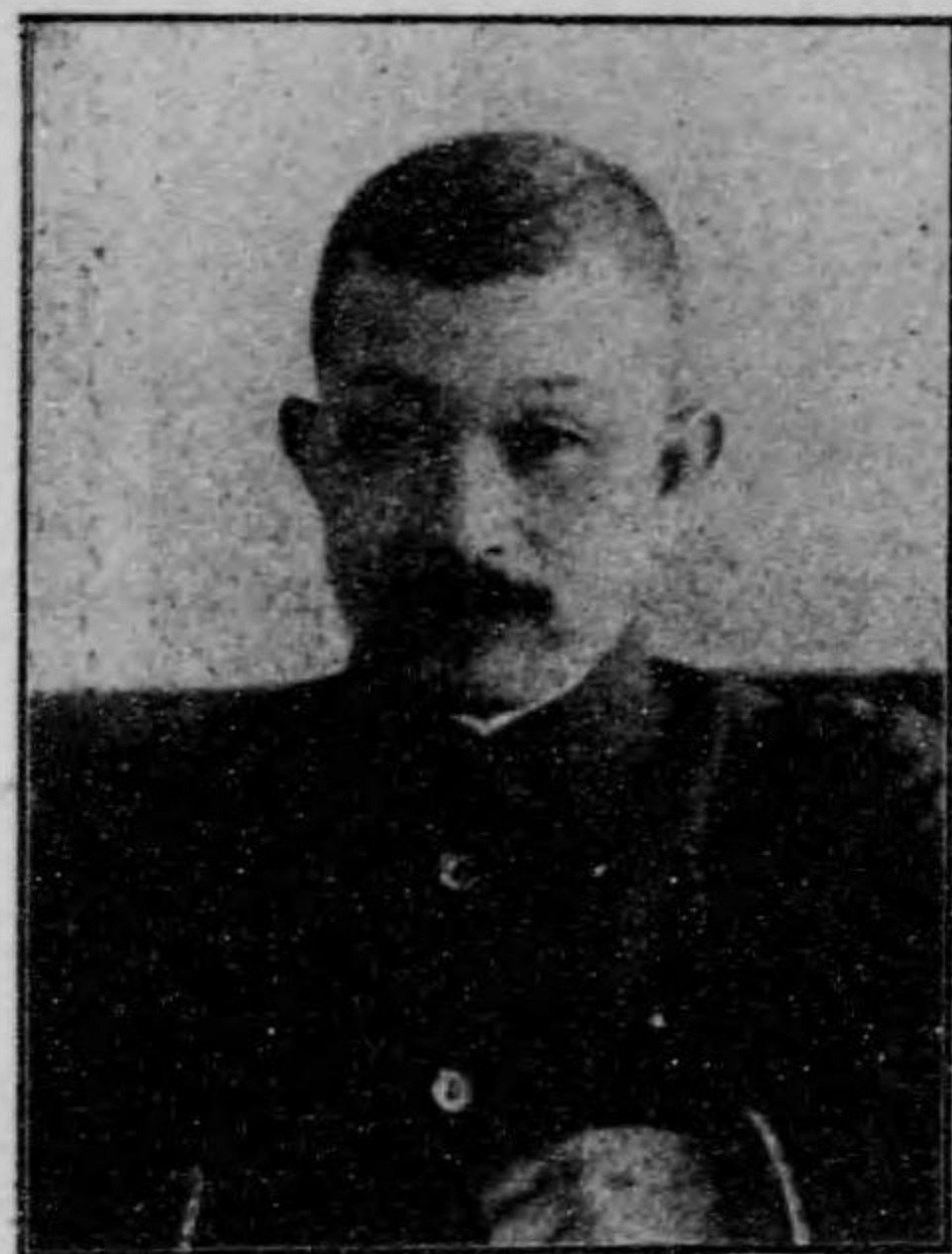


氏は安政二年十二月を以て江戸三田松山藩邸に弧々の聲を擧ぐ、資性温厚にして内毅然たる志操を蓄へ、最も學に篤し、明治元年松山藩學校に於て學問修業を命ぜられ、得業生たり、猶藩儒官近藤元修塾に寄宿して漢學を修む、同十年國文學を松山の諸先輩に學び、後水戸人久米幹文に國語及歌文の通信教授を受く、明治七年以來本縣中學校及師範學校の教諭並舎監に歴任し、同四十五年勳八等に叙せられ、現に縣下教育界の一大恩人として崇敬せられつゝあり、

氏の如きは人格崇高に模範的教育者と謂つべし。氏は愛媛縣内教育に従事する事四十有餘年、殊に現職に就きて爰に二十六閱年、同校卒業生を送ること千六百餘名、之等多數の學徒は皆氏の教授薰陶に浴したる者にして、平素生徒に接するや嚴格、而も其慈愛の至情に於ては眞に掬すべきものあり、卒業生の進んで高等學府に在るもの、休暇歸郷には必ず氏を訪ふて款晤するを樂みとす、其學殖博く徳望高く、老來愈々元氣旺盛、孜々努めて止まず、嗚呼氏の功績を聞く者、誰か聲咳に接するを望まざる者あらんや。」

愛知縣中島郡千代田尋常小學校長

村手源治郎氏



抑も我國體は家族の發達したるものにして、忠義、孝行は此間に生じ、仁義禮智亦此間に發す、孝なる者は、自から忠なる所以亦實に茲に在り、一家に於て家長を中心とするが如く、天皇を國民の中心と爲す、故に國家の平和を望むものは一家の平和を慮らざる可からず、家族の圓滿は即ち國家の平和なり、村手源治郎氏は、先づ自家中心主義を以て範を一校一村に垂れ、引きて國家に及ぼさんとす

氏の忠孝說以て教育者たる者の根本主義と爲すに足る。氏は本縣中島郡千代田村の人、明治五年八月に生る、明治二十六年三月愛知縣尋常師範學校を卒業し、中島郡三宅尋常小學校准訓導を拜し、同二十七年七月同校訓導と爲り同三十一年八月海東郡津島高等小學校訓導に轉じ、同十一月中島郡稻澤高等小學校訓導と爲り、同三十四年五月同校訓導兼校長に昇り、同四十五年四月現校長の職に就く、此間勳績二十一年、氏は到る處徳望群を脱し、優良教員の令名を馳す、人格修養の深き所以ならん。

氏人と爲り篤實温厚にして衆人の畏敬する所たり、其職員兒童に對しては常に躬行實踐の美德を涵養せんことを以てし、躬ら家庭を整へ以て國家に盡す可きを教ゆ、學校と家庭とは互に兒童の教育場たるが故に彼此氣脈を通じて教育の目的を貫徹すべく、青年は國家の元氣なり、宜しく自治の精神を以て將來を圖るを要すとて各字、日割を定めて指導誘掖す、社會は即ち一家の集會なり圓滿の發達を期待せざる可からずと説く、教育者の任亦重い哉、氏の健在を希ふや切なり。」

教育家銘鑑

山部

五六四

山梨縣北巨摩郡尋常小學校長
北巨摩郡高等小學校長

向山 豐氏

山梨縣北巨摩郡に二兒あり、一は菅原小學校長一木氏、一は葦崎小學校長向山豐氏なり、共に明治十九年山梨縣徵典館の産む所、今や郡下教育界の二星として一般の欽仰を蒐め、隆々たる校運を開拓して自ら校園に識種を培ひ、徳花爛漫として芳薫將に縣下に洽からんとす。



氏は北巨摩郡祖母石村の人、慶應元年五月を以て其地に孤々の聲を擧ぐ、資性着實温厚にして思慮綿密、施設中察にして誤りなし、母校高等師範科を了はるや、北巨摩郡下に於て圓野、藤井、河原部、穴山等の各小學校長に歴任し、頗る令名あり、後擢んでられて縣師範學校訓導を拜し、教生指導の任に在りしが、葦崎尋常高等小學校校長に缺員を生じ、當局其人選に苦しむ、干時召されて其校長に任じ、勤続十年の後西八代郡視學に榮轉して在職四年、再び轉じて現職に就く、校務の外山梨縣教育界及北巨摩郡教育會の評議員、副會長、幹事等に選任せられ會務擴張、社會教育の改善に執筆甚だ努む。

氏や居常質素、邊幅を飾らず、剛直にして自ら信ずる所何人と雖も屈することなし、且つ勤勉努力、實踐躬行以て兒童の範を示し、部下職員を信頼する事厚く、至誠以て斯道に盡すが故に、校内靄然統一して各職員の忠實至らざるなし、殊に頭腦明透博覽強記、總ての學術に長ずと雖も特に漢學及數學の造詣深し、氏斯道に従事する事二十有八年、奉職校は常に生地四周たりしを以て附近數方里皆其の薰陶に浴せり、郷黨其學徳を芙蓉の高さに比す宜なる哉。』

京都府周山尋常小學校長
北桑田郡高等小學校長

村山 彌一氏

賢なるは自ら知るより賢なるは無く、強きは自ら守るより強きはなし。村山彌一氏の如きは眞に克く賢に克く強き人と謂つべし、されば寛宏にして同情に濃なるも、敢て柔弱に陥るることなく、謙讓にして抑止するも、嘗て他の侮をうけず。兒童は喜んでその教導に従ひ、部下職員も亦樂んで命をさし、所屬衆庶は仰慕してその感化を受けんことを思ふ、氏の事業が着々として奏効するは、決して偶然に非るなり。



氏は、明治元年七月を以て京都府北桑田郡周山村字周山に生る、幼にして穎悟、長じて志を育英に馳せ、進んで京都府師範學校に入り、明治十九年七月業を卒へ、爾來同府下の小學校に歴任して訓導又は校長と爲り、到るところ成績頗る見るべきものあり、明治四十二年四月現職につき、以て今日に至る、校は氏の出生地なるを以て、村民の信用厚く、氏も亦た赤心を披瀝して奮勵努力しつゝあり、大正二年天長節祝日には、教育上の功績を録せられ、府より選

奨せらるゝの名譽を荷ひたり、以て其の功勞の顯著なる想ふべし。訓練教授管理に關する氏の主義方針に曰く、良心明智の指示する所に行動せしめ、善良なる興奮の下に善良なる行爲を反覆せしめ、改過遷善に敏捷快活ならしむ、利他を完全にして獨立自動に一致せしめ、明瞭なる知識を與へ秩序ある觀念を形成せしむ、應用を敏活にして實社會に活動すべき素養を與ふ、と、これ一面に於て氏の心的寫眞と見るを得べし徳望高き人格者なる哉。』

山部

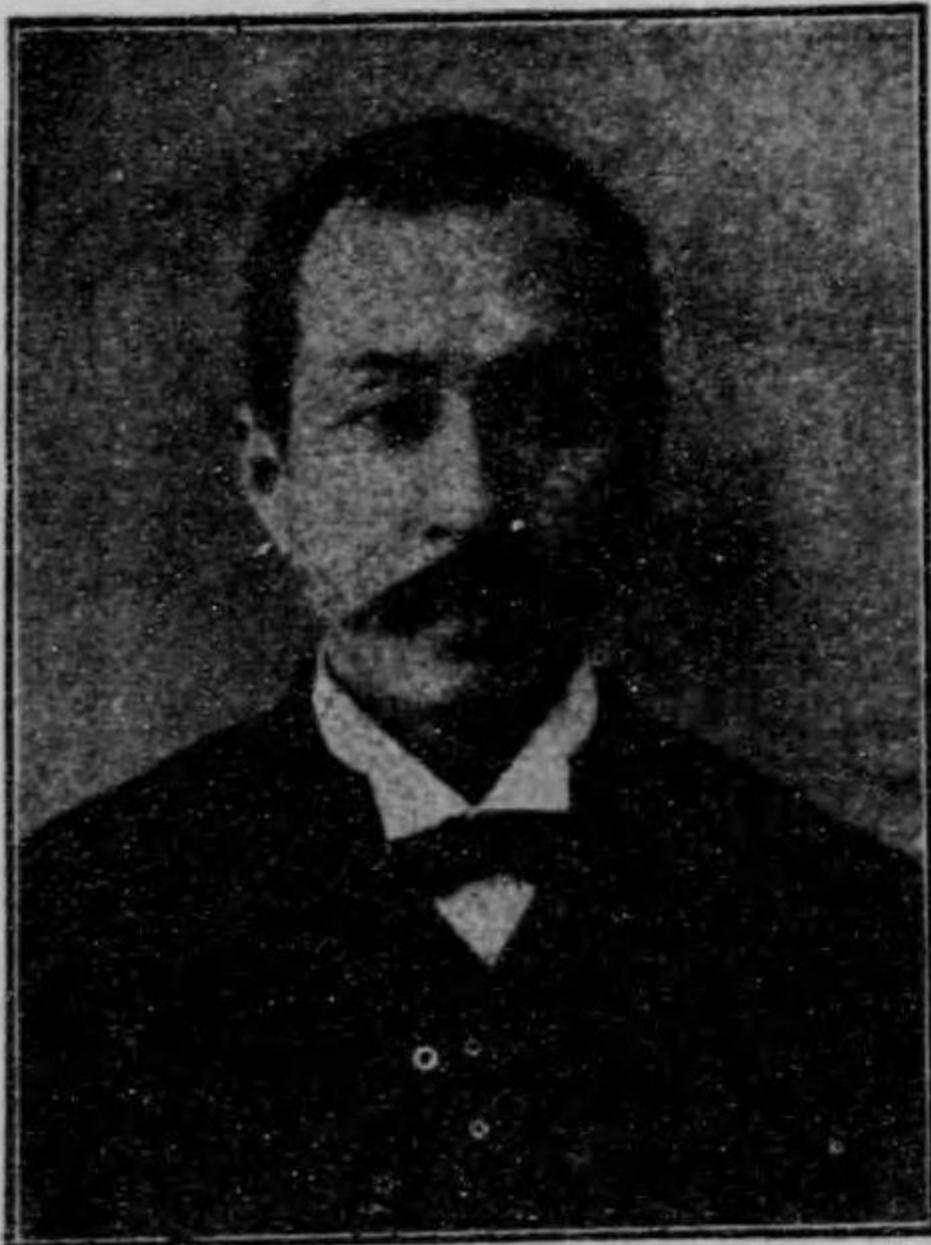
五六五

教育家銘鑑

福島縣平町第一尋常小學校長
石城郡

勳八等 武川教義氏

正確なる道德的識見の養成、高尚なる道德的感情の陶冶、堅實なる道德的意志の鍛練を爲し、至誠を以て根柢とし、己を持し人に對するに、正直、勤勞、親切、剛毅の諸徳を涵養し、忠良なる臣民を養成するは教育者當然の任務而已、然り武川教義氏の主義識見亦其軌を同くする所なり。



氏は元治元年七月を以て本縣白河町に生る、少にして育英に志し、明治十六年福島縣師範學校を卒業し、爾來縣下各郡に於て小學校長たる事十九年、各郡視學たること十二年、其教育界に貢献せし功勞の尠少なからざるものあるは素より論ずるの要なしと雖も、其明晰なる頭腦を以て、其豊富なる學識を應用し、之を正確なる經驗に徴し、適切なる施設を行ふに至りては實に推服に價するものあり、而かも嚴格の裡親愛の情に富み、和衷協同部下能く悦服其任を盡す、教授に於ては専ら實力の養成を主とし、管理は主として實用を旨とし努めて煩瑣なる形式を避り、職員をして先づ全校を腦底に藏めしめ、然る後部分的の事に従はしむ而して自らは其大綱を統べ、各自十分責任を以て獨立の行動を取らしむ。

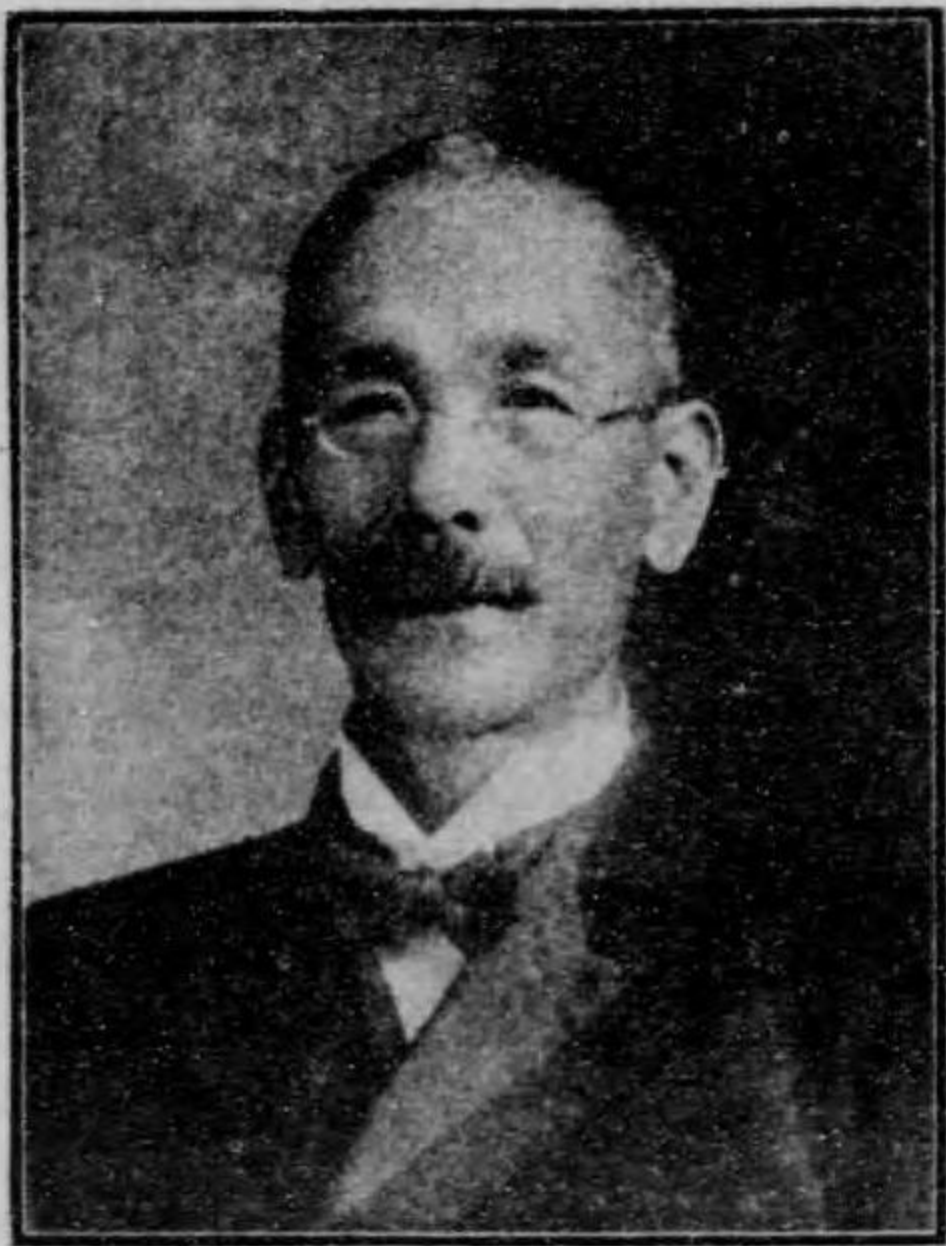
氏は町民に對し頗る親切に、其調和を圖りつゝあれども而も猶學校施設の一般に周知せられざるを慨し、努めて學校と家庭、青年及社會の聯絡に努めて其効實に多大なるものあり、氏天稟人格高きの人にして、至誠一貫福島教育界の重鎮を以て目され、而して血あり涙ある氏の性格、一般人士を感化したる效蹟偉大、臻る所に仰慕さる、氏又言論に巧、文章に長すと、嗚呼何ぞ壯なるや。

鑑銘家育教

北海道北鎮尋常小學校長
旭川區

勳八等 武藏卓氏

由來本校は北海道中部の野、旭川區の北一里、第七師團將卒の子弟を教育する所たりき、從て校風自ら軍隊的にして他校と趣きを異にするものあり、我武藏卓氏は過去三十有餘の經驗を以て今や任に此校に在り、嚴格端正の教育方針は氏の常に持する處、蓋し適任たるを失はず。



氏は安政五年三月を以て山梨縣下甲府市に生る、明治十四年山梨縣師範學校を卒へて押原小學校の訓導に任じ、校長心得を命ぜらる、同二十年中巨摩郡田富尋常高等小學校訓導に轉じ、同二十二年同校長に進み、同三十一年同郡西野高等小學校長に榮轉せり、然るに校務縮少の止む可からざるに會し、爲めに休職と爲り、轉じて靜岡縣駿東郡長原第一尋常高等小學校に任じ、同三十六年遠く北海道網走尋常高等小學校長に轉じ、樺戸郡新十津川高等小學校長空知郡砂川尋常高等小學校長に歴任し、同四十年病氣退職、翌四十一年壽都郡第二壽都尋常高等小學校長と爲り、町立女子職業學校長を兼ね、同四十三年兼職を

辭し間もなく病て休職と爲り、同四十四年現職に就き、大正三年勳八等に叙せられたり。

氏の豪邁英毅、頗る霸氣に富み、所信斷行の勇あり、然れども往々にして他の誤解を受く、蓋し超然たる卓見の猶能く他に會得せられざるに出づ、南船北馬席暖かならざるは之が爲めのみ、且つ氏は近時漸く健康を失し、精勵の素志を缺くと雖も、其の高潔偉大の人格は常に感化薰陶の實績を擧げ、人をして仰慕せしむるに至る、國家亦氏を撰んで叙勳する蓋し由因なくんばあらず、ア、。

鑑銘家育教

岐阜縣 稲葉郡 尋常 小學校長

村瀨助太郎氏



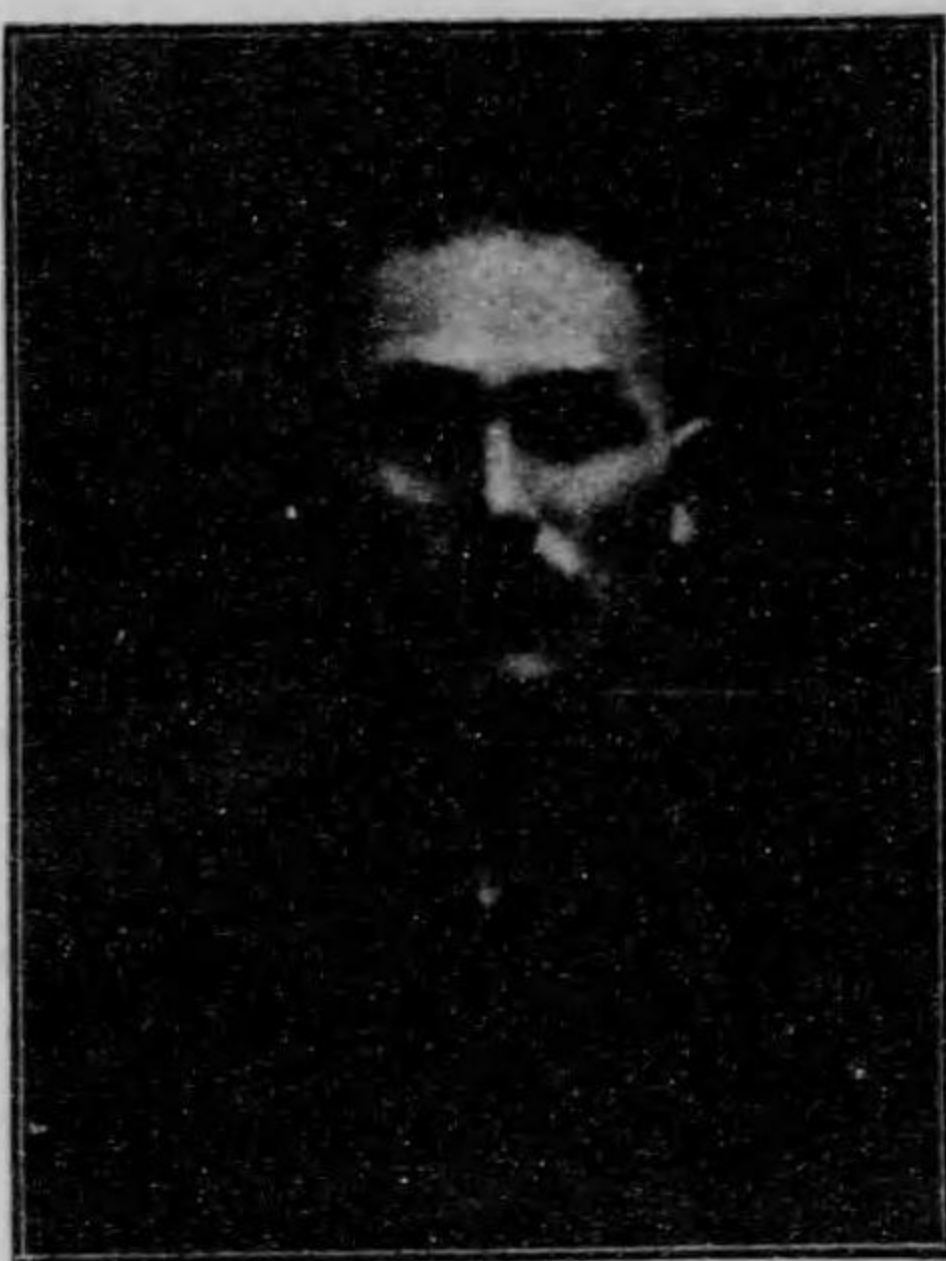
一夫耕さざれば、天下其の饑を受け、一婦織らざれば、天下其の寒を受く、されば一國の安寧福祉を増進せしめんとせば、民各其の業に勉めざるべからず、而して民をして其の天分を知らしめ、邦國共同福祉のため活動せしめんとせば、宜しく之に教なかるべからず、夫れ國民教育の任重且つ大なるかな、カント曰く人の人たるは唯教育あるに依るのみと、吾人は更に云はん、國家の國家たる唯教育あるに依るのみと、現任岐阜縣稲葉郡尋常高等小學校長村瀨助太郎氏の如きは、眞の人格的教育家として民を導くものと謂つべし矣。

氏は明治八年十月を以て本縣本巢郡七郷村に生る、人と爲り沈毅果斷、事に當るや克く前後經重する所を見一刀兩斷の果決衆をして畏服せしむるものあり、明治三十二年三月本縣師範學校を卒業し、直に本郡黒野尋常高等小學校訓導と爲り、同卅九年三月多年教育に従事し功勞顯著なるに依り本縣知事より賞賜せらる、同四十四年三月遂に現任と爲り爾來營々汝々校務の發展を圖り、専ら精神的教育の内容に重を置き功績着々として顯る。

夫れ教授の主とする所は、生徒の經驗と實際とを擴充して、其の思想界を形造し、因て以て興味を發するに在り、此の點に於て氏は最も克く成功せるものと云ふべし、其の訓練亦克く興味を變じて意思と爲し、意志を促して善良なる行爲と爲さしめ、兩者の進行提携間然する處なし、部下職員の統率や其の寬恩の愛克く衆を悅服せしむ所屬民の人望益厚く氏の令聲縣下に噴々たり。

福岡縣 前田尋常小學校長

村田義廣氏



外見を修飾して其實績の之に伴はざるは是れ世の通弊たり、其主義とする所根柢なく徒らに新潮を趁ふは是亦現時の實弊たり、我村田義廣氏茲に見る所あり、敢て邊幅を飾らず、至誠以て事に當り汝々營々其の實績の擧らんことには是れ汲々たり、而かも濃厚篤實、公明正大にして地方人士の信頼殊に厚く、言行自から衆の範たる可く、人格亦一般の師表たる可し。

慶應三年十一月福岡縣遠賀郡淺木村の地氏を生む、明治二十年同縣尋常師範學校卒業、鞍手郡直方高等小學校訓導に任せられ、以來同郡福丸高等小學校に、再び直方高等小學校に轉任し、更に三井郡久留米高等小學校、遠賀郡蘆屋高等小學校、同郡石峰高等小學校、同郡長津高等小學校に訓導又は校長として歴任し、同四十二年現任、同四十四年普通免許狀を受領す、其他遠賀郡教育界理事、遠賀郡校長會長等の重任に當り、縣教育界に貢獻する所頗る大なり。

由來前田の地、其人々微々たるものなりしが、製鐵所發展と共に益移住者の増加を見るに至り、延いて人情輕薄、言語野卑に陥り、風教上憂ふべき現象を呈するに至れり、氏赴任以來深く之を憂へ、規律、勤勞、誠實、禮讓の四徳を選び校訓として其範を垂れ、外に宗教、青年會其他の會合を利用して社會教育に盡瘁し、以て地方的缺陷を救濟し、且美點を助長せしめん事に腐心し、今や着々其實績を見んとするに至れり、蓋し教育者の任たるや、至誠示範の徳器を成就するに在り、氏亦多からざるの神聖的教育家なる哉。』

鑑銘家育教

ウ之部

五七〇

石川縣實科高等女學校長
江沼郡立

勳七等 瓜生余所吉氏

智者は智を弄して衆庶に媚び、能者は能を挾んで衆庶を瞞す、若し夫れ聰明叡智の君子は、社會の水平を高歩し以て衆庶の良心と爲り、主腦と爲り、案内者と爲り、教導者と爲る、我瓜生余所吉氏は眞に衆庶の教導者なり、身を教育界に投じて爰に三十有六年、遂に一日の寧きなく、遂に一刻の懈怠なし、其の言ふ所は必ず後進の羅針盤と爲り、行ふ所は必ず衆庶の柱石標榜と爲る。



氏は加賀國大聖寺の人、萬延元年五月に生る、明治十一年石川縣第一師範學校を卒業し、江沼郡錦城小學校訓導と爲り、同郡遷明中學校教員を兼ね、同十八年更に同郡京達有隣二校の訓導を兼ね、次て各校の校長心得と爲り、後三校の校長を兼ね、同二十五年學制改革に當り錦城尋常高等小學校長に任じ、大聖寺町學務委員たり、翌年普通免許狀を授けらる、同三十年石川縣地方視學に拔擢せられ、同四十年石川縣屬兼視學と爲り學務係長として令名あり、同四十一年視學專任、翌年勳八等に叙し、同四十五年現校長の任に就き、大正二年勳七等に陞叙せらる、其の間講習所教授を囑託せらる、等幹旋亦甚だ力む。

氏や人と爲り濃厚英邁、人に厚く己に薄し、至誠一貫職責を竭し嘗て寸時の安きなし、宜なる哉明治十七年文部省の賞に浴し、同二十年知事より多年の教職に従ひ品行端正教養切實殊に子弟の懷慕父兄の尊信を得て、功績狀を受け、同二十六年縣より第一等教育功績章を授けられ、後叙勳二回に及ぶ、氏の如きは眞に教育者の典範、現任更に其適任なるを信ず、氏夫れ偉なる哉。」

奈良縣南葛城農學校長
南葛城郡立

浦久保 太良平氏

名譽を欲し榮達を望むは何人も同じ、然れども名利に汲々として人道の何物たるを疎んずるは非なり、夫れ道に適ひたるの行は期せずして名譽と爲り榮達と爲る、只一片至誠の心あると然らざるとに由る、蓋し至誠は褒譽と毀貶との分水嶺なりとす、現任奈良縣郡立南葛城農學校長浦久保太良平氏は至誠を以て處世の方針とし、學徒教養の主義と爲す、其の今日の名聲は實に至誠の上に立ちて左右を決せしの證憑なる哉。



明治十二年十一月を以て奈良縣山邊郡福住村の地氏を産む、人と爲り英邁、頭腦明晰にして條理整然たり、明治三十三年奈良縣師範學校を卒業するや、在學中學業優等品行方正の故を以て奈良縣より賞與さる、留まりて母校師範の訓導に任せられ、翌年農業教員養成所に入り、同三十五年卒業す、任を本校教諭に奉じ、同郡御所男子高等小學校訓導を兼ね、次て農學校長心得と爲り、同三十六年現任校長に就き、同四十四年奏任待遇に進む。

氏は温厚の君子、其の職を本校に奉じて以來、常に研鑽自修の範を部下並學徒に示し、躬行實踐終始一貫至誠奉公に職を致し、漫然時代の思潮に誘はる、事なく、仁義忠孝、勤勉儉素、自から衛り自から修め、以て農業主義、國利民福主義の鼓吹に努め、青年を指導誘掖して其の社會に於ける地位を會得せしめ、醇厚の俗を興さしめんとす、今や郷黨知る知らざるの別なく、均しく其の人格を尊慕し、其の門を訪ふもの踵を接す、奈良北邊斗星の輝きある、蓋し氏の人格なりとす。」

ウ之部

五七一

鑑銘家育教

鑑銘家育教

ウ之部

栃木縣河内郡視學

上野一之氏

五七二

教育者は自ら地方の先覺者を以て任せざる可からず、其一進一退は地方教育の盛衰に關すると大なり、研鑽自重以て衆に範を垂るを要す、視學は更に一段の先覺者、所謂兵に將たるに非ずして、將に將たるの自信なかる可からず、單に教育行政官を以て止まる可からざるもの、獨り學校當事者をして職責を完ふせしむる而已ならず、自ら進んで教育の重任を負ふ所以を明かにすべきものなり

上野一之氏は眞に教育者の教育者たる自信と抱負を有する點に於て凡ならざる者あり。



氏は本縣の人、明治十一年七月を以て生る、人と爲り、温厚篤實にして城府なく、襟度宏量にして果斷、思慮精細にして事務の才あり、明治三十三年縣師範學校を卒業し、上都賀郡小學校訓導に任じ、同三十九年同郡北犬飼小學校長に進み、大正元年同郡今市第一小學校長に轉ず、到る所部下職員兒童は勿論父兄村民に信頼を受け、施設效を奏せざるはなく、令聲大に擧り、遂に大正二年を以て視學に擢

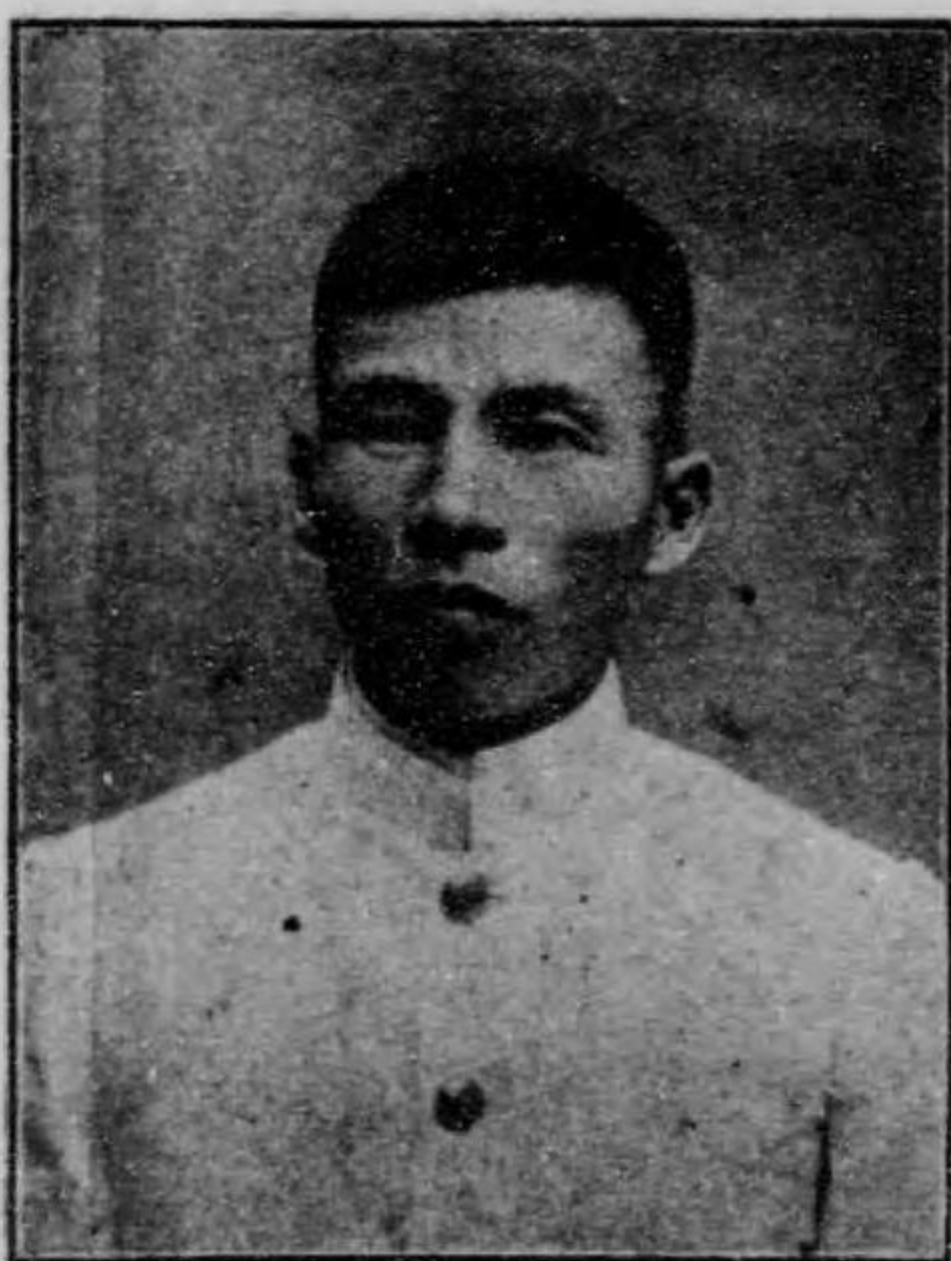
んでられ、河内郡を宰するに至る、當局者の明、河内郡の幸、蓋し氏に俟つや大なり。氏は現時教育の事、形式に傾き實際を離れ、教授の不確實と、實用的智識の養成を輕んずるの弊を矯め、訓育の効果を擧げん事を以て管下當事者に臨み、更に實業補習教育の發展と青年の指導誘掖とは國家教育上忽諸に附す可からざるものにして、教育者の任亦爰に在るを自覺し、奮勵努力、青年の氣力を善導し、教育會の活動を圖り以て忠良臣民の養成に資せんとす、氏多端能く努めよ。」

臺灣公館公學校教諭兼校長

正八位 氏家 榎 治 氏

鑑銘家育教

ウ之部



臺灣縦貫鐵道の一驛苗栗より中央北勢蕃地に出入する要地に沿ひ、後埔溪流域の平野迢々たる中央に位せる本校は、深く教育の修養を積み、驚くべき臺灣語の熟練を以て知られたる氏によりて管理せらる、その教育上に於て多大の効果を擧ぐるは決して偶然に非ざると同時に、この地にかゝる適材の教育者あるを思ふとき、新領土の前途に春海の如き希望の展開するを満足せざる能はず。

氏は明治元年三月を以て香川縣仲多度郡六鄉村大字上金倉に生る、幼にして學を好み、長じて丸龜なる龜山中學校に學び、次て並進書院に入り、明治十八年退院す、それより育英の途に志し、再び學に志して東京に遊び、郷里に歸りて小學校に教鞭を執り、明治卅一年八月渡臺して總督府國語學校の講習を卒へ、次て臺灣月眉公學校、樹杞林公學校に轉じ、大正二年十二月公館公學校に移り、同三年三月叙位の御沙汰に接す、氏の臺灣に在るや教育を以て生命とし又風土瘴癘の苦と土俗險惡の艱とを思はず、子弟の教訓化育はいふを俟たず、學校の經營管理等に就て、奮勵努力せる效績歴々枚舉に遑あらず。

其の人と爲りや剛毅不屈、其の志や恬淡寡慾、友誼に厚く後進に慈に、而も熱烈なる忠君愛國の至誠に至りては水火且つ避けざるの概あり、此故に夙に郷國を去て南天の雲に入り、土民蕃族の間に精勵して報國の大義を盡くす、氏の如き献身的教育家ありて、始めて南天の新附民衆また皇化に露ふを得べく、其の功勞や深且大なりと謂つべし。」

五七三

岡山縣眞庭郡視學

内田輝太郎氏

律令の完備は文明の標識なるも之を運用する人を得ざれば空文たるのみ、特に我教育事業に於て其切なるを感ず。嘗て單純なる屬吏の掌裡より轉じて教育實務者の手腕に歸せし、本邦視學制度は常に偏重偏輕當を得ざる事久し、近時漸く實成の期に至らんとし教育の實務に根柢を保ち、斯業の内容に充實を圖りつゝある教育家の輩出は邦家の一大慶事たり、視學内田輝太郎氏の如きは即ち制度活用上其人を得たる者と謂つべし。



氏は岡山縣上道郡平井村の産、明治三十二年三月同縣師範學校の業を卒へ、同縣同郡芥南高等小學校訓導を拜命し同三十五年三月同郡雄島尋常高等小學校長に榮轉拮据七年其教授訓練の功績管理統御の功果大に顯はれ、同四十二年選ばれて眞庭郡視學と爲り勵精今日に至る、氏は少壯有爲の教育者たると共に圓滿なる同情者老熟せる指導者として常に儕輩の尊敬を受け、特に修養の率先者として嘗て人に後れし事なく各種の講習會殆ど出席せざるなく、同四十四年文部省に視學講習を受け大正二年亦同省に於ける修身科講習を了したり、氏の學校に在るや克く部下職員を看護し、苟も過誤あるや諄々説きて悔悟せざれば息まず、教授に關しては其應用法に重きを置き、就中補習教育に力を加へ、施設實行の功績多く、視學の職に就くや部内教員の指導監督至盡公平なる措置と嚴格なる勵行とは、嘗て絆を緩めしとなし、是に於て歟郡内教育の實績駁々として舉る、氏の如き人格崇高に模範的教育者を得て一郡の視學に仰ぐ眞庭郡教育界夫れ多幸なる哉。」

福岡縣久留米市男子高等小學校長

宇高宜光氏



怡然光風霽月、氣宇濶達にして清廉潔白なる、穎脱爽瀟、潔然明鏡玉雪の如く、玲瓏として胸襟裡一片の汚塵を止めず、之れを以て宇高宜光氏の人と爲りとす、阿諛諂佞、他の髻を拂ひ、他の足を拭ひ、他の馬前に跪き、他の車側に蹲り、可笑からざるに抱腹し、可悲からざるに哀倒し、偏に其歡心を得、其感情を損せざらんとす、巧言令色、自ら卑しうして之れを耻とせず、眞に人心世道の式微嘆ずるに餘りあり、其風潮や我教育界にも惡弊を流し躬、重大なる育英の重任を帯びながら、敗徳汚濁、射利浮薄の時流に投じ恬然たるのみならず、却て新人を以て自ら任じ得々たるの輩多し、如斯輕躁諂佞の泥中に於て吾人見るを得たり、白華芙蓉、眞に宇高氏あるを知りて感措く能はず、嘗に兒童の薰陶者たるにあらず、之れを部下職員の敬仰に止めず、進んで世道人心の啓發者となし、郷黨の歡喜と聲を合して以て氏の人格を稱讃せんと欲する也。氏は久留米市の産、安政元年七月櫛原町に生る、明治十年四月長崎縣官立師範學校を卒業し、爾來小學及び中學教育に盡瘁し、明治三十二年七月現任と爲り、其教鞭を振ふ、肝膽を碎き、思想を凝らし、拮据勉勵眞に息む事を知らざるなり。其教授に於て規律正しく、一糸亂るゝを許さず、其管理亦頗る嚴格にして假借の餘地なし、然れども其部下職員に對して頗る溫籍、能く其言を容るゝの雅量あり、寬嚴度を得つゝ、職員と一致協力、其職に鞅掌し、未だ曾て他を見し事あらず、如斯教育者を有せる久留米市教育界夫多幸なる哉。」

鑑銘家育教

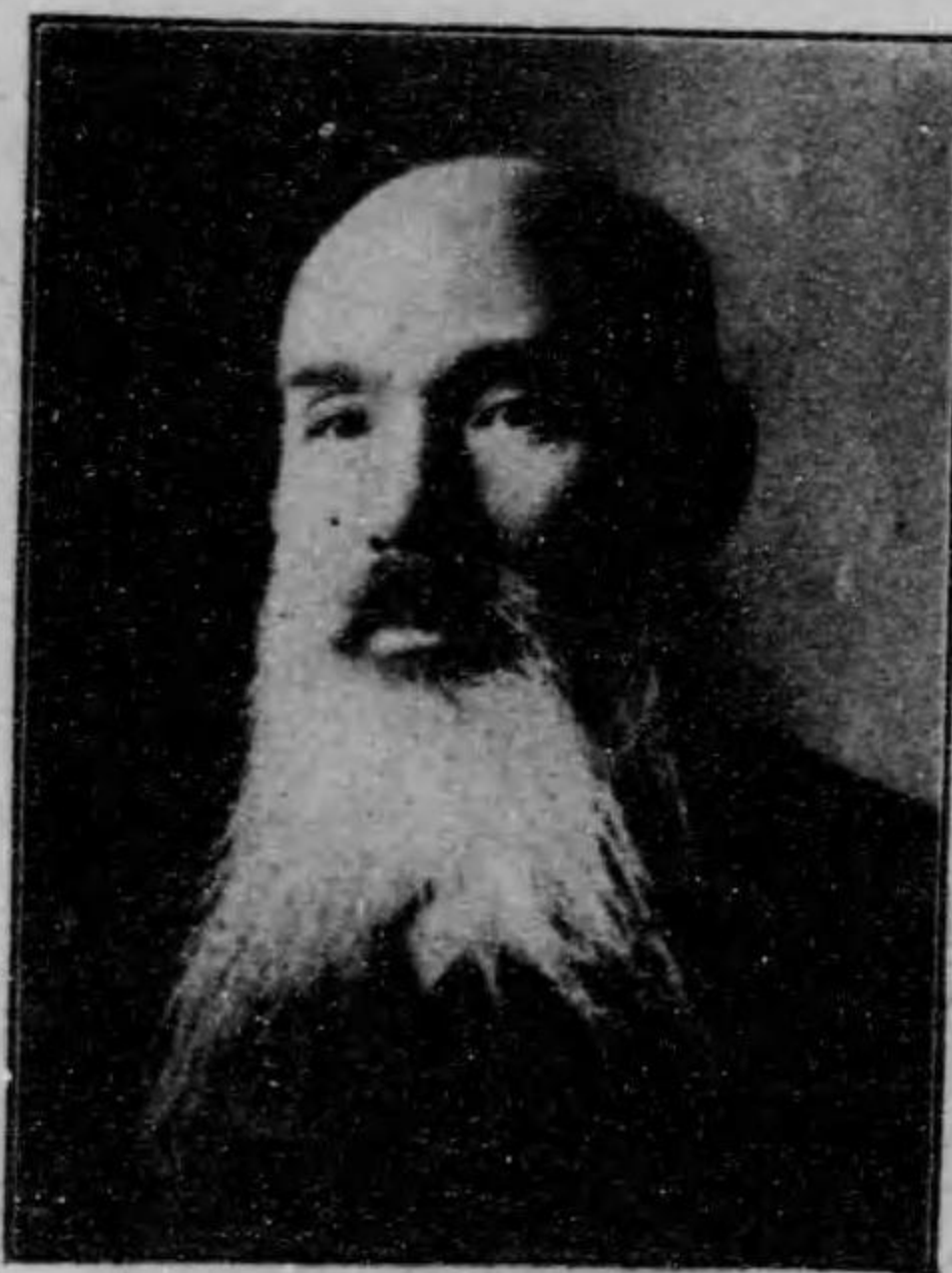
ウ之部

福岡縣會根尋常小學校長
企救郡會根高等小學校長

潮田佐太郎氏

五七六

明治九年初めて教職に就きて以來、爰に三十有七年、終始一貫一郷の育英を以て天職とし、年齒既に耳順に及ぶも鏗鏘として壯者を凌ぎ、率先力行職員を統督し、専心兒童を薰陶し、校運爲めに旺盛を極め、斯界の仰視する所と爲り信賴徳望益々加はる者、之を潮田佐太郎氏と爲す。



氏は安政元年十二月を以て本村に生る、資性温厚篤實にして所謂君子の風あり、居常誠を以て己を持し毫も時流を追はず、着々の奏效頗る多きが中に、明治四十一年の頃當時僅に六學級なりしもの義務教育年限延長及高等小學校併置の爲め、俄然兒童の劇増を來し、十四學級編制の必要に迫り、校舎の規模之に馴はず内容改善の實を擧ぐるが如き到底望むべからず、氏は東奔西走當局と協議し、數ヶ年に渉る繼續事業として校舎の建築に着手し遂に今日の設備を了へ、示範指導其宜しきに適ひ、職員亦研究的態度に富み、兒童の學習着實にして成績見るべきに至る、蓋し氏の努力の致す處たらざるはなし。

氏や郷土の研究に努め、常に地方適切な國民養成を期し、氏の徳望は其根柢の深遠他に比なく、從て訓育の効果亦著し、其他就學及出席獎勵、清潔衛生、基本財産蓄積、或は社會教育盡瘁の如き皆氏の努力に出づ、曾て郡教育支會の副會長たり現に其の評議員及び會根區會長たる事十數年、猶青年會の統一を圖り社會風教の改善に盡す、宜なる哉縣郡其他の行賞數次、次て文部省の選奨に浴す、今や郷黨均しく氏の徳を仰ぎ、縣下遠近に名聲を馳す、嗚呼偉なる哉。』

鑑銘家育教

ウ之部

山形縣興讓尋常小學校長
米澤市興讓高等小學校長

歌川源太郎氏

五七七



碧、澤に藏れて自ら渺、玉、山に收りて光を頼む、大丈夫此の温籍なくんばあらずと、此語に宛然たるの人、之れを歌川源太郎氏と爲す、氏温潤の資、包容の意を有し、内に徳を藏し、光を包みて外に圭角見はれず、度量氣象よく萬物の上に卓爾として、更に功を逐ひ、名を求むる事なし、是れ即ち仁人と云ふべく君子と稱すべし、現時氏の若きは寥々晨星も雷ならずと云ふべき也。

米澤市元中馬口勞町の地、安政元年正月を以て氏を生む自文久元年至明治三年米澤藩興讓館に入り専ら漢學を修む、明治四年米澤中學校に入り、同九年千葉縣師範學校に入學、同十一年同校小學校師範科を卒業し、千葉縣湊學校訓導に任ぜられ、同十二年より山形縣東置賜郡、赤湯沖郷及び米澤市の小學校に訓導又は校長として勤務し、同四十年現校に赴任、孜々經營曾て勞を知らず。

氏や徹底實行を以て訓育の主眼と爲し、熱烈なる信念と不撓の努力とを以てせざる教師の力は微弱にして、徒らに時間と勞力とを浪費するに過ぎずと、之れ氏が常に口にする處にして、部下職員に對するや頗ぶる懇切にして、各々其長を執り、適材を適所に置き以て校務を分擔せしめ、又常に職員自己の修養を怠らざらん事を促し、日夜心を智徳の修養に潜め、以て兒童及び青年に範を垂れんとす、教授上苟も理論に終るを好まず、常に實力の充實を計り、管理亦宜しきを得、則ち校裡春色靄然たるの中、薰陶の好果着々顯る、大正三年六月叙勳の恩命に浴せらる故ある哉。』

石川縣越路高等小學校長
鹿島郡

卜部義太郎氏

教育の途多岐に亘れども一言以て掩へば忠良なる臣民を養成するに在り、肇國以來帝國の道義なるもの實に忠良なる精神に依りて策造せられたるなり、我國教育者に望む所實に此點に在り。

卜部義太郎氏は文久二年五月本村に生る、夙に教育者たらん志望を以て明治十二年より同二十年迄縣下小學教員の職に在り、後ち師範學校に學び、同二十三年七尾小學校訓導を拜し、爾來數校に

歴任し、同三十七年現職に就き、農業補習學校長を兼ね、以て現今に至る、資性溫良にして着實、校務に盡して倦まず、殊に田園趣味を有し、餘暇あれば鋤鋤を手にし、栽培に努め、試作に熱中し、産業に留意す、克く郷土的趣味を喚起し、教育の實際に當り、成績良好、徳望を一身に蒐め得たるもの亦所以なきにあらざる也。



誠意の同情、意見の尊重、勤勞の感謝、教壇上の教師に對する無限の尊敬は、引て兒童の精神界を感化し、教師の一言一行は悉く兒童の信頼と爲り、崇敬と爲る、人の師として望む所是より大なる報酬なく、之れに優る快樂はなかるべし、學校は不偏、不黨、清淨無垢を精神として、村民の中心を以て任じ、健全なる家庭愛情審美的情操の涵養に力め、青年をして血氣の勇を戒め、忠良なる臣民たるを誨め、社會の覺醒は現代に於る絶大の要求なり、何ぞ乃木大將の少なきや、否之れありとするも社會の表明に力めざるを遺憾とす、氏は實に斯の如きの精神を以て訓練し教授す、蓋し越路の地、良校長を得たりと云ふべし、村民氏を徳とし敬慕して措かざるもの、理ある哉。

福島縣野田尋常小學校長
信夫郡

正八位
勳八等

宇田徹事氏

稜々たる氣骨は深く胸底に藏し、綿々たる温情は常に眉宇に徘徊す、而も自信極めて強く、權貴に阿附せず名利に跪坐せず、常に寡黙を守ると雖も、意既に決するに於ては剴切なる論議人をして驚倒せしむるものあり、宏量にして人を容れ義に重く仁俠自ら喜ぶの風あり、之を現任野田尋常高等小學校長宇田徹事氏の性格とす、蓋し臆測猶足らざるを憚る。



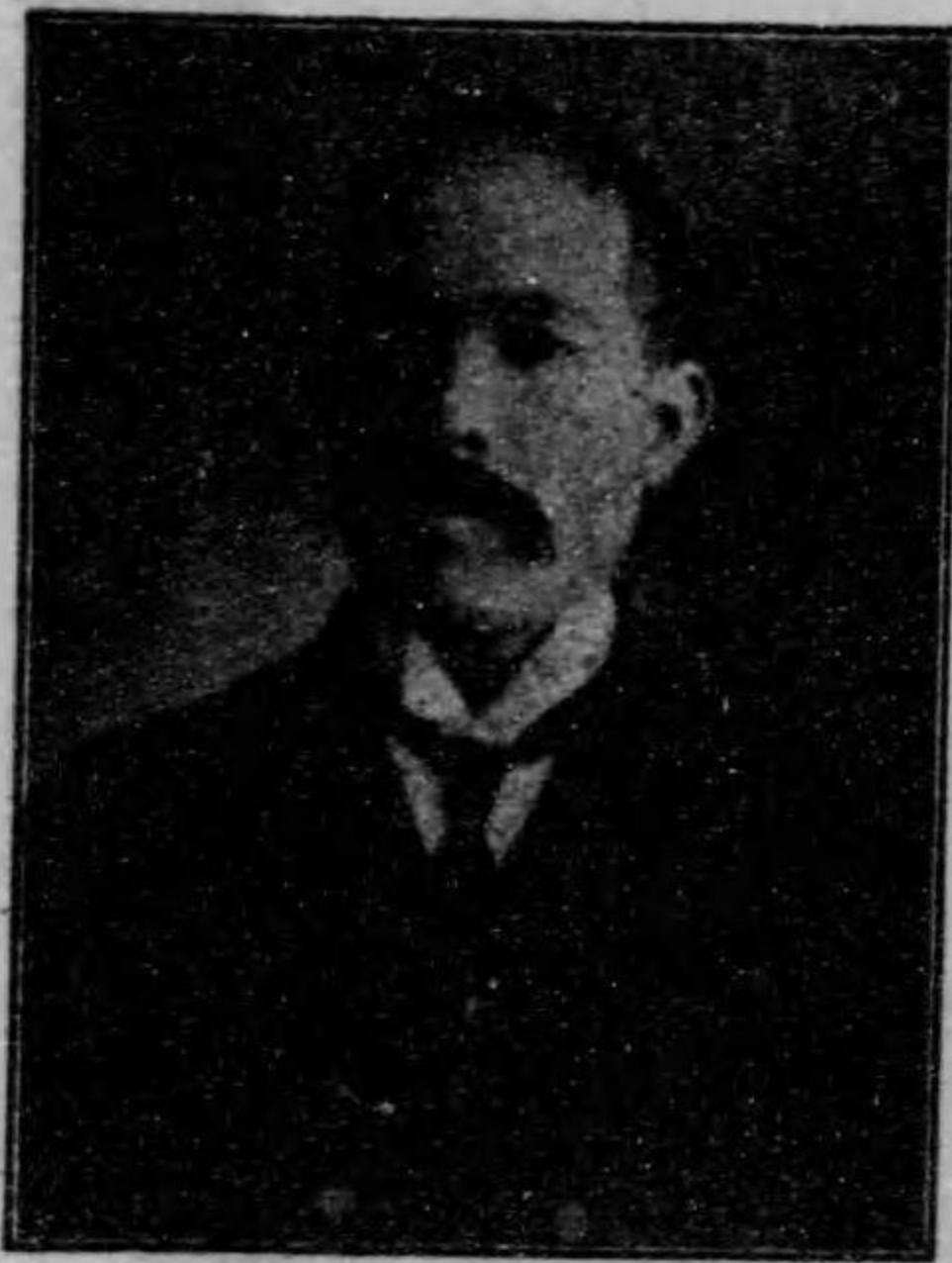
氏は福島縣安達郡二本松町の産、安政四年二月を以て生る、明治八年福島縣師範學校の前身たる小學校則講習所を卒業して大石小學校訓導に就き、翌年保原小學校訓導に轉じ、同十八年安達郡書記と爲り、翌年再び小學校に入る、同廿六年保原小學校長に任じ、同三十五年拔擢双葉郡視學を拜し、同三十八年田村郡視學に轉ず、同四十二年安積郡視學に移り、同四十四年安積郡立安積實科高等女學校長事務取扱を兼ね、更に大正二年耶麻郡視學に任じ、幾許もなく現校長に就く、前後勤續四十年稀なる哉。

其視學の職に在るや、公平を楯とし苟も私曲巧言の徒あれば誠む事嚴に、勵精其職に盡し至誠身を以てする者あれば之を賞するに吝ならず、爰を以て郡下肅然とし效績を表はし、人以て異材とす曩に文部省は多年視學の職に在りて效蹟顯著なる故を以て金百圓を賞與し、次て正八位に叙し勳八等を授けらる、氏や耳従に近く老境既に至ると雖も鏗鏘壯者を凌ぎ、縣下教員の先輩として衆の敬服する處たり、帝國教育會は氏の功績旌表として功牌を贈らる偶然ならざる也。

福岡縣 潮田幾之助氏
京都郡 行事高等小學校校長

潮田幾之助氏

本校は福岡縣京都郡延永村大字下津熊字芝原にあり、二階造二棟、平屋造一棟、寄宿舎一棟及び校長住宅一棟あり、其坪數五百七十四坪八合にして、教授用器械器具等殆んど完備し、基本金は同組合立豊津高等小學校の分と共に一千五百七十四圓餘に達し、學級は十にして、兒童數は五百六十人餘なり、以て村落には有數の學校たるのみならず教務上の於本郡教育界の推稱たり。



此處に校長たる人を潮田幾之助氏とす、氏天性温厚篤實にして敢て事を苟もせず、孜々營々熄む時なく根氣頗る強くして研究し盡すに非ざれば止まざるの概あり、慶應元年二月十日縣下企救郡曾根村大字曾根に生れ、明治二十年九月福岡師範學校を卒業するや、直に小倉市小倉高等小學校訓導に任ぜられ、同二十八年十一月京都郡行事高等小學校訓導兼校長に榮轉したり、爾來孜々教へて倦まざる二十年間一日の如く常に勇健活潑の生徒を養成せんとし、而も又質素の美風を失はず、勤勞を厭はざるの習慣を造り、自治の精神を以て之を訓練せり、教授は確實に習得せしめて、自習を重んじ反覆練習せしめ、苟も時勢に拘泥せず管理頗る嚴密妙を得たりと謂つべし。

職員に對しては懇切を極め注意を以て能く指導す部下亦た能く子弟の如く怡々として命に従へり全郡組合の學校なるを以て家庭に直接すること難しと雖も猶質素勤勉義勇奉公等の道德心を中心と爲し着々遂行しつゝあり、徳望一郷に洽ねく、子女の敬慕厚き故なきにあらざる也。」

鑑銘家育教

茨城縣 大子町尋常小學校長
久慈郡

内田熊藏氏

深き蘊蓄と大なる抱負とを以て育英界に投じ、率直にして邊幅を飾らず、身を持する事謹嚴にして古武士の氣象を有し、和漢地歴の學に通じ、任地の學校何れも新築を完成し、其薰陶に浴せし者絶えず書を寄せて慰め、縣下に聲名の噴々たる者、蓋し我内田熊藏氏の如きは稀なり。



氏は本縣鹿島郡の人、元治元年九月中野村に呱呱を擧ぐ、幼時齋藤健介に漢學を修め、小學校を卒はるや外祖父荒原元之丞氏に和漢學を習ひ、水戸講習學會に於て漢學及普通學を修む、先に師範學校に入る心あるも、父兄の許す所とならず、明治十六年檢定試験に合格して訓導と爲り、次で試験係等を命ぜらるゝ事再三、他府縣の招聘を却くる事屢次、克く大子農學校、大子女子技藝學校の設立を唱へ創立委員と爲り、而して現職十年に至る。

氏や確固不拔の精神に加ふるに精粗漏らざる注意周到の素質を有し、部下を信任すと雖も時に細密の視察を以て指導し、言急に至るも後淡然として跡なし、校内和氣霽々たる宜なる哉、諧謔時に職員の頤を解き理想を談じて後進の指導に資す、正義公道部民の示範者と爲り、世の辛酸を嘗め盡したる修養は偉大なる人格と化して指導の任に當り、明治二十三年多賀郡に青年會を起して其筋の警告を受く、現に談話會を組織し地方發展に努め、父兄に親しみ青年の風儀を矯正し學術の進歩を圖り、各種講演に臨みて風教の作進に力む、宮内省に某あり、嘗て氏の教を受く、明治天皇の御物二點を氏に贈る感銘以て家寶とす、又餘暇書畫に嗜しむ壯なる哉。」

鑑銘家育教

岡山縣津山女子尋常小學校長
苦田郡

植月 皓氏

過去四十年間超然として名利の外に立ち、敢て邊幅を飾らず時世に阿らず、孜孜屹々育英を以て自己の天職とし、研鑽修養一日も怠らず、其劃策經營する所益々良果を收め、校風施設大に觀る可く公私の賞賛を受くると屢次、今猶日夜勵精、心血を斯道に注ぐもの我植月皓氏其人と爲す。氏資性篤實濃厚、人に接する城府を設けず、事を執る綿密丁寧、兒童に對して諄々慈悲、一小事を企つるも猶部下に諮り具さに利害得失を考究し、宜しきに從て施設し必ず實踐を期す、故に事に遺算なく業に蹉跌なく圓滿解決實行を見る、現下廿二學級の兒童二十五名の教員は正に是れ一家族の如く、各其業に勵み其事を樂み、部下職員兒童は勿論父兄、所屬民の尊信日を追て益厚し。



氏は殊に慈愛に富み、困窮窘迫の狀を目撃し、或は父兄の實話を聴き繼ぐに涙を以てす、身體健全意志亦鞏固氏の缺動を見たることなく、常に衆に先じて出校し、點燈猶當日の整理を了せざれば退出せず、平素質實躬行を尙び苟も浮華虚飾に傾くものは悉く排け、女兒のリボン簪の如きは絶対に用ゐしめず、學年末賞與の如きも總て貯金臺紙及切手を以てし勤儉貯蓄の美風大に興り今や兒童の貯金總額五千圓に垂んとす、從順にして愛敬を旨とし、靜淑にして禮讓を重んじ、質素にして勤勞を貴ぶの三則を校訓とし着實に實行に力む、苟も風教に關する團體會合に氏の努力を見ざるなく、訓導牧氏と共に津山の二星として徳澤洽く、効蹟噴々たり、大正三年六月官其功を録し勳八等に叙し瑞寶章を賜はる宜なる哉。』

埼玉縣北葛飾郡杉戸尋常高等小學
校長兼杉戸女子實業補習學校長

漆原 嘉吉氏

社會教育を行ふ所以のものは補遺改善を要するものあればなり、先づ町の社會狀態を精細查詢し、缺陷と美點とを考へ、長を進め、短を補ふ可く具體的に講話の資料を記述し、名けて杉戸町社會教育方案と號するものを編す、全三冊に亘り千餘頁の冊子たり、要するに漆原嘉吉氏が、系統的教育を行ひ、其の到着點を明にせるものと云ふ可し、氏の用意推服に堪えたり。



氏は明治十七年八月を以て、北埼玉郡太田村に生る、明治三十七年縣師範學校を卒業し、直ちに杉戸町清松尋常小學校長に任ぜらる、時に年齢二十にして其重任に就く、蓋し異數なりとせん、而も明晰なる頭腦と濃厚着實なる資性とは、一指を他に染め得られざるに至らしめ、衆以て捲舌の想あるもの眞に天才と云ふ可きか、轉じて現職に就き、更に一段の光輝を増し、今や令聲轟々たるを見る。

氏や最も社交に長じ、雅量に富む、辯舌を能くし、其風發の論以て人をして呆然たらしむる事屢なり、然れども歸結する所實に教育問題にありとす、常に愛情を以て部下に接し、部下をして不足を啣たしめず、新任者猶月餘にして氏に同化す、其乙種教授法研究、自習時間、成績比較表等は教授の効果に對する氏の獨創の方法にして他の範と爲す可く、又朝禮訓話、校庭當番、校外指導等の訓練事項に至りても、亦能く良果を收めつゝあり、父兄との提携を謀り、教育有終の美を收むるに努め、父兄並に一般部民の敬慕淺からざるもの、眞に氏の非凡なるの致す所とす、偉なる哉氏。』

石川縣稚松尋常小學校長
能美郡

有東常次氏

傾聽せよ夫れ國家の干城は那邊に在りや、人或是此奇間に驚くあらん、或は威猛群雄を懾伏すべき名將軍を以て答ふるあらん、然り良將は國家の干城たり、然りと雖も吾人は信ず、茲に熱誠を盡し、一身を屠して國民教育に鞅掌し、第二の國民養成に盡せるの人、眞に國家の干城なりと、我有東常次氏其人なる哉、熱誠を盡して國家の爲め力むる豈良將に輸する處あらんや、噫。



氏や明治六年三月を以て呱呱の聲を擧げ、同二十九年、石川縣師範學校を卒業し、縣内能美郡寺井尋常高等小學校に奉職、同三十二年同校長兼任以來、同三十三年、山口尋常高等小學校に、同三十七年、栗津尋常高等小學校に歴任し、同四十三年四月、現校に赴任、訓導兼校長として今日に及べり、氏や其の間精勵にして息む事知らず、夙夜斯業の爲めに思ひを練り、心を盡し拮据經營し、縣より郡より、職務格別勉勵のため賞状を享けし事數次に及ぶ、明治三十七八年戰役中、職務格別勉勵勤勞不尠に付其賞として

文部省より金員を給與さるゝの榮を擔ひ、郷閭又氏を敬慕して措かざるに至れり。或は劣等兒の取扱法に、或は校具の改善、兒童の貯金に、其至誠を盡して效果の完たからん事を期し、質實なる氣風を振作し、實力ある學童の養成に盡し、一方家庭と學校との連絡、協力を圖り父兄會、家庭訪問等によりて之れが機を作り、又青年夜學會に於て、一郷青年のため盡瘁して其進歩向上を期する等誠に氏の功や多大、吾人國家の干城と謂ふ蓋し過言ならざる也。」

大阪府東成郡平野尋常小學校長
杭全高等

鵜飼吉久氏

人格主義、實行主義、平民主義を以て部下及部民に對し、其の度量は能く人を容れ、一般の信頼は目を追ふて厚く、心服敬慕益々加はり、内外一致協力誠意熱心學校教育の爲め、奮勵努力する者之れを鵜飼吉久氏と爲す、而して學校内容の充實、形式の整理と相俟ち殆んど理想の域に達す。

氏は和歌山縣の人明治七年五月を以て生る、資性温厚着實勤勉にして常に崇高なる理想と剛毅なる氣力を有し、慎重なる考慮と穩健なる方法を以て本務を盡さんとするの精力家なり、明治二十九年大阪府師範學校を卒業し、同市小學校に職を奉ぜしも、同三十六年病牀の爲め職を休め、其年學事視察の目的を以て北米に漫遊し、在留數年彼の地の教育狀況、人情、風俗、習慣等を詳かにし、歸朝後再び教職に就き以て今日に至る。



氏は忠君愛國の精神充實したる國民の養成を期し、校憲七條を制定す、之を體得し道徳を以て自己の生命と覺悟し、躬行實踐兒童訓育の實を擧げ、善良なる校風を樹立し、教化一郷を風靡せんことを期す、地方教育の主義方針たるや、教育勅語の趣旨を奉體し、學校は地方文化の源泉なれば、常に智徳の修養を怠らず、其心術を皎潔にし、職務に全力を盡し、學校を信頼し、教師を尊敬するの念を深からしめ、諸種團體の代表者と互に相提携し、一致協力以て地方自治を啓發し、地方民の教育を促進し、學校教育と相俟て圓滿なる教育の實績を擧げ、以て國運の隆昌を期せんとす、今や其圓滿崇高なる人格と高潔なる品性とは、斯界に嘖々の名聲を博す盛なる哉。」

岡山縣八濱尋常小學校長
兒島郡八濱高等小學校長

上野善市氏

五八六

校舎は既に郡内第一位に居り、基本財産として學校林四十町歩、二十萬本の黒松あり、時價正に五千圓に達す、外に練習林八百餘坪、松四百本桐四百本の兒童植樹と、有價證券四千壹百圓、現金二百五十拾有餘圓とを有する、八濱小學校は實に我國模範村として内務省の選奨したる八濱町の中部に位置す、蓋し歴代當事者の功多きに因るは勿論なりと雖も、亦以て任を當校長に奉ずる上野善市氏の性格と從來の功績とを窺ふに足らん歟。



氏は本縣上房郡の人、明治九年十月を以て有漢村に生る資性聰慧思慮緻密、周意周到にして機に敏く、才氣縱横にして加かも嚴正規矩を失はず、明治三十一年縣師範學校を卒業し、上房郡八川小學校訓導、有漢小學校長、淺口郡西浦小學校長に轉じ、後黒崎高等小學校長に就き、再び西浦小學校長と爲り、大正三年現職に移り、附設女學校を兼ね、前任校を去るに臨み同地有志者は氏の功績に酬ゆる爲め紀念品懷中時計並に寫真一葉を感謝狀に添贈せり。

氏や常に人格の修養、品性の陶冶に努め、有益なる教育書を耽讀して見聞頗る廣し、且つ文筆を能くし流暢の辯あり、説論條理に叶ひ、人をして傾聽せしむるに足る、訓練教授其他現校に施す所何れも前校長の主義方針を踏襲すと雖も、亦自ら一家の見識を抱有し、着次之が實行を期す、勉めて町村の自治に接近し、青年及社會の兩教育に意を致し、益々敦厚勤儉の美風を發展助長せんとす、此町にして此校長あり、當局者亦人を得るの明を有すと言ふ可き也、氏の譽彌高きを知る。」

山梨縣八代尋常小學校長
東八代郡八代高等小學校長

内田音吉氏

荀子に曰ふ、「君子は譽に誘はれず、誹に恐れず、道に卒ひて行ひ、端然己を正うし物のために傾倒せられず、夫れ之を誠の君子と謂ふ」と、是れ先秦諸家の理想的人格を描寫せるものにして同時に吾人の世に處して、爾く學ばざるべからざる所、誠や士の操守嚴然たる、世の毀譽褒貶に介意するなく、端然外物に累せられざるは、浮薄の世遂に求め難きかな、現任八代尋常高等小學校長内田音吉氏の如きは眞に斯種の典型にして、吾人の欣仰措く能はざる所とす、偉なりと謂つべし。



氏は文久元年十二月を以て山梨縣東八代郡相興村に生る、明治二十二年四月本縣師範學校を卒業し、東八代郡富士見小學校長、石和尋常高等小學校長等を経て、同三十三年五月東八代郡視學と爲り、更に西山梨郡視學に轉じ、小學教員試験委員を兼ね令名藉甚、管内教員異口同音其の徳を稱す、同三十六年九月再び教務に執掌し現任と爲る、在職今に至りて十一年致々として實績を擧ぐるに努む。

本校は、諸器械教具の完備郡内有數の模範校たり、而して收容する所の兒童學級數十五、二十の職員皆氏の意を體し、訓練に教授に各切瑳琢磨して其の鋭を竭す、其の實績隆々として四隣の龜鑑と仰がれ參看者常に絶へず、地方教育に關しては氏に特見あり、教職員を各部落に住ましめ以て青年の修養に便し其が指導に當らしめ、以て風儀の改善を圖れり東八代郡誌編纂委員に擧られ盡力三年一大冊誌を見るに至る、氏の令聲噴々たる偶然ならん哉。」

五八七

福岡縣今元尋常小學校長
京都郡今元尋常小學校長

植村勝一氏

世話好きの人にあらずんば幼年兒童の教者に携はるを得ざるべし、誠實、熱心、親切、勤勉は亦初等教育者の必要なる條件とす、福岡縣京都郡今元尋常高等小學校訓導兼校長植村勝一氏は、事に當つて頗る熱心にして、勤勉努力飽くことを知らず、物事に誠實にして親切なり、人の爲めに奔走するを喜び勞と費とを厭はず以て職に勵む、初等教育者として適任者たり模範者たるを知る。



氏は此の天資を以て生徒を教訓し、『禮儀を守れよ』、『勤勉せよ』、『勇氣なれ』を校訓とし、教授は、教材研究を第一とし、生徒をして反覆練習せしむるに勉め、自治的學習を爲さしむるを目的とす、氏の見界夫れ深遠なりと謂つべし、職員に對しても、懇切を主として指導を怠らず、深く細事に關係せず、唯熱心に奮闘努力し、一に國家の爲めに勤めしむるを第一義と爲しつゝあり、村民に對しては『なるべく接近して、學校と家庭との連絡を採り、家庭教育の忽にすべからざるを説き、學校教育と相俟つて子女の成人を完成せんとし、頗る巧妙に最も圓滑に進行を圖りて止む時なし。』

氏は師範學校出身に非ずして、中學校出身なり、明治二十二年七月豊津中學校を卒業し、明治二十四年六月履教員を拜命し、同二十五年七月准訓導と爲り、同二十七年四月訓導に任ぜられ、爾來勤績して、同四十年四月現今の學校に奉職し、前後二十有八年間教職に従事して渝らず、終身育英事業に盡瘁せられ兒童の敬慕厚く所屬民の信頼深き、偶然にあらざるなり。

鑑銘家育教

鑑銘家育教

岡山縣林田尋常小學校長
苫田郡林田高等小學校長

植月寅吉氏

近時社會の風潮、虚飾奢侈に流れ、兒童青年の將來に及ぼす影響の大なるを慨し、各地競ふて風會、青年會、處女會、其他各種の團體を組織し、風紀改善の實を擧げんとす、植月氏亦之を憂へ、學校教育は國運の基礎たり宜しく社會の改良を第一とすべしと、先づ躬らを修め、以て之れが範を爲し、忠良堅實なる國民を養成するは、責任一つに教育者の双肩に懸れりと説く。



氏は慶應二年十二月、本郡津山町に於て生る、明治十九年本縣師範學校を出て、二三小學校の訓導或は校長を奉職し、同三十四年現任校長に任ぜられ以て今日に至る、前後勤績實に三十年を閱す、効績顯著、夙に普通免許狀を受け縣其他の選擧を得たる數次に及ぶ。

氏は意志鞏固、堅忍、誠實、勤勉、廉潔、質素の諸徳を修め、殊に進取の氣象に富む、兒童の固性を重じ、個人訓育の法を設け、訓練要目を定め、實踐躬行、自治精神の涵養に力む、二宮尊徳、乃木大將を崇拜せしめ、形式的教授を斥け自學輔導主義を採り、實力養成を主とす、部下に對する公正、寛容親切にして同情心厚く、卒先勤儉の範を示し、人格と實力の修養に勉めしむ、所屬民に接する親切、敦厚質實の氣風に化せしめ殊に公德心を養ふに盡す、各種會合の機を利用し、忠孝の道を講じ、風紀の矯正、勤儉貯蓄の必要を説き其實行を確實ならしむ、社會風教の改善には有力家と協力之が救済の法を講じつゝあり、斯く精力主義を以て村民の敬慕措かざるものある敢て奇とするに足らず、嗚呼偉なる哉。

香川縣 高松市四番丁尋常小學校長

上原伸太郎氏

五九〇

深思熟慮の爲めに、勞力を費すを惜む事勿れ、夫れ輕舉蹉躓、爲めに徒費せる勞力の損失に比すれば、果して其得失如何ぞや、上原伸太郎氏、謹直にして篤實、世俗に拘泥せず、時流に投ぜず、自ら信じ、一貫實踐に勤む、加ふるに思慮縝密百の施設一の遺漏あるなし、如斯好適人格者を其愛兒黨育の校長として有せる、高松市豈多幸ならずや、其父兄たる者又至福と謂つべし。

明治十一年三月香川縣綾歌郡陶村、氏を生む、同三十二年三月同縣師範學校卒業、同年四月同縣師範學校訓導に任せられ、同三十三年六月同縣綾歌郡坂本尋常小學校訓導に任せ長に轉じ、同三十六年八月同縣香川郡佛生山尋常高等小學校訓導兼校長に、同四十八年八月現任となる。



以て校風の振起を促し、進んでは所屬民の啓發を誘導し、其貢獻する所極めて多大なり、漸進的にして、先づ學童訓育の果、完全ならん事を圖り、其部下職員の協力に勤め、一郷青年の向上を促し、進んでは國家社會の進歩に努力せんとす、坐すに秩あり、行くに序あり、氏が理想や眞に之れを洞察し、堅實不拔なり、氏が擧ぐる効果や實に聳目して待つ可きなり。

福井縣 今立郡中河尋常小學校長

上田藏之助氏

洋々たる雅量は以て衆を統率すべく、堅緻なる思慮は以て大事を遂行すべく、恪勤精勵は以て後進の範とすべし、今や其の功績昭々部下所屬民に對して威望九鼎の重を爲すもの、之を現任福井縣今立郡中河尋常高等小學校長上田藏之助氏其人と爲す。



氏は明治十二年三月を以て本郡北新莊村北區に生る、其の天資俊敏快濶、事務を處理する捷約、克く衆に先んじて實踐の範を示し、終始實果の成に留意し、教育上の新設備未だ曾て他の後に非ず、明治三十三年福井縣師範學校を卒業するや、鯖江町惜陰小學校訓導に任じ同七月六週間現役に服し幹部適任證を受け、同九月花筐小學校に轉じ、同三十八年四月智光小學校長に榮進し、更に同四十二年十二月中河小學校の優聘する所と爲り現任と爲る、其の間十有餘年一日の如く普通教育に奮勉し、嘗て郡視學として選拔せられしも、辭して應ぜず専ら直接兒童の教育を以て終生の職とす。

氏は至誠を以て訓育の骨子と爲し、教授は實用を主義とし、常に職員會を開きて指導を怠らず、苟も寸暇の許すあらば諸方を視察し、大に捕長短補を努む、されば本校は郡内の粹を集め、模範校として參觀者絶ふることなし、又校下の父兄に對しては親切叮嚀を旨とし、時に父兄母姉會を開き學校教育の目的方法を講じ、施設事項を説き、家庭教育の方法を指示し、以て一般父兄の向學心を發揮せしめ、青年會を補導して自ら是れが修養の中心點となつて誘掖怠るなし。

高知縣久禮田尋常小學校長
長岡郡久禮田尋常小學校長

内田菊次氏

正直、從順、勇氣、親切、公德の五徳目は我内田菊次氏の撰する處、以て久禮田尋常高等小學校の校訓なりとす、蓋し古來の習俗、現時の風潮を斟酌し、地方開發、初等教育の基礎たらしむるものたるや明らかかなり、當初兒童は校下の民風に支配せられ、粗暴に流れて眞摯學習の風乏しかりしも、今や完く改善せられ、校訓の實現を見るに至れり、氏や眞に偉材なる哉。



氏は高知縣の人、元治元年十一月を以て生る、明治十七年試験を経て教員の資格を得、初めて本校の教壇に鞭を執りて以來、終始一貫能く任を轉ぜず、孜々奮勵を以て兒童教化の實を擧げ、同二十七年累進して同校長に進み、其の今日に至る三十年の星霜を閱す、豈効果なくして可ならん。氏や精勵恪勤、部下推服し共同努力の實を擧ぐ、校下を十區に分ちて校外取締を置き、各區父兄中より委嘱し、以て兒童風儀の矯正に努め、明治三十四年の頃既に補習教育を開始し、青年會をして里道の改修、道路標の建設、高齡者の慰安、基本財産蓄積等の事業を爲さしめ、自ら會長として指導誘掖す、明治三十六年縣より教育獎勵金二十圓を受くるや、之を基礎として教員は毎年四月俸給百分の一、兒童は秋季收穫の際米又は金十五錢を納めしめ、兒童入學及卒業の際金十錢を納めしむ、奇想着々効を收むるを見る、氏は土地の状況に應じ、兒童の短所を矯正し確實明瞭なる智能を得せしむるに努む、曩に縣より五十圓を表彰せられ、次て村民氏の勳績二十五年祝賀會を催し、大正二年文部省の選獎に浴す偉哉。』

和歌山縣橋本尋常小學校長
伊都郡橋本高等小學校長

内海恒夫氏

百千の智識は一の實行に不如、蓋し箴言なり、勤勉共同は我地方の要求たるに止まらず、社會思想の變遷は切に其必要を認む、故に極力是を習慣性たらしめ、欲求を寡少にし訓練力の徹底に努むとは内海恒夫氏の執る處、然り少許の確固たる知識も幾多の不確實なる知識に勝れり。氏は三重縣宇治山田の人、明治八年七月に生る、人と爲り温順にして邊幅を飾らず、常に修養研究に努めて主義の一貫を期し其の成果を見ざれば止まず、明治三十年三重縣師範學校を卒業し、訓導たること約六年餘、小學校長、裁縫學校、補習學校長に任ぜられて今日に及ぶ、赴任以來、校紀益々嚴肅、訓育の效は兒童の一舉一動に之を認むるに至りたる、眞に氏の熱誠の賜なり。



氏は確固たる知識を得んには反覆を屢して教授力の徹底に力め、所謂「讀書百遍義自通」の意に出で、言はて治むるは言ひて治むるに勝る事數等なり、而して言へば必ず千鈞の力あらんを欲し、所謂「無爲にして化す」とは單に爲政者の軌範たる而已ならず、管理上にも必要の箴言たり、學徳の修養を積みて圓滿なる人格を作るが統御上の根本要義なりとし、町村を解し家庭を詳にし教化の中心を學校に置き、平民的所屬民との接觸を圖り、青年には奮闘的立憲的を要求し、壓迫放任共に取らず、自ら學徳の修養に志し、彼の人格を尊重し、大綱を把り、些事を委し、血氣を誠じ、社會に對し、精神の向上思想の健全を促し、永遠に其の貫徹を期するの勇を以てせば美風揚り惡風跡を潜むるの機ありとは氏の抱介、敬服すべき哉。』

臺灣恒春尋常小學校長
阿緞廳恒春高等小學校長

上野喜一郎氏

臺灣恒春街は恒春半島の平野に在り、住民は新に植民として移住せる者なるが故に、家庭は概ね溫和なる老人を缺き、血氣の壯夫婦を兒童保護者とするを以て、一般の氣風粗莽にして禮讓を蔑如し奢侈風を爲し放縱俗と爲り、化育の勞頗る多し。この間に在りて善良なる新領土臣民を養成せんとするは、決して容易のことにあらず。たゞ一片耿々たる精神と、鬱々たる修養とありて、始めて其の目的を貫徹し得べきなり。



如是重任に當りつゝある上野喜一郎氏は、熊本縣の人に於て明治六年十二月八代郡金剛村大字敷川内に生る。明治三十年三月同縣師範學校を卒業し、直に八代東部高等小學校訓導を拜命し、次て南部高等小學校に轉じ、同三十五年六月累進して龍峯村尋常小學校訓導兼校長に昇進す。同三十七年一月新領土臺灣に渡り、臺灣小學校教諭に任ぜられ、嘉義尋常高等小學校に勤務し、同四十二年四月嘉義尋常高等小學校長に轉じ、大正二年三月現職に就く。

人の真相を知らんと欲せば、其の周圍近親を見ざるべからず。氏は身長男に生れて一家を繼ぐの責任を荷ひ、且つ昆弟數人のあるあり。氏よくこの間に處して家を重んじ諸弟を愛し、彼等をして悉く中等以上の教育を受けしめ、末弟は現に帝國大學に在りて研究の功を積みつゝあり。この事情は直に氏が教育家としての人格を想望せしむるもの、その濃厚篤實、堅忍不撓、以て教化の功を擧ぐることは、決して疑ふを要せざるなり、令名一郷に洽ねき宜なる哉。」

熊本縣高瀬尋常小學校長
玉名郡高瀬高等小學校長

内田綱吉氏

教育に従事する事三十有五年、其間任地を轉ずる事四度、何れも良好なる成績を擧ぐ、其の選ばれて高瀬尋常小學校長と爲るや、益々勵精恪勤部下の統督宜しきを得るを以て、職員心服し校務能く整理し、内容亦大に改善せられて、縣下に於ける優良なる小學校と爲り、明治四十三年文部大臣より學校を選奨せらる、町民の悦び氏の榮譽、豈に偶然ならざらんや。



氏は熊本縣の人、元治元年三月を以て其の郷に生る、明治十二年初めて山本郡山本小學校に教鞭を執り、同十七年資格を得て同校訓導に任じ、翌年同郡岩野小學校訓導に轉じ、勤績十有二年にして鹿本郡田底尋常小學校長に榮轉し同三十三年玉名郡長洲尋常小學校長と爲り、同三十五年長洲尋常高等小學校長を拜し、翌年高瀬尋常小學校長に移り商業補習學校長を兼ね、同四十三年高等科を併置して現今に至る、此間文部省又は縣郡等より表彰數次、第四帝國聯合教育會代議員として出席の榮を得たり。

氏や濃厚着實、思慮周密なり、學校選奨後は一層奮勵部下職員を督勵し、諸般教育事業の改良進歩を企圖し、或は來學年に施設經營すべき事業を豫定具案して一ヶ年前に準備し、又は劣等兒の救濟法を講じ、或は校報を發行して家庭との連絡を圖り、職員をして各種の内容改善に竭さしめ、更に面目を一新す、補習教育、社會教育其他各般の事に斡旋頗る力め、皆佳良の成績を擧ぐ、曩に町會は學校選奨の効績に對し銀盃一組を寄贈し、大正元年文部省の選奨に浴す、ア、偉なる哉。」